



* 0044311000 *

0044311-000

特203-922

研究録 (国民科修身・理数科理科・国民科国語綴方)

鹿児島県教育研究会・編

鹿児島県教育研究会

第38回

昭和18

AHF

431

137

和十八年二月

第三十 回 研究 錄

國民科
理數科
國民科
國語綴
方科
修身科

鹿兒島縣教育研究會

第三十八回鹿兒島縣教育研究錄

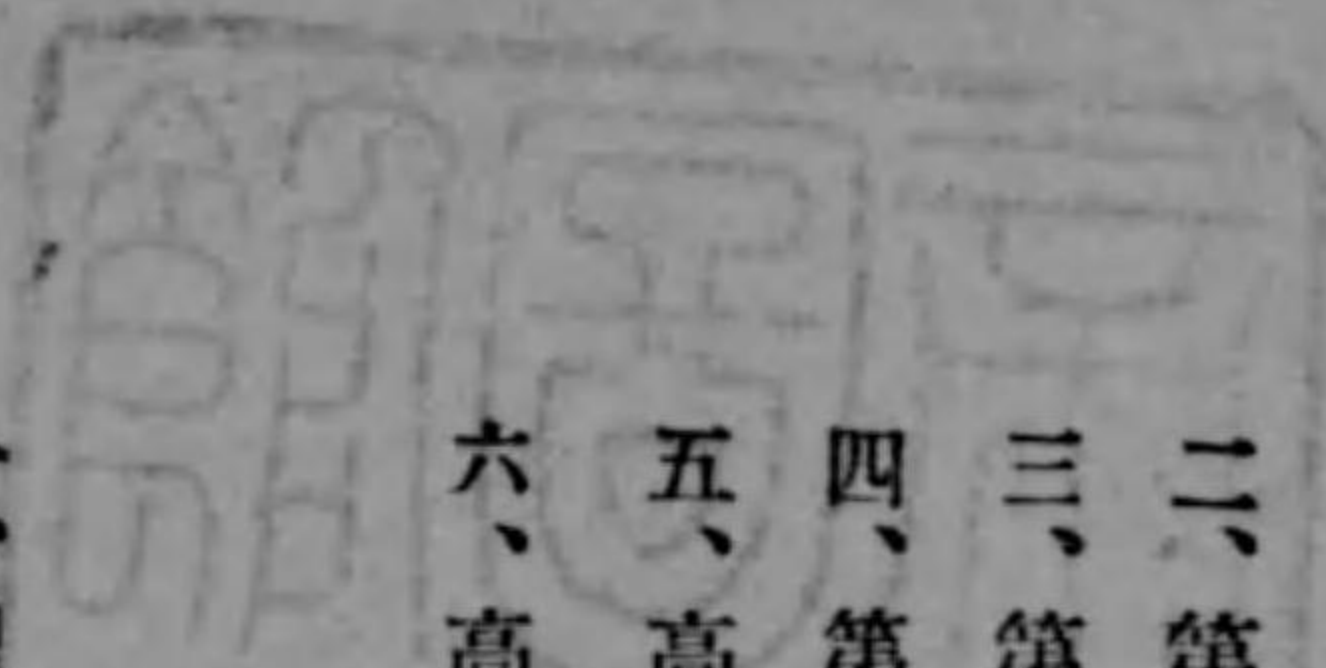
目次

◆國民科修身

- 一、第一期に於ける國民科修身教育の方法……………(日置郡)……………一
- 二、第一期に於ける國民科修身教育の方法……………(嚙啖郡)……………三
- 三、第二期、三期に於ける國民科修身教育の方法……………(男師附屬)……………六
- 四、第二期、三期における國民科修身教育の方法……………(伊佐郡)……………四
- 五、高等科に於ける國民科修身教育の方法……………(鹿兒島市)……………五
- 六、高等科に於ける國民科修身教育の方法……………(熊毛郡)……………六

◆理數科理科

- 一、理數科理科「自然觀察」指導の方法……………(田上代附)……………八五
- 二、理數科理科「自然觀察」指導の方法……………(揖宿郡)……………一〇二
- 三、理數科理科「自然觀察」指導の方法……………(出水郡)……………二九
- 四、理數科理科教育の方法……………(川内市)……………三四
- 五、理數科理科教育の方法……………(肝屬郡)……………四四



持203
922

六、理數科理科教育の方法……………(大島郡)……一七

◆國民科國語綴方

- 一、第一期に於ける國民科國語綴方教育の方法……………(女師附屬)……一七
- 二、第一期に於ける國民科國語綴方教育の方法……………(川邊郡)……一九
- 三、第二、三期に於ける國民科國語綴方教育の方法……………(始良郡)……二〇
- 四、第二、三期に於ける國民科國語綴方教育の方法……………(鹿兒島郡)……二〇
- 五、高等科に於ける國民科國語綴方教育の方法……………(鹿屋市)……二五
- 六、高等科に於ける國民科國語綴方教育の方法……………(薩摩郡)……二五

◆附 録

- 一、第三十八回研究委員名……………二六
- 二、本會役員名……………二六

國民科修身

熊鹿伊男贈日
 兒 子
 毛 佐 喲置
 島 附
 郡市郡屬郡郡

第一期に於ける修身教育の方法

日 置 郡

もくじ

序 言

一、國民的自覺

二、教 化

結 語

序 言

大御稜威の下、父祖の悲願を承繼いで米夷英戎膺懲の皇軍は、向かふ所敵無く今や皇軍神武の切尖から亞細亞人の亞細亞が生まれんとしてゐる。雄渾と言はうか、壯大と言はうか、日本國民にしてこの大いなる日、この大なる時に生れて感奮興起しないものがあるであらうか。

しかも歴史は縦に貫く生命の流であり、大東亞戦争は日本の歴史の本質的生命の躍動であり、八紘一字の御精神の顯現である。過去に生き現在に生き無限の將來に生きる精神を根底に於て我々は今この偉大なる日を戦つてゐるのである。

此の聖戰を完遂し、御稜威を八紘に遍照せしめることを吾人に負荷された重大責務でありこの責務たるや任責重く道遠きものであつて、是を完遂する唯一の道は、かゝりて日本人の精神維新に俟つ。

古來日本の農民は稻を作ると言はずして、必ず田を作ると言つた。田を立派に作つてさへ置けば自らにして稻は瑞々しく稔るのである。

又南洲翁遺訓にも「人智を開發するとは愛國忠孝の心を開くなり。國に勤むるの道明かならば百般の事業は從つて進むべし。」と。大切なことは日本人を作ることであり、日本人の心田を開拓することである。

即ち大東亞戦争の完全勝利は、身を以て神國日本を信じ、國民的自覺に徹し、國民各自が大君の御爲欣然死地に投ずの固い決意によつて、各々の生活を統整行動する所に、眞に始めて完遂され、かくて八紘一字の礎石たる大東亞共榮圈が確立するのである。

而も現時日本人教育の主力点は、東條首相の訓辭にもある如く「今の時代は一にも實行、二にも實行、三にも

實行の時代で、今や國家の國民に求めるものは、正にこの正しき努力である。己を空しうし私を捨て發瀾たる精神を以て自分の職務に向つて最善の努力をするが如き人こそ時代に相應しい人である。」と。而もかゝる人を作るには「自ら實行の範を垂れると同時に、少國民をしてその純真なる時代より實行力を涵養せしむること。」にある。されば、心意發達未分化の第一期兒童の修身教育に於ては、

一、情意的鍊成をなし、趣味を豊ならしめると同時に道徳的情操の涵養に努め

二、生活による實踐指導を主として、徳性を養ひ

三、日本人の善行爲はすべて、皇國の道に則るものであり、天壤無窮の皇運を扶翼し奉らんが爲めであることの自覺の方向へむけ、國民的信念に培ひ、忠良な臣民としての覺悟を固め、進んで一層よい國にしよと努力する心構をはつきり持たせ(ヨイコドモ教師用参考)

以て「負荷ノ大任ヲ全ク」すべき國民の基礎的な鍊成の中核確立が其の狙ひである。

由來、修己治人は東洋に於ける徳育薫化の根基である。殊に教育の全野に滲透し、その中核をなす修身教育に於ては、教師が一切である。自己が眞に日本人として

の信念に燃え、發して天業翼賛に至誠純行する時、教材は一々國民的思想感情の生命に躍動し、一言一動以て幼き國民の生命に國民的息吹を與へ、茲に皇國民鍊成の「徳化」が營まれるのである。

一 國民的自覺

「大日本は神國なり。天祖始めて基を開き、日神長く統を傳へ給ふ。我が國のみこの事あり。異朝には其の類なし。此の故に神國といふなり。」と親房卿の喝破せる如く、宇宙の根源にまします天御中主神を初とする神代七代の終に伊弉諾尊伊弉冉尊の二柱の神が成りまして

「是に天神諸の命以ちて伊弉那岐伊弉那美命二柱の神にこの漂へる國を修理り固成せと詔りこちて天の沼子を賜ひてことよさしたまひき。」

とあつて、諸冊二尊は先づ大八洲を生み、次で山川草木神々を生み、更にこれらを統治せられる至高の神たる天照大神を生み給ふた。

天照大神は高天原の神々を始め二尊の生ませられた國土を愛護し群品を撫育し、生々發展せしめ給ふと共にこの大御業を天壤と共に窮りなく彌榮えに發展せしめられる爲皇孫瓊瓊杵尊を降臨せしめられ、天壤無窮の御

神勅を下し給うた。

かくて「民族の胎籠の時」なる神代に、人の作爲としてどもなく、また自然の存在としてどもなく、一に皇祖の御神勅によつて萬世一系の皇位が確立し君臣の大義儼乎と定まり、茲に我が國體の確立を見たのである。

元來國家の本然は君臣の身行に外ならぬから、國家の根本は正しく君臣の大義確立に存する。即ち、君は超越の主体の位に具り給ひ、臣は君を絕對者として還入し奉り、親として抱かれまゐらせるのみであるから、君臣の對面は結局一個の君上の生命に歸する。故に國を肇むることは畢竟君位の確立に存するのである。

而も國家は元來不死のものでなくてはならぬが、我が肇國の體驗はこの不死を端的に覺照して「寶祚の隆へまさんこと當に天壤と窮りなかるべし。」との親神の言視そのまゝに、現實の歴史的事實として豊葦原瑞穗國に萬古不易に實現されてゐるのである。

君と臣とが絕對の未來と絕對の過去との契機をなして絕對的現在の内に對面し、包越者にまします天皇の「君徳の恩光四表にあらはれ被ふ。」わが皇國は、永遠の未來によつて光被される絕對的現在であり、天壤と共に窮りのない寶祚であつて、これ實に「み民われ」の「神州不滅」の信念であり、絕對の論理である。

而も日本は、親神によつて生れ親神によつて修理り固成された神國たるのみならず天皇も臣下も共に日本を神國たらしめんとする上下のマコトの緊張志氣によつて現實に神國を實現する永遠の存在である。

されば神國日本に生きる者は、常に日本の生命を守ることを今日の當務とし、一瞬ごとに新なる神國日本を實現することを己の責任とせねばならぬ。

尙教學に於て往古より實踐的立場を空しくせぬ我が國は、單に理を以て教を傳へず「何物にても物に傳へ業に傳へ器物に比して傳へる。」のであつて、かの天壤無窮の御神勅と共に御授けになつた三種の神器は、御歴代之を繼承遊ばされ、「宜以擁神器爲正」の儼然たる皇位のみしるしとして傳承し給ふと共に親神の御靈代として神鏡を奉齋遊ばされ「たゞ天照大神の大御心を大御心として、萬事神代に定まれる跡のまゝに行はせ玉ひ一中略一惣じて何事にも大かた御自身の御かしこだての御料間をば用ひたまはず。」専ら「天神の訓を奉じ以て民を治め」られて、御自ら祖神と御一休御精神紹述展開の皇道を御研鑽遊ばされるのである。

かるが故に、天皇は空間的に一切の個の立場を超え給ふのみならず、時間的にも個を超え給ひ、今の世に於ける天皇にましますと共に、天神皇祖皇宗の御いのちそ

のものとして應現ましますのである。されば 天皇の御
神威も唯 天皇にまします所に即ち神の御末であり、神
皇一にまします所に仰ぐのであり、神と皇とを二つにす
ることなく、幽には神明を崇め奉り、明には現人神たる
天皇を敬ひ奉ることが皇國臣民の道たるのである。

天皇は、かゝるまことの神にましますから「み民われ
」が身命を培って御守り申すべき肉體的生命を具へ、現
人として應現し給ふのである。我等にとりて宗教とは、
現神にまします 天皇に事へまつる外になく、妙法護持
とは、具體的には 天皇を守護し奉ることである。され
ば山本常朝の封建主従の體験たる「今の拙者に似合しか
らざる事に候へ共、成佛などは嘗て願ひ申さず候。七生
までも鍋島侍に生れ出で國を治め申すべき覺悟膽に染み
罷り在るまで候。氣力も器量も入らず、一口に申さば
御家を一人にて荷ひ申すまで候。」を皇國の體験にま
で高むれば、そのまゝ皇國臣民の信念告白となる。我等
は天國極樂のはかなき豫感に住してゐるのではなく、神
國日本に住し、天皇の恩光所照裡にその生命を授けられ
てゐるのであるから、飽くまで現在への執着を捨てぬの
である。かゝる信念は、かの楠公七生報國の遺言にも現
はれてゐる。楠公兄弟は誓に七生のみでなく、實は未だ
初から嘗て死なぬのである。「神になつたらば一(死し

たらば)一内侍所の石の苔になりともなりて、守護の神
の末座に加はらん。」「汝吾を見んと要せば尊皇に生き
よ。尊皇精神ある處常に我在り。」「て、天壤無窮に皇位
を守護し奉るのである。

かく、皇運の無窮に對應して、それを扶翼し奉るべき
臣子の命も萬世を貫いて生き続けなければならぬ。「み
民われ」は「亡らむ世まであまかけりても子孫の勇を助
け護らむことをぞ思ふ。」のであり、我が捨身の事行に
於て、君國の生命を今のひとゝきに守護するのが、自ら
の立場に於ける永生を得ることであり、この守護の精神
を子々孫々に傳えるのが自らの立場の永生を得ることと
ある。ますらをが最期に奉唱する「天皇陛下萬歳!」こ
そは、永生への産聲であつて、如何なる唱名にもまして
絶對的生命の永遠的宣言であり「眞珠灣頭、明月亦朗」
の心境なのである。

かく觀する時、今更に「皇國日本」に生れた有難さが
しみじみと身にせまり、佐久良東雄先生の

吾君に まさる君なし
吾祖に まさる祖なし
天照らす 日の大神の珍御子
吾祖は 日の若宮に おはします

神伊弉諾酒大御神

吾君に まさる君なし
吾祖に まさる祖なし

たふとき此身
うれしき吾身

の「詠人道歌」が思ひ出される。

「まさるものなき 君」と「まさるものなき祖」の臣子
たる吾は「尊き吾が身」と覺されるのである。「尊き吾
が身」は、他にまさるものなく 君を立て、他にまさる
ものなく祖を立てんとする事行的精神によつて、尊く保
たねばならぬ。

かゝる我等の自省自敬によつて、日本及日本人が、神
國のまゝなる日本、皇孫のまゝなる日本人に立返り、皇
國三千年熱き血潮の傳統を脈博の直下にひしひしと感じ
天皇絶對隨順奉仕の信念に生き、發して 皇國護持發展
のため、國の内外のまつろはざるものを、まつろはしめ
「國生み」の神業を今の世に實現完遂すべく、不惜身命
の臣子行に邁進するのである。

國を思ひ寝られざる夜の 霜の色
月さす窓に見る 劍かな

(橋 曙覽先生)

二、教化

國民學校教育の目標は端的に之を言へば、「教育勅語
」の趣旨に則り、國民的自覺に徹し信念に燃え、以て皇
國の負荷に任すべき「立派な國民」の育成の爲め、眞に
身につく教育をすることであり、「皇國民へ」の基礎的
練成である。

而も、國民科修身は「教育勅語」の實踐的奉戴をその
眼目とし、皇國民的心情を培ひ 天皇絶對隨順奉仕の思
想行動を指導し、以て皇國の護持發展に挺身する人物の
育成をその中核としてゐるのである。

而して、皇國の道を行する所に於て、教學一體、師弟
一徳となり、茲に教育徳化の様相があり、我が國柄の教
育があるのであつて、教師の自己修練の要が此處にあり
一面教育の心術は作戦のそれと等しく「己ヲ知ル」と共
に「彼ヲ知ル」ことが又肝要であつて、殊に低學年に於
て其の感を一層深くするのである。

されば「身につく教育」をするには、
第一、兒童の具體性に即せねばならぬ。——生活化——

即ち 皇國民としての兒童の心身發達 天稟の素質と
その生活及生活環境とを十分知悉せねばならぬ。

而して此の期の兒童は、身體的にも精神的にも、力を

持たず方向を有せず、全く外部的任意的であつて、行爲の善悪は道徳的原理によつて區別されることなく、單に親師長によつて是認されたものが正善であり、禁止された事が邪惡である。されば親師長の行爲は總て善惡の批判なしに、直に之を模倣する。道徳的理想も亦現前の物質又は外的幸福にあり、心情も純真にして絶對從順することに何等の作爲も存しない。蓋し此の期にかゝる傾向を有するが故に道徳的鍊成が可能となるのである。

斯の如き一般的傾向を基礎とし、其の天稟の特質、生活様相家庭環境等により、各人各様の個別的生活表現をなすのである。故に是等の觀察は、兒童個々の日常生活を遊視することによつてなされると共に、一面家庭との緊密な連繫の下に十全を期することが出来るのである。而も是等の觀察調査が、一時的形式的のものでなく、常に個々の兒童を見つめ、それが指導により或は他の影響により、兒童の生活行動が如何に變化し、如何に發展しつゝあるかの現實様相を不斷に注意觀察すると共に、事情に依つては教師其の都度、學校家庭通信、家庭訪問をなし、以て兒童の具體的生活を知悉し、生活具體に即し個々に透徹した指導をせねばならぬ。

第二、教材の具體性に即せねばならぬ。

教師の日本の見識と信念の下に人格化された教材によ

とれ。」とある趣旨も此處にあるのである。

而して、茲に重要な役割を持つものは教師の説話である。上記の如き心構の下に、教材の趣旨に則り、兒童の眼前に髣髴として其の具體的生活場面が描き出される時兒童の道徳的情操は油然と湧き、茲に實踐意欲は旺盛興起するのである。

第三、實踐指導に徹せねばならぬ。

「實踐指導といふのは、實踐への指導たると共に、また實踐の指導たるべきものである。」とある如く「實踐への指導と實踐の指導が一括されて、實踐指導と呼ばれる所に深い意味がある。」教師用書一のであつて、修身は飽くまで實踐的な点を明示してある。この實踐は「教育勅語」の實踐的奉體であつて、身も魂も天壤無窮の皇運を扶翼し奉る臣子行たるのである。されば實踐指導は、修身教育の手段方便に非ずしてその自身目的なのである。

かく、行を通して體得せしめる事が、此の期に於ける重要な考慮の對象であつて、常に豊かな情操の上に立つた實踐指導が、兒童生活の全野に亘つて企圖されねばならぬ。

第四、躰の徹底を圖らねばならぬ。

此の期に於ての實踐指導は先づ躰より始まるのであ

つて、兒童を國民に止揚することが鍊成である。而して教材は、歴史的國民文化財より國民鍊成の企圖のもとに理想的に構成されたもので、國民學校低學年の教材は、兒童の具體的國民生活から取材され、具體的な動きの一部面づつが配置されてゐる、具體的現實のものである。勿論、國民科修身の本旨から見れば必然とらねばならぬ内容と順序とを持ちながら、而も具體的な國民生活の展開の系列と一体となつて並んでゐるのである。其の一々、ヨイコドモ自身の内部の繋りと、ヨミカタ其の他の横の繋りが寄り合つて成してゐる具體的國民生活といふ立体的構造を有してゐるものである。

されば授業者は兒童の現實生活を見つめ、與へられた材料を再構成し、兒童生活の生の場に於て當然參與してゐた部分への聯關をなし、もとの生々渾一的な姿相に還元し、兒童の具體的生活の分節として、其の生活の中に溶け込ませねばならぬ。故に一時限の授業にのみ捉はれず、其の一時限が前後の時限と有機的な發展連鎖の中に更に兒童の全生活の中の一環として働いてゐる様取扱はねばならぬ。

常に兒童に「具體的に體驗させる。」心構のもとに、「教室」にこだわらず、その全生活の場に於て具體的な指導が肝要であつて、教師用書に「他のものとの聯關を

る。即ち「兒童の遊戯や各種の學校行事、教師に對する態度學友との交際、學用品その他所持品の取扱ひ方、服装家庭に於ける朝晩の挨拶、道の歩き方、電車の乗降車中の心得、神社佛閣の参拜の仕方、食時の作法など兒童に親しみ易く、實行し易いことから指導し始める。」教師用書一のである。かく兒童の日常生活の全野に亘つての指導で、一々手数のかゝる事ではあるが、確固たる信念と強靱なる根氣と細心なる注意の下に、教師の垂範の行動により、功を急がず、一時に多くを要求せず、絶大なる親心によつて不斷に反覆せしめる時、習ひ性の境地にまで發展せしめることが出来るのである。

而も躰に當つては兒童のみを目標とせず、兒童を通じて家庭生活の向上をも目標とし、その躰が家庭へまで浸潤する時、兒童の躰は一層徹底すると共に、教師の權威が透徹する結果ともなるのである。

「國民學校の躰」は「ヨイコドモ」鍊成の具體的生活様式を示した躰表で、我が校兒童の具體的生活の基礎の上に立ち、ヨイコドモ及國民禮法要項を參照して編成したもので、是を學年始家庭に配布し、兒童生活に一定の規準を與へると共に、家庭の自覺をも促し、相協力してよい躰樹立に留意してゐる。即ち此中の數項を選び、月努力事項とし毎日反省して〇×印を附し、教師之が檢閲

をなし、家庭に於ても注意して頂く様にしてゐる。

第五、軍人援護國防訓練に努力せねばならぬ。

征戦万里異域に死生を超越して疾驅する、皇軍將兵の魂に通ふ童心の慰問文は、降魔の利刃を振舞う明日の戦闘力となるのであり、護國神社、戦死者墓地、清掃参拜は、勇士への敬虔報謝の念を童心に培ひ、學用品の節約小遣錢の貯蓄或は廢品回収への協力落穂拾ひの實踐は、銃後一億の一員として、子供乍らも總力戦の一部を分擔し我等も戦つてゐるのだとの自覺を喚起するのである。

されば、教科を通じて軍人援護の念に培ふと共に、毎月七日の愛國貯金、八日大詔奉戴日の神社参拜、慰問文の發送、第一日曜日戦死者墓参掃、月末の廢品回収等をなし、或は社前に於ての時局訓話や勇士の忠勇美談をなし、童心に培ふと共に、教室設置にも工夫し、兵器戦争に關心を持たせ、又臨時非常訓練を施し萬一に備へ以て、皇軍への感謝と國防の訓練に資してゐる。

第六、郷土に即し、家庭社會環境との連絡を圖らねばならぬ

兒童生活の現實基底は家庭及郷土にあるが故に、茲に七百涵養の傳統薩摩教育法の再興が要請されるのである。即ち郷中一致團結親和協力の下、お互ひ惡を斥け善を勧め、義に殉ずる氣風の昂揚に努め、其の子弟教育に

於ても、自己の子弟は他人に笑はれざる様態けると共に他の子弟と雖も郷中協同責任の下に、教育補導して來たのである。更に思ふ可きは、家庭に於ける母の教育である。往時薩藩の母はその子弟教育に當り、如何にして主君の御役に立つ人物に育てるかに就き、細心の注意と確固たる信念不撓の忍耐とを以て、全心全靈を打込んで是に當つたのである。又子弟相互に於ても長幼の序列確然たる中に、親和團結し、共勵切磋以て君國奉仕への基礎的修練を積み來つたのである。

されば此の精神、此の鍊成法を現時に生かし、一はその郷中教育精神を各部落常會に覺醒復興し、以て大君の赤子たる子弟教育に盡力を願ふべく、毎月の常會及婦人常會に於て其の月の努力事項に就き懇談し、一は母親學校の創設をなし母の講座を設け、教育の根基たる婦徳の涵養を圖ると共に、學校教育の眞の理解と協力を求め、更に毎月の部落子供常會及び班會に於て、兒童の校外及家庭に於ける生活全野の躰の徹底と志氣の昂揚に努力してゐる。

第七、「ヨイコドモ」の教壇

「身につく教育」の教壇實踐を、ヨイコドモ下「私ノウチ」に就いて考察する。

私ノウチ

我が國家組織及國民生活の基本は、祖孫連貫親子の立體的關係たる家にある。かゝる家の觀念を得しめる端緒として、先づ家庭生活の楽しみを考へさせ、家庭和樂・一家團樂の中に、家の尊さ有難さをしんみりと考へさせるところに此の教材の趣旨がある。

随つて初詣で、祖先のお墓参り、お正月の家庭的な遊びなどの印象が生々としてゐるうちに、兒童自身の家に於ける位置とその本分とを體得實踐せしめるやう指導し教師用書

即ち兒童の心意發達による情意的鍊成を出發とし、兒童の具體的國民生活から取材された具體的現實的生活教材である。

而も「私ノウチ」の生活に必然的に關聯するものに、ヨイコドモ上（孝行三題）、「シンネン」等をうけ、下巻「ヲチサントヲバサン」の家の觀念擴充に發展し、尙ヨミカタ（二）の「シャシン」「カゲエ」「ユメ」エノホン（二）の「オウチノ人タチ」と一體となつて家庭の團樂和樂を情意的に感得させるのである。されば、取扱ひに於ては、

(1)「お正月にはどんなことをしましたか。」の問により、樂かつた正月の情景を想起させ、思ひ出を發表させる。神社参拜・お雑煮・家での諸儀式 拜賀式・諸挨拶

抄等について話合ひ、特に樂しかつた遊びに就いて色々語らせ前課シンネンの指導擴充をなし、此處でシンネンの所を讀ませる。右の問答を基礎にして正月に於ける一家團樂を中心とした話合ひに導き、「それは樂しかつたね。」と樂しい思ひ出に浸らせ、

(2)「お家でその外に樂しかつた、面白かつた事はありませんか。」と樂しかつた思ひ出の範圍を新年以外の家庭生活に擴大し、家の人と樂しく遊んだりお話したり働いたりした事を發表させ、又教師の見聞した具體的説話を挿入し、家族の人々について、

(3)「いゝお祖父・母さんですね。」「ありがたいお父さんですね。」「よく可愛がつて下さるお母さんですね。」「元氣な面白い兄さんですね。」「やさしい姉さんですね。」とその有難さを感得させる。(教師用書主要事項一・二)

(4)次に「樂しお家を何時も樂しい處として置くには私達はどうしたらよいでせう。」と事行主體としての自覺へ向ける發問をなし、種々の應答の中から、

○病氣をしないようにします。(オトウサンオカアサンと連絡)

○よくいひつけを守ります。(オテツダヒ)

○兄弟仲よくします。(オルスバン)

等と導き具體的生活事實を述べさせ、孝行三題と自然必

然の聯關をとる。

以上、兒童の現實生活を凝視させることによつて、そこから國民生活へのあるべき相へ我が自ら方向づけさせるのである。

(5) 「親類に泊つたことはありませんか。その時家へ歸りたくなつたでせう、どうしてでせうか。」と浸りきつた家より、一步他へ出た時を思ひ出させ、兒童の氣持を率直に發表させ「お家はほんとに楽しい所だ。」「それは有難い人達だけだから。」といふことを感得させる。(主要事項一・二)

(6) 「それでは、お家で一番楽しい時は何時ですか。」の發問により結局「みんな揃つて頂くお夕飯の時。」に導き、その場の情景——何時頃・人數・食べる場所・食卓での話・様子等——を話させ兒童の原生活への還元をはかり、その場にある氣分に浸らせる。

(7) 右の話し合ひから自然とヨイコドモの生活記録を我がものと考へて讀み得る様導き、齊讀個讀をさせる。

(8) 掛圖を活用しながら教師用書取扱ひの要領により「自分の家もそうだ。自分の家にはお祖父さんもお祖母さんもゐらつしやる。お父さんもお母さんも元氣だ。これは自分の家と同じだ。」又「家にはお祖さんもお祖母さんもゐられないが外の事は全部同じだ。」「この家は自

分の家だ。」と考へる様兒童の具体に即して説話し、
○うちの人々の世話を受けてゐること。

○家の人々の言ふ事をきき、目上の人によく事へ、弟や妹を可愛がること。

を兒童の家庭狀況日常の生活行爲の一々を腦裡に描き乍ら具体的に指導する。

(9) 再びヨイコドモを讀ませる。

(10) 「お父さんお母さん、お祖父さんお祖母さんの言ひつけをよくきいたことがありますか。」「お祖父さんお祖母さんがまだ生きてゐらつしやいますか。」と家庭調査を基として話し、

○私達の家はすつと昔から續いてゐること。祖先への血のつながりと 皇恩所照裡に生活して來たこと。

○昔の方々も私の家を楽しいよい家にして下さつたこと

○それ等の方々は今はお亡くなりになつてその御靈は先祖棚に安置してあること。

○私達の今楽しく暮して行けるのも、それ等の方々のお蔭であること。など分らせ、

(11) 次で祖先尊崇に就いて

○朝夕お大麻と共に先祖様にお禮をする。

○神や花を供へ、初物珍らしい物は先づお供へする。

○お正月お盆お命日其の他出来る丈お墓参りをする。こ

とを家庭と連繫して指導し、

(12) 禮法の指導

(イ) 神棚に對する拜禮 (ヨイコドモ下氏神様)

「毎日拜んでゐる人、どんなにしますか、やつててらん。」と兒童にやらせ、賞讃し、

「先生がしますよ。」(二禮二拍手一禮)

(ロ) 佛壇に對する拜禮

これも前に準じて取扱ひ、神様と異り線香を焚き鈴を鳴らし合掌して禮拜する。

ことを實演させる。(校區は始ど佛徒)

(ハ) 起床就寢の挨拶——既にヨイコドモ及ヨミカタで指導してあるので、動作と結合した言葉として身につける様、尙時々注意して實踐を督勵する。

(ニ) 食事の時の禮法——家庭と連絡し儀表を規準に尙十月「オコメ」の指導以來特に注意し、晝食携帯時實際に即し継続的に指導。

以上大まかに第一期に於ける兒童の「身につく教育法」を論じたのであるが、如上の儀も授業も、國體信念に徹したる教師の信と、それに絶對信頼する兒童の信の緊張によつて、眞にその精華を發揮し、幼き子供乍らも「自分は日本の子供であり、聽て 天皇陛下のお役に立つよ

い日本人となり、日本を一層強い立派な國にして行かねばならぬ。そのために今からよい子供にならねばならぬ。」との志氣によつて貫かれるのである。かくて始めて、日本人の中核を確立する國民科修身の眞價の發揮使命の達成が期せられるのである。

結 語

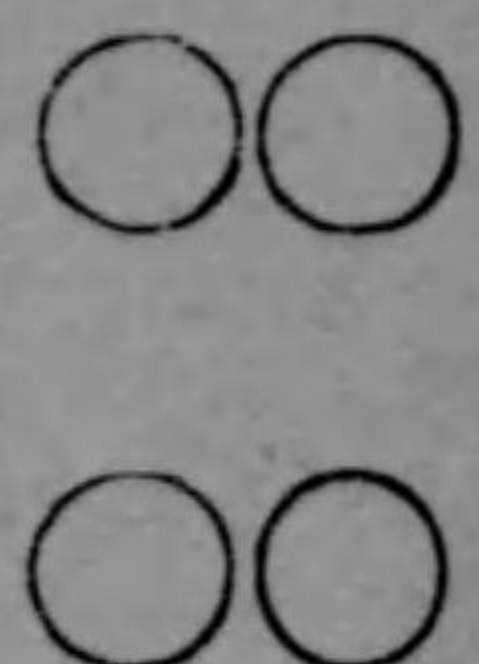
教師が躬行垂範陣頭に立つことは、何時如何なる場合に於ても修身教育の根本である。殊に第一期の兒童に對しては、理窟だけではいけないし、技術の末のみの巧者でも不可である。されば我等は教育的意圖を有しない自己の全生活に於ても其の心を収め行を正しくし、以て日本人的生活を深め信念に培ふと共に、自己の保有する童心に磨をかけ、愛の明鏡の曇りを拂ふ修練が必要である。

而もそれが「兒童と共に遊べる。」では足りないし、「兒童と共に遊び樂める。」でも未だ不足である。「自ら兒童になれる。」良寛の心境と同時に「先生が笑ふ生徒も笑ふ、皆が聲を立て、笑ふ。」その情景の間にも「教師の眞顔」が兒童の胸奥に残らねばならぬし、又「先生が黙る、子供も黙る、皆がジツト固唾を呑む。」その場合にでも「先生の笑顔」が兒童の眼底に髣髴とし

てゐなくてはならぬ。かくて茲に低學年に對する諸方法
の教育的根源が存するのである。

かくて、脈々三千年の日本の血潮を享受せる兒童は、
教師の確固たる日本人的信念より進る正しき導により、
身も魂も大らかにすすくと伸び 皇運扶翼の信念に燃
え、大東亞指導者の一員として正しく強き日本人たるの
素地が培はれるのである。

日置郡



國民學校一

教	校	登	事	食	朝	床起		
<p>1、朝は後の出入口より無言で一禮して入る。</p> <p>2、先生に對しては一齊に「お早うございます」</p> <p>3、平常は後の出口から二列に出て各自解散し、又後</p>	<p>1、便所に上れ。</p> <p>2、服装をととのへてから家を出よ。</p> <p>3、鼻紙、手拭をわすれるな。</p> <p>4、朝會前二十五分に學校に到着するやうに家を出よ</p> <p>5、「いつてまわります」と挨拶する。</p> <p>6、錢をもらう時はそのわけをはつきりと言へ、釣錢の有無を明確にすべし。</p> <p>7、友達への挨拶男「お早う」女「お早うございます」</p> <p>8、先生、長上への挨拶は數歩手前で立止つて敬禮「お早うございます」(長上へは無言禮でもよし)</p> <p>9、二列正常歩左側通行</p> <p>10、本道を行け。</p> <p>11、最上級生の指揮に従ふ。</p> <p>12、懐手をしたり、ポケットに手を入れたりして歩いてはいけぬ。高聲の談話等も慎め。</p> <p>13、人とすれ違つた時、振返つて見たり笑つたりするのは失禮である。</p> <p>14、途中での出來事は直に先生に告げよ。</p> <p>15、本門から登校すべし。本門の禮は常に停止最敬禮である。</p>	<p>1、夏は五時、冬は六時、自分で夜具の仕末をせよ。</p> <p>2、相當の年とならば室内を拂へ掃けふけ。</p> <p>3、庭園道路の掃除もせよ。</p> <p>4、その他一定の家事につけ。</p> <p>5、齒を磨き、時々爪を切れ。</p> <p>6、顔は冷水で洗ひ、よく眼を冷せ。</p> <p>7、深呼吸をせよ。</p> <p>8、神佛禮拜。</p> <p>9、長上に朝の挨拶をせよ。</p> <p>10、時間あらば勉強すべし。</p> <p>11、本日の學用品を調べよ。</p>	<p>1、姿勢を正しくする。</p> <p>2、食前に手を洗ふ。</p> <p>3、一同席につくのを待つ。</p> <p>4、食前一禮「いただきます」食後一禮「ごちそうさま」</p> <p>5、箸は目上の人のとつた後にとる。</p> <p>6、飯をついでもらう時には、飯碗はなるべく兩手で出せ。</p> <p>7、飯をたべてから次に茶に移ること。</p> <p>8、飯や汁をついでもらつた時は一度膳の上に置いてから、取上げてたべなさい。</p> <p>9、一粒ものこさずたべること。</p> <p>10、右側のもは右手で取上げてから左手に移してたべる。</p> <p>11、食物を口にしながら話をせず靜かに食べる、こぼしてはいけぬ。</p> <p>12、汁わんを置いたまゝ汁の實をたべてはいけません</p> <p>13、湯茶は右手を添へて飲む。</p> <p>14、よくかみ、すき、きらひを言はず食ひすぎるな。</p> <p>15、腐敗のうたがひあるものは一應たしかめてから食ふこと。</p> <p>16、食事の用意が出来たらすぐたべること。</p> <p>17、食後の楊枝は使用せぬがよい。人前で楊枝を使つたり、楊枝を口にしながら歩くのはいけません。</p> <p>18、歩行の際食物を口にするな。</p> <p>19、人に飯などをついでやる時は縁に拵指がかゝらないやうに。</p> <p>20、食物を運ぶ時は自分の息がかゝらないやうに。</p> <p>21、給仕中は髪や、きものやたゝみなどに手を觸れてはいけません。</p>	<p>1、箸は目上の人のとつた後にとる。</p> <p>2、飯をついでもらう時には、飯碗はなるべく兩手で出せ。</p> <p>3、飯をたべてから次に茶に移ること。</p> <p>4、飯や汁をついでもらつた時は一度膳の上に置いてから、取上げてたべなさい。</p> <p>5、一粒ものこさずたべること。</p> <p>6、右側のもは右手で取上げてから左手に移してたべる。</p> <p>7、食物を口にしながら話をせず靜かに食べる、こぼしてはいけぬ。</p> <p>8、汁わんを置いたまゝ汁の實をたべてはいけません</p> <p>9、湯茶は右手を添へて飲む。</p> <p>10、よくかみ、すき、きらひを言はず食ひすぎるな。</p> <p>11、腐敗のうたがひあるものは一應たしかめてから食ふこと。</p> <p>12、食事の用意が出来たらすぐたべること。</p> <p>13、食後の楊枝は使用せぬがよい。人前で楊枝を使つたり、楊枝を口にしながら歩くのはいけません。</p> <p>14、歩行の際食物を口にするな。</p> <p>15、人に飯などをついでやる時は縁に拵指がかゝらないやうに。</p> <p>16、食物を運ぶ時は自分の息がかゝらないやうに。</p> <p>17、給仕中は髪や、きものやたゝみなどに手を觸れてはいけません。</p>	<p>1、腰を深くかけよ。</p> <p>2、足は男はすこしひらいて、女はそろへて手の上に軽く置き、習字の時は腰掛を引かず体に出す。</p> <p>3、話を聴く時は先生の目を見る。</p> <p>4、朗讀の時本と目とは三十糎餘本は眼よりも軽くもて。</p> <p>5、作業の時左手は右手と對稱の位置に、目と紙三十糎、常に腰掛を前に減距離を取れ、胸を縁に壓迫せず數糎離せ。</p> <p>6、應答の場合は「ハイ」と明確に返事してから不動の姿勢を取りて答へよ。中腰をするな。</p> <p>7、授業中鉛筆は削らざるを本体とす。筆入の前方。</p> <p>8、離席か教室を出る時は先生の許を受けよ。</p> <p>9、遅刻者は後方に佇立して師命を待つべし。</p> <p>10、舉手は右前斜上方に勢よく正しくせよ。「先生」とか「ハイ」とかを連發するな。</p> <p>11、用具をわすれた時は先生にとゞけよ。</p> <p>12、教師が話す時は筆記せず、板書と同時に筆記を本体とす。</p> <p>13、齊唱は聲を小にせよ。</p> <p>14、自ら進んで學習せよ、絶対にわき見や雜話をな。</p>	<p>1、教室朝會は努力事項の達示反省、諸注意事項の達示、及訓話等大切な事柄をなすのであらきゝもらしてはならぬ。</p> <p>2、大麻拜禮は落ち着いた澄み切つた氣持でなす</p> <p>3、腰を深くかけよ。</p> <p>4、足は男はすこしひらいて、女はそろへて手の上に軽く置き、習字の時は腰掛を引かず体に出す。</p> <p>5、話を聴く時は先生の目を見る。</p> <p>6、朗讀の時本と目とは三十糎餘本は眼よりも軽くもて。</p> <p>7、作業の時左手は右手と對稱の位置に、目と紙三十糎、常に腰掛を前に減距離を取れ、胸を縁に壓迫せず數糎離せ。</p> <p>8、應答の場合は「ハイ」と明確に返事してから不動の姿勢を取りて答へよ。中腰をするな。</p> <p>9、授業中鉛筆は削らざるを本体とす。筆入の前方。</p> <p>10、離席か教室を出る時は先生の許を受けよ。</p> <p>11、遅刻者は後方に佇立して師命を待つべし。</p> <p>12、舉手は右前斜上方に勢よく正しくせよ。「先生」とか「ハイ」とかを連發するな。</p> <p>13、用具をわすれた時は先生にとゞけよ。</p> <p>14、教師が話す時は筆記せず、板書と同時に筆記を本体とす。</p> <p>15、齊唱は聲を小にせよ。</p> <p>16、自ら進んで學習せよ、絶対にわき見や雜話をな。</p>	<p>1、高等科、東校舎は第二時限の休憩時に、南、本校舎は第三時限の休憩時に水を汲み置きて自習前教室校庭を清掃すべし、當番は早く出て自習前に清掃を終了させよ。</p> <p>2、窓は最初に登校した者があける。窓は後方からすること。</p> <p>3、第四時限後作業の用意をして所定の位置に整て先生より作業上の注意を受ける。</p> <p>4、服装は輕裝すべし。</p> <p>5、作業の鐘で一齊に始める。</p> <p>6、繩對無言たるべし、人に下知するな。</p> <p>7、雑布をよくしぼり、兩掌を接合したる廣さのみ、力を入れてふけ。</p> <p>8、常に考へて作業よ。</p> <p>9、腰掛、机は二人で持て。</p> <p>10、作業終の鐘が鳴るまでは仕事を見つけてと。一心不亂のこと。</p> <p>11、道具は丁寧に使用すべし。</p> <p>12、作業やめの鐘で道具を所定の位置に正しくべし、組長は其の良否を必ず検査せよ。</p> <p>13、更に整列して教師の講評を受くべし。</p> <p>14、作業後必ず手を洗へ。</p> <p>15、放課後は整理當番をし道具の始末を厳正に</p> <p>16、月曜日は先生との會食だから姿勢を正して來室を待つ事。</p> <p>17、綴長の號令で一禮「いただきます」</p> <p>18、終りは個人別に一禮して仕末し他の終るの</p> <p>19、正常歩の用意をして下校庭に出る。</p> <p>20、中食時家へ歸つて食ない。</p>	<p>1、直ちに便所に上れ便所に入る時は合圖せよ。</p> <p>2、愉快に元氣よく仲よく遊べ。</p> <p>3、身体に異狀あるものゝ外は佇立し袖手する、屑を拾へ。</p>

朝		習 自		入 出 の 室 教		校		登		事	
<p>1、朝會の鐘が鳴つたら馳足で集合、整頓する。先生達の出場を待つ。</p> <p>2、先生が見えたら児童週番長の號令で不動の姿勢をとる。</p> <p>3、以後は週番の先生の號令で行動する。</p> <p>4、宮城へ最敬礼。</p> <p>5、レコード又は朗詠。</p> <p>6、一同敬礼は児童週番長の號令でなす。校長は壇上に立つ。</p>		<p>1、自習は正味二十分すべし。</p> <p>2、無言を本体とす。</p> <p>3、音讀の場合は他教室に迷惑にならぬやうにする。</p> <p>4、教師の命令なきものは自習時間中教室を出ることは出来ない。</p> <p>5、自習におくれた者は先生にとゞける。</p> <p>6、自習やめの鐘が鳴つた時は直に下校庭へ出ることに立つ。</p>		<p>1、朝は後の出入口より無言で一禮して入る。</p> <p>2、先生に對しては一齊に「お早うございます」</p> <p>3、平常は後の出口から二列に出て各自解散し、又後の入口より二列に入つて各自着席すること。</p> <p>4、道具を出して授業の準備をし、先生が遅い時は直に自習をすべし。</p> <p>5、先生教室の入口に立つた時一同起立教卓のところに立つた時一同禮、先生の許があつてから一同着席。</p> <p>6、道具は時間割順に整頓し、既習書は次々に最下部へしまる。</p> <p>7、必ず足をふくべし。</p> <p>8、講堂の出入は共に整列してなすべし。</p>		<p>1、便所に上れ。</p> <p>2、服装をととのへてから家を出よ。</p> <p>3、鼻紙、手拭をわすれるな。</p> <p>4、朝會前二十五分に學校に到着するやうに家を出よ</p> <p>5、「いつてまゐります」と挨拶する。</p> <p>6、錢をもらう時はそのわけをはつきりと言へ、釣錢の有無を明確にすべし。</p> <p>7、友達への挨拶男「お早う」女「お早うございます」</p> <p>8、先生、長上への挨拶は數歩手前で立止つて敬禮「お早うございます」(長上へは無言禮でもよし)</p> <p>9、二列正常歩左側通行</p> <p>10、本道を行け。</p> <p>11、最上級生の指揮に従ふ。</p> <p>12、懐手をしたり、ポケットに手を入れたりして歩いてはいけない。高聲の談話等も慎め。</p> <p>13、人とすれ違つた時、振返つて見たり笑つたりするのは失禮である。</p> <p>14、途中での出来事は直に先生に告げよ。</p> <p>15、本門から登校すべし。本門の禮は常に停止最敬禮である。</p>		<p>1、一粒ものこさずたべること。</p> <p>9、右側のもは右手で取上げてから左手に移してたべる。</p> <p>11、食物を口にしながら話をせず静かに食べる、こぼしてはいけない。</p> <p>12、汁わんを置いたまゝ汁の實をたべてはいけません</p> <p>13、湯茶は右手を添へて飲む。</p> <p>14、よくかみ、すき、きらひを言はず食ひすぎるな。</p> <p>15、腐敗のうたがひあるものは一應たしかめてから食ふこと。</p> <p>16、食事の用意が出来たらすぐたべること。</p> <p>17、食後の楊枝は使用せぬがよい。人前で楊枝を使つたり、楊枝を口にしながら歩くのはいけません。</p> <p>18、歩行の際食物を口にすな。</p> <p>19、人に飯などをついでやる時は縁に拵指がかゝらないやうに。</p> <p>20、食物を運ぶ時は自分の息がかゝらないやうに。</p> <p>21、給仕中は髪や、きものやたゞみなどに手を觸れてはいけません。</p>			
講 堂		時 憩		休		中 食		業		作 習	
<p>1、先生の許可なく講堂に入るな。</p> <p>2、個人の場合は出入共に敬禮すべし、團體出、敬禮せず。</p> <p>3、つまさきで歩く。</p> <p>4、講堂授業の時は出入共に整列し、講堂の中することなし。授業開始前及終了後正面に立つこと。</p> <p>5、絶対に雑談するな。正面に注目して不動た業當番は六時とす。</p>		<p>14、みだりに職員室の廊下を通つたり、特別室たりするな。</p> <p>13、雨天時にはなるべく自席に居る事。</p> <p>12、學校用のボール使用は先生の許可を得よ先生の檢査を受けよ。</p> <p>11、始業の鐘によつて遊戯は一齊にやめて早くよ。必ず足をふくこと。</p> <p>10、第二時限の休憩時は体操である皆擴聲機に所定の位置に集合すべし。</p> <p>9、シーソーや鐵棒には同時に二人以上さがつてけない。</p> <p>8、芝生は許可を受けて使用せよ。</p> <p>7、校庭の樹木をいためるな。</p> <p>6、職員室には入口で敬禮し「はいつてよいです言つて許可されてから入ること、廊下を走らぬこと」</p> <p>5、教室、小使室に立ち入るな。</p> <p>4、校外に出る時は許可を受けよ。</p> <p>3、身体に異状あるもの、外は佇立し袖手するを肩を拾へ。</p> <p>2、愉快に元氣よく仲よく遊べ。</p> <p>1、直ちに便所に上れ便所に入る時は合圖せよ。</p>		<p>1、月曜日は先生との會食だから姿勢を正して來室を待つ事。</p> <p>2、級長の號令で一禮「いたゞきます」</p> <p>3、終りは個人別に一禮して仕末し他の終るのを待つこと。</p> <p>4、正常歩の用意をして下校庭に出る。</p> <p>5、中食時家へ歸つて食ない。</p>		<p>16、放課後は整理當番をし道具の始末を厳正にすべし。</p> <p>15、作業後必ず手を洗へ。</p> <p>14、更に整列して教師の講評を受くべし。</p> <p>13、道具は丁寧に使用すべし。</p> <p>12、作業やめの鐘で道具を所定の位置に正しく仕べし、組長は其の良否を必ず檢査せよ。</p> <p>11、作業終の鐘が鳴るまでは仕事をみつめて待つこと。一心不亂のこと。</p> <p>10、腰掛、机は二人で持て。</p> <p>9、常に考へて作業よ。</p> <p>8、雑布をよくしぼり、兩掌を接合したる廣さに見、力を入れてふけ。</p> <p>7、絶対無言たるべし、人に下知するな。</p> <p>6、作業の鐘で一齊に始める。</p> <p>5、服装は輕装すべし。</p> <p>4、第四時限後作業の用意をして所定の位置に整て先生より作業上の注意を受ける。</p> <p>3、窓は最初に登校した者があける。窓は後方にすること。</p> <p>2、自習前教室校庭を清掃すべし、當番は早く出て自習前に清掃を終了させよ。</p> <p>1、高等科、東校舎は第二時限の休憩時に、南、本校舎は第三時限の休憩時に水を汲み置くこと。窓は最初に登校した者があける。窓は後方にすること。</p>		<p>8、離席か教室を出る時は先生の許を受けよ。</p> <p>9、遅刻者は後方に佇立して師命を待つべし。</p> <p>10、舉手は右前斜上方に勢よく正しくせよ。「生」とか「ハイ」とかを連發するな。</p> <p>11、用具をわすれた時は先生にとゞけよ。</p> <p>12、教師が話す時は筆記せず、板書と同時に筆記を本休とす。</p> <p>13、齊唱は聲を小にせよ。</p> <p>14、自ら進んで學習せよ、絶対にわき見や雑話をな。</p>			

校一日の躰

してはいけない。
 教室へ進發。
 男女の配列は平常の反對にする。
 有無は標識をもつてする。
 其の達示反省、諸注意事項、行
 事大切な事柄をなすのであるか
 ならぬ。
 いた澄み切つた氣持でなすべし
 らいて、女はそろへて手はも、
 百字の時は腰掛を引かず体を前
 の目を見る。
 は三十種餘本は眼よりも稍々低
 手と對稱の位置に、目と紙とは
 を前に減距離を取れ、胸を机の
 離せ。
 「と明確に返事してから起立
 答へよ。中腰をするな。
 さるを本体とす。筆入の位置は
 時は先生の許を受けよ。
 立して師命を待つべし。
 に勢よく正しくせよ。「先生」
 を連發するな。
 は先生にとせよ。
 記せず、板書と同時に筆記する
 よ。
 よ、絶対にわき見や雑話をする
 第二時限の休憩時に、南、西、
 の休憩時に水を汲み置くこと。
 清掃すべし、當番は早く出校し
 終了させよ。
 た者がある。窓は後方にあけ
 用意をして所定の位置に整列し
 の注意を受ける。
 始める。
 、人に下知するな。
 、兩掌を接合したる廣さにた
 け。
 持て。
 るまでは仕事をみつめてするこ
 と。
 用すべし。
 器具を所定の位置に正しく仕末す
 良否を必ず検査せよ。
 師の講評を受くべし。
 へ。
 をし道具の始末を厳正にすべし
 の會食だから姿勢を正して先生の
 禮「いただきます」
 禮して仕末し他の終るのを待つ
 して下校庭に出る。
 食ない。
 便所に入る時は合圖せよ。
 によく遊べ。

<p>下校</p> <ol style="list-style-type: none"> 2、下校後には教師と聯絡なき児童は一人も居ないこと。 3、服装をと、のへて二列左側正常歩で歸る。 4、校門の最敬禮。 5、校外では先生には會ふ度に敬禮する。 	<p>歸宅</p> <ol style="list-style-type: none"> 1、さつさと歸宅せよ。 2、歸つたら「たゞいま」と言つて挨拶せよ。 3、成績物はなるべく早く父母に見せよ。 4、家事の手傳ひか復習に時間をあてよ少年團の仕事ある場合は明確に父母へ報告せよ、告げずして遊ぶな。 5、小遣の釣銭を渡せ。 	<p>戸外</p> <ol style="list-style-type: none"> 1、言葉遣ひを正しくする、品位をけがすな。 2、街道往來他人の妨害となる遊びをするな。 3、落書やあぶないことや賭事に類する遊びや喧嘩をするな。黨を組み亂暴するな。 4、道を聞かれた時は丁寧な教へる。 5、葬列に逢つた時は丁寧に對しては敬禮をする。 6、火遊びをせな。 7、墓所や田圃に立ち入るな。 8、山林をあらすな。 9、水泳には必ず親の許を得よ。 10、早く歸れ。 11、事故が起つた時は附近の大人に告げなるべく早く家にしらせよ。 12、自動車や汽車に注意せよ。 13、歸宅したならば其の日の大体を親に報告せよ。 14、神社、寺院の前は敬禮して通ること。 15、夜遊びは禁する、夜會は學校の許可を受けること。 	<p>手傳</p> <ol style="list-style-type: none"> 1、親の言ひつけには氣持よく「ハイ」と言ひ、すぐ仕事にとりかゝり、出來終るまではそれに一生懸命になつて、他の事をせな。 2、言ひつけがなくとも毎日きまつて自分で出來る仕事（庭掃除、整頓、草刈、飼養、子守、水汲み、湯沸、炊事、洗濯、草取）は進んでする、お使ひは早く。 3、仕事の結果は必ず報告する。 4、お使ひから歸つたら必ず報告する。 5、兄弟が多い時は仕事を分けるか兄弟の指揮に従ふかして仲よくすべきである。國民學校の子供は兄弟喧嘩などすべきではない。 6、仕事がすまらずとも夜に入つたら切り上げて歸れ、怪我をするな。 	<p>入浴</p> <ol style="list-style-type: none"> 1、夏は二日に一回、冬は一週一回以上。 2、掛湯をしてから入ること。 3、錢湯で騒いだり、湯桶を一人て占有したりするな使つた湯桶は必ず仕末せよ。 4、よく洗ひ、親兄弟と同時入浴の時は背中を流してやれ、長湯をするな。 	<p>勉強</p> <ol style="list-style-type: none"> 1、毎日一時間以上の家庭自習をせよ。 2、本日習つたところは必ずその日に復習しむづかしむところは何度も繰返して讀んだり、書いたりせよ。 3、明日の學科は本がよめるだけにして來なければならぬ。修、讀、地、國、理など皆教科書がよめるやうにし、更に時間があつたら、むづかしいところをしらべ、その上尙解らないところは質問出來るやうにノートに書いて來る。 4、はじめから参考書にたよつてはいけない。 5、だら／＼した勉強では駄目だ。一心不亂にやること。 	<p>強就</p> <ol style="list-style-type: none"> 1、寢につく前に今日ありし事を反省し初五以上は日誌を記せよ。 2、就寢の時刻を定めよ、十時前がよい。夜更しは最もいけない。
--	--	--	--	---	--	---

<p>水泳</p> <ol style="list-style-type: none"> 1、身體の虚弱な者や、心臟病、肋膜炎、肺結核、腎臟病、レウマチス、脚氣、癩癩及耳の疾患ある者や重い病氣の恢復期にある者並びに痲痺の習癖ある者はしてはいけない。 2、時刻は午前十時前後と午後三時前後がよい。食前食後はいけない。 3、十五分位を一回の遊泳時間とせよ。長時間に亘るのはいけない。 4、顔色が蒼白となり、口唇が暗紫色となり指の爪下が蒼白となつてゐるものはすぐ上げること。 5、準備運動、整理運動は必ずする。 6、外耳道に綿をつめる。 7、危険な時は、仰向きになり大聲にて救助を求め親に告げて行け、一人行くな。 8、學校の往復に泳いではいけない。 9、頭、耳、わきの下、胸をしめしてからしづかに泳げ。 10、いたづらに沖へ出たり深いところへ行くな。上つた時は必ず人数をしらせよ。 11、指導者の注意を守れ。研究しながら泳げ。 12、隊長の指揮の下に規律正しくなければならぬ。 13、夜會は學校の許可を受ける。 14、奉仕作業を命ぜられた時は計劃を立て、家庭の仕事や學校の仕事にさしさわらないやうにする。 15、興亞奉公日の神社參拜は祭典前後にするあまり早く行かない。 16、運動の練習は學校の許可が出てからする。 17、學校の命令は全團一致たゞちに實行すること。 18、自分達で解決出來ない事や父兄からの希望などは先生に相談する。 19、各隊は反目してはならぬ。 20、少年隊長會の結果は直ちに團員に報告せよ。實行の計劃を立てよ。 21、會合の度数を多くしたり時間を長くしたりして家に迷惑をかけるな。 22、毎月隊誌を提出すべし。 23、團員は長幼の序を守り年長者は年下の者を可愛がれ、年若の者は年長者の教によく従へ。 24、男子團員は毎朝立木打を實行せよ、女子團員は家事の手傳をきめて毎朝實行せよ。 	<p>少年隊心得</p> <ol style="list-style-type: none"> 1、坐つた姿勢は、兩足の指を重ね兩膝の間を男子は十種乃至十五種とし、女子はなるべくつけ、體を眞直にし、正しく腰を据え、兩手は股の上に置き、頭を眞直にし、口を閉ぢ、前方を正視する。兩手は軽く組んでよい。 2、立つてする最敬禮は上体を徐に前に約四十五度に立體は約三十度に傾け、頸を屈したり、膝を折つたりせな。 3、坐つてゐるとき最敬禮は、先づ姿勢を正し、正面に注目し、上体を徐に前に傾ける共に、兩手を膝前に進め、指尖の間を約五種とし、頭は座面より約五種の所まで下げるのを度としてとせ、凡そ一息の後、徐に元の姿勢に復する。殊更に頸を屈したり、腰を上げたりしない。 4、神を拜するには、再拜、拍手二を行ふか又は拜を行ふ。前後に揖をする。 5、拜は上体を約四十五度前に傾けて後に復する。揖は十五度前に傾ける。再拜、拍手二、の後に一拜を加へることもある。神葬の場合に拍手を行ふときは忍手とする。手水は柄杓にて清水を汲み手を清める。更に口をすすぐんとする場合は清水を掌にうけて行ふ。 6、佛を拜するには、佛前に進み、適當なところに、 	<p>水泳心得</p> <ol style="list-style-type: none"> 2、速にその用向を述べる長居は失禮である。 3、濫りに家具、調度に手を觸れたり見まわしたりせな。 4、相手の顔を見て話をする。もじもじせな。 5、歸る時はしつかりした禮をし「有難う御座いました」と言ふ。
---	--	---

かを連發するな。
時は先生にとゞけよ。
筆記せず、板書と同時に筆記する
せよ、絶対にわき見や雑話をする
は第二時限の休憩時に、南、西、
限の休憩時に水を汲み置くこと。
を清掃すべし、當番は早く出校し
を終了させよ。
した者があける。窓は後方にあけ
の用意をして所定の位置に整理し
上の注意を受ける。
し。
に始める。
し、人に下知するな。
り、兩掌を接合したる廣さにた
ふけ。
よ。
で持て。
るまでは仕事を見つけてするこ
こと。
用すべし。
道具を所定の位置に正しく仕末す
の良否を必ず検査せよ。
師の講評を受くべし。
洗へ。
番をし道具の始末を厳正にすべし
の會食だから姿勢を正して先生の
禮「いただきます」
一禮して仕末し他の終るのを待つ
して下校庭に出る。
て食ない。
れ便所に入る時は合圖せよ。
仲よく遊べ。
もの、外は佇立し袖手するな。紙
許可を受けよ。
立ち入るな。
で敬禮し「はつてよすか」と
てから入ること、廊下を走るな。
ためるな。
けて使用せよ
には同時に二人以上さがつてはい
時は体操である皆擴聲機に向いて
合すべし。
て遊戯は一齊にやめて早く入室せ
ること。
使用は先生の許可を得よ仕末は先
よ。
べく自席に居る事。
の廊下を通つたり、特別室に入つ
講堂に入るな。
入共に敬禮すべし、団体出入には
く。
出入共に整理し、講堂の中で開散
授業開始前及終了後正面に敬禮す
な。正面に注目して不動たるべし
鐘は四時半、作法當番は五時、農

外	手	傳	入	活	勉	強	就	寢	便	所	活	寫	眞	訪
12、自動車や汽車に注意せよ。 13、歸宅したならば其の日の大体を親に報告せよ。 14、神社、寺院の前は敬禮して通ること。 15、夜遊びは禁止する、夜會は學校の許可を受けること。	1、親の言ひつけには氣持よく「ハイ」と言ひ、すぐ仕事にとりかゝり、出來終るまではそれに一生懸命になつて、他の事をせぬ。 2、言ひつけがなくとも毎日きまつて自分で出來る仕事（庭掃除、整頓、草刈、飼養、子守、水汲み、湯沸、炊事、洗濯、草取）は進んでする、お使ひは早く。 3、仕事の結果は必ず報告する。 4、お使ひから歸つたら必ず報告する。 5、兄弟が多い時は仕事を分けるか兄弟の指揮に従ふかして仲よくすべきである。國民學校の子供は兄弟喧嘩などすべきではない。 6、仕事が終わるとも夜に入つたら切り上げて歸れ、怪我をするな。	1、夏は二日に一回、冬は一週一回以上。 2、掛湯をしてから入ること。 3、錢湯で騒いだり、湯桶を一人て占有したりするな使つた湯桶は必ず仕末せよ。 4、よく洗ひ、親兄弟と同時に入浴の時は背中を流してやれ、長湯をするな。	1、毎日一時間以上の家庭自習をせよ。 2、本日習つたところは必ずその日に復習しむづかしところは何度も繰返し讀んだり、書いたりせよ。 3、明日の學科は本がよめるだけにして來なければならぬ。修、讀、地、國、理など皆教科書がよめるやうにし、更に時間があつたら、むづかしいところをしらべ、その上尙解らないところは質問出來るやうにノートに書いて來る。 4、はじめから参考書にたよつてはいけぬ。 5、だら／＼した勉強では駄目だ。一心不亂にやること。	1、寢につく前に今日ありし事を反省し初五以上は日誌を記せよ。 2、就寢の時刻を定めよ、十時前がよい。夜更しは最もいけぬ。 3、就寢の挨拶をせよ。 4、自ら床を延べよ。高女は家族の床をも延べよ。 5、寝衣を着かへよ。暑い時は着物を腹からきれ。 6、寝る前に齒を磨くのはよい習慣である。 7、仰臥がよい。横臥の時は左測を上にしてねる。大の字なりに寝るのはつしめ。 8、すぐねむること。居眠りはいけぬ。 9、手を胸にあてたり、足をまげたりしてはいけぬ手は体側に軽く置く。 10、寝ながら本を讀んだり、話したりするのは絶対にいけぬ。 11、寝る前や起きる前にもものを食べるのはいけぬ。 12、便所に上れ。	1、定期に用便する習慣をつくれ。 2、朝食前後がよい。 3、入る時は合圖せよ。 4、汚すな。 5、手を洗へ。着物で拭くな道路わきに小便をするのは文化人ではない。	1、芝居、活動寫眞は學校の許可なきものは絶対に見ること。 2、卑しいことを云ふて場内で騒ぐな。闇にまぎれて悪戯するな。帽子はとる。 3、皇室に關するものや戦争に關する寫眞などの時は姿勢を正せ。謹んで拜觀すべし。 4、場内を汚すな。	1、「ごめんください」と言つてしつかりした禮をする。							

少	年	隊	心	得	禮
1、隊長の指揮の下に規律正しく行動する。 2、夜會は學校の許可を受ける。 3、奉仕作業を命ぜられた時は計劃を立て、家庭の仕事や學校の仕事にさしさわらないやうにする。 4、興亞奉公日の神社参拜は祭典前後にするあまり早く行かない。	5、運動の練習は學校の許可が出てからする。 6、學校の命令は全團一致たゞちに實行すること。 7、自分達で解決出來ない事や父兄からの希望などは先生に相談する。 8、各隊は反目してはならぬ。 9、少年隊長會の結果は直ちに團員に報告せよ。實行の計劃を立てよ。 10、會合の度敷を多くしたり時間を長くしたりして家に迷惑をかけるな。 11、毎月隊誌を提出すべし。	12、團員は長幼の序を守り年長者は年下の者を可愛がれ、年若の者は年長者の教によく従へ。 13、男子團員は毎朝立木打を實行せよ、女子團員は家事の手傳をきめて毎朝實行せよ。	1、坐つた姿勢は、兩足の指を重ね兩膝の間を男子は十種乃至十五種とし、女子はなるべくつけ、體を眞直にし、正しく腰を据え、兩手は股の上に置き、頭を眞直にし、口を閉ぢ、前方を正視する。兩手は軽く組んでよい。 2、立つてする最敬禮は上体を徐に前に約四十五度に立體は約三十度に傾け、頭を屈したり、膝を折つたりせぬ。 3、坐つてゐるとき最敬禮は、先づ姿勢を正し、正面に注目し、上体を徐に前に傾ける共に、兩手を膝前に進め、指尖の間を約五種とし、頭は座面より約五種の所まで下げるのを度としてとゞめ、凡そ一息の後、徐に元の姿勢に復する。殊更に頭を屈したり、腰を上げたりしない。 4、手を拜するには、再拜、拍手二を行ふか又は拜を行ふ。前後に掛をする。 5、佛を拜するには、佛前に進み、適當なところに、とゞまり、一禮し、更に進んで合掌、退いて一禮する。 6、燒香するには、佛前に進み、少し手前で一禮香爐臺の前に進み、合掌、燒香一回合掌、退いて一禮する燒香は特殊の場合には二回若しくは三回のこともある。 7、坐禮は、先づ姿勢を正し、先方に注目し上体を徐に前に傾けると共に兩手を膝前に進め指尖の間を十種乃至十五種とし、頭は座面より十種乃至十五種の所まで下げるのを度としてとゞめ、寸時その姿勢を保ち、後徐に元の姿勢に復する。殊更に頭を屈したり、腰を上げたりしない。一般に男子は女子より頭を稍々高目にし指尖の間も廣目にする。 8、擧手は、先づ姿勢を正し、右手を擧げ、その指を互に接して伸ばし、食指と中指とを帽子の庇の右側に當て、掌を稍外方に向け、肘を肩の方向で畧々その高さにひとしく頭を向けて、先方に注目する。 9、會釋は、立つてゐるときは先づ姿勢を正し、先方に注目し、上体を徐に約十五度前に傾けると共に手は自然に下げるとゞめ、後徐に元の姿勢に復する。頸だけ屈するのはよくない。 10、坐つてゐる時の會釋は、先づ姿勢を正し先方に注目し、上体を徐に約十五度傾け、後徐に元の姿勢に復する。手は股の上に置いて、又体の兩側に下してもよい。 11、坐つてゐる人に對しては坐つて敬禮し、立つてゐる人に對しては立つて敬禮し腰を掛けてゐる長上に對しては立つて敬禮する。 12、帽子を脱ぐには右手でし、その内側を右の外股に軽く觸れる位にして敬禮する。		

第一期に於ける國民科修身教育の方法

贈 呷 郡

目次

- 一、はしがき
- 二、めざすもの
- 三、躰の具体相
 - 1、素朴な「コドモ」
 - 2、躰けられゆく「コドモ」
 - 3、強しよ「コドモ」
- 四、むすび

一、はしがき

母の會に於ける一婦人の切實な話の一節である。此の話の具体相に果して我々は何を感じ、何を反省させられるか一母親の教の備みではあるが、心靜かに沈思黙考して見たい。

夏休を前にした一學期最終の「母の會」の席での事である。最後に残つた一人の母親（町でも有力な商家）が次

のやうな事を訴へた。

「私の子供は學校に上るやうになつてから、お蔭様で大分おとなしくなりましたが、性來腕白者で、兄弟の言に逆らつたり、弟を虐めたりする事は常の事で私達父母の言ふ事すら聞入れない事が多いやうです。或晚私は二宮金次郎の孝行の話と致して見ましたが、倅は「僕の内もお百姓さんであればお米をついて勉強するよ、貧乏であれば草履をつくるよ。」と言つて、まるで馬耳東風の態であります。先生困つたものです。どうしたら素直に導く事が出来るものでせうか。」

子を持つ母として眞實の告白である。私は其の愛情に打たれて次のやうな事を語つたのである。

「そんな事を言ふのはお宅の坊ちゃんばかりではありませんよ。實は東京の山之手のさる裕福な家庭の子供に金次郎の身の上を語つて聞かせたら、さつぱり感激がないので揮毫まで持出して見せた。ところが金次郎の肩のつぎを見て其の子供は「先生これは勳章ですか。」と言つたといふ事です、まことに笑ふにも笑へない話で

す。子供といふものは、僅かに其の身邊の直接経験から物を解釋してゆくもので、時代を異にし、環境を全く異にした他人の金次郎さんではびんと來ないのでね。」と笑ひながらも、日の暮れるのを忘れて、正しい導き方について種々懇談したのであつた。

一、めやすもの

如上の母の話は、家庭教育の一断面であり一姿態を物語るものではあるが、慎思熟考する時、此所に躰、死活の鍵が秘められてゐる。

道徳的行爲の主体を「ワタクシ」に置く 前述の子供が孝子金次郎の話の感激を覚えなかつたと言ふ事は勿論母の説話のし方にもよるであらうが、一面「孝行」といふ徳目をふりさざして之を兒童に悟らしめようとし組み、兒童の道徳的な興味を殺いだ事にも基因するであらうし、又他面時代と環境とを異にした金次郎の徳行をそのまま知らしめようと企圖した事にもよるであらう。

第一期兒童に於て提出される孝行な子供はかやうに時代と環境とを異にした金次郎でもなく、「オノサ」でもなく、すべてが「ワタクシ」を主体としたものでなければならぬ。

錬成を期する」とあるのも此の趣旨に基づくものであらう。

實踐指導といふ事は全期間を通じての根幹的な仕事であつて、それは「實踐への指導」と「實踐の指導」とが一体として呼ばれるものであるが、一期に於ては前記の趣旨により「實踐の指導」即ち日常的な躰といふ事が主体をなすのである。二期三期となつて理論的方面が發達するにつれて「實踐への指導」といふ事が次第に深くなつて來なければならぬ。

情意的に錬成する かくの如く日常的な躰を施してゆく所に此は單に、日常生活の具体的事項を知らしめるとか、分らせるとか言ふ事であつてはならぬ。從來の生活指導の多くは、日常生活の一つ／＼の事項を調査討議して、唯、理論的に開發する面に偏する傾向にあつたやうであるが、眞の實踐指導は信じて行じさせる所謂情意的錬成を缺くものであつてはならぬ。單に知らしめて後行はせるのでなくして信じてしかも喜んで行するものぞなければならぬ。特に理論的に分化してゐない此の期の兒童に對しては、著しく此の點に留意して錬成の歩を進めなければならぬ。教科書の挿畫が、高雅にしかも美麗に出來、其の文章にも童心豊かなものが盛られ、感銘深く出來てゐ

ばならぬ。そして其の「ワタクシ」は田舎に生を享け、農村の生活をしてゐる兒童でもあり、同時に又大都會の一隅に生を享けた兒童でもあり得なければならぬ。かゝる意味に於て不足のない商家に育つた此の子供として、金次郎や「オノサ」の孝行より他に自己の日々の實踐行爲に直接生きて働く孝行があるのではなからうか。教科書「ヨイコドモ」が「ワタクシ」はかく／＼の事をしたといふやうに道徳的行爲の主体を「ワタクシ」に置いてゐるのも此の意味からであらう。

躰を主体となす

そこで「ワタクシ」の生活環境に於ける「ワタクシ」の日々の實踐、即ち商家の子供は商家の子供として、農家の子供は農家の子供として、直接生きて働く孝行を躰けるといふ所に、此の期の指導の重點がなければならぬ。未分化的な子供に如何に金次郎のうるはしい徳行の例話を聞かせて見ても、自らの道徳行爲を捉すやうな自覺が果して生ずるものであらうか。「オテツダヒ」とか「風邪をひかないやうに」とか「偏食をしないやうに」とか、彼等の生活に手近なものを教へて各自の生活に實踐出來るやうに躰けてゆく所に、孝行といふ道徳的行爲が顯現するのである。「ヨイコドモ」に「第一期に於ては兒童の遊戯、學校の行事、家庭に於ける躰等と緊密に關聯せしめつゝ、兒童徳性の情意的

るのも此の情意的錬成の一助たらしめようとする深い心組であらう。

前述の母親が、其の子の躰に當つて、十分の効果をあげ得なかつたのは、單に例話の仕方が悪い爲ではなく、孝といふ道徳的行爲を知らしめて行はせようとする企圖したことに基因するのではなからうか。

此の期に於ける指導のこつは育ちゆく兒童の氣持に共感しつゝ、彼等の具体的な行爲を凝視し、其の善行を稱揚して彼等に喜を感じしめつゝ、反覆の意欲を起させる事である。

國民への錬成

「オテツダヒ」する事も「アラシノ日」に敢へて學校への道を急ぐことも、「カミノ舟」に工夫をこらす事も、「ウンドウクワイ」に力を合せて最善の努力を盡くすことも「サイケイレイ」に整然たる所を見せる事も、これ等一切の躰が、教育に關する勅語の御趣旨を奉戴して天壤無窮の皇運を扶翼し奉る臣節につながる事は勿論である。

かゝる皇國の道徳修としての道徳的行爲が兒童自身の中から芽生えるやうに指導して皇國臣民としての信念を堅持させ、將來の東亞を見事に盛り立ててゆく「ツヨイコ」たらしめてゆくといふ所に修身指導根本の目標がある。一期の修身指導は日常的な躰を重視することは言つ

ても、常に此の根源的なものを忘れてはならないのである。教則に示された國民科の要旨「我が國ノ道徳言語歴史國土國勢等ニ付テ習得セシメ特ニ國體ノ精神ヲ明ニシテ國民精神ヲ涵養シ皇國ノ使命ヲ自覺セシムル」といふ事も國民科修身の目的「教育ニ關スル勸語ノ旨趣ニ基キテ國民道徳ノ實踐ヲ指導シ兒童ノ徳性ヲ養ヒ皇國ノ道義的使命ヲ自覺セシムル」といふ事も共に其の到達すべき目標を昭示したものである。

以上の目標を目指しつゝ、脚下の子供を照顧して躰の具を相を述べることにしたい。

三、躰の具相

躰の具相を述べるに當つて、先づありのままの素朴な「コドモ」を考へ次に家庭で育ち、學校で導かれ、更に不斷の修練を経て第一期の兒童なりに完成されゆく「ヨイコドモ」の實相を究明する事にしたい。

一、素朴な「コドモ」

入學當初の事である。神岡といふ兒童が、四五人の子供と一しよになつて、校舎の壁に色々と落書するのを目撃したので次のやうな注意を與へた。

は、そのためである。神岡といふ子供が、落書をしてはならぬと教師に注意されておりながら、壁に落書する事と、黒板に落書する事とを別な事に考へてゐる理由もそこにある。そこで教師としては丸山の場合に指導したやうに、其の場其の場で手をとつて導いてやる事が肝要である。「昨日落書してはならぬと言つたのに分りませんでしたか。」などと詰問するよりも其の前に黒板にも落書してはならない悟し方があつたのではなからうか。又例へ、黒板に落書してゐるのを目撃した場合と雖も、如上の特性に鑑みて親切に指導してやるべきではなかつたか。

要するに言葉の上でのみ説明して理解させようと圖つても兒童の道徳的興味をにぶらすばかりである。具体的な行爲を通して理解させそれが行爲にあらはれるやうに聽ける事が工夫されねばならぬ。かくして始めて心身を一体として修練が出来るのである。

此の期の兒童は 此所に再び丸山といふ兒童について殺那的である 考察を續けて行つて見たい。前述の

事例にもあるやうに教師が何遍注意しても、傘棚の整頓といふ事が思ふやうにならないし、又現地の指導も一回ならず二回ならず、實に五六回に及んではじめて其の實

教師 「色々と自分の好きな繪を書く事はよい事ですがそんな所に落書する事はやめる事にしませう。」
すると其の翌日の休時間の事である。此の兒童達が黒板にいたづら書をしてゐた。

教師 「昨日落書してはならないと言つたのに分りませんでしたか。」

兒童 「先生此所もいけないのですか。」と。

是も又入學當初の事である。大分傘棚の整理も上手に出来るやうになつたが、丸山といふ兒童だけが、何遍注意しても整頓が出来ないので、雨の日毎に五六回現地に行つて、「傘はこゝにかうして置くのですよ。」と手を取つて始末して見せた。それからといふものは、外の兒童よりもよりりつぱに整理が出来るやうになつた。

この期の兒童は具

前述の事例に徴して見ても分るやうに、此の期の兒童といふものは

一つの事項について、考へ方振舞方を悟しても、場所が違ひ、物が違へば、別の場合のやうに感じ易いものである。同じ考へ方同じ振舞方が、あらゆる場合に於てはまるといふ普通性抽象性に缺けてゐるものである。どこまでも具的に即して躰けてゆく事が考へられねばならぬの

行が可能となるといふ事實は、明らかに兒童の生活が利那的であるといふ事を裏書するものであらう。此の點滅不整なる彼等の衝動的な行爲を正しく馴化するに至るまでにはなみなならぬ教師の根氣が必要なのである。一期の指導が、教師と兒童との根氣比であると言はれる理由も此所にある。此の意味に於て日本人としての基本的な行爲を一通り修得させるには前述の傘棚の整理に徴しても分るやうに、兒童の利那的な特性を考慮して回を重ねて練磨育成するより外はないのである。

此の期の兒童は未分化的である

壁に落書してはならないといふ事から推して、黒板のいたづら書もやめ

ねばならないといふ事は理知的に分化した兒童には納得出来るはずであるが、此の期の兒童は、其の事實を、別の事のやうに思惟するのである。即ち未分化的であると言ふ事が、此の兒童達の一特質である。

従つてこれ等の兒童に對しては理知に照らした自覺的自律的な道徳的判斷を強要する事を避けて、隨時隨所に於て日常の行爲を馴化する事が考察されねばならぬ。理知的方面の伸張が顯著でない此の期に於て躰が第一義的なものとして取上げられる理由も此所にある。

2、躰けられゆく「コドモ」

○家庭のをしへ

次は前章に述べた一母親から教師の手に届けられた手紙の一節である

前署 暑さきびしい折柄先生にはお變りもございませんか。愚息は常に一方ならぬ御世話様になり、家内一同感謝致して居ります。最近余程學校生活にも慣れたと見えて、喜んで通學致して居ります。一學期末に開催された母の會に於ては御懇切なる御指導をいただきまして、誠に有難うございました。先生の御をしへのまゝに家庭に於ても、教育の事に専念致して居ります。つい二三日前の事であります。一里もある新原の叔父の所に急用がありまして、お使に行くやうに申しつけました所、遊びに夢中であったにもかゝらず、早速應じてくれましたので、母親として誠にうれしく頼母しく感じました。あのやうな子供が、かくも素直に分けが出来るやうになつたかと、今更ながら教育の偉大さを痛感致しました。甚だ勝手ではございますが、いつか折を見て

先生にもおほめの言葉をお願い申し上げます。

○ 家庭は躰の場所である 「此の母にして此の子あり。」とは古くから言はれてゐる言葉である。一學期までは親の言付に殆ど耳を傾けなかつた此の子供が、母の熱意と、躰の方法によつては、かくも一變するものであらうか。實に家庭は躰の場所であり、修練の道場であると言はれる通りである。我が薩藩に於ては昔から幾多の英傑が輩出してゐるが、其の裏には、何れもかうした信念に満ちた母の愛育錬成の力が働いてゐたことを見逃してはならぬ。「をしへ」の語は我が子を「惜し」と思ひ「愛し」と思ふ親心に發する愛育の謂である。かゝる愛育の下に幼少の子供達は先づ「オテツダヒ」「朝晩の挨拶」等の如き禮儀作法言語動作等を家庭に於て培はれてゆくのである。かゝる意味に於て此の一母親が家庭の躰に細心の注意を拂つて其の子の愛育に専念する事は、實に日本の母親として當然の事と言はねばならぬ。日本の家庭はどこまでも躰の場所なのである。

○ 家庭のをしへは一切 前節に於て述べた如く兒童は兒童として大人とは違つた世界に住むものではあるが、しかし將來日本の中堅國民たるべき素養を家庭に於て漠然ながらも隱約の中に修得するも

のである。即ち子供の悉くは其の家庭にある神棚に仕へて敬神崇祖の念を深くし、朝夕拜する二重橋の御寫眞に國體の尊嚴と國民的な感激を覚え、國の子としての誠に生きてゐるのである。

日本の國は山川草木すべてうるはしい四季の變遷の正しい國である。兒童は此の國に生れ其の兒童の両親が、又此の國に生れ、其の両親の膝下に育つた子供が、此の子供なのである。前述の母又然り、子又然り。即ち日本の子供は悠遠な國史の中に生れ育まれたる歴史的存在で生れながらに天皇に奉仕し、父祖の心につながる歴史的生命を有してゐる。

さればこそ兒童の家庭に於ける小規模の生活は大規模に於ける國家的生活の縮圖であると言へるのである。そして其の中に一切の國民文化を無意識ながらも、直感的感情的、全体的に把握しつゝあるのである。

國民學校の教育は此の全体的な未分化のしかも一切を含有する兒童の体験から出發し、次第に之を分化しつゝ、漠然たる体験を漸次明晰な意識に高め組織的体系的ならしめ以て皇國民の鍊成を全からしむべきである。

○學校でのみちびき

學校は家庭の延長である。家庭で躰けられた子供達が即ち學校の延長である。よき子供なのである。國民學校の教育

は一面からは家庭教育の延長深化向上として考へねばならぬことは既述の通りである。前述の母の教育に見る如く家庭教育の全き所、學校教育も圓滑に營まれ得るのである。教則に「家庭及社會トノ聯絡ヲ緊密ニシ兒童ノ教育ヲ全カラシムルニカムベシ。」とあるのは此の事情を物語るものである。

前述の兒童が未だ「ヨイコドモ上、十三オテツダヒ」の課を直接學修せずして隱約の中に修得した道の顯現として、母の言のまゝに叔父の下に使したといふ事實は「オテツダヒ」といふ孝なる行爲の萌芽が既に家庭に於て培はれたものと言はざるを得ない。

「十三、オテツダヒ」に於ては漠然ながらもこれ等一切を含有する体験から出發して「親の言付を守らねばならない。親の言付に従はねばならない。」といふ孝の實踐を指導する所に其の趣旨がある。

以下此の「オテツダヒ」といふ事を主題として教育開展の模様を敘述しよう。

○ 隨時隨所是 躰は單に國民科修身の時間のみでなされ修練の機會

ると考へる事は早計である。休時間、作業時間、登校下校の折は勿論ありとあらゆる場合が修練の機會である。

「ヨイコドモ」の教材中に出てゐる事項であつても單

に其の時間のみで導かれるものではない。例へば「禮法」の如きも、奉安殿に對する最敬禮があり、通學途上に於ける先生への挨拶があり、學友への挨拶があり、又朝禮での挨拶があり、教室での挨拶がある等、修練の機会は隨時隨所にあるものである。「キマリヨク」せよといふ事について考へて見ても、登校始業の時刻、履物雨具の始末、机内の學習用具の整理、學習帳の使用法、玩具の出し入れ等限りなく躰の好機を擧げる事が出来る。又「オテツダヒ」について考へて見ても毎日の用足しを奨励する事は勿論、日曜の前日とか、種時、苗植、刈取の前日とか、家庭に病人の出来た時とか、家庭に於ける祭時の前日とか、適當な時期を捉へて、其の場其の場で其の實踐を促し以て修練の機会たらしめる事が出来るのである。

修身の授業は兒童をして、皇國の道を實踐し得るやう修練するといふ事に異論はないはずであるが、それは斷じて、抽象的理念としてのみ働くものであつてはならない。時と場所とに應じて充實した内容を持つ事の出来る具体的行爲たらしめねばならぬ。かゝる意味に於て兒童の道德的意欲の發動を其の生活の實際に即して、隨時隨所に促すべきである。

かくの如く、「十三オテツダヒ」の課を學習するまでに、兒童は「オテツダヒ」に關聯する如上の事項を履修し來つたのであるが、此の間之に伴つて、「ヨミカタ」に於ても其の心の奥行をつくる側裏ともなるべき幾多の教材に直面するのである。即ち「ヨミカタ」一、二〇オツカヒの課では「イサムサンガ、ヲヂサンノトコロヘ、オツカヒニイキマス。シロモ、ヨロコビ ツイテイキマス。」と親しいをぢさんの所へのおつかひの楽しさを味ははせ、「同三十三、オハカノサウヂ」の課に於ては「オハカノ マハリノ 草ヲ トツタリ、オハカノ石ヲ水デ アラツタリシマシタ。」と言ふ中に祖に生き祖に應へる心を培ひ、「三十五、ユフダチ」の課では「ワタクシハ、オカアサント イツシヨニアマドラ シメマシタ。」と母に協力する強い子の心意氣を示し、「ヨミカタ二、九イモヤキ」の課では「ケフ、ハタケノ カタヅケヲ シヨウ」ト、オトウサンガ オツシヤイマシタノデ、オカアサンモ、ボクモ、弟モ ハタケニ 出マシタ。……」と一家總出で楽しくもなごやかな尊嚴氣の中に子供各自が、分に應じて、父母と共に愉快に働く場面をあらはしてゐる。

以上要するに「ヨイコドモ」と「ヨミカタ」とは一体不可分のものとして、國民科の教育目的を遂行し、以て

前項に於て躰は表裏一体となつて皇國の道を修練す 隨時隨所に行は

れるものであることを説いた。此の事は他面各教科科目を通して、道の修練をする事の裏書ともなるものであるが、しかし直接國民的自覺信念に培ふ爲の教科は何と言つても國民科である。即ち「ヨイコドモ」は國民生活の正しい筋道を明らかならしめる表側となり、「ヨミカタ」は國民的な感情情緒を豊にして心の奥行をつくる裏側となつて、相互に連絡し補足し合ふものである。

然らば「ヨイコドモ」上十三オテツダヒの課に至るまで此の兩科目が、「オテツダヒ」に關聯して如何に一体的な進展をして行くか此所に考察して見たい。

「ヨイコドモ」上「ガクカウ」の課に於ては家庭の親、學校の教師の躰ける所によく従ふことが「ヨイコドモ」の本である事を説き、「同七、ナツヤスミ」の課に於ては休中はおとうさんおかあさんの言付をよく守つて草花に水をやつたり庭を掃除したり、お使に行つたりしてよくうちの用事を手傳はなければならないといふ休中の心得を説き、更に「同十二オトウサンオカアサン」に於ては親の恩の洪大な事を感じさせ、親は大切にすべきだと言ふ道德的理想を芽生えさせて孝なる行の實踐へと導いてゆく。

國民的自覺信念に培ふ事を企圖したものである。

此の教材に直接した此の子 オカアサンガ、「ニハヲ供進を如何に修練するか オハキナサイ。」トオ

ツシヤイマシタ。ワタクシハ、「ハイ。」トイツテイ
チラウト イツシヨニ、ニハヲ ハキマシタ。ニハガ
キレイニ ナリマシタ。(ヨイコドモ上、十三オテツダヒ)

先づ子供の内 凡そ修身指導のこつは如何なる場合に
心につれる あつても兒童の有する生活體驗を理解

することに於ける。しかもそれは監督者といふ立場からではなく、子供の味方となつて悉さに了解するのでなければならぬ。その爲には日頃から子供と共に生活して其の行狀を凝視することは勿論、家庭訪問或は母の會等によつて、子供は果して従順であるか、どんな事を喜んでなすか、どんな事をきかないか等について、豫め個々の兒童について知つて置く必要がある。

此の事は多種多様な環境にある子供達の行爲實現の方法を、具体的に手引する用意ともなるものであつて、修身指導死活の要訣は全く此の一點に盡きるものである。

若し此の事を怠るならば個に徹した指導の出来ない事は勿論やゝもすれば子供を小さな大人と見誤つたり、或は子供は大人と全然別な世界に住むものであるといふ兒

所が、「その邊の花壇にはものが植込んであるからあち
らの方で遊びなさい。」と言ふお父さんの聲が聞えた。
それで私達はすぐにお父さんのおつしやつた所へ行つて
毬投を続けました。」

此所に至れば話す者も聞く者も共に説話の中に融合す
る。今は姉弟の行爲が、兒童の現實生活に生きた模範と
して現前し、如上の説話の過程が、即今兒童自らの内的
行動の過程となつて、感激を興へ、その實踐の意欲をい
やが上にも高めるであらう。

そこで其の感激を再び

文章に読み浸る、「ワタクシハ「ハイ。」トイツテイチ
ニナリマシタ。」眞言は即ち眞行であつて實に孝の實踐
なのである。

實踐意欲高

潮に達す へ面白い遊びをしてゐる最中もお父さん
のお母さんのお呼びになつた時は、すぐ返事して其言付
を守らなければなりません。」といふ最後の教師の一言
に深いうなづきを見せた。そして「お父さんはお母さん
が私達をおほめになる事もお叱りになる事も私達を「ヨ

3、強よ「ヨドモ」

皇國の道に隨順する道徳行爲が 以上述べ來つた所は
兒童自身の中に芽生えるやうに 孝なる行爲としての

「オテツダヒ」の修練過程である。然してそれは「ヨイ
コドモ」への基礎的な躰の一つではあるが、これも將に
皇國の道に則る孝道であり、天壤無窮の皇運を扶翼し奉
らんが爲の誠忠に繋がるものである。實に「ヨイコド
モ」としての善行爲は國體の精華を發揮する事と切離し
てなされるものではないのである。

要するに一期に於ける修身科独自の使命はかやうに皇
國の道に隨順する道徳行爲が兒童自身の中に芽生えるや
うに實踐指導をなし、徳性を涵養する所にある。

みため

かくて兒童達は「セウコクミン」としての自
覺を持つと共に「日本ヨイ國、キヨイ國。世界ニ

カガヤク エライ國。」と日本に生を享けたるを無上の
喜びとし「天皇陛下ノ アリガタイコトガ、ワカリマ
シタ。 天皇陛下ヲ イタダク日本ノ國ハ、世界中デ
一番タフトイ國デアルコトヲ 知りマシタ。私タチハ
天皇陛下ニ チュウギヲ ツクシ、コノヨイ國ヲ、ミン
ナデ イツソウ ヨイ國ニ シナケレバナラナイト思ヒ

イコドモ」にしたい爲である。」といふ親の恩の洪大さ
が身にしみたやうである。

○不斷の修練

學校の教育と家庭の教育とは表裏一體となつて始めて全きを得
てはならない。家庭に歸つても此の感銘を實にして其の
行爲に表さねばならぬ。國民學校の教育が二十四時間で
あると言はれる理由も此所にある、其の爲には家庭通信
父兄母姉會等が眞に生かされねばならぬ。既述した一母
親の如き熱意ある父兄が一人でも多からん事を願ふもの
である。實に教育は學校と家庭が相互に補充する事によ
つて始めて全きを得るのである。

反覆による斷

えざる修練 先に子供の生活は具體的であり感覺的
であり利那的であることを述べた。感
激も早いのが冷却も早い。「ヨイコドモ」を通し、「ヨミ
カタ」を通し、又其の場其の場の機會をとらへて常に此
の感激を温めてやる所に反覆の必要がある。習性となら
しむる所に躰の目標が存する。兒童と父兄と教師とが鼎
の足となつて不斷の努力を続ける所に「ヨイコドモ」へ
の修練も期せられるのである。

マス。」と臣節の誠を披瀝するのである。

實に此の國の子達はすべて皇國悠久の生命を享け來り
更に之を永遠の未來に發展させる使命を自覺する「ヨイ
コ」たらねばならない。そして又百年の後まで繼續せら
れるであらう米英撃滅大東亞建設の天業翼賛に挺身參劄
する大使命を自覺する「ツヨイコ」たらねばならぬ。

四、むすび

教師の誠ある所兒童其の誠を捧げて絶對信順し、相互
感應共銘してをしへの本領は遺憾なく發揮される。大東
亞戰爭下此の聖職に挺身する我等はひたすらに其の誠を
長養し、其の場其の場の仕事を如何に實踐し、如何に躬
行すべきか、此所に自己の本來を再認識するの要がある
上來修身教育の方法を述べるに當り、躰の具體相を本論
として縷々述べし所以のものは實に此のさゝやかな具體
の中に其の方法を見出し、具體に即して我等の本分を發
見せんが爲であつた。我々は此の具體相を常に凝視し、
其の目標たる「ヨイコドモ」「ツヨイコドモ」の鍊成に
對し、之を如何様に返照し判斷するかを常に考察しつゝ、
教兒相携へてみことの旨に應へまつらん事を誓ふもので
ある。此所に拙論を述べて筆を擱く。

第二・三期
に於ける
國民科修身教育の方法

鹿兒島縣師範學校附屬國民學校

男附 二六

目次

第一章	もとゐ
第二章	みちびき
第三章	むすび

第一章 もとゐ

・日本は神様がお生み下さったのだから、世界で一番尊い國です。それで、大東亞戦争はきつと思ひます。大東亞戦争で米英をやつゝけて、よいアジャをつくと神様方はきつと喜んで下さるでせう。
・天照大神は日神とも申しあげるのだから、今も生きていらつしやるのです。天照大神がお生まれにならなかつたら、世界中の人はみんな死んでしまふだらう。
私は毎日大庭に拜禮するが、きつと皇大神宮におまゐりたいと思ひます。そして御しやしんをいたゞいて来て

、机の前にかざり、毎日皇大神宮におまゐりしてゐる氣持でゐたいと思ひます。
・本當によい神様がいらつしやるから、日本は尊い國です。今でいへば、お二方は天皇陛下・皇后陛下だと思ひます。
・天皇陛下は天照大神のごしそんで、生神様です。日本は生神様がお治め下さるのだから、世界で一番尊いのです。私どもはこんな尊い國の子どもだから、きつとえらい人になつて忠義をつくします。
・もし私が米英の子どもだつたら、どんなに苦しいだらう。日本の子どもだから、ゆくわいに勉強も出来て、ほんとにありがたいです。
・今、神様のかはりに、戦地では兵隊さんが戦つて下さいます。兵隊さんはとても強いです。戦死されると、靖國神社の神様になられます。私も、りつぱな神様になりたいと思ひます。
・私は日本に生まれて、大へんありがたいと思ひます。しつかり勉強や運動にせい出して、きつとりつぱな大東亞をつくりたいと思ひます。

右は、初三男兒が、「み國のはじめ」を學んで記帖した感想の中から拾ひ上げたものであるが、皇國の道に生成して行く兒童達の頼母しい相に、ほゝゑましい力強さを感じて止まぬものがある。

第一期に於て、徳性の情意的鍊成を期して、國民的自覺を喚起されつゝ實踐行爲に導かれて來た兒童達は、こゝに卷頭第一、み國のはじめの悠遠にして神嚴な神話に接し、神國日本の感激に、鮮かしい第一歩を國民的世界觀の素地に培ひ、國民的自覺を喚起して道徳的な理想を構成し得る方向に、逞しく踏み出したのである。

今、兒童の感想に接して最も心に迫るものは、悠久深遠な皇國の事實に對する驚異と、神國日本に生まれた喜びと誇である。而もそれが、表現に程度の差のある事は勿論、又表現し得ないにしても心の底に躍動する感激として、殆んど全兒童の魂に脈搏つ事を感じ得る。而して其の感激は、發して感謝の念となり、逞しい決意となつて、子供ながらに臣道實踐の氣魄を生じてゐるのである。

國民科修身のめざす皇國の道義的使命の自覺は、要するにかゝる國民的感激・氣魄を醗酵昂揚し、國民的自覺を喚起しつゝ、之を實にする事に他ならない。之を實にするとは、兒童を皇國の道に則らせる事であり、盡忠報

國・皇運扶翼の臣道を體得實踐させる事である。

吾人は先づ、「日本は神様がお生み下さったのだから世界で一番尊く強い國だ。」とうなづき、皇國日本に生まれた喜びにひたる兒童の現實に直面して、彼等の幼き魂に脈搏つ國民的なるものゝひびきに、生成發展して止まざる偉大なる萌芽を諦觀し、心に迫る力強い感動を覺えるのである。

而して、この兒童の心に躍動する感激こそ、正しく悠久深遠なる皇國の事實を物語る神話の中に宿された宇宙本源の大生命に、明淨正直ともいふべき邪念なき兒童の心が光被されて、その國民的なるまことを搖動かされたが故であらう事を思ふのである。

實に我が國は、神の生み給へるところにして、人工や人爲を以て構成されたものではない。本を本とし末を末として、親子の道により最も自然に成れる國である。日本の國があつたから神々が住まれたのでなく、久羅下なす漂へる所に伊弉諾尊・伊弉冉尊が、「天神諸の命以ちて」先づ大八洲を生み、次いで山川・草木・神々を生み、更に、「何にぞ天下の主たるべき者を生まざらめや。」と仰せられて、天照大神を生み給うたのである。即ち天照大神は、「光華明彩しくして六合の内に照徹らせ」られ、生まれながらにして天下の主たるべき絶對至

男附 二七

高の神にまします。その御稜威は宏大無邊であらせられ天地萬物を化育遊ばされ生成發展せしめ給ふのである。

凡そ國土萬物を生み給へる神が、その主たる神をも生み給へりといふ程甚深の意あるものはなく、天照大神の御出現によつて天地萬物が眞實に生きるものであり、こゝに神皇合一・神人一体・神物一如・君臣一体なる所以がある。

而して伊弉諾尊・伊弉冉尊の修理固成の大御業は、その大御心を承け給うた天照大神の御神勅となり、天孫此の土に降臨し給ふ。こゝに我が國体の基・教の根源は確立し、更に神武天皇の御創業となり、歴代天皇の大御業となつて中今に現御神を仰ぎ奉る。

畏多くも 天皇は「共殿同床」御鏡を奉齋遊ばされ、祭祀によつて皇祖皇宗と御一体とならせ給ひ、常に皇祖皇宗の御遺訓を紹述遊ばされて、肇國の大義と國民の履踐すべき大道とを昭示し給ふ。即ち、祭祀は神ながら皇國政教の基づく根本であり、天皇の御治教は祭祀を基として行はれるのであつて、こゝに祭政教は自ら一体である所以がうかゞはれる。

臣民は、天孫降臨の際奉仕せられた神々の精神をそのままに、祖先の心を心として億兆一心惟神の大道を翼賛し奉り、絶対隨順のまことを以て仕へ奉る。我等は生ま

れながらにして、皇運扶翼のみこともちてこの道を行じみたみわれの感激に生きる。

實に敬神崇祖は、報本反始の行であり、生命の根源への復歸であり隨順である。まことそれは、親子の道天地本然の大道であり、君臣の義・父子の情に基づく國家の必然的根本性格であり、道の國日本の據つて立つところである。

而して、君臣一体・家國一如・忠孝一本・上下感孚の我が國体の精華は、歴史的に具体化した道そのものであり、この道の窮りなく生成發展する具体的な相こそ、永遠に創造發展する皇國の歴史である。又、我が一貫せる國民精神はこの道に基づいて涵養され、我が精彩ある國民文化はこの道を樞軸として生み成される。

「道は發して教となり、學となる。」我が國の教學はすべて、道に發し道に於て一如たり得るものである。従つて、我が國の學は所謂「見る・ある」の觀念の學でなく、「生む、なす」の實踐の學であり、道の修練そのものでなければならぬ。

しかも既に述べ來つた如く、我が國の教の初發は天地開闢と同時にあり、國体の基が直ちに教の基であり、教の基がそのまま國の基である。こゝに萬邦無比の我が國の教の絶対にして神嚴なる所以がある。

而して、皇國臣民が億兆一心の實を擧げ、國体の精華を發揮する所以の道を、

斯ノ道ハ實ニ我カ皇祖皇宗ノ遺訓ニシテ子孫臣民ノ
俱ニ遵守スヘキ所之ヲ古今ニ通シテ譯ラス之ヲ中外
ニ施シテ悖ラス

と昭示し給へる「教育ニ關スル勅語」こそ、實に我が國民のすべてが奉體實踐すべき第一の經典であり教の一切であり、千載不磨の大御訓である。

我が國教育の本義は、正にこの大御訓の奉體實踐であり、億兆一心、絶対隨順のまことを以つて「斯ノ道」の修練に力める事に他ならない。而して、聖訓を實踐奉體して皇國の大道を中外に宣揚し、八紘爲宇の肇國精神を世界に顯現する事こそ、道の國日本が中今に擔ふ道義的大使命である。

今や、皇國日本の直面してゐる現實は、大東亞戦争の必勝完遂による大東亞共榮圈の確立・世界新秩序の建設である。それは即ち、漂へる世界の修理固成であり、天業の恢弘具現であり、肇國精神の顯現である。實に、全世界を普く道義の光に照明し、全乾坤を擧げて道義的に一字たらしめる事こそ、皇國日本の中今に擔ふ尊き大使命である。

大東亞戦争こそ正に、眞面に神籬を奉持し天沼矛を翳

して、億兆一心の總進軍であり、大詔を奉戴しての皇道宣布である。まつろはぬものをことむけやはし、眞に悔悟せるものを復活せしめ、人類に生成化育繁榮と幸福とを招來するものは、實に皇國の道を措いて他にはない。皇祖皇宗ノ神靈上ニ在リ朕ハ汝有眾ノ忠誠勇武ニ信倚シ祖宗ノ遺業ヲ恢弘シ速ニ禍根ヲ芟除シテ東亞永遠ノ平和ヲ確立シテ帝國ノ光榮ヲ保全セムコトヲ期ス

と昭し給ひ、上は皇祖皇宗に事へさせ給ひ、下は億兆に臨ませ給ふ宏大無邊なる大御心にこたへ奉る天業翼賛・皇運扶翼の臣民の道は、實に大東亞戦争を徹底的に勝ち貫く「今日」の實踐であらねばならない。

かくて吾人は、國民科修身の目的が、
教育ニ關スル勅語ノ旨趣ニ基キテ國民道徳ノ實踐ヲ指導シ兒童ノ徳性ヲ涵養シ皇國ノ道義的使命ヲ自覺セシムルモノトス

とある眞精神を會得し、その力動性に思ひを致すのである。

第二章 みちびき

「國体の本義」に「みちびくとは、子弟をして道に至らしめる事である。」と、述べられてゐる。

男附 三〇

て眞の行じ方を求め、正しき修身教育の方法を生成發展すべく力めよう。
先づ本月の教育計畫中、本科を中心とする關聯ある部面を表示する。

吾人は前章に於て、國體の本義に沈潜し皇國の道に思ひを致し、教育實踐の基底に高鳴る感激を覺え、教の由つて生ずる所に修身教育のあるべき相を求め來つた。
實に、「教育＝關スル勅語」の實踐的奉體こそ修身教育のめざすところであり、師弟同行教に隨順し道を体得實踐せんとする相こそ、正に眞のみちびきである。師弟が教へる心と學ぶ心を一にして、それぞれの分に於て絶對隨順のまことを致し、皇運扶翼の臣道を體得實踐せんとする啐啄同時・機々即應の一体の學びこそ、正に日本教育のあるべき相であり、國民の基礎的鍊成としての眞のみちびきである。

我が國の教學は、道に發し道に歸入するのである。行する事なくして道の體得はなく、道を道たらしめる所以は踐み行く事であり、教と學とが道に歸入するの機は修練であり、行である。

みちびきの在り方は、方法一般として概念的・抽象的な思索に於て解明されるべきものではない。行する過程としてのみちびきの具體的現實を凝視し、反省する事に於て生成樹立され、かくてこそ今日の教育實踐に生動し明日の實踐に生成する事を信ずる。

かゝる見解の下に、吾人はこゝに現實に行じつゝある初四女十一月の教育實踐に立脚し、行じつゝある相に於

週	日曜	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14
日曜	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日
生活	學級常會 (儀式訓練) (修)	明治節 (家庭奉讀式) (修)							大詔奉戴日 体育大會豫行 全右及び準備	行幸記念體育大會 國民精神作興詔書 下賜記念日 休業					(大戰果發表) (修)
教材	明 治 天 皇 の 德														
教材の趣旨及び指導の重点	<p>▲教材の趣旨</p> <p>明治節に因んで、明治天皇の御遺徳を偲び奉るとともに、明治天皇の大御心を繼がせ給ふ天皇陛下の御仁慈を感得し、益々天業翼賛の至情に燃えしめる。</p> <p>▲教材の重点</p> <ul style="list-style-type: none"> ●明治天皇の御仁慈 ●新潟縣行幸の際の御仁慈(目の記念日) ●天災地變の折の御仁慈 ●窮民に對する御憐憫 ●明治天皇の御武徳 ●愛知縣大演習の御統監 ●廣島大本營に於ける御生活 ●明治天皇の御儉徳 ●御日常御質素であらせられたこと ●明治神宮寶物殿 <p>▲指導の重点</p> <ul style="list-style-type: none"> ●明治天皇の御盛徳 ●天皇陛下の御紹述 														
他教科との關聯(本月分)	國語 大連から ・觀艦式 くりから谷 ひよどり越 綴方 秋の一日 運動 勉強 郷土の觀察 神社														
實踐主題	學校常會 決議 「きまり正しくいたしませう。」 敬神 規律 質素 勉勵														

五	四					三									
30 29 月 日	28 土	27 金	26 木	25 水	24 火	23 月	22 日	21 土	20 金	19 木	18 水	17 火	16 月	15 日	
母の會・學校常會 教育勅語御下賜日 (家庭奉讀式)(修)	徵兵制七十周年記念 (修)					新嘗祭 學級常會					行幸記念市内相撲 綱引大會 (修) 新穀感謝週間 (敬神崇祖修養週 間)二十六日まで (新嘗祭の訓話)				
雅 澄 の 研 究															
<p>● 臣民の覺悟―臣道の体得實踐 ● 禮法の徹底(教師用一三六頁)</p> <p>▲ 教材の趣旨 鹿持雅澄の眞摯な研究態度を述べて、皇國臣民の進むべき學問の方向を明確に示すと共に、かかる學者の努力に對する 歴代天皇の御仁慈のほどを知らしめて、皇恩の忝なきを感得させる。</p> <p>▲ 教材の重点 ● 雅澄の苦學力行 ● 萬葉集古義と研究の價値 ● 宮内省から出版されたこと ● 皇恩の優渥</p> <p>▲ 指導の重点 ● 雅澄の努力と臣道實踐 ● 無窮の皇恩景仰・國民的自覺 ● 我が國學問の道と勉學の態度 ● 禮法(教師用一五一、二頁)</p>															
<p>理科 稲のとり入 れ でんぶんと り</p> <p>体操 體育會準備 綱引練習 其他</p> <p>音楽 世界のはて までも ひよどり越</p> <p>工作 グライダ―</p> <p>日記反省主題 ● 神様をうやまひます ● きまり正しくいたします ● せつやくします ● ま心こめて勉強します</p>															

男附 三二

國民科修身の指導が、單に教室に於ける當該時間のみに終つたとしたら、決して所期の目的を完うし得ない事は論ずるまでもない。兒童は大東亞戰下の生活を、家庭・學校・社會のあらゆる場に於て、四六時中行じながら生成してゐるのである。あらゆる生活の具体に即應して繼續的な修練を重ねてこそ、習は性となり徳性は涵養され、教育に關する勅語の實踐的奉體は達せられる。

従つて教材は月教材又は學期教材として示され、一箇月又は一學期を通じて趣旨の徹底を圖るべく用意されてゐるのである。

本月教材は、「明治天皇の御徳」と「雅澄の研究」の二教材であるが、前表の「教材の趣旨」によつても窺はれる如く、共に御盛徳の宏大無邊にして皇恩の優渥なるを感得せしめ、天業翼賛の至情に燃えさせて臣民の道を體得實踐せしめんとするものである。

又本月の生活曆を觀るに、明治節・新嘗祭を第一に、大詔奉戴日・國民精神作興ニ關スル詔書御下賜記念日・新穀感謝週間・徵兵七十周年記念日等の國家的行事や、行幸記念體育大會・市内相撲綱引大會の體育行事等、極めて豊富な内容を有つ。しかも第二學期の半を過ぎ、收穫の秋・勉學運動の節として、一年中に於ける最も活動

的躍進的の季節であり、大東亞戰下、學期末年末を控へた緊張の月である。

従つて、兒童の生活を大東亞戰貫徹體制に整へ、國民的自覺を長養して自律的徳徳判斷の能力を啓培助長し、平常心は道の修練をなさしめるに當つて、吾人は本月の練成重点を、皇運扶翼の臣道實踐としての敬神・規律・質素・勤勉の四面に置くのである。それは、直面する教材の本質的究明と、現前する學級兒童の現實的具體的諦觀との一体的相關に於て考慮し、本月教材の示す趣旨に則る修身指導の徹底を、一ヶ月を通じて圖らんとする意圖に據る。

直接的には、修身教育の中核的ならひである敬神の念は、『秋から冬へ(學期教材)』の繼續的指導として新嘗祭を中心に、規律・質素は『明治天皇の御徳』の取扱に於て、勤勉は『雅澄の研究』の取扱に於て指導するのであるが、一ヶ月を通じて一体的に指導し、實踐の徹底を圖らんとするのである。

而して、二日(月曜)の學級常會を利用して、次の四項を本月の實踐主題として約束し、日記の反省主題として與へ、板書揭示もなして、繼續的に實踐の徹底を圖るべく用意した。

男附 三三

忠義

- ・神様をうやまひます。
 - ・きまり正しくいたします。
 - ・せつやくします。
 - ・ま心こめて勉強します。
- 戦ふ少國民

常會は、戦ふ國民としての臣道實踐を師弟同行勵まし合ふ機會として設營し、教師司會の下に、前週(月末の際はその月も)の反省と、今週(又は月)の實踐主題を決議するのである。

相互反省・共勵切磋の最もよい機會としての常會は、兒童達も自分達の眞實な語り合であるだけに、眞剣な反省と逞しい實踐の氣魄を發する。

四日(水曜)三年以上少年團員全員講堂に會して學校常會を開き、訓練部長司會の下に、先づ前月の「心身を秋に鍛へませう」の反省をなし、次いで各學級から提出された議題の審議を経て、學校一体の本月實踐主題を、「きまり正しくいたしませう」と決議した。

こゝに學校一体の修身的實踐の雰囲気は醸成され、一齊に又は學級相應に繼續的反省と指導が加へられつゝ、益々生活態度は昂揚する。

常會は又、少年團分隊別に大詔奉戴日の早起會に於ける神前常會としても行はれ、近時自發的に家庭常會の誕生をも聞くのである。

は前から書いてみますが、今月はみんなよく守つて、全部◎になるやうに心がけたいと思ひます。夜、實行表を作りました。しつかり守つて、大東亞戰爭を勝ちぬきます。今月守る事を書いて机の前にはりました。

●(今日あつた主な事を書き、その後、次に次のやうに工夫してゐる兒童もある。)

敬神◎ 神だなをふいてからお水をかへました。勅語拜讀をしました。

節約○ プリントの裏を使つてノートを作りました。電車に乗つたのがいけない。

勉強◎ 修(三回讀んだ)讀(百字・おさらへ・見うつし)算(計算)裁(手さげ)

規律△ 六時半に起きました。下校の時、歩き方が悪いでした。

それぞれ眞剣な反省と實踐への氣魄がうかゞはれて嬉しい。しかも理知的な萌芽、自律的な生活態度の昂まりつゝある事が見られる。今日の反省は明日の實踐を昂める。伸び行く兒童の相に皇國の發展を憶ふ。

しかし全兒童の日記が、そのまゝ充實してゐるのではなく、又兒童の生活實踐がそのまゝ充分日記に表はれてゐるでもない。こゝに指導の必要がある。吾人は學級兒童を六組に分けて週一回宛檢閲し、日記を契機として生活全面に着目し、實踐指導を個に徹し生活全野に及ぼ

かくて兒童は、毎日の生活を日記記帖の機會に反省するのである。反省は發して實踐への氣魄となり、行となる。これが教師のみちびきによつて益々昂揚され、漸次自律的生活態度は生成し、自律的道德判斷の能力は啓培長養されるのである。

今、十一月二日に於ける兒童の日記の中から、若干擧げてみる。

●一時限の修身で、「明治天皇の御徳」を習ひました。私はおうちでよく御本を讀んで、感想もしつかり書いてゐたので、よく發表出来ました。(日記は修身帖に書かせるのである。兒童の發表した感想が、前日の日記の後に書かれてゐる。：おいつくしみ深い天皇陛下をいたゞく日本の國に生まれてほんとにありがたいと思ひます。……と。)

●三時間目に稲刈がありました。私たちの植えたお米が、こんなにりつぱにみのつたのは神様のおかげです。私は稲刈はじめてですから、うれしくてたまりませんでした。……學校へ運ぶ時は、あまりたくさん持つたので、手がしびれるやうでした。

●四時間目に、明治節の式のおけいこがありました。・明朝は早く起きて、國旗をたてよう。・夕方さんばつに行きました。・明朝はおうちでも勅語の奉讀式があるのです。みんな五時に起きる事にきめました。

●常會で本月守る事がきまりました。私は神佛日記と勉強日記

すべく、放課後や休時間を利用して個別指導に力める。又學習時に通讀させて共勵切磋を圖り指導を加へる。

學級保護者會・母の會・學校參觀・家庭訪問・通信等による家庭との連絡は、學校・家庭一体となつて躰の徹底となり、盡忠奉公の信念を啓培し臣道實踐力の昂揚となる。日記にしても、必ず父母の檢印がなされ、字句の訂正や勵ましの言葉迄書き加へられ、又子供の教育を中心として家庭日記を工夫して、一家一心日毎の臣道實踐を省みつゝある家庭を見ては、自ら言ひしれぬ感激に浸る。又、一般學校保護者會の折、全家庭に「教育ニ關スル勅語」を奉戴させ、毎月三十日に家庭奉讀式を舉行し聖旨の下に學校家庭一体となつて國の子の教育に徹すべく意圖した。

修練の場として、家庭の重大性を閉却してはならない。吾人は家庭教育の偉大なる力を痛感し、我が子を眞にお役に立たしむべく全生命を抛つて、子弟の教育に生き貫いた我が薩摩の母の偉大なるを憶ふ。偉人の背後には必ず偉大なる母があり、母こそ最上の教育者である。こゝに家庭との連絡の重大なるを痛感するのである。吾人は常に家庭に呼びかけ、父と話し母と語り、眞に學校家庭一体となつて兒童の教育に徹し、國の子の魂に皇運扶翼の臣道を強く逞しく培はねばならない。

以上、吾人は生活全面に於ける修身教育の行じつゝある相の一斑を常會及び日記指導・家庭との連絡を中心に述べ來つた。而してその中核をなすものは、いふまでもなく當該時間に於ける指導である。

次に、その在り方を行じつゝある實踐の相に於て省みその生成躍展を圖らんとするのであるが、之に先行すべき考察として、先づ教科書の編纂体系を省み、第二・三期に於ける指導の位相を定位し、本月の實踐に及びたい。

第一期の教材は、所謂生活教材であつて、實踐行爲の主体を「ワタクシ」として示され、兒童の遊戯・學校の行事・家庭の躰等と緊密に關聯せしめつゝ、兒童の情意的鍊成を期する。

第二期に之を引繼ぎ、日常的な躰の反覆により、水準化を圖ると共に日本人としての基本的行爲を一通り仕上げの方案が立てられる。更に神話・史的物語や季節・年中行事等と結んで、兒童の情操を涵養すると共に國民的世界觀の素地に培ひ、國民的自覺を喚起して道德的な理想を構成し得る方向に進むのである。

而して第三期に於ては、先づ卷頭に「教育ニ關スル勅語」が奉掲されて、本科独自の面目を發揮し、各課の教

しかも理知的學習の漸く始まらんとする時期に於て、學問研究に關する教材を採擇してその向ふべき方向を示し、日常の實踐を通して躰けると共に反省させ、漸次自律的學習態度の樹立を圖らんとする所に偉大なる考慮が拂はれてゐる。

而して兒童用書は、兒童性に立脚し國語と一体的な手法による周到な考慮の下に兒童讀物として親しませるべく工夫されてゐる。従つて指導に際しては、高山彦九郎が太平記を読んで感奮立志した例の如く、讀書を通して自ら國民的自覺に培ふべく、充分教科書に親しませる工夫が必要である。

吾人は教室に於ては勿論の事、家庭に於ても充分讀む様に躰けるべく力めてゐる。前掲の日記にも表はれてゐるやうに、新教材といへども必ず讀んで感得点を記帖し教室に臨むのである。而してそれは、自發性に培ひ學習を積極的能動的ならしめ、且つ自修の習慣を涵養せんとする意圖も存するのである。

次に「明治天皇の御徳」の第一次取扱に於ける兒童の主なる感得点を、筆記帖及び兒童發表を通して若干擧げよう。

・この文は明治天皇の御事が書いてありますから、つゝしみの心を持つて讀まねばならないと思ひます。

材は直接的なつながりを以て聖旨の實踐的奉體を強く求める。教材は史的物語・英雄譚等を多く含み、兒童の理知的な萌生えに即應して、反省資料たらしめるものが正面から提出される。かくして、學年の進むに従ひ漸次自律的な道德判斷の能力を啓培助長する事に留意しつゝ、第六學年迄に一通り國民學校に於ける修身指導の一段落を求めようとするのである。

従つて教材はすべて單なる例話や徳目の形で示されず臣道實踐に於ける基本的行爲の一体的相として、その儘價值當體であり生きて動く具體の道德そのものである。

本月の教材も全一的に兒童の具體に生動する。今、本月の教材と小學修身四の「第一明治天皇」「第六勉強」とを比較對照してみよう。前者に於ては四月教材が十一月教材として周到な修補の下に明治節に關聯して改めて採擇された所に、儀式行事教科一体・具體立脚・生活即應の精神を窺ひ、後者に於ては例話としての渡邊登の單なる勉強が皇國の道を明らかにしようとする盡忠の氣魄に於ける鹿持雅澄の刻苦勉勵の相として、無窮の皇恩の下に提示されてゐる。斯の如く皇運扶翼の臣道實踐に培ふ逞しい力動性に於て格段の開きを窺ふ事が出来るのであつて、吾人はこれによつても國民科修身のめざすところを會得する事が出来る。

・明治天皇が國民を子のやうにおいたはりになり、苦しみも樂しみも國民と共にしようとなさつた事は、大へんおそれ多い事です。

・明治天皇はとてもおいつくしみ深い御方です。早く目をなほすやうにお手もと金をお恵み下さつたり、地震や大水や大火事等の時御心配下さつたり、病氣にかゝつて藥を求めるとの出来ない人をおいたはり下さつたり遊ばされた事を讀んで、とても有難い事だと思ひました。

・大演習の時、兵士と同じやうに御づきんもお召しにからずお指圖下さつた事はとてもおそれ多い事です。
・戦争の時は、朝早くから夜おそくまで、少しのおひまもお休み遊ばされないので、私共はなまけてはいけなやと思ひます。そして大東亞戦争をきつとやりぬきます。

・明治天皇はとても御質素な御方です。硯箱や筆墨などもごくふつうのものを、役に立たなくなるまでお使ひ遊ばされるのですから、私共はもつと物を大切に使はねばいけなやと思ひます。

・私は、天皇陛下をいたゞく日本の國に生まれて、本當にしあはせだと思ひます。しつかり勉強して、立派に忠義の出来る人にならねばなやと思ひます。等。

これ等の感想は兒童の積極的發表となり又能動的諦聽となり、共勵切磋の雰圍氣を醸成して修練の場を緊張躍展せしめる。しかし發表力の優れた兒童が必ずしも實踐力に秀でてゐるとは言へない。従つて眞言眞行のまこと

に培ひ、言語禮法の徹底への指導を常に圖らねばならぬ。

教師は兒童の發表を諦聴しつゝ、全兒童の心の動きを凝視して、兒童の感得度を窺ひ現實の相をみつめ、益々礎相をがっちり把握しなければならぬ。爾後の指導はこの礎相に培ひ教材の趣旨の徹底を期する所に眞のみちびきとなる。

而して、教科書の読みや教師の講話が進められ、兒童は益々感銘を深くし、自己を反省し實踐の氣魄を發する。實に、國民科修身に於て指導すべき事項は、兒童をしてこれを理會させ感激させるのみでなく、確實に實踐させるのである。即ち、情意的鍊成と理知的開發に力め知情意一体として常に實踐への氣魄に培ひ、實踐の方途を指導しこれが實踐を督勵しなければならぬ。

従つて、説話や訓辭をなすにも、出来るだけ具体化し、兒童の生活環境に置換へ、兒童の境遇に應じて敷衍して、兒童が忠良なる皇國民たらんとする逞しい意欲に培はねばならない。道を修練する第一要件は、道とはこんなものだといふ既成の觀念を授ける事では決してなく、その意欲性自發性に培ひ求道心を起させる事である。而も兒童は、過渡期としての第二期に於て、既に未分化的空想的傾向から脱却して合理的分化的傾向を示すと

にいへ、その精神傾向はいふまでもなく感覺的であり具體的である。かゝる兒童に、抽象的觀念的な説話や訓辭は絶對的に禁物である。即ち、徒らに忠良なる日本人たれと叫ぶのみでなく、忠良なる國民としての具體的内容を示しこれを行する事に於て休得させねばならない。かくして教材・兒童・教師は三位一体となり、絶對的緊張躍展生成のむすびの場は醸成され、生成發展の皇國の大道に則り得るのである。

吾人はかゝる心構で、教材「明治天皇の御徳」の指導を次の如く進めて、趣旨の徹底に力めた。

第一次 二日（月曜第一時限）

勅語拜讀、教科書通讀、全体的感得点發表、重点的板書の後第一・二・三・四節の讀み・講話を進めつゝ、宏大無邊な御仁徳を景仰させ皇恩に感激させて生活を反省させ、實踐指導をなす。特に目の衛生に留意し、益々運動に勵み健康の増進に力め、又奮勵努力すべき事や天災地變並びに非常時に對する心構等の充實確立を圖り、戦ふ少國民としての實踐氣魄に培ふ。尙九月上旬の侍從御差遣や十月三十日の朝香宮殿下本校へお成り遊ばされた事等と關聯し、又明治節を明日に迎へる心構及び禮法の指導をなす。

第二次 五日（木曜第一時限）

勅語拜讀、明治節の日記に出發して佳節の感激と生活反省を話させ、實踐の指導を加へ、第五・六節（大演習及び日清

戰役に於ける御盛徳）を拜讀させ、講話を加へつゝ、實踐指導をなす。特に規律正しくする事に重点を置いて生活反省をさせ（日記も利用）、大東亞戰完遂の巨道實踐に培ふ。又、十日の行幸記念日に關聯し、体育大會を迎へる心構を培ふ。

第三次 十二日（木曜第一時限）

勅語拜讀に次いで規律正しい毎日の生活を反省させ、之に實踐指導を加へつゝ、第七・八節に入る。讀み・講話を通して御日常極めて御質素にまじし、御親ら範を垂れさせ給ふ宏大無邊な御盛徳に感激させて生活反省をさせつゝ、質素儉約の實踐指導をなし、大東亞戰爭必勝貫徹の巨道實踐を益々昂揚する。

第四次 十六日（月曜第一時限）

勅語拜讀、本月の強調四項の實踐反省に出發し、教科書の總括的取扱をなす。又、教師用書備考欄にある御製を奉誦させて大御心の恭けなさに感佩させ、益々皇恩の宏大深厚なるを感得させ、國民的自覺を昂揚して巨道實踐の氣魄を昂め

今、こゝにみちびきの全貌を示す事は紙數の規制も許さないで、次に第三次指導の一斑を述べてみよう。

1、勅語拜讀

四月以降、正確な拜讀と厳正な禮法の徹底をめざして來たので、殆ど全兒童がそらんじ奉るやうになつた。家庭に於ても、毎日又は毎週數回拜讀してゐる兒童が多い。注意すべきは、いつも眞心こめて拜讀するやうに饒ける事である。

2、實踐の反省（體驗的理會の發表）

前時督勵した實踐事項の實踐反省をさせ、之を指導する。次にその一斑を示さう。（○印兒童△印教師）

○明治天皇が、どんな寒い日でも毎朝五時にお目ざめ遊ばされた事を承つて、私も五時に起きる事に決めましたが、昨日は休みで心がゆるんで、六時過に起きて残念でした。こんなに朝寝をするのは申しわけない事だと思ひます。

△體育會の折語らつた兒童の母の喜びに充ちた顔と思ひ出す。母の喜びを語つて兒童を賞揚する。一兒の賞揚は他兒の激勵となる。次いで全兒童の今朝の起床狀態を調べる。大部分六時であるが、五時が三名七時頃が四名居る。何時に決めるかと問ひかけると六時が守り易いといふ兒童、私共も今戰つてゐるのだから五時にしようと言ふ元氣よい兒童、結局、兒童の自發性に培ふべく、六時迄には必ず起床する事に決め、寒さに打克つ朝の生活實踐の指導をなす。

○休み時間、私はよく運動する様になりました。もつと大きな運動をして体を鍛へたいと思ひます。明治天皇は朝早くから夜おそくまで、少しのお暇もお休み遊ばされないので、私もは休み時間や日曜日があつて、ほんとにもつたいたいと思ひます。なまけてゐてはいけなしいと思ひます。

△心構の正しさを賞揚する。休み時間や日曜日の生活反省をさせ、その實踐指導をなす。休み時間は運動場で即場的指導をなす。

○近頃少し寒くなつたので、登校の歩き方がよくないと思ひま

す。私は昨日、土持さんに注意されてなほしました。

△相互共勵の態度を賞揚して之を指導する。次いで前時、時間不足のため敷衍し得なかつた、明治天皇が出征將士をお慰み遊ばされて極寒に燄爐を御使用遊ばされなかつた事を謹話し、大御心の恭けなきに恐懼感激させて、戦時下寒さに打克つ氣魄を培める。

○私は、今朝ちこくして、ほんとに悪いでした。これから決してしません。

△心からの誓である。遅刻の理由は、電車が満員で乗れなかつたからだとわかつた。少し遠いが、なるべく歩くやうに奮勵する。

かくして、「明治天皇が、極めて御質素にしました御日常を拜察ませう」と、教科書七・八節を讀ませる。

3、教科書の讀みと感得点の發表

通讀後、最も心にひびいた事を發表させる。

○明治天皇は、硯箱や筆・墨なども、ごく普通のものに役に立たなくなるまでお使ひ遊ばされ、又御間の敷物や毛皮も、古くなつて色が變つても御心におかけにならず、度々おつくろはせ遊ばされた事は、ほんとにおそれ多い事です。

○私共は少しせいたくだと思ひます。もつと節約しなければならぬと思ひます。○今、大東亞戦争だから、尙一層節約しなければなりません。等。

△發表を諦観し、兒童の感得度を諦観しながら、「せつやく、

いと思ひます。

○明治天皇が封筒をお切開きになつて、その裏に御製などをお認め遊ばされた事は、ほんとにおそれ多い事です。私は今まで帖面や紙を贅澤に使つてゐた事を考へて、まことに申しわけないと思ひます。

等と、極めて眞劍な發表がなされる。こゝに兒童の眞言をみる。發表する兒童・背く兒童―じつと見守る教師、そこに道を求めんとする心は躍動し、臣道實踐の氣魄は醗酵する。この兒童の發表を眞言ならしめ、眞言を眞行たらしめる所に眞の實踐指導がある。

△皆さんの立派な覺悟を聞いて、先生はとても嬉しい。皆さんが今持つてゐる物はみんな……さう、お國の物ですね。『一本の鉛筆も日本の鉛筆』……一本の鉛筆を無駄にする事は、お國の寶を粗末にする事です。物を粗末にする人は日本人ではありません。私共は今戦つてゐるのです。物を粗末にしては、大東亞戦争を勝ち貰く事は出来ません。ではどんなにしたら、本當に物を生かして使へるでせうか。先づ毎日の生活を反省してみませう。鉛筆の使ひ方は―筆は―墨は―紙は―帖面は……等と、學用品使用の實踐を指導し、進んで日用品・衣服・食物・公共物に及ぶ。特に物費節約・廢品更生・勤儉貯蓄の心構を日常生活の具体に定着せしめ、大東亞戦争必勝貫徹の氣魄を昂揚する。又、割合物に不自由を感じず兎角贅澤に走りがちで、友達が珍らしい物を持つてゐると之を求

役に立たなくなるまで、つくるよ、』等と板書し、實踐指導の心構を整へる。

4、講話及び實踐指導

講話は恭敬謹嚴、用語態度を正してなす。教師の信念に發し感激が吐露されてこそ兒童の魂にひびく。兒童の礎相に立脚して、具体化し敷直しつゝ實踐指導を進める。兒童は、宏大無邊な御盛徳を感佩する事に於て自らの生活を省み、こゝに道を求め道を踐まんとする心は昂揚する。従つて次の如く問ひかける。

△お話をきながら、どんな事を強く感じましたか。

○明治天皇が、毛先がちびて軸の張紙の文字も見えなくなるまで、筆をお使ひ遊ばされた事をおききして、ほんとにおそれ多い事だと思ひました。私は、筆が少し古くなつて書きにくくなると、すぐ新しいのを買ひたがりますから、今持つてゐるのをいつまでも使へるやうにしたいと思ひます。

○筆や鉛筆や、墨やケシゴムやクレパス等をていねいに使つていつまでも使へるやうに工夫したいと思ひます。

○明治天皇は、ボール紙のあき函に御書類をお納め遊ばされたのに、私の内には上等な手紙箱があるのは、大へんおそれ多い事です。これから贅澤な物は決して買はないやうにしたいと思ひます。

○お友達がいよいよ辨當袋を持つてゐるので、私も山形屋で買つてもらひたいと思つてゐましたが、もう今のハンカチでよ

めたがる女子學級としての特質に鑑み、虚榮のめばえを撤去する事に力め、婦徳の基底に培ふ。

此の間日記を利用して、今月の實踐主題である『せつやくします』の實踐狀態を發表させて共勵切磋に力める。兒童の發表せるものを若干挙げると、私は人蔘は嫌ひですが、我慢して食べました。・弟の短かい鉛筆に軸をつけて使へるやうにしてあげました。・田舎のおばさんからいたゞいたお金を貯金つばに入れました。・廣告の裏を使つて計算練習をしました。・學校の箒を修繕しました等がある。

4、實踐への督勵

益々質素な生活に力め節約に精出すやう、又毎日よく反省して日記に書くやうに督勵して本時を終る。

教材『雅澄の研究』は、次の如き計畫で指導を進めつゝあるが、前教材と稍々趣を異にする。

- 第一次 日記『ま心こめて勉強します』綴方『勉強』に關聯して、日常の勉學狀態を反省させ、實踐指導をなす
- 第二次 雅澄の苦學力行に臣道實踐の在り方を學ばせ、我が國學問の本道を感得させ、臣道實踐としての勉學の精神に培ひ、實踐への指導をなす。
- 第三次 明治天皇の御文徳を景仰させ、萬葉集古義が世にあらはれた由來を知らせて、皇恩の優渥なるを感佩せしめ、益々勉強の自覺を昂揚する。

かくて吾人は、行じつゝある本月實踐の跡に省み、行

しつゝ、眞のみちびきを体得し、第二・三期に於ける國民科修身教育の方法を、眞に吾人の實踐に生成昂展すべく試み來つたのである。

省みるに、そこには殘された問題の極めて多い事を思ふ。しかしそれ等の解決は、吾人が眞に教育報國・臣道實踐のまことに徹し、ひたむきに日本師道を行する「今日」の實踐に於てこそ、必ずや生成樹立されるであらう事を確信する。

今や大御神威の下、皇軍の威武は海に陸に空に擴大され、赫々たる戦果に、吾人はみたまわれ生けるしるしを體感し、國民的感激の躍動を覺える。大東亞の天地に新しい國生みは行はれ、八紘爲宇の肇國精神は日に月に顯現されつゝある。而して將に大詔奉戴一周年を迎へようとする。吾人はこゝに、「米英如何に強くとも戦ひ抜かん、撃ちてしまはん」と絶叫した當時を憶ひ、更に新たな決意の油然として躍動するを覺える。

世界戦争の現段階を正視する時、戦は正にこれからである。吾人は緒戦の戦果に酔ひ、打續く戦果に決して押れてはならない。眞に「我等はことごとく天皇陛下の兵なり」との信念に徹し、第一線將士の心を心として、日々是戰・平常心是道の臣道實踐を、眞に戦ひ貫き勝ち抜く毎日の實踐たらしめねばならない。

じつゝある相に於て眞の行じ方を求め、指導の過程を畧述したのであるが、それは決して形式的模式的に一律に決せられるべきものでなく、直面する教材と現前する兒童の具體的相關に於て、みちびく心のまことにより生成昂展せられるべきものであると思ふ。従つて教師用書の徹底的研究も兒童の個性調査も郷土の傳統精神の体得も當然不可缺の問題である。

道に則る事に於て、機に應じ場に即してこそ、眞のみちびきは行ぜられる。かくてこそ、教へる心と學ぶ心は道に於て一体となり、機々即應・啐啄同時・師弟一体のむすびの相は生成躍展し、國民の基礎的鍊成は完うせられる。

第三章 むすび

吾人は第一章に於て、國体の基づくところに宇宙根源の大生命を觀じ、萬邦無比の我が國体の絶對にして尊嚴なるを身にしめ、肇國一貫の精神に道義的大使命をうなづき、教の由つて生ずる所に教育の淵源する所をうかひ、臣民の道に思ひを致しつゝ、修身教育の眞の在り方を求めた。

而して第二章に進み、深く思ひを日常實踐に馳せ脚下を照顧し、行じつゝある具體的現實を凝視し諦觀し反省

燦然たる東天光を浴び遙かに皇城を拜し奉る時、又かしは手拍つて神前に額づく時、吾人は眞に己の生を識る。しづかに瞑目する時、そこに未生以前本然の自己をみる。そこには生もなく死もなく、唯々皇運扶翼の臣道あるのみである。生きて皇國の道に徹し、死して護國の神となる事こそ、吾人の行でなければならぬ。

歸還部隊長はしみじみ語る。「敵の作戦がわかつてゐたら、これを破碎する作戦は生まれるが、戦争はそんなには行かん。この時、事を決するものは信念であり、その信念によつて生ずる敬神の念である。」と。

實に敬神の念は國民的信念の基底であり、發して盡忠報國の精神となる。

吾人は大麻を正中に戴いて教壇に立ち、聖勅を奉體して兒童をみちびく。兒童は大麻を拜して教をまなぶ。それは教室のみではない。かくてこそ師弟一体のまなびとなり、平常心是道の修練は行ぜられる。而も吾人は皇祖發祥の靈域に生を享け偉大なる傳統に育つ。吾人の祖先は常に戦時体制の生活を行じ、その魂を吾人に傳へた。吾人が眞に大我に目覺め皇國の道に徹する時、自ら薩摩傳統の力は皇國の道に生動する。

兒童が學ぶのは教師の單なる言葉でなく、その行であり信念である。信念は信念によつてのみ培はれ、人は人

によつてのみ人たり得る。吾人は省みて自己の不徳を憂へ、唯ひたすらに臣民の道を教育報國の一念に行ぜんとなめるのである。

而も吾人は、今や大東亞戦争の最中に、教育の事に當るの光榮を思ひその重責なるを識る。而して思ひを尊皇攘夷の幕末に馳せ、蓋世の英傑南洲翁を憶ひ、憂國の志士吉田松陰先生を憶ふ。これ等先人の氣慨果して現世に生き、吾人教育者の五体に湧溢するであらうか。夕に省み晨に誓ふ教育報國・臣道實踐のまこと。唯々一意精進あるのみである。

畏多くも、教育の任に在る我等に下し給へる、

健全ナル國民ノ養成ハ一ニ師表タルモノノ徳化ニ竣

ツ事ニ教育ニ從フモノ其レ奮勵努力セヨ

大御心の恭けなさ……

こゝに、臣道實踐のまことに誓ひつゝ本論文を結ぶ。

むすびは永遠の生命の絶えざる創造である。それは歸結であると共に生成への出發であり、本論文の眞の完結は吾人の實踐に永遠につながるのである。

第二・三期に於ける修身教育の方法

伊佐 四四

伊佐郡

目次

- 一、修身教室以前
- 二、修身教室
- 三、修身教室の周辺
- イ、薩藩士風の作興
- ロ、組織
- ハ、練成
- ニ、環境
- ホ、師道確立(むすび)

一、修身教室

イ、修身教室以前

初等科修身二「日本は海の國」取扱ひに即して修身教室を眺めることとする。

性別	在籍	参加	不参加
男子	一八	一八	〇
女子	三四	一五	一九
計	五二	三三	一九

上圖は去る夏期鍛錬期間中、實施した水泳の参加児童數と、不参加児童數とを示したものである。

かくした學級の個性と、婦徳の涵養が問題にされ、將來皇國發展に婦人の働く力の大きいこと等と考へ合せて努力の方向が暗示される。又私は金曜日水泳に行かなかつたので、今日こそ浴びやうと思つて準備して行つたけれども、先生が「浴びない方がよい」とおつしやつた。胸がドキ／＼してたまりませんでした。之は、水泳が出来ない程化膿してゐる児童の日記である。

私は始、水泳に行きたくなかつた。けれども、後から行つて浴びたので大へんよかつたと思ひます。すこし泳げるやうになりました。○木さんにも負け

ないやうけいこしいと思ひます。

自己の中に自己ならぬものを定立させて、夫を媒介として自己を發見し、しかし自己發見の喜を味つてゐる児童の姿を見るのである。

其の他次の如き理由で不参加を希望したが漸次参加して四日目から四十八名が参加するやうになつた。

頭痛	腹痛	耳病	腫物	怪我	アセ	泳げ	道具	其他
3	3	2	2	2	1	4	1	1

第一期では、児童生活の遊戯、學校の行事家庭に於ける娯等と緊密に關聯せしめつゝ、児童徳性の情意的鍊成

第二期に於いては、一面水準化の取扱ひと共に、季節及年中行事と結び、児童の情操を涵養し、國民的自覺を喚起して、道徳的な理想を構成し得る方向に向かせる過渡期的取扱ひがなされるべきである。

日本精神は道理や理窟ではなくして、日本的な情操と云ふものが日本精神の大事な下地になることを忘れてはならぬ。情操を養ふと云ふことを抜きにしては日本精神に意味をなさぬ。第二期(過渡期)の意義はこゝにある。第三期は、前述の基礎の上に立ち漸次自律的な道徳判斷の能力を啓培助長するところに狙ひがある。

(附記)

ヨイ子供の一

△起床から學校まで

- 1、目がさめたらさつさと起き、床をあげ、齒を磨き、顔を洗ひ、元氣よく体操をする子供。
- 2、神や佛を拜み(日曜日墓參する)子供。
- 3、お父さん、お母さんに朝の挨拶をする子供。
- 4、食事の前には、「いただきます」「ごちさうさま」といふ子供。
- 5、食物の好惡を言はず、キヨロ／＼せず、よくかんで一粒も残さない子供。
- 6、いつもさつぱりした着物を着て、帯はきちんと結び、髪はいつも短くかつてゐる子供。
- 7、ハンカチ、塵紙を忘れないで用事は無言でサツサと、すませる子供。
- 8、「行つて参ります」と挨拶して家を出る子供。
- 9、左側を、二レツに並んで正常歩、さそひ合つて仲よく、焚火したり、遅刻しない子供。
- 10、傷痍軍人、遺骨に會つたら感謝の誠を捧げ不具廢疾者には同情する子供。

△學校での生活

- 1、奉安殿や、宮城に對し奉つては、敬虔、嚴肅なる態度で最敬禮をする子供
- 2、教室や、廊下では、靜かに歩く子供、講堂では特に靜か

伊佐 四五

にしてゐる子供。

3、教室や、講堂、職員室に、は入る時はお禮をし上級生や先生に『お早うございます』と挨拶する子供。

4、學習

自分から進んで勉強し、先生や親の教をよく守る子供。まつすぐ立ち、まつすぐ座つて、先生に正しく注目し『ハキハキ』ものを云ふ子供。

『ハイ』と『イ、エ』をはつきり云ふ子供。何をしても、いろ／＼工夫し、いつでも反省して見る子供。

善と思つたことは、やり通すまでは断じてやめない子供。先生の話をよく聞いて、不明な点はどし／＼質問する子供。

5、運動場

他の教室をのぞいたり、這入つたりしないで廣い運動場で進んで運動する子供。

校門外に出ない子供。

水道を大切に使い、花園や築山には入らぬ子供。

人の悪口や、かげ口を言はぬ子供。

決して弱いものいぢめをせぬ子供。

如何にも丈夫さうで明朗な子供。周囲まで明朗にする子供。

6、掃除など心を合せて働く子供。

伊佐 四六

用事など起きたら進んでなす子供。

學校をよごさぬやうに心がける子供。

7、復唱復命する子供。

8、後始末をしつかりして歸る子供。

9、先生や友達に挨拶を忘れぬ子供。

△家庭での生活

1、『唯今歸りました』と挨拶する子供。

お父さん、お母さんが歸宅されたら『おかへりなさい』と挨拶する子供。

2、入浴して手足をキレイにし、爪を切つてゐる子供。

3、遊びに行く時は、行く先をはつきり告げて行き、危険な場所や、お取込みのある家の附近で遊ばぬ子供。

買食や、余計なものを買はぬ子供。

マツチ、刃物なども遊ばぬ子供。

4、前途に希望を有し、よく勉強する子供。

5、日誌をつけ『おやすみなさい』といつて休む子供。

△其他

1、標準語と正午の祈念を忘れない子供。

口、修身教室

巻頭に『教育勅語』を奉掲することは、兒童に實踐的奉體を要求するのである。各課の教材は直接にそのことにつながりを持ち、皇國の教育は『爾臣民』と仰せられた大御言葉に對する奉答を公案として録るものでなければ

ばならぬ。

『教育勅語奉讀』

靜かに着席させながら

反省

○『去る十七日から水泳が始りましたね。どんな心構へで浴びてゐますか』

と問ひかける。夫々の理由により水泳しなかつた兒童も切實なものをもつて教育に這入つて來てゐる。僻を與へてはならないのであつて、教材を理會することによつて、『必ずやるぞ』と云ふ決意を固めさせねばならない。『實踐への指導』たるところに第三期修身教室のねらひがある。

『人鮮尤惡』で『なる』を通して『なす』親心的教化指導によつて『直枉』されねばならない。

△『身體を丈夫にする爲です』

『舟が沈んだ時泳げるやうに』

『海軍に行つた時必要です』

『溺れぬやうに』

等の解答を得た。解答自體は誤りではない。而し日本の思惟はもつと深いところに根底がなければならぬ。かゝるより深き思惟に導くことは、第三期修身教室が最後に思を致すべき点である。『指導を受ける兒童が大東亞

共榮圈の建設者であり、世界の新たな秩序を求める現代日本を背負ふ小國民であるといふことに思を致し、國民的世界觀の確立徹底を圖れ』とあるのでも明瞭である。

理會

○『はつきり わかる、爲 日本は海の國を調べやう』

兒童の發表を基にして中心問題への展開を圖る。漠然として與へることなしに問題化して與へることが兒童の内面活動を旺盛にすることである。故に發問の工夫は學習を決定する鍵である。

理會・會得とは結論的に言へば、『文化價值がわかることである。價值は人生を有意義ならしむる究極概念である。この人生を有意義ならしむるものとして具體的に建設されたものは、先づ國家であり、國體であり、種々なる國家の制度慣習であり、其の國の國民道德であり、經濟學術歴史であり、其の他一般の文化である。文化價值が『とつくりとわかる』ことが理會、會得の原理である。

我が國の道德、禮法、政治、經濟、國防の意味が『わかる』ことだけでなくして、例話のわかるのも、種々なる心得のわかるのも、實踐事項のわかるのも亦修身教育に於いては必要不可欠のことである。

伊佐 四七

而して理會の中にも一體的な觀方が作用してゐる。理會とは單に知的にのみわかることではない。知るのではなくしてわかるのである。わかるとは人間全體としてわかることである。精神全體が作用くは勿論のこと、心身一體の観点から全身全靈的にわかることである。」と修身教室の周邊を交渉し、實踐することによつて自覺することであればならぬ。換言すれば「形成的自覺」でなければならぬ。

大東亞の地圖（掛圖第一五圖）を示しながら

○「日本の國はどんな國ですか」

△「海に囲まれた國」「海の國です」

○「海に囲まれた國であれば、どんな恵を受けますか」

△「魚が取れます」暗示を受けて「貝」「こんぶ」と答へる。

其の他にないか、と靜かに考へさせて

天皇と國土と國民とが同じ御一人の産靈の神の産みの子としてあるのが日本の國である天皇が歴史的使命を祖神より受けて歴史的世界建設の最高主体として生成建設を行ひ給へば國民は國土と協力することによつて、その歴史的道義的使命の御遂行を輔翼し奉るのである。即ち「海に護られてゐる」といふ氣持日本の情操に培ひたい。

の光を輝かしながら活動してゐる。英國で買つた土産品にも「メイド イン ジャパン」と書いてあつた。日本の商品が海を渡つて各方面に優勢であることを示し、兒童の奮起を促すと共に、それが

○「大東亞戦争」

の原因をなしてゐることを説明す。

特に織物界の脅威、——英米の經濟プロッタ結成、對日壓迫、となつて表はれた。其の根底には英米的世界觀があるのであつて、個人主義道義の上に立つた不正なる殖民政策があつたのである。

個人主義に立つ限り、そこには一時的な殖民地や生活資財の配分はあり得ても、民族の運命のわかち合ひとも謂ふべき民族の歴史的構造がない。民族の根源の自覺に立つ歴史的主体の自覺を欠ぐのである。民族が常に死の危機におかれたかゝる秩序に置かれた本二十世紀初等における世界人類はまことにみじめなものがあつた。

かゝる相對的、抽象的世界觀を生かし直すものが日本の國家構造とそれの歴史の中から汲みとられねばならぬ。

その顯現を大東亞戦争に見ることが出来る、即ち八紘一字を標榜し各民族その所を得るを新秩序の道義とする日本が、ヨーロッパの原理を克服し、身をもつてする近

○「海に對してどんな氣持を抱いてきましたか」
△「海に親しんで來ました」「兄弟としての交り」だから、逆巻く怒濤も決して恐れぬ。寧ろ海國男子の試練と見て、果てもない大海原を乗り切つて國威を輝かした人が非常に多い。

○「山田長政、濱田彌兵衛、東南亞細亞方面に散在する無名勇士の墓石」

説明して、發展的な國民性が海を足場として具現されたことを理會させる。

○「祖先は何をなしたのだろう」
子供なりに發表させてみる。

かくした發展的な國民性は鎖國によつて一時閉ざされ、まことに止むを得ないものがあつたが、明治の大御代に力強く解き放されて今日に最もよく具現されてゐることを説明

○「水産日本」

掛圖第十五圖、地圖を示しながら、世界總産額の 1/4 を産し第一位たること、南極海の捕鯨一頭約一萬圓、しかも二、三ヶ月に五千頭から六千頭とれる。先進國諸國を凌駕して水産日本の名聲を擧げてゐる。

○「海運國日本」

世界いたるところの海洋に、日の丸の旗をかゝけて、國

代からの轉身の苦闘であり、近代への告別宣言といふ歴史的轉換の雄渾なる戦争が大東亞戦争である。

道義の憤怒に發した、このやうな戦争は徹底的破壊と共に、本來建設の爲の戦ひであり、今日を天地初發の時とする歴史的創造を擔つてゐるのである。

○「どこで戦争してゐますか」

ハワイ海戦以來の赫々たる戦勝を想起感激を新にさせ、「へさきに菊の御紋章を仰ぐ帝國軍艦は、み國の護り、もかたく、太平洋から、印度洋にかけて其の威力を張つてゐた」のは有事即應の構へであつたのだ。

わが國に取つては、此の廣い大海原は世界に正しいことが行はれるやうにする道場であつて、日本に挑戦して來るものを懲らしめる戦の庭である。

大東亞戦争の性格から考へても、東西古今の史實に徴しても、長年月を要するであらうことは想像に難かしくない。此の世界史的現實を理會せしめ、海國日本の少國民たるの自覺を高めたい。

自覺の主体は國家であり、國民の自覺の生命的主体は天皇に在します。國民としては、皇運扶翼が最終の自覺的實踐である。海と空とを確保する國のみがこの「地球最終の決戦」に勝抜くことである。

「海國日本の誇りを擧げる舞臺は限りなく大きい。そ

の廣い舞臺に日の丸の旗をさし上げて進むのは私達の使命です」

の覺悟を促す。

「讀ましめる」

兒童用書を兒童の爲のものとして取扱ひ、出来るだけ兒童に親しませるやう工夫する。

結極は教師の心構への問題となつて来る。自由主義、享樂主義観点から修身科を敬遠するやうであつてはならない。「人は倫理の中で人であつて、倫理外に人たるを得ない」のである。

涵養

「涵養とは養ふことである。養ふといふ以上、その中には生長發展と云ふ意味が重要な要素となつてゐるのである。修身教育に於いては既にいくらか素材として持つてゐるもの、その持つてゐるものを伸ばし、生長させるといふ方法が考へられなければならない。

涵養する爲には教へることが必要である。養ふと云ふは教へることである。會得がそのまま涵養となるのであつて涵養の爲の方法は正しく會得である。會得と異なる所は其の背後に生長發展と云ふことが豫想されてゐる点である」

「個々の場合は千差萬別であつて、兒童の生活を如實

に知り、教科書の示すところに隨つて行爲實現の方法を具體的に手引することが修身科指導の要訣である」と個に徹した指導がなされねばならぬ。教室、教室の周邊と動的な結びつきに涵養の方法があらう。

○「使命を果たすには、どうせねばなりませんか」

△「水泳をします」「からだをねる」

「學問をする」 其の他の答を得た。

最初の發表と比較して、日本的思惟に導く、單に臣民の道の自覺といふよりは、唯一の君に任へ奉る唯一の「御民われ」の覺悟もて八紘一字の天業を翼賛し奉らんとする責任的實踐の精神に生きることである。

○「泳げますか」

一しきり、よろこびの聲、聞きつゝ、

○「一番始は、どんな心持で浴びましたか。」

兒童の發は次の如くまとめることが出來た。

△ 水泳した人

浴びたかつた

浴びたくなかつた

水泳をしなかつた人

浴びたくなかつた

泳げない

鍊成の原理は、具體的には闘争を契機とする原理である。現在と超現在、肯定と否定、傳統と創造、未來と過去、等の如く對角線的に對立するものを現實に結ぶ教育的行である。鍊磨育成であつて、闘争を通してのみ事が事となり、物が物となる。

兒童の發表の一つ一つについて、賞讃、激勵して、實踐への指導をなす。

現在の生活に満足してゐる人は犬猫と撰ぶところがなし。日誌を取扱つて具體的に人間生活を説明して置く。

○「海國少年少女は水泳だけでよいか」

文を實現するものは武であり、武を支へるものは文である。文の極致は八紘一字の大理想であり、武は亦それが實現の爲の身体的最高原理である。文武相即は新らしき國民鍊成の方法原理である。質實剛健の氣風はそこから派生する戰鬪的身構へである。「文ヲ修メ武ヲ鍊リ、質實剛健ノ氣風ヲ振勵ス」へ導きたい。

特に後一週間に於いて夏休みである。夏は身體を鍛へるに一番よい季節である。どんな暑い日であろうと、日本の子供は負けてはならない。どんなに海があれども荒波を乗り切つてお國の爲に盡くす心構へをつくらねばならぬ。

○「水泳の注意と非常の注意について」

夏休み身體鍛鍊の方法は主として水泳である、注意事項を想起させ、徹底せしめたい。

修身と一體たるべき禮法の指導は、單なる形式的末梢的な容儀であつてはならない。即ち禮法の指導と禮法への指導でなければならぬ。禮法への指導と共に日常の禮法はプリントにして配布し、家庭と聯絡して實踐の指導を繰り返すと共に、少年團の活動により禮法修練の雰囲気の醸成につとめてゐる。

第三期修身教室は、實踐への能力を助長せしむると共に、國民的自覺を深めて、八紘一字の道義的生命力の維持育成がねらひである。

一、修身教室の周邊

1、修身教室の周邊

教育全般が廣義の修身教育であることは、「國民學校ハ皇國ノ道ニ則リテ初等普通教育ヲ施シ國民ノ基礎的鍊成ヲナス」とあるのや、國民學校令施行規則第一條第一項に明である。

科目としての修身は、かゝる地盤から特定の條件を具へて結晶して浮び上つた形態である。しかも修身科は皇國の道を直接の内容とする教科だけに各教科科目と對立しながら、常に廣義の修身教育にふれて行き、そこにま

で足を踏み入れ、そこにまで進展せんとするものである。修身科が廣義の修身教育にふれ合つて、教育の根源的意味に立歸らんとすることは修身科の依つて立つ性質上承認しなければならぬ問題であろう。寧ろそこにこそ修身科の獨自性があるともいへる。

少年團訓練に於ける復唱復令が訓練の時間に限定されてゐたり、講堂に於ける不動の姿勢が体操科の夫と逕庭があるやうでは教育の効果また期して待つことが出来ない。従來の修身科があらゆる思想の洗禮を受けつゝ、猶現實に見るべきものがすくなかつたのは、かゝる抽象を繰り返してゐたところに理由がある。

一體的な観点に立つて兒童生活の全野が修身教室の周邊として視野の中に收められねばならぬ。しかも兩者は動的交渉の中に一體として把握されねばならぬ。

ロ、薩藩士風の作興

自覺するとは「分を知る」ことである。道義に於いて立ち、道義が武において顯現される神武の國日本に於いては、國民は大君の絶對の命に侍することをわが分際とする人間の體驗をサムラヒ（侍）として自覺して來たのである。侍は分を知り、やがて分に死することによつて永遠に生きんとした情熱は「氣節ヲ尙ヒ廉恥ヲ重ンズル」の道義として表はれた。

新らしき世代を背負ふ國民の性格は、「青少年學徒＝賜リタル勅語」の御聖旨を自覺の道として反省すれば此の「氣節ヲ尙ヒ廉恥ヲ重ンズ」武士道的道義であると思ふ。

武士道的道義がなければ「文ヲ修メ武ヲ鍊ル」鍊成も實質剛健ノ氣風ヲ振勵スル」ことも意味をなさぬ。特に大御心のまに／＼大東亞の指導者として立つ爲には日本の名をけがさぬと云ふ武士道的情熱が必要である。

この情熱は、建國以來華人の胸奥に藏せられた、忠孝の精神を經とし、剛健尙武を緯として織りなされた薩藩の士風の中に見出すことが出来る。

聖旨を奉體し、鹿兒島健兒傳統の精神に生きる少年團を生かすことが薩藩の士風を紹復し、作興するものである。

ハ、組織化

私達ハ、一年生ノ世話ヲシマス。朝學校ニ來ル時ハ、サソヒマス。學校デ一シヨニ遊ビマス。私達ハ先生ノ教ヲヨク守リ。三年生ヤ四年生ニナラツテ、ヨイ子供ニナラウト思ヒマス。

更に、「掛圖の第二圖は子供隣組の回覽板を讀んでゐるのを示したもので、子供隣組の活動について指導する」教師用書とある。組織化を暗示したものであろう。

指導者訓練の消極道は、從順性、遵奉の習慣を養成することであらう。少年團經營に支障を來たすものは、二期兒童の衝動的生活を數へることが出来やう。

一、鍊成

現在の生活と超現在の生活を結ぶ現實になされる教育的行が鍊磨育成である。國民學校に於ける方法も鍊成の方法を取らねばならぬ。たゞ一つの公案を十年の課題とする禪宗の教育方法や、最も單純なことを繰り返し身につけることから其の奥儀にまで至る武道修業の方法を範とせねばならぬ。量的なひろがりと共に質的に徹底することが必要である。

鍊成の反面には反省が伴はねばならぬ。反省とは自覺の深化であり、本に還ることである、本に還ることは出發点に還ることである。

反省の機關として部落の常會、學級常會を指導することも一つの方法であり、日誌による反省も考へられる。特に部落常會を指導する事は學校と家庭との聯絡を緊密にする上から考へても價値ある問題だと思ふ。

反省を伴はざる鍊成は龍頭蛇尾に終る。結果を見てやること、努力を認めてやること、教育的考慮がなされることは明日への期待と適當な壓力とを與へる。

統一ある學校活動は、必ずはつきりした上下關係を必要とするものであつて、軍隊の統率性に實證を求むるまでもない。學校活動に一つの組織を與へたものは少年團であつて、少年團は學校と相即一體の立場で訓練体制を確立せんとするものであつて、「訓育の面では少年團に百歩を譲ることが、學校訓育の新らしい出發となるといつても過言ではない。」

故に其の集團形態としても、學級學年別による集團と地域別による集團とをもつてをり、必要に応じては前者より後者に、後者より前者に移ることが出来るやうに訓練して置く必要がある。

組織の反面には、維持と云ふことが考へられねばならぬ。内容的には定められた規則、躰けられた事柄が維持される方法が考慮されねばならない。

教師が陣頭に立つて範を示すことが必要であるが、兒童幹部に夫夫分に應じて責任をもたせ、相互に切磋琢磨して行く方が効果的なことがある。指導者訓練が組織を維持する上から必要な問題となつて來る。

指導者訓練は二つの形態を取ることが出来る。即ち學級形態で基礎的訓練を受けることであり、他は分團形態で活動してゐる實際場面で、其の分團の担任教師から指導を受ける方法である。

國民儀禮の後、學藝訓練をなさしむ。

大東亞共榮圏の指導者として必要な素質のみならず、郷土の特殊性に考慮して努力してゐる。父兄も亦學藝を通して吾が子の姿を再認識し、明日への督勵をなしてゐるやうである。終了後の

「話し合」

は達示事項であつたり、「ヨイ子供一日の生活」を中心とする、児童生活事象のありのままの話し合である。一人の團員に善行あれば皆譽め合ひ心から敬意を表し、行儀の悪い子供がをり、意地悪い團員がゐても決して捨て、仕舞ふやうな事があつてはならない。喧嘩する児童、ラヂオ体操に出ない子供がゐる。然るに児童の心情に喰ひ入つてよく話をしてやる。更に参列の父兄母姉卒業生から鞭撻を受ける、かゝる雰圍氣は「児童をして、おのづと悟りあらためさせる」のである。かくして正しき目標が示され、一團となつて實踐して行くのであつて、其の間切差し磨き合つて最大の能力を發揮し、學校、社會が道場的雰圍氣に包まれ國民生活の教育化が可能となる國家發展の基礎に培ふこととなる。

父兄との懇談後、閉會することにしてゐる。

ホ、環 境

仰せられた如く、個人中心的な物の考へ方、觀方であつたと思ふ。貪欲そのものであつた。「國家を衰頹に導くものは共產黨にあらず、人民戦線にあらず乃至社會主義にあらず。之等の主義は、日本精神鍊磨の大砥石であり、爲に皇國精神は愈光を放つ。亡國は底なき利己心のみ」と、

消極的には、「身殺」みそぎをなすと共に、積極的には、「廣大無邊なる誠の命の力と云ふものを上御一人を貴き御縁として感ずること、祭により「ミタマノフユ」を我が身の上に感得する」ところに教師としての菩薩行がある。

道を體得して、道に生きんとすることは、絶對的權威をもつて子弟に臨むといふことになり、一切の人々を教化せずんば息まずといふ願望となつて示される。かゝる上求菩提と下化衆生といふ二つの世界の動的なる結びつきに於て眞の教師としての態度を見る。日本の師道は、大御心を奉體して皇國の道を奉じて邁進する内的活動そのもの、權威と慈愛とに於て求めなければならぬ。

かゝる境地の衆生に及ぶ秩序は「子弟同行」「實踐垂範」でなければならぬ。自己が對立して所謂格闘が行はれる場合、必ず教師が其の媒介となり、同行者となつて其處に立合ふことではなければならぬ。實踐垂範は卑劣愚

教師が自分の「はたらきかけ」に執心するあまり、児童を取り圍む物的環境や、教師以外の人的環境には無頓着であつた。化するとは統一され、整備された全体の力が部分的な細案に表はれない力として働くことを意味する。

塵一つとよめない校舎内外、帯一本、チョーク一本に至るまで精神が通ひ清潔整頓整備された周囲と、鍊成の一途を辿る人的な環境からは必然に「おのづから悟り改める」といふ道場的風格、一種の雰圍氣が醸成される。環境整ひ、雰圍氣醸成するならば、儀も禮法も自ら興るものであり、生活能率は高まり、學習は向上するものである。

最後に皇祖發祥の聖地に生を受け、雲に聳ゆる高千穂の靈峰を朝夕仰ぐ吾等は計量することの出来ぬ無爲の感化を受けるのである。吾々の環境の中に生かさねばならぬ。

三、師道確立むすび

具體的實踐のあとに振返つて見ると結極は廻つて教師われの問題に歸つて來る、師道の如何が一而一切的なものであることを知る。

師道行に於て支障を來たしたものは十七ヶ條憲法五に

味なる教師われの垂範でなくして、万民と共に、否一民われと共に行ぜんと先立ち給ふ上御一人の御聖徳を讃仰欣慕する民のあかきまろろひでなければならぬ。

しかもかゝる感激が一時の高奮に終つてはならない。實踐指導は根氣比である。促成栽培であつてはならぬ。實踐垂範が全校職員一致の大的雰圍氣から永續化される時、大いなる産靈が行はれ、創造が行はれる。

「春は山野をかけめぐつて得ず、かへつて自家庭前の梅梢にこれを見る」「宇宙的なものは一個的なものであり、永遠的なものは即今的なものである」「武士が仕へるもの、分際に生きたその身分的分際が職域の概念によつて生かされて來た今日、國家に盡くすの道は職分報國の外なく、此の職分に死することによつて、生死一貫を越へ大自在の境地に這入るべきである。道は近きに在り。營々として脚下の小さな問題に全身全靈を捧げつくすところこそ自己の使命なりと自覺し、その實現に邁進したいと思ふ。

高等科に於ける修身教育の方法

鹿兒島市

目次

序 鑑志義勇信分

序

修身教育の方法は、人によつて異なり、教材によつて違ひ、時所によつて變るべきものであり、更に兒童心理への適應、家庭環境への適應、日常生活への適應等によつて、具體的方法是無限に變化する。従つてこれらの問題を一々こゝに究明することは不可能である。自覺期にある高等科の修身教育は、教師と兒童とが、

互に求道の同志として、俱學俱進するところに方法の重點があると信ずる。
時は正に皇國存亡の決戦中であり、卒業生の中には、これを最後の教として、直ちにこの決戦に参加する兒童も少くないのである。この時局下に、この兒童を相手として、我々は如何に俱學し、如何に俱進しなければならぬのであるか。この小論は、さうした教兒の同志的修行について、その眼目とすべきところを論ずるものである。

鑑

修身教育の指導目標は教育に關する勅語の實踐的奉體に徹せしめることである。兒童をして、「斯ノ道」を實踐せしむるには、我々自身が深く「斯ノ道」を體得し、日々之を窺行して兒童の鑑とならねばならぬ。畏くも勅語に昭示し給へる如く、師表たる者の徳化こそ修身教育の理想的方法である。併し乍ら、我々は果して兒童の鑑

として疊なき者であるだらうか。本立ちて道は生ずる。修身教育方法上の根本問題は、先づ我々教師自身が如何にして眞の日本人になり切ることが出来るかと、いふ事ではなければならぬ。特に、個人主義・自由主義・功利主義等米英思想の侵害してゐる現代に育つた我々は、深刻なる反省と激烈なる修行によつて、速にその穢を破はねばならぬのである。而も我々は現に教へつゝある者であり、今更改めて修行して出直すといふわけにはいかぬ。我々は教へつゝ修行し、修行しつゝ教へねばならぬのである。即ち教兒共に「斯ノ道」の修行に俱學俱進する外ないのである。

「斯ノ道」は決して觀念的な規範ではなく、祖先の實踐した遺風であり、國史の發揮した成跡である。故に「斯ノ道」の修行には斯ノ道の具現者を鑑とすることが最善の方法である。孔子が「述而不作信而好古」といはれた如く、道の具現者たる古人を鑑として、その人格思想の中に自己の規範を發見せしむることが正しい修身教育の方法である。特に今日は皇國存亡の重大なる時局であるから、現下の我々の修行は、皇國の非常に處して「斯ノ道」を發揮したる人物を鑑とすることが第一でなければならぬ。

道の具現者を鑑として修行するには、その人物に對す

る畏敬の念が深刻でなければならぬ。敬することによつて法が法となるのである。修身の授業に於ては、先づ第一にその人物に對する畏敬の念を振起することが必要である。それには教師自身その事蹟を精密に研究し、その精神を十分に體得し、内に畏敬の念を藏し、外に言葉を慎しんで語らなければならぬ。

また道の具現者を鑑とするには、從來のやうに、抽象的徳目の一例證として見るのではなく、或徳目を修行の眼目としながら、その具體的人格全體を鑑として仰ぐのである。
高等科の兒童は英雄崇拜の心理を多分に持つ青年前期であるから、その心理を一層純化して、道の具現者を崇拜せしむるやうに善導することが肝要である。その一つとして、讀書の指導を忘れてはならぬ。特に都市の兒童は冒險物語、探偵物語等浮薄なる讀物に浸淫してゐる者が多いから、力めてこれらのものを避けしめ、忠臣先哲の傳記を愛讀せしめるやう積極的に指導することが肝要である。

教兒が一堂に宿泊して切磋し合ふことは、教室に於ける授業よりも遙に深い感銘を與へ得るものであるから、高等科に於ては出来る限り之を實施する必要があるが、その方法も、忠臣先哲の記念日を選んで、その思業を鑑

とする語り合ひを營むやうに工夫するならば、一層有効であらう。

國民科修身は「教育ニ關スル勅語ノ旨趣ニ基キテ」「國體ノ精華ヲ明ラカニシ」「國民精神ヲ涵養シ」「國民道徳ノ實踐ヲ指導シ」「兒童ノ徳性ヲ養ヒ」「皇國ノ道義的使命ヲ自覺セシメ」以て、「國民ノ基礎的鍊成ヲ爲ス」ものであるが、國體の精華は惟神の信によつて體認せられ、國民精神は義の確立によつて涵養せられ、國民道徳は勇によつて實踐せられ、兒童の徳性は求道の志によつて長養せられ、皇國の道義的使命は、各自が分を盡くすことによつて達成せられるものと信ずる。故に修身教育に於て、道の具現者を鑑とする修行の眼目も、常にこの信・義・勇・志・分の五項でなければならぬ。以下章を分けてこの點を究明せんとするものである。

志

修身の出發點は求道の志にある。この志を立てしめなければ、修身教育は結局徒勞である。景岳先生は僅か十五歳にして立志の必要を論じ、「志なき者は魂なき虫に同じ。何時まで立ち候ても丈ののぶる事なし」といひ、松陰先生は獄中にあつて、當時の學生の功利的態度を痛嘆され、「名利の爲にする學問は、進めば進む程その弊

著はれ、進退を誤り、節義を缺き、勢利に屈し、醜態言ふに忍びざるに至る。」と戒めてゐる。

我々は皇運扶翼のみことちて生れ來つたのであり、このこと以外に我々の生き方はないのであるから、松陰先生の所謂「子としては孝に死し、臣としては忠に死し仰いでは皇國の大恩に報じ、俯しては一身の職分を盡くす」ことが我々の本志である。古來忠孝の二字が人倫の根本として重ぜられ、現在に於ても修身の眼目として説かれてはゐるが、實際の生活はむしろ別個の主義によつて動いてゐる有様である。別個の主義とは即ち功利主義である。明治以來西洋功利の思想に浸淫せる我が國民は次第に傳統の大義を忘れて、立身出世を以て志とするやうになつて來たのである。今や、米英との一大決戦に際會して、一切の迷夢を清算し、皇國本來の精神に復歸しつゝあるが、その第一は志の復歸でなければならぬ。三十八年の生涯を勤皇の大義に捧げられた有馬正義先生は、十三歳にして早くもその志を確立してゐるのである。偉人の立志は大抵十三四歳であるといはれる。高等科の兒童は丁度立志の年齢にあるのであるから、この時期に一生を貫く眞の志を確立せしめねばならぬ。それには、日々、「青少年學徒ニ賜ハリタル勅語ヲ」奉體せしめ、國運維持の大任を負荷する自覺に培ひ、純眞なる少

年の魂を、常にこの感激によつて皇運扶翼へ志向せしめることが肝要である。

修身の授業に於て、人物の事蹟を語る場合は、その事蹟の根柢が盡志報國の志にあることを強調しなければならぬ。

我が郷土は皇祖發祥の聖地であり、我々の祖先は肇國の古より天業を翼賛し奉れる忠臣である。更に幕末の志士、維新の元勳、明治の聖將等、先輩の純忠至誠は燦として我等を照してゐる。この祖先に承け、この先輩を嗣ぐことが、我々の誇でありまた責任であることを自覺せしめることが立志の上からも大切である。

九軍神を始め、幾多の年若き軍神達が、現に我々の前でその崇高至純なる志を遂げつゝある偉大なる事實は何よりも尊い養志の鑑である。この軍神達の精神を、切實なる氣持で仰がしむるならば、低劣な功利の志などは忽ち雲散霧消する筈である。

養志の教育は、教師と兒童とが、同志として堅く結び合ふことによつて徹底する。我々教育者の志とするところは、大義の顯揚であり、道義の護持である。この志を成す爲には、正義先生の所謂「禍福利害を以てその志を易えず」常に「憂國の言を行ひ、世教を維持し、名分を正し、以て民志を定むる」ことに専念しなければなら

義

ぬ。高等科の担任は卒業して直ちに世の中に出て行く兒童にとつて最後の師である。従つて、その間には永遠の師弟としての強き結びがなければならぬ。教師と兒童とが、道義窮行の同志として、互に勵まし合ひ、松陰先生が爲された如く、常に「一心を正し、人倫の重きを思ひ、皇國の尊きを思ひ、夷狄の禍を思ひ、事に就き類に觸れ、相共に切磋講究して、死に至る迄他念なく、片言隻語も是を離るゝことなく。」修行し合ふところに、國家の存亡を擔ふ青年の志が磐石の如く確立するであらう。

人の道は君臣・父子・兄弟・夫婦・朋友等の間柄に於て成立する。この間柄を正すことを義といふ。故に人の道は義の一字を以て表すことが出来る。義の根本は君臣の大義である。我が國は神勅のまにまに君臣の大義を根本として父子・兄弟・夫婦・朋友その他一切の道義を正す國柄である。教育に關する勅語に昭示し給へる孝・友・和・信以下の諸徳は、それぞれの間柄に於て義を全うするところに生ずる徳であるが、これらの諸徳はすべて皇運を扶翼し奉る忠の一徳に歸一する。大義は一切諸道の歸結であり、忠は一切諸徳の統名である。大義より展開

されたる道でなければ如何なる道も正しいものとはいへない。従つて忠に統一せられざる徳は如何なる徳も眞實のものではない。孝・友・和・信以下の諸徳はすべて忠を全うするものとしての徳である。專言すれば日本人の道は大義の一道であり、日本人の徳は忠の一徳である。

忠とは穢き心を祓ひ去り、明かき淨き直きまことの心を以て大君に仕へまつることである。この惟神の忠が武士道の錐鍊によつて、一層精緻となり、一層深刻となつて、こゝに義と利とを厳別し、苟も義に反する利は斷乎として排撃せられ、節義・廉恥の諸徳が赫然たる朱光を放つ道義國家を建設して來たのである。然るに封建制度の崩壊と共に、武士道精神は衰退し、かてゝ加へて西洋功利の思想が浸潤せる爲、義を捨て、利を取るユダヤ的商人根情が充滿して來たことは、實に日本思想史上の一大汚辱である。又那事變解決の障害の一つは、日本人の沒義涉利にあるといはれてゐるのは、慨嘆に堪えない事實である。大東亞諸民族に、道義的秩序を與へる事が我が國の使命である事を想へば、此の事實は強烈に反省せられねばならぬ。而も今日未曾有の大戦下、國家存亡の關頭に立つて、尙銃後國民の生活に種々の經濟的不正行為を開き、或は艱難を避けて安逸を偷む言動を見るのはたゞに日本人の恥辱たる許りでなく、國家の將來にとつ

て寒心に堪えない現象である。

幕末の國難に際して、松陰先生が、「群夷競來る。國家の大事とはいへども深憂とするに足らず。深憂とすべきは人心の正しからざるなり。苟も人心だに正しければ百死以て國を守る。其の間勝敗利鈍ありといへども、未だ遽かに國家を失ふに至らず。苟も人心先づ不正ならば、一戦を待たずして、國家を擧げて、夷に従ふに至るべし。然らば今日最も憂ふべき者は人心の不正なるに非ずや。」と叫ばれたる如く、群夷總反攻の大國難に直面せる今日、國家最深の憂ひは、國民が一人も残らず利を捨て、義を取り生を捨て、死を取る精神を確立してゐるかどうかといふ事である。

必勝の體制とは國內が義によつて純化統一されることではなければならぬ。淺見綱齋先生が劍術筆記に無懼の剛を説いて、「必ずや清心寡欲、謹身勵精、毎に忠孝節義を以て念とせば、夫の死に向ふの志、剛決の氣、表裏内外通徹確固、敵誰か得て之をへだてん。故に至要の術計全く己を實にするに在り。一毫の敵の虚に乘するなし。」と教へられたる如く、義を以て己を實にすることが絶對不敗の要件である。

この義を破るものは利である。國家滅亡の原因は、すべて國民の利己心にある。己一個の利を追ふ者には國家

の存亡に際して、潔く一命を捨てる事は出來ないのである。護國の大義に喜んで死ぬことが出来るのは平生から利を捨て、義を取る修練を積んでゐる者である。然るに現代の日本人には義利の辨に明らかでない者が多い。むしろ利を正當視する思想によつて行動してゐるのである。義利の辨を明らかにしなければ道義一本の行動は不可能である。我々が今教へつゝ、兒童は、幼少よりこの點を厳しく修鍊して、道義一片の眞箇日本人となし、名實共に世界人類の道義的指導者たらしめねばならぬ。畏くも青少年學徒に賜はりたる勅語に、青少年修行の第一として氣節・廉恥を御垂示し給ひし大御心の程を拜察し恐懼に堪へない次第である。都市は多く利を求めて集る他人の集合であるから、市民的性格は一般に利己的である。家庭環境が利己的であるから自然兒童の性行にも利己的色彩が強い。義利嚴辨の教育は都市兒童に於いて一層重要である。特に卒業後直ちに職に就く高等科兒童に對しては、義利を嚴辨する修鍊を徹底しなければならぬ。

義利嚴辨の修鍊には、士風の復活が肝要である。士風形成の消極面は利の絶對否定である。我が薩藩士風の如きは實に義利嚴辨の好標本である。舊傳集に「御家は人の心無慾にして貪らず、心ある人々は知行俸祿を給ひても返上して請けず、上に忠を入れん事を專とする小身者

多し。」とある如く、諸士多く増祿を望まず、寧ろ之を賤し、假令感状を受けても、その文中より増祿の文字は之を切抜いた程であるといふ。「思ほへず違ふものなり身の上の欲を離れて義を守れ人。」と戒められたる日新公の遺訓は、そのまゝ永く墨守せられ、財利を口にしないことを賤む傳統の士風が形成されたのである。この傳統の士風より生み出され、これを大成されたる大人格こそ西郷先生である。先生の思業言行一としてその表れでないものはない。我々は無盡の教訓を藏する先生の大人格の中に、特にその「難に逢ふては背て退く無く、利を見れば全く循ふ勿れ。」と教へられたる武士道精神を仰がねばならぬ。今日この武士道精神を復活することが道義修鍊の要訣であると信ずる。その一方法として郷中詮議の修鍊法を修身教育の中に取り入れることは有効である。詮議は即ち詮議であり、義利を明辨する修鍊である。學級生活乃至家庭生活に於ける義利の問題を取擧げて、兒童相互に詮議せしめ合ふならば、そこに自ら利を恥ぢ義を知る精神が涵養せられるであらう。

義利嚴辨の教育上特に注意すべきは、道徳を功利的因果關係にて説いてはならぬといふことである。善を爲せば必ずそれに相當する功利が報いられる。惡を爲せば必ずそれに相當する禍害を蒙むるとして道徳を説くこと

は、結局道徳そのものの成立を破壊することになるのである。谷泰山先生が炳丹録序に述べられた如く、道義を貫く者はむしろ悲惨なる生涯に終つてゐるのが歴史の事實である。道義を行ふのは人の禽獸と異なる絶對の道であつて、どこまでも道義の爲に道義を行ふのであり、功利は思慮の外でなければならぬ。利を否定して義を行ふところに、實は眞實の利が全うせられるものであらうが、併しその事は道義的意志に於ては問題でないのである。

勇

平生利を捨て、義を取る生活は決して容易の業ではない。谷泰山先生の所謂「義を以てその私を制し、氣を以てその決を致す」のでなければ道義の實踐は不可能である。松陰先生は士規七則に、「士道は義より大なるはなし。義は勇によつて行はれ勇は義によりて長す」と斷じ忠孝の義が勇によつて全うせられる所以を述べてゐる。正義先生はこの点を一層明白に説いて「士の道を行ふや文を以て焉を明かにし、勇を以て焉を立つ。其の文武の實を盡くす所以の者は何ぞや。曰く義、曰く勇、是なり所謂學といふ者は、正に文武の道を學び義理の當否を明かにし、義勇の實を盡くさんと欲する也。」とのべてゐる。

ざるもの、一つである。最近發表せられたる文學報國會選定の愛國百人一首の如きも義勇を養ふにふさはしい雄渾なる言葉である。

義勇修練の方法として、薩藩の郷中にて行はれた如く、鍊武・登山・行軍・水練・相撃等武の鍛鍊が不斷に行はれねばならぬ。特に古武道示現流(自顯流)の精神は忠孝の實踐に必死猛進するところにあるといはれてゐる。即ち義勇の精神を五體を以て感得するのが薩藩傳統の古武道である。その鍛鍊に當つては、常に義勇修練の自覺を振起せしめつゝ指導することが肝要である。

義勇涵養上重要な一つは教師の氣魄である。氣魄は義勇内に充ちて自らに發する精神的迫力である。今日教育者の缺點として氣魄の缺除が指摘せられるのは我々の大いに顧みねばならないところである。次代の國民には大國民としての氣魄が實しなればならぬ。氣魄は氣魄によつてのみ養はれる。一切の問題が常に我々自身に在ることを顧みて、師道の確立に邁進しなければならぬ。

義勇の至極は死を期するところにある。一死を甘しとする者でなければ眞の義勇は生じないのである。松陰先生が「死して後己むの四字言簡にして義該ぬ。堅忍果決確乎として抜くべからざるもの是を捨て、術な

る。道義實踐の工夫、先哲の見るところ自ら義勇の二字に歸一する。義勇の精神によつて日常の生活を規律し鍛鍊することが即ち修身である。義勇を涵養せずして、如何に訓練を反復し生活を指導しても砂上に樓閣を築くやうなものである。

修身の授業に際しては、人物の行跡を皮相に語り輕薄に稱へてはならぬ。凡そ道義の實踐には何人も義利・勇怯の葛藤を生じ、これを斷ずるに義勇の精神を以てするのである。故に人物の行跡を仰ぐ場合には、常にその内の苦闘の深刻さを情意に訴へて具體的に語り、それを各自の立場に置換へて考へしめ、その義勇に感銘せしむると共に、それを己のものとして體得せしむる様指導しなければならぬ。

我が薩藩は古來武勇を以て鳴る國であり、武勇發揮の事蹟は枚擧に暇がない位である。機會ある毎にこれ等先輩の武勇の事蹟を語つて聞かせ、皇國元氣の根源が今後と雖も我が三州の地に在るべきを強調しなければならぬ。また義勇を發揮せられたる忠臣義士の言説・詩歌等を日夕朗讀吟誦せしむることは、義勇涵養の方法として有効である。薩藩の家庭教育に於いて、勇壯なる「虎狩の巻」を暗誦せしめたことは大いに参考とすべきである。特に詩吟による元氣の涵養は青少年にとつて缺くべから

きなり。」といはれた如く、險難極りなき道義の貫徹は死して後己む者でなければ不可能である。今や蠻夷米英は死者狂になつて皇國侵攻を策してゐる。「我等何を以て是を制せんや。他なし、前に論ずる所の我が國體の外國と異なる所以の大義を明らかにし、闔國の人は闔國の爲に死し、闔藩の人は闔藩の爲に死し、臣は君の爲に死し、子は父の爲に死するの志確乎たらば何ぞ諸蠻を畏れんや。」と斷ぜられたる松陰先生の確信を、そのまゝ我々の確信として、教兒共に必死の修身を志さねばならぬ。かくして、綱齋先生が劍術筆記に述べられた如く、國民の總べてが「死に向ふの志進なく退なく、平日即ち對敵、對敵亦平日、生死を貫いて一日の如く」なつた時眞に不敗の體制が確立せられるのである。

一死を甘しとする精神は、先哲の死生觀を語つて聞かせること、精神不滅の信念を與へること、歴史的自覺を振起させること等によつて、相當養はれるものと信ずる。また自ら死を求めて潔く散つて行く軍神の精神に深く感銘せしめ、一命を致して皇恩の萬一に應へ奉ることが臣民の道であることを體認せしめなければならぬ。而もこの道の根源は國體に存するのであるから、國體の信に徹することが一死奉公の臣道を確立する根柢である。

信

一死奉公の志は不死の自覺によつて不動となる。即ち死んでも死なぬ永世の確信があれば死を恐れないばかりでなく、むしろ悦んで死ぬことが出来るやうになる。永世の確信は國體の信より發する。即ち君臣の大義が天地の常經であり、不易の準則であることを眞實に體認し、この大義に安心立命し得るのは、國體の信仰が純一であるからである。故に修身教育ぎりぎりのところは國體の信仰といふことである。松陰先生の烈々たる大義の自覺は、實に國體の信仰が根本であつたのである。「天照の神勅に日嗣の隆えまさんこと天壤と窮り無かるべし」とあり候處、神勅相違なければ日本は未だ亡びず、日本未だ亡びざれば正義重ねて發生の時は必ずあるなり。只今の時勢に頓著するは神勅を疑ふの罪輕からざるなり。「とは死期を目前にひかへたる先生の肺肝よりほどばしれる大信念の語である。かくの如き強烈なる神勅信仰を根本として、「此の君臣は開闢以來一日も相離れ得る者に非ず」「實昨素より無窮なれば臣道も亦無窮なる」を確信せられ、「大君のへにこそ死なめのどには死なじ」と必死の臣道に奮進せられたのである。神勅絶對にして、皇運は無窮であり、皇運無窮にして、國體は不動であり

國體不動にして歴史は無窮であり、歴史無限にして臣道は不滅である。松陰先生が臣道の模範として楠公精神の不滅を説かれたのも、刑死することを死なぬ人の仲間入りであると悦ばれたのも、すべて臣道不滅の大信念より發するものである。
今日國民一人々々の胸奥にこの國體信仰がどれほど深刻且つ純粹に確立してゐるであらうか。一部には、外面之に和するが如くして内心之を問題にせざる所謂知識階級の唯物思想と、他の一部には邪宗邪教に歸依して一個の救済を願ふ利己的信仰とが今尙根強くすぶつてゐる状態ではなからうか。若し然りとすればその責任は一體何處に歸せらるべきであらうか。教育をすればする程、國體觀念が薄くなるのが今までの日本教育の實狀であるといはれるのは何故であらうか。こゝに我々は遊佐木齋先生が室鳩巢の邪説を爆砕されたる書信に「神德至妙なりと雖も之を崇むるの教なければ則ち久しうして後やまんのみ、是を以て神を崇むるの教あり。以て實昨の窮なきを致すは神國神明の立つ所、地勢風氣の然らしむるところなり」と述べられたところを反省しなければならぬ。

となり、現御神としてまつりごとをみそなはし給ひ、又皇祖神明の御遺訓を奉體あらせられて萬民を教へ給ふのである。我等教育者はこの大御心のまゝにまつりによつて神明のましへを奉體し、これを明かにしなければならぬ。

國體信仰の第一著手は家庭に於ける敬神崇祖の教育である。各家々に於て、毎朝神棚に拜禮し祖先の靈位に拜禮する儀は修身教育の第一歩として重要である。次に神社参拜の勵行は臣道修練の行として肝要である。神社の根源は神籙磐境の神勅に存し、皇孫の御爲に齋き奉ることとその本義である。神社に祀る神は皇運扶翼の大業に奉仕した神靈であり、この神靈の御前に皇運の無窮を祈り奉る奉仕の中に自ら穢き心が祓はれ、明かき淨き直きまことが養はれるのである。

教室に奉齋する大麻に對し奉る日々の嚴かな奉仕はまつりとをしへを一にする尊いとなみである。大麻の拜禮を單なる形式にのみ終らせるか、或は神威を仰いで忠誠を養ふまつりとするかは教師その人の信に存する。信は信によつてのみ養ふことが出来るのであり、教師の信は修身教育の根本である。尙大麻の拜禮ばかりでなく日々の學習の總べてが神明の照覽の下に、つゝしみかしこむまなびでなければならぬ。つゝしみかしこむことが學

びの根本態度であり教への由りて生ずる所である。各科の成績品等も先づ之を大麻の御前に奉獻してから處理するやうにしたら、學習がより眞摯になるであらう。特に藝能科の作品は日本本來の進獻藝術の精神に則つて神の御前に供へるものとすれば一層有意義である。

忠臣先哲の記念日をトして宿泊訓練を爲す場合は、その祭を營み、祭式一切を兒童自身でやらせるやうにしたい。兒童に祭を營ませることは祭祀の意義を明らかにし敬神の念を涵養する上から極めて有効である。

神の信仰はやがて現御神の信仰として深化せられねばならぬ。「すめろぎは神にあれば」と歌つた古代人の純粹なる天皇神信仰は、同じく我等の信仰である。「神道の事は容易く顯はさず」といはれる通り惟神の道の實體を我々が知ることは出来ない。惟神の道の實體は之を承け給ひ保ち給ふ上御一人の大御心にのみ存するのである。惟神の信とは即ち大御心に絶對隨順することである。松陰先生が獄中の囚徒に對してまで「億兆の人宜しく日嗣と休戚を同うして復他念あるべからず」と教へ、孝明天皇の大御心を「今上皇帝の安心立命身を以て國に殉じ給ふこと叡慮久しく已に決せり」と拜察せ

られては「元來神勅無になり候事を御嘆き思召せばこそ
主上の御苦勞遊ばされ候事にて、其の御苦勞を體し候へ
ばこそ、吾輩かく迄精神を凝らし候事に候。」と滿腔の
赤心を吐露して居られる如く、行住坐臥大御心と休戚を
同うし、一思一想の末にも國體の存亡を思ひて他念なく
各々その分を竭くして宸襟を安じ奉るところに、唯一絶
對なる臣道が存するのである。今や大御心奉體、神意隨
順の信仰生活は、我々自身の問題として眞剣に反省せら
れねばならぬ。

分

今日國家は存亡の關頭に立つ一大決戦下にあり、高等
科の兒童は大部分卒業して直ちにこの決戦に参加するの
である。軍では各種少年兵に高等科卒業生を募集し、國
防植民としての義勇軍も益々重要化しつゝある。一方銃
後の各職域にも多數の少年工が必要である。故に特別な
る者以外は中等學校への進學を中止し、或は少年兵とし
て第一線に立ち、或は義勇軍乃至産業戰士として銃後に
闘はねばならぬのである。故に高等科に於ては職分の教
育が重要である。職分は正義先生の所謂「己がさま／＼
あるにまかせて皆皇祖神の大道の一端を盡くして皇國の
用をなす」つとめであり、むすびの天業を分擔する奉仕

の道である。その自覺は國體の信より發し、名もなき民
として奉公する志を確立し、常に義を踏んで利に誘はれ
ず、一死を甘しとする勇によつて之を貫行するところに
職分は全うせられる。従つて前述の志・義・勇・信を眼
目とする日々の修身教育の中に職分の教育は自ら營まれ
るのであるが、之を一層徹底するものとして、學級生活
乃至團體訓練に於ける分の自覺を振起することが肝要で
ある。またあらゆる機會をとらへて責任觀念確立の教育
を施さねばならない。責任の觀念は全體に對する個の自
覺に於いて成立する。今日戰時體制下の各職域が精巧な
る機械の如く組織化され、一人の勤怠が直ちに國家の興
亡に關係することを強調し、その責任の重大なるを自覺
せしめねばならぬ。

國民學校に於て團體的修練が重視せられるのは當然で
あるが、併し團體の蔭に個人を見失ふやうな教育に陥つ
てはならない。教育はどこまでも個人を主體として之を
鍊成するものである。個に徹する教育でなければ眞實の
ものではない。特に職分の教育は、兒童一人々々の個
性・家庭等に則して個別的に指導されねばならぬ。その
爲には絶えず家庭を訪問して、家庭の事情を知ると共に
職分選定について父兄と十分相談することが肝要であ
る。勿論それには時局に對する教師の識見によつて父兄

も共に指導する心構へがなければならぬ。

宿泊訓練・登山・遠行等によつて、兒童一人々々と親し
み合ふ機會を多くし、常に語り合ふことが必要である。

特に兒童の日記を中心とする語り合ひの教育は種々の
點から有効である。自覺期にある高等科の兒童にとつて
日記による修行は極めて重要であり、日記を書くことに
よつて、その自覺は明確となり、その反省は深刻となり
その生活は歴史的意義を感じるやうになる。而も日記は
それによつて教兒の同志的語り合ひを深くするところに
大きな教育的意義がある。凡そ教育は教師と兒童とが一
對一の結びりをなすところに眞實の營みとなる。日記
は實に教兒の結び紐である。兒童は一日の生活を素直に
反省し、素直に記録して、教師に提出する。教師は深き
慈愛を以て之を精讀理解し、その恥づる所を慰め、その
勇む所を鼓舞し、善行は微小なるものにも賞讃を以て報
い、過誤は一切同情を以て懇ろに諭してやる。こゝに教
兒のまことが溶け合ひ、道の修行は彌々白熱化する。日
記は檢閲するのではなく、日記を中心として教兒の語り

合ひを營むのである。時局下の少國民として日常如何に
分を盡くしつゝあるか、又如何に分を盡さねばならない
かといふ點を語り合ひつゝ、日記を通して兒童の心性を
理解し、生活を善導し、更に職分の選定を指導すること
に力めなければならぬ。高等科の兒童は概して知能劣り
志操も亦低いのであるが、かうした教兒の同志的語り合
ひによつて、その志は意外に高まり、その義勇はすばら
しく發揚して來るものである。高等科の担任と卒業生と
は永遠の師弟であると共に、また永遠の同志である。こ
の結びりが強ければ強い程世の中の荒波を乗り切る彼等
の力も強くなるのである。今日少年工の一部不良化が喧
傳せられるのは實に遺憾であるが、我々は教兒の同志的
結合の強化によつて、如何なる環境に在つても毅然とし
て志を持し義を踏み分を守る眞に強き日本青年を鍊成し
て世に送らねばならぬ。それには通り一片の授業のみに
て出來ることではなく、不斷に求道の同志として語り合
ふ中に強く切磋せられて行くものであると信ずる。

高等科に於ける修身教育の方法

熊 六八

熊 毛 郡

目次

はしがき	第一章 皇國の道
道の根元——臣道——傳統——業道——一体	第二章 修身教育の目的
第三章 修練の場	家——血縁と地縁——まつり——みちびき——物——なりはひ
第四章 高等科修身教育の基盤	高等科兒童の特質——郡民性——兒童の家——兒童の部落——兒童の遊び——兒童の働きの場——兒童の經歷——結び
第五章 教材の見方	第六章 指導のすがた
教授の姿態(一)——(二)——(三)	むすび

はしがき

明治天皇御製

たらちねの親の教をまもる子は

まなびの道もまどはざらなむ

皇國の道の根元は天皇にお在します。祖孫一体となり父子一元となり億兆体を一にして、天皇へ仕へ奉る實踐そのものが皇國臣民の道である。

誠に皇國の道は、畏くも皇祖皇宗の御聖徳であり、御遺訓であらせられる。そして我等祖先が血と汗と膏とを以て行じ來つた翼賛實踐行であり、祖先の遺風なのである。

祖より孫へ、父より子へと相承け相繼ぎ相傳へられて來た皇國の道の裡には、血から血へ、魂から魂への祖孫一貫の生命の力強い躍動を見る。

兒童の家は皇國の道の貴重なる修練の場であり、皇國民の魂の錬成場である。兒童の住む部落は臣民道育成の道場である。家の生活の在り方が、部落民の働きの在り

方が生活のしづりが、皇國の道の育成錬磨の上に根源的な關係を持つことを強く思ふ。

今や皇國は、その道義的使命の達成完遂に總力を擧げてゐる。それは祖先傳統の負荷の大任の力強い實踐である。兒童の父は、兄は、此の使命達成の場に逞しく、雄々しく、皇運扶翼の實踐道に挺身してゐる。明日は此の兒童が此の父、此の兄の跡を襲つて挺身しなければならぬのである。

皇國の道の錬成は誠に重且つ大で、そして又眞に急である。

かくありて許さるべきや密林の

木蔭に消えし友等を思へば(本間大將歌)

第一章 皇國の道

道の根元 皇國の道は肇國の元に淵源し國体の精華に根元する。

諾冉二尊天つ神の命もちて神々及び國土山川を生み給ひ、修理固成の大業を恢弘し給ふ。此の大業は二尊の私一個の御考へによつて行じ給うたものでは決してなく、天つ神の命に對へ奉り給ふ御いとなみであらせられた事は申す迄もない。かくして我等の遠き祖は「天つ神の事依さし給ふまゝに」大業を道と一元的に生みなされたもの

である。「教」「道」「業」一体「業」「道」一体の皇國の道の眞髓は茲に根元するものと信ずる。

生みなされた神々國土山川は即ち大八洲であり、臣民であり、ものごとである。それはまさしく生みの子である。子は祖に根元し親から生れる。そして生まれた子はその裡に「生む親」を含む、その「生む親」は即ち祖孫一貫の生命である。それは神々及び國土山川を生み給ひし御意志を傳承する神・皇・祖・親・孫を貫く生命である。皇孫瓊瓊杵尊神勅を奉じて此の國に降臨し給ひ皇祖天照大神を祀り給ひて皇祖皇宗と御一体とならせられ天照大神の御高徳そのまゝに大業を恢弘し給ふ。

我等皇國民の生命は、祖神の御意志に隨順し、祖神と床をともし行じいとなみ、そして子孫へ傳へて行くところの實踐に外ならぬ此の自覺こそ日本臣民の根元的生命の把握であり、茲に日本國民道の根元が存する。

臣道 肇國の大業を翼賛し奉りし神々の御意志を奉戴し、神と一体の「御民我」として、そのまゝに天皇に絶對隨順し奉る時、神の御意志に生き、祖孫一貫の生命の中今に在る自分を見すのである。天皇絶對隨順の誠は忠であり、祖孫一貫の誠は孝である。是れ我が忠孝一本の皇國独自の道徳である。

祖先の大業翼賛皇運扶翼の遺業を傳承し、祖孫一体父

子一元、上御一人に隨順し奉る事を他にして皇國臣民道はない。教育勅語は昭に臣民の實踐すべき大業翼賛、天壤無窮の皇運扶翼の大道を筆教し給ひしものであつて、我等の日夕奉戴必謹必行の實踐行である。

傳統 皇國の道は祖より孫へ父より子へと血から血へ傳承され鍊成され生々發展して來た道である。天皇隨順神人一体祖孫一貫の生命の自覺を根元とする日本臣民の營みは、神が道によつて生み給ひ、修理固成し給ひし皇土と一体となつて悠久三千年の歴史を生み、風を生み、ぶりを生み、子々孫々に繼承され生みなされて生々發展、今や大東亞否世界新秩序建設たる歴史的道義的使命達成のいとなみに邁進しつゝあるのである。「御民我」のいとなみは祖先の遺業の裡に、祖先の仕へ奉りし道に自らを省み、祖孫一体以て天業恢弘の大業を翼賛し奉るにある。由來三州の地は皇祖發祥の地にして、日本道樹立の根基であるといふ可きの地である。忠孝練武質實剛健廉恥を重んずるの士風は武士階級のみでなく、農工商を貫く七百年の傳統として築き上げられた薩摩の風であり、ぶりである。國家の傳統、郷中の傳統、家の傳統、すべては祖先の道に立つといとなみの繼承である。「傳統に生き傳統に死す」我等皇國の道である。

業道一体 武士に武士道があり、農民に農民道があ

り、皇國の生業は道に根元し道に則して營まれ修練されて來たのである。従つて道は生業の修得、營みに依て鍊成されて來たものである。皇國の道は業と一体的に修練され育成されて來た業道一体の實踐道である。

第二章 修身教育の目的

皇國民の生活の總ては天皇に絶對隨順し奉るにある。然して以て皇國を無窮に生々發展せしむるに在る。是は悠久三千年祖孫一貫の信念であり、信仰である。

然して國民科修身の目的は「教育ニ關スル勅語ノ旨趣ニ基キテ國民道德ノ實踐ヲ指導シ兒童ノ徳性ヲ養ヒ皇國ノ道義的使命ヲ自覺セシムル」事に在つて、此の目的を達成する事によつて國民科の「我が國ノ道德ニ付テ習得セシメ特ニ國體ノ精華ヲ明ニシテ國民精神ヲ涵養シ皇國ノ使命ヲ自覺セシメ皇國ニ生レタル喜ビヲ感ゼシメ、敬神奉公ノ眞義ヲ体得セシム」といふ目的に合致するのである。皇國の道を修練する事が國民學校の營みの悉くであり、教育の全野である事は言ふ迄もない。此の皇國の道の實踐を指導し兒童の徳性を涵養する所の國民科修身の使命は「皇國ノ道ヲ修練スル」事に最も直接するものである。「皇國の道を修練す」といふのは「皇國の道を單に知識的に把握せしめるだけでなく、皇國の道を体得

し實踐するまでに至らしめる」ことであり、そして「皇國の道の修練とは一言に臣道實踐の教育を指すのである。」

然して皇國の道を修練せしむる核心は「萬邦無比の我が國體に對する信念を強固にすることであつて皇運扶翼の大精神も、義勇奉公の至誠も皆皇國の道の修練とこれによつて体得された國體に對する強固な信念とが基礎となつてそこから由來するものである。

教則第三條に示された七項に亘る修身教育の方針は、教材の見方考へ方及び指導の方途に對して指針を示してゐるもので、特に家庭の躰を重視し、高度國防國家体制の確立に重点を置いてゐる事は見逃してはならない事項である。

要するに修身教育の目的とする所は教育勅語の必謹奉戴であつて皇運扶翼の不抜の信念を樹立し、以て皇國民の魂性を養ふ事にある。

第三章 修練の場

我等の祖先が天皇に仕へ奉りし心魂のいとなみが、如何なる場に於て、如何なる姿に於て、修練されて來たかを省み、以てそこに、祖孫一体以て天業を翼賛し奉る兒童鍊成の基調を求めたい。

家——血縁と地縁 我が國が民族國家であり同時に家族國家たることは忠孝一致を根幹とする國民道德を生み

なした。肇國創業の神の御裔が天皇であらせられ、皇室であらせられる。臣民は建國以來神に仕へ奉りし祖を同じくする神の子孫であり、三千年來一連一環の關係のもとに仕へ來つた家の子である。されば「家」は御宗家たる皇室に祖孫一体、夫婦一体、兄弟一体となりてお仕へする場であり臣道修練の道場である。そこに情義ある日本道德を生みなしてゐるのである。我が國民道德は眞の情義に樹つた道德である。

家は生の原理たる血縁と、そして地縁とを持つ。此の兩縁は一体となつて家に對する感情に深い培ひをなすのである。

血縁は單なる「我」を越えて血に連る一体的な「我」を自覺せしめる。親と子に連る情愛の一体的な姿は、感情豊かな道德を生み情操豊醇なる生活を育てる。

更に自己の生れた家を取巻く田畑草木あらゆるものが家に對する感情を深くしてくれる。これ等の感情はうちなる感情に於て言はれる。うちの者、身うちの者、うちの物といふ感情は他と區別されない自己を感じ、家族や他の者總てが我と一体となつた姿である。

祖孫一体の生命の自覺である。「うちの物」であり、

「うちの畑」であつて、「父の物」「母の田圃」「俺の物」ではない。

祖孫一体の生命の自覚は上下を貫く縦への自覚である。夫婦を主とする西洋の家とは根本的に相違する。夫婦のいとなみは何處までも横である。縁が織りなして家族一体となつて祖に仕へ、大君に隨順して行く。そこに皇國の道の行じ方がある。

かくして「家」に於て「父母に孝＝兄弟＝友＝夫婦相和シ……以テ天壤無窮ノ皇運ヲ扶翼シ奉ル」臣道は鍊磨育成されて行き、敬神崇祖のお仕への生活振りが鍊成されて行くのである。

まつり 祭祀は神人一体、祖孫一体の實踐行である。神に仕へ、祖に仕へる祭祀の行は本に報ひ、元に歸し、祖に歸入するの誠である。自らを省み自らを謹み、祖を崇めるの心である。家族一同一心一体となり、又は部落民一心相和して祖神に仕へるのである。

父と共に母と共に朝夕の神祖の御前の敬虔なる參行は、神の御意志、祖先の生命を自ら會得して我に會ひたくば靖國の社に……との言葉を妻や子に残す勇士の心を培ひ、銚後にありては精魂込めて働く職業戰士の魂を養成するのである。家に於ける禮讓の躰は親子一体となつて神祖を祀る所に始まる。父母長上に對する禮讓の躰

も親類縁者に對する道も、社會に於ける作法心構も或は部落民一致團結の精神も總ては祖神を祀りて、天皇に仕へ奉る心を元とするのである。かくて皇國臣民の道は「まつり」の場に於て「まつりのこと」を通して育成され修練を積んで來たのである。

明治天皇御製

わが國は神のすまなり神まつる

むかしのてぶりわするなよゆめ

みちびき 天皇に仕へ奉る祖孫一貫の實踐行は、よりよき後繼者のみちびきとして現れる。導きの大親は天皇にましまし、師は教の親である。此の親子の情愛は親心を以てする導きの姿として現れてゐる。親は子の成長の全からん事を祈り、朝夕三度の食事にも意を注ぐ。此の心情は朝夕の起居動作にも心を配り、己を空しうしてよりよき後繼者たらしめんと只管念願する。子供の不作法は親の躰の悪さを意味し、「あれは誰某の子だ」と直ぐ親の名が出る。子の恥は親の恥、祖先を辱かしめる者とされ、殊に女親の導き――躰は極めて重視されてゐる。兄弟姉妹を導き先輩は後輩を導き、師匠は弟子を躰ける。

導きの姿は躰であり其の方法は鍊成であり、事上鍊磨である。生活と一体的に、働きと一体的に、技術の鍊磨

と一元的に 修練され性格にまで 鍊成されて來たのである。

物 自己を超越する一体なる感情は物に對しては上御一人より戴きたるもの、お預りしてゐるもの、祖先傳來のものとして現れる。縦へ自己の勤勞によるとも自己のものとしての占有感はない。家のものである。祖先傳來のものをなくしてはならぬとの考へは非常に強く、我が代になつて働きの足らなから他へ譲るなど此の上ない祖先への不孝とされる。

肇國の古、皇祖が親しく生業を授け給ひ、産業經濟が國の大御業たることを御示し遊ばされた其の神意は、神の授け給ひしなりは、ひによつて生みなされた物により、國民生活を保ちて皇威を發揚せしめんとする御旨に外ならぬ。

こゝに於て總ての物は天業翼賛の爲のものであり、ために戴きたるものである。物を戴くといふ言葉は大君のもの、祖先のいとなみたる物といふ考への上に成立した言葉である。一粒の米一着の衣一汁一菜これ皆戴きたる物であり、物の中に君の御惠祖先のいとなみを深く感ずるのである。皇國産業皇國經濟、總ては「戴く姿」に於て「仕へる心」に於て行ぜられて來た。

家庭に於て食事をするにも「頂きます」、箸を取るに

も禮を正して戴き、一粒の御飯にも勿体なさを感じ残さず戴く朝夕の躰、無駄使ひせぬみちびきは、自づと物の有難さを會得せしむる感謝の行なのである。物と事に仕へる實踐なのである。

なりはひ 皇國の道は「業道一体」の道である事を前章で述べたが、古來民族に於ける職業の分掌は、家業尊重の精神を生むに至つた。家業尊重は家名を尊重し、家業精勵の如何が家の名譽を左右する最も重要な營であつた。故に職業の繼承は最も厳正なる魂性の鍊成に依つて始めてなされ、家の名譽を一身に擔ひ祖先の遺業に應へたのである。

我流を直し我儘を打ち破り、正しき型に入れて人間をつくる。劍道指南の武道教育に、鍛冶職や大工の徒弟教育に、武士は武士として、農人は農人として、町人は町人としてそのわざの修練は勿論、言葉遣ひ禮法に至るまで、其の親、其の師の納得が行くまでにならなければ家職は勿論、家の名を繼ぐ事は許されなかつた。然しそれは單に型に捉はれず型を超越する爲の鍊成であつた。道に入り道に苦しみ眞に鍊れた自在の人間が出来る。型に入つて型より出で眞我にいたる鍊成である。

師とは道と型の体得者であり弟子は師弟同行の姿に於て師の道と型を自づと會得したのである。家業に於ては

父は師であり、雇傭關係に於ても單なる使用者被使用者の關係でなく、切れば血の出る關係に置かれたのである。家業の道の爲には自分の子たりとも儼然たる態度で臨んだ。總ては家の名譽、職業道のための鍊成であつた。武士は武士として、商人は商人として、職人は職人として、漁師は漁師としての魂性は鍊成であつた。親子同行、家族同行、師弟同行、先輩同行の姿に於て其の業務と、働きと、技術と不可分の皇國の道は育成鍊磨され日常の生業に即して一体的に修練されて來たのである。

第四章 高等科修身教育の基盤

高等科兒童の特質 こゝでは家庭生活郷中郡民性に關聯せしめて記述したい。高等科兒童は青年前期と言はれる時代で實用的段階より原理的段階への過渡期であり道徳的には極めて危険な時代である。即ち道徳的自我的發生期で良心と本能が對立する時代である。更に理想生活を描く時代で自己中心に自己の知見によつて他を極端に批判する態度が現はれる。自律的な一面他律的面を多分に持つ時代である。然して一面極めて感激性が強い。彼等はまだ概念生活をやつてゐない。具体的事實に感激し

極めて實踐迫力に富んでゐる。彼等は熱血兒であり、義に燃える長所を持つてゐる。男女の特性も極めて明瞭となり、女子に於ては特に思春期の萌芽を見情操の發達著しく、感情的に物を見、自己の行爲を律するといふ方面が強く現れる。彼等の内面化する傾向を凝視し内なる悩みを解決し計畫的な實踐へと指導せねばならぬ。此の期の實踐訓練の弱体化は將來取り返しのつかない結果を生む。

郡民性 由來本郡は地勢的に變化少く天恵の耕地産物は人情を豊かにし温順ならしめた。早くより儒學開けて禮讓正しく、物の見方は極めて純朴且つ情感的で情操豊かである。かゝる点は他郡に見られぬ長所であらう。然し天恵と風土と交通の不便は安逸に慣れ持久力乏しく進取敢爲の氣力に欠け、生活に規正がなく實踐力に欠くるが如き状態の性状に立到らしめた。此の性格は長幼を問はずあらゆる面に現れ本郡指導者の極めて重視してゐる問題である。

兒童の家 兒童を知るには其の父祖を知り、家を知らねばならぬ。親のいとなみ振り家ぶり、家の性格を知らねばならぬ。子は父祖の行じ方によつて自ら鍊磨されつゝあり、家ぶりによつて修練されつゝある「嫁を貰ふなら親を貰へ」「七代崇る」「氏より育ち」等の俚諺は無

量の含蓄があり親の性格が子孫に繼承される事を示唆してゐる。子孫の善行を見て「何某の子だ、やつぱり偉いものだ」と父を褒め母を偉いといふ。兄も偉かつた、姉も偉かつたといふ此の事實は我等の教育の足場であり重要な基盤である。

兒童の部落 兒童の住む部落は又兒童を自然の中に育成して行く。然かもそれは非常な力を持つてゐる。部落には部落の歴史があり、風があり、習はしがある。部落の魂性があり、これ等は住む人達を根強く修練して行くのである。傳統の力は強い。こゝにも修身教育の基盤がある。

兒童の遊び これも亦見逃してはならない道の修練の基調である。兒童が心身一体となつて夢我夢中になつて遊んでゐるその遊び―部落傳統の遊びがある。時局を反映した遊びがある。或は個人的なもの、鬭争的なもの、團体的なもの種々あるが、此の遊びによつて心身と一体的に道が修練されて行き性格が育成されて行きつゝあるのである。

兒童の働きの場 兒童は學校から歸ると、家業に働み畠を耕し作物に培ふ。草刈り、薪採りに、父と共に、母と共に、兄弟共に或は家族總出で、或は友達と汗を流す。商家の兒童は店頭接客と接し、漁師の子供は父と兄

と櫓を操る。此の働きの場の働きの姿こそは修身教育の由つて樹つ所である。

兒童の經歷 具体的に知るといふ事は道の修練の上によき手がかりとなる。兒童の出生の地、成長の地、保護者との關係、家のいとなみぶりの變化、隣組、交友、等に就いて極めて具体的にわかる、といふ事は導きの上に、よき方途を示唆して呉れる。更に學校に於て、就學以來教師から如何に導かれ、如何に薰陶を受けて來たか、担任教師の性別、年齢、性格、担任期間、及びその導きの姿等具体的に經歷をわからなければならぬ。

結び 兒童には長所があり短所もある、美点もあれば缺點もある。その由つて來る所を究めねばならぬ。修身教育では概して兒童の長所を中軸として導かるべきである。

徒らに缺點短所のみを見て、獨斷的に、頭ごなしに、否定し去らうとするその概念的な行方は、教兒同行の姿ではない。

兒童調査

家庭生活	登校前	○起立五時 ○朝掃除 ○神佛禮拜 ○祖母へ挨拶 ○立木打 ○朝讀 ○登校ノ爲附近ノ兒童ヲアツメル
	下校後	農業手助け、神佛禮拜、祖母へ挨拶(夜) 家事一般ノ相談=アツカル 日誌記入
初六以前	學校ノミチビキ	家庭ノ躰
	○子供ヲ虐メルナ ○喧嘩ヲスルナ 子供ノ欠陥ノミ=捉ヘテ指導サレ テイタ傾向アリ家庭トノ聯絡ハ殆 ドトラレテキナイ	殆ド顧ラレテキナイ親カラ厄介視サ レタ爲子供ノ心ハ歪メラレ爲ス事々 ニツケ叱咤ヲ受ケル有様デ親心ヲ以 テ導カレテキナイ 六年ノ二學期ヨリ叔父ノ薰陶ヲ受ク
高一	教師ト叔父叔母祖母聯絡ノ下=神 佛禮拜、墓參ヲ勵行セシメ、農業 ノ手助け勉學ノ方面=向ツテ心ヲ 落チツケサセ毎日ノ行爲ヲ反省ス ル態度ヲ練成ス	朝ノ掃除 神佛禮拜、石水ヲカヘル 祖母叔父ノ手助け 心ヲ落チツケサセル 仕ヘサセル(祖先=)トイフ様ナコ トヲ中心トシテ導カル、叔父ガ教師 トナリシガ爲極メテ効果アリ
	參行ノ喜ビヲ感ゼシメル總テノコ ト=休當リ主義ヲ率先事=當ル態 度ヲ修練ス 立木打、朝讀少年團幹部トシテ仕 事=祖母=ヨク仕ヘルヤウ機會ア ル毎=導キツツアリ	高一ノ行事ヲ繼續シ立木打モカカサ ズツケルテキル。 部落少年團ノ行事等=ハ率先シテ出 ルヤウ=仕向ケテキル、叔父應召ノ タメ、農業其ノ他ノ事=モ相談相手 タラシメテ家ノ經營=直接参加スル 態度ヲ養ハセテキル
高二		

熊七七

兒童氏名	○ ○ ○ ○	出生地	熊毛郡○○○
	昭和三年五月二十三日生	成長地	出生地=同ジ
環境	家格	普通	健康 健康系=シテ背高
	家風	落着キヨク地味 シツケヨシ	家系中ノ 優劣者 ナシ
家庭	父	三十三才=シテ肺炎=カカ リ死農業=從事無口デアツ テ事=熱心デアツタ 体格モ極メテ大キカツタ	母 夫死亡後家計ノ關係デ弟ヲ伴 ヒ長子久夫ヲ殘シテ再縁ス(現 在ノ夫ハ極メテ練ラレタ人 物ナリ)性質ハ極メテヨク夫 =仕ヘル 身体强健=シテ身長普通
	家族	祖母叔父叔母本人共=四人ノ生活 叔父ハ應召中 叔母ハ○○=通勤祖母ト兒童=ヨツテ農業ヲ 營ミツツアリ	
部	生計	稍下叔母ノ收入ガ家計ノ大 分ヲ占ム	信仰・眞宗・神佛共=祀ツ テアル
	住宅	家屋 六疊二間・四疊半一間瓦葺キ 机 有	整 掃除ガ隅々=マデ 理 届イテキル
兒童	部落	移住部落 戶數13個 移住後四十年内外デ現在移住 部落ノ感ジナシ	郷 風 移住部落=ヨク見ラレル意地 ノ強サ勤儉貯蓄ノ風アリ 個人相互ハ親シミ深イ
	經歷	五才=シテ父ヲ失ヒ母ト別レ兄弟ト離レ、家計不如意ノ爲里子ト シテ木炭業者=ヤラレ、昭和十年○○校=就學、成績不良操行惡 シク、友人ハ勿論、社會ヨリ指彈ヲ受ク、四年生=シテ又他人= 貰ハレ、素行改ラズ、六年生ノ時叔父教員トナリ、之ヲ見テ祖母 ノモト=引キトリテ導ク、其ノ後素行漸次改マリ、勉學=心ヲ向 ケ家事ノ手傳ヒヲナシ、友ダチモ漸ク出來テ、現在無口ノ方ナル モ正直=シテ作業其他=率先シテアタル。	熊七六
志望所見	農業 叔父ハ應召・家=アリテ祖母ヲ養ヒ更生ノ御恩=報ヒタイ 此ノ純情ト希望ハ逆境ヨリ拔ケ出タ親身ノ祖母=仕ヘル喜 デアラウ		

熊七六

第五章 教材の見方

熊 七八

修身教材は天業翼賛の臣民實踐道を示すものであり、その内容は「教育勅語」を實にする皇國民のいとなみである。それは長くも皇祖皇宗の御聖徳であり御遺訓である。又我等祖先の實踐行であり遺風である。而して皇國の道に實にするいとなみの誠は皇祖皇宗の御遺訓の奉戴であり、祖先の實踐行への歸入であり遺風の顯彰である。換言すれば天壤無窮の皇運を扶翼し奉る盡忠の至誠である。「父母=孝」「父子=一體」となり祖孫一元となつて皇運扶翼の臣民道に參じ、「夫婦相和シ」「一連一體」となりて祖に仕へ翼贊道を行じ、「兄弟=友」「力を協せ心を一にして 國に奉じ……」「學ヲ修メ業ヲ習ヒ」以て「天壤無窮ノ皇運ヲ扶翼シ奉ル」べき負荷の大任を行ぜなければならぬのである。教材は此の誠の具体である。

上に仕へ、親に仕へる。物に仕へ事に仕へる。——これが皇國の道の實踐のあり方である。皇國の道は仕へるといふ誠に於て修練されて來たのであり、修練されて行くのである。仕へるといふ事は一體になるといふ行じ方である。我が國には親の子に對する道は説かれてない。師が弟子に對する道は説かれてない。子に仕へらるゝ父

成の道德観である。功名利達に依つて社會に貢獻するといふが如き自己を満たして他を満たす道德的思想が盛られてゐることである。

次に現行教科書の一二の徳目に就いて簡単に述べると「勤勉」といふ徳目でも祖孫一貫、天業翼賛の自覺に立ついとなみならば、勤勉ならざるを得ない躍動を感ずるのである。高一、十五に見らるゝ勤勉は幸福の母であるとか、國は個人の勤勉によつて榮えるとか、その思想は個人のいとなみの一面のみが強調せられて、やむにやまれぬといふ心境の自覺とはなり得ない。高二第十一「學問」に於ても然り、教科書に「知識を廣め徳性を養ふには學問を修めることが大切である」と述べてゐる。第一に掲げられた知識を廣めること、徳性を養ふ所以のものが明確に指示されてゐない。道を樹て國家の使命を完遂せん爲の學問技術であること、祖先の生みなせる皇國文化を更に進展せしめる爲の學問たる事が極めて不明確である。他は省くとしても、經濟に國防にあらゆる徳目が此の皇國の根元的ないとなみに即して見られなければならぬ。

尙兒童の心意の發達に即し、時局に即應すると共に土地情勢、風習及家庭の實踐行、部落の行事等を考慮して教材を見直さねばならぬ。而も徳目の解釋は教師自らの

は更に親に仕へ、弟子に仕へらるゝ師は更に又自分らの師に仕へて行く。それが父道であり師道である。事始めの行事がある。皇國特有のお仕への行事である仕事をするといふことは、事に仕へるの精神である。こゝに皇國の仕事、皇國産業の構へがあり、働き振りがあ

かくして皇國の道は生業と技術と、そして日常の生活と朝夕の起居と一元的に修練され行ぜられて來たのである。我等の祖先が至誠を以て修練に修練を積んだ實踐行である。縦には祖孫一體 横には億兆一心世々相傳へ相承けて厥の美を濟して來た道である。これが國民道德であり、皇國の道であり、臣民道である。この見方に立つて現行高等科修身教科書を見直して行かねばならぬ。

教材は兒童の生活を基盤として生活を深化し統制して兒童の徳性を啓培錬成し皇國の傳統を積んで行かうとするのであるから、教材の持つ面は多岐多様であるが、しかもそれは皇運扶翼の大道に歸一しこの一途に出づるのである。従つて飽くまでも兒童の經驗に統一と組織とを與へ以て負荷の大任を自覺せしめ道德的的使命を悟らしめるものでなくてはならない。

現行修身教科書は多くの缺陷を持つ。それは英米思想の影響である。教科書の中に多く見られることは個人完

生活體驗を基礎とし、深い信念と理解を持つてあたらねばならぬ。例話、訓辭、格言、俚諺等の見方も要は祖先の道德生活體驗であり、之を兒童の生活に適合せしめ、實踐せしめるものでなければならぬ。

國民學校高等科修身教科書が出来る迄は現行教科書を使用するのであるが、之が活用に當つては叙上の如き見方に立つて指導すべきである。

尙最後に敢へて一言したいのは、教材は皇國民のお仕への場、働きの場、營みの場、修道の場乃至は生活の場として提示されなければならない。従つて具体の生活体であつて抽出されたものであつてはならない。故に國史と關聯し、地理と國語と、乃至は科學と藝能と體鍊と嚴密に關聯し合ひ、然かも組織と統一を持つものである。

第六章 指導のすがた

授業の姿態(一) 教材 職業(高一、二男女複式)

×家庭調査は兒童の父母祖父母の生活狀態及遺傳性行等綿密に調査し兒童の經歷及性行に就いては學籍簿を参照しつゝ、父兄及郷中の指導者を通じて 詳細に調査して置く。大体職業指導所の調査表を參考とし兒童の經歷及性行欄には具体的に生活事實を卒直に記入する。
×希望職業といふ題で綴方を書かして置くくと兒童の道德

熊 七九

的意識の程度が明確に把握される。

×身体は毎月初めに身長体重胸圍を測定せしめ、榮養其の他衛生に關する事項は個人別に指導する。殊に本校は蛋白質の攝取不充分に就き、雜魚の乾物を奨励してゐる。

×指導所と連絡をとり家庭を訪問して國家の要求及兒童の性能を知らしめると共に父兄の意向を聴取し就職の指導をなす。

展開の場 晝食時 五〇分 少年團甘藷栽培

開墾地の中央にある涼み松の下で五十六人の兒童に圍まれて晝食。○印教師 △印兒童

△先生お茶を飲んで来ました。

○さうかありがたう。皆で頂かう……四方山の話、失敗した話

苦しかつた話、嬉しかつた事、前に居られた先生方の話から私の年齢や父の話まで進んで行つた。

△先生のおとうさんは何を居られたのですか

○大工だつた、○大工といつて、相當名の賣れた大工だつたよ。宮崎君、君のおとうさんも大工さんだね、君もよい大工さんになりさうだね。

宮崎、私は軍人になりたひのです。

○さうか、それはよい、体も丈夫だし——海軍を志願しようと思つてゐる者は誰々だつたかね——福岡君に春田君、大里君もだつたね、こんな時うんと働いて心身を鍛つておかんと駄

お父さんの後を繼いで農業をやるものは、國の大黒柱は自分達であると思つて働くのだね。——(時間が来たので再び録を握つた)

あらゆる機会を捉へ教室だけでなく、耕しつゝ御飯を頂きつゝみちびく。青空の下、鍬を振り、祖先先輩の汗と背に滲んだ此の土くれに、我が汗と背を注ぎ、祖先先輩一体の境地を体得せしめ、休みの暇々に語り合ひつゝ、教兒一体親和の中に教への一つ一つが、どれ程兒童の心深く印象づけられるか測り知れないものがある。斯くして業に勵みつゝ、技を練りつゝ、それと一体的に修練せられ行ぜられて行くのが我が國民道徳——皇國の道なのである。

教授の姿態(二) 皇國産業の眞義に徹せしめ、職業を通じて皇運扶翼の大道に參する心構を練成す。

指導の要点——指導の場所 教室——

一、天業翼贊の爲の職業であること

神授の業、祖先の遺業

二、職分を通じてお仕へすること

三、職業を選ぶ心得

○此の前開墾地で海軍志願や工廠に行く話が出たが、それから家の人と相談した人があります。今日はおつと深く考へて

目だぞ——

△私の父は家に残つて手傳ひして貰はねばといひますが私は是非海軍に行きたいのです。

○さうか君のお父さんはお若いからお家の働きはお父さんに頼むんだね。——お父さんに先生からよく話しておきますから君の不得手な算数をしつかり勉強するのだね。

△私からお父さんによく話をして見ませう。

○原君は工廠に行き度いと言つてゐたね。

原、「はい」父も母もよからうといひました。

○さうか、それは有難い。只今お國では、工廠に君のやうな優秀な人に深山来て貰いたいと願つてゐる所だ。君には兄さんも居る事だし——うんと食べて体を鍛らねば——最後は氣力と体力だよ。然し皆出てしまつても困るね、後に残るのは誰々だつたかね。

△ハイ ハイ(半數位手を舉げる)

○よしそれで大丈夫だ、我が國は何と言つても農業を本とした國だ。農業をやる精神で工業や商業をやつたら日本の國はまだ——榮えて行くよ、之からは大東亞共榮團の先生だから魂の入れ方がうんと違つて來なくては駄目だ。農業を忘れた國を知つてゐるかね。

△ハイ イギリスです。

○さうです、農業を忘れた國は必ず滅ぶと言はれてゐます。農は國の大本と昔から言はれてゐる事が現在の日本を見てよく解るでせう、三度の御飯を頂く國が今何處にあるでせうか、

見ませう。

春田 その晩父に『是非海軍にやつて下さい』とお願ひしましたら『それ程お前が望みなら今度の試験を受けて見よ。今は自分の事ばかり言つてゐる時ではない』と申しました。

○さうか、よかつたね、お國の爲に働かうといふ眞心がお父さんの心に通じたのだね。

畑山 私は家が苦しいので早くおぢいさんを安心させたいと思ふのです。

○畑山君の心持ちはよくわかります。——これから職に就く人は國の爲、君の爲といふことを第一に考へて働いてもらはねばなりません。どうかすると自分の利益や名譽のことばかり考へて國家にお仕へするといふ精神を忘れることがあります。皆さんが職に就くといふことは、天業を翼贊し奉るといふ事ですから、この事をはつきりとわきまへなくてはなりません。自分の子や子孫がお國の爲役立つてくれることは親にとつてどんな喜びかわからない。家名をあげるやうな立派な仕事なら尙更ですね。——

畑山君、二三日中におぢいさんの所に行つて君のことについて話をしませう。

榎本 私は畑山君の話を聞いてすまないやうな氣が致します。

○さうか。然しね、君の家の事情は畑山君と違つてゐる。殊に大事な農業をやらうといふのだから決して心配しなくてもよい。農業をやつて御奉公することは開墾地でも話した通り、日本にとつては最も重要なことだよ。皆さんがお父さんと共

に耕したり田を植ふたりすることは、神様から授かった尊い仕事であり、之で一億國民の命を養つてゐるのです。銃後にある農人は銃後を振ふ戦士であり、大東亞戦完遂は我等の腕にかゝつてゐるのです——女子からは何も出ないやうだね。

今度の様な大きな戦には、銃後を護る女の働きが極めて大切であつて、女が男の分までも働かねばならぬ。現在軍需工場には、職工がいくらあつても足りない。すでに爆弾や弾丸の大部分は、十六七歳の少女の手によつて造られつゝあるのです。私も何時お召があつても應じられるだけの覚悟が必要です。この中には自分の職業のきまつてゐない人が大部分です。が、將來就職する場合には何時でも先生に相談なさい。卒業後であつても必ず先生に相談するやうにして下さい。

教授の姿態(三) 放課後便所の扉を修理しつゝ

(教師と樹木)

○君は体も丈夫だし、近頃は勉強もよくするし海軍にすゝめられたのだが、叔父さんが出征されてからはおばあさん一人ではなかくだね。

△叔父さんの分は私でやつて行けそうです。

○さうか、然し忙しい時には先生のところまで知らせてくれ、おばあさんの御恩は忘れてならないよ。

△私も一生懸命働いておばあさんだけは大切にします。

○お父さんの墓に御詣りするか。

△ハイ、一週間に詣ります。

○お父さんが働いた畠や田圃で、お父さんの姿を偲びつゝ働くのだからお父さんも喜ぶし、君も嬉しいだろう。

△然し、先生が海軍志願のボスターをお張りになられた時はとても行きなかつたです。

○君のやうに農業をする人がないと困るからね。どんな職業でもお上から戴いたものだ、わかるだらう。

△先生、春田君ははねられたさうです。

○先生も春田君から聞いたよ可愛さうに涙を流してゐた肺活量不足りなかつたらしい。

△來年は又受けると言つてゐました。

○春田君の家も兄弟が皆小さいからお父さんも心配してゐられた。まあ一年お父さんとみつちり働いたら体もしつかり整つて來るだろう。何時行つてもお父さんの手助けをしてゐる。

△春田君が先生のお家の半を作つて上げようと、昨日皆に相談してゐました。

○さうか。それは有難い。今度の土曜頃手傳つて貰はう。

△ハイ

○さあ、これでやめて置かう。御苦勞だつたね。

『先生さやうなら』と言つて歸つて行く姿を見て言ひ知れぬ涙が落ちた。父もない、母もない、只一人の祖母を頼りに更生の道を踏出してゐる尊い姿、彼の握りしめてゐた金槌にそつと觸れて見た。

特殊兒童は特に目をかけ、あらゆる機会を捉へて親子語りひの内に指導をする。殊に此の期に於ける不良少年の多くは家の營みより來る情愛の缺除と、監督不行届及學校家庭一体の指導が爲されぬ場合に起因する。暖かき道徳的情操の育成は家庭を根基として培はれるのである。而して學校に於ては正しき姿に於て、情操の純化を圖らねばならない。

むすび

兒童は教師のいとなみぶりに直接する。教師の生活のしぶり、行じ方、求道參行の姿は兒童の魂にぐんぐん迫つて行く。

『健全ナル國民ノ養成ハ一ニ師表タルモノノ徳化ニ俟ツ』と垂教し給ふ御聖慮の程、誠に畏しとも畏き極みである。我等は只々恐懼感激身の措く處を知らない。

ある校長室で、初等科一年の担任教師が涙を浮べながら話して居られる。

校長 「早く行つておあげなさい」さういつた校長の眼には涙が一杯たまつてゐた。その先生は靜かに扉を開いて外に出ると足も地につかぬ有様で駈けて行かれた。校長が後で話された事によつて次の様なことがわかつた。初等科一年の女の子が脚に大きな腫物が出來た。大事

にならぬうちにと醫師は切開手術を奨めた。親は娘に手をかへ品をかへなだめすかして手術をすゝめたが容易に子供は動かなくなつた。幾度かすゝめた後に七つの頭是な「子供」の口をついて出た言葉は「先生が一緒に居てくれたら」の一言だつた。母は教師に此の事を告げて醫院に駈けつけた。子供は先生の胸に抱かれて手術を終へたのである。

子供の教師に對する信頼、此の信頼あつてこそ教は徹底するのである。平常の教の親としてのいとなみが生んだ尊い姿である。

吾人は朝に夕にひたむきに天業翹翹の大道に率先垂範以て道の後繼者たる兒童の鍊成に邁進し御聖旨の萬一にも應へ奉らん事を期するのである。

に耕したり田を植ふたりすることは、神様から授かつた尊い仕事であり、之で一億國民の命を養つてゐるのです。銃後にある農人は鋤鋤を振ふ戦士であり、大東亞戰完遂は我等の腕にかゝつてゐるのです——女子からは何も出ないやうだね。

今度の様な大きな戦には、銃後を護る女の働きが極めて大切であつて、女が男の分までも働かねばならぬ。現在軍需工場には、職工がいくらあつても足りない。すでに爆弾や弾丸の大部分は、十六七歳の少女の手によつて造られつゝあるのです。私どもは何時お召があつても應じられるだけの覚悟が必要です。この中には自分の職業のきまつてゐない人が大部分ですが、將來就職する場合には何時でも先生に相談なさい。卒業後であつても必ず先生に相談するやうにして下さい。

教授の姿態(三) 放課後便所の扉を修理しつゝ

(教師と樹本)

○君は体も丈夫だし、近頃は勉強もよくするし海軍にすゝめたかつたのだが、叔父さんが出征されてからはおばあさん一人ではなかく、だね。

△叔父さんの分は私をやつて行けそらです。

○さうか、然し忙しい時には先生のところまで知らせてくれ、おばあさんの御恩は忘れてならないよ。

△私も一生懸命働いておばあさんだけは大切にします。

○お父さんの墓に御詣りするか。

△ハイ、一週間毎に詣ります。

○お父さんが働いた畠や田圃で、お父さんの姿を偲びつゝ働くのだからお父さんも喜ぶし、君も嬉しいだろう。

△然し、先生が海軍志願のポスターをお張りになられた時はとても行きたかつたです。

○君のやうに農業をする人がないと困るからね。どんな職業でもお上から戴いたものだ、わかるだらう。

△先生、春田君ははねられたさうです。

○先生も春田君から聞いたよ可愛さうに涙を流してゐた肺活量が足りなかつたらしい。

△來年は又受けると言つてゐました。

○春田君の家も兄弟が皆小さいからお父さんも心配してゐられた。まあ一年お父さんとみつちり働いたら体もしつかり整つて來るだろう。何時行つてもお父さんの手助けをしてゐる。

感心だね。

△春田君が先生のお家の芋を作つて上げようと、昨日皆に相談してゐました。

○さうか。それは有難い。今度の土曜頃手傳つて貰はう。

△ハイ

○さあ、これでやめて置かう。御苦勞だつたね。

『先生さやうなら』と言つて歸つて行く姿を見て言ひ知れぬ涙が落ちた。父もない、母もない、只一人の祖母を頼りに更生の道を踏出してゐる尊い姿、彼の握りしめてゐた金槌にそつと觸れて見た。

特殊兒童は特に目をかけ、あらゆる機会を捉へて親子語りひの内に指導をする。殊に此の期に於ける不良少年の多くは家の營みより來る情愛の缺除と、監督不行届及學校家庭一体の指導が爲されぬ場合に起因する。暖かき道徳的情操の育成は家庭を根基として培はれるのである。而して學校に於ては正しき姿に於て、情操の純化を圖らねばならない。

むすび

兒童は教師のいとなみぶりに直接する。教師の生活のしぶり、行じ方、求道参行の姿は兒童の魂にぐんぐん迫つて行く。

『健全ナル國民ノ養成ハ一ニ師表タルモノノ徳化ニ俟ツ』と垂教し給ふ御聖慮の程、誠に畏しとも畏き極みである。我等は只々恐懼感激身の措く處を知らない。

ある校長室で、初等科一年の担任教師が涙を浮べながら話して居られる。

校長 「早く行つておあげなさい」さういつた校長の眼には涙が一杯たまつてゐた。その先生は靜かに扉を開いて外に出ると足も地につかぬ有様で駆けて行かれた。校長が後で話された事によつて次の様なことがわかつた。初等科一年の女の子が脚に大きな腫物が出來た。大事

にならぬうちにと醫師は切開手術を奨めた。親は娘に手をかへ品をかへなだめすかして手術をすゝめたが容易に子供は動かなかつた。幾度かすゝめた後に七つの頑是な子供は口をついて出た言葉は「先生が一緒に居てくれたら」の一言だつた。母は教師に此の事を告げて醫院に駆けつけた。子供は先生の胸に抱かれて手術を終へたのである。

子供の教師に對する信頼、此の信頼あつてこそ教は徹底するのである。平常の教の親としてのいとなみが生んだ尊い姿である。

吾人は朝に夕にひたむきに天業翼賛の大道に率先垂範以て道の後繼者たる兒童の鍊成に邁進し御聖旨の萬一にも應へ奉らん事を期するのである。

理
數
科
理
科

大肝川出揖田

島屬内水宿^上_代

郡郡市郡郡附

理數科理科(自然の觀察)指導の方法

鹿兒島縣師範學校
代用附屬國民學校

田上國民學校

目次

○序

一 觀

○觀ること

○觀ると行

二 「觀る」と子供

○自然の子

○科學する芽生

三 觀ることの指導

○そなへ

・施設環境

・全校一體

○みちびき

・興味と必要

・自然な態度

序

道に絶對隨順なる「はたらき」は行である。素直なま

ことの「はたらき」によつて物の眞實が把握され物の眞實はこの「はたらき」によつて現前し、あるがまゝの「ものごと」に即して「あるがまゝ」を觀ることの眞義もこゝにある。

あるがまゝの「ものごと」と子供の素直な「はたらき」との關聯の中に具體的な子供の生長があり健全なる日本文化の將來を約束するものがある。道即我の現成としての「觀る」はたらきを謙虚なる科學的態度であり自然の觀察の原本的問題である。換言すれば自然の觀察指導の方法を方向づける根本の問題はものごとの「あるがまゝ」即ち「まこと」を把握する「みち」の體得にあるといへる。

このみち、この行に立つて始めて國家の要請に應へ得るのである。

正しくくはしく明らかに見、考へ扱ふことを端的に「觀る」として現し先づ觀ることの機縁をたづねこの機縁に生きる「子供」の實相を究明し常事學として展開する「みちびき」の實際を考察することとした。

一、観る

森羅萬象、事々物々の「あるがまゝ」即ち「まこと」を把握して行く「行」を通してのみ正しく、くはしく、明らかに見たり考へたり扱つたりする態度は養はれるのである。ものごとの「あるがまゝ」を把握する唯一の方法は、體驗の世界に没入することである。養眞な心で、しかも強く正しくはたきかけることである。

この身心を擧げての無我の行によらずして他の立場で科學する心を培はんとするのは、恰も水に入らずして泳ぎを會得しようとするに等しい。

従つて、自然の觀察の原本的問題として、ものの觀方ものを觀る態度が先づ取上げられて、深く考へられ、正しく納得されなければならぬ。

而して實踐上の諸問題は、總べてこの母體から生れるべきであらう。

○観ること

普通見るといふ事は、ちやうど月が水に影をやどすやうに、心の鏡に外部の物が映るといふやうに考へられる。即ち心と物との二つがあつて相對立し物が心に映るのであると考へられてゐる。然し色々みる立場はあるにしても事實を事實として扱へ、ものごとを「あるがまゝ」に把握するには、物となつて考へ、物となつて行ふ外にみ

にならないのである。

元來一つのごとは總て他のものごととの聯關に於てその「ものごと」としてあるのである。これらが互に聯關してあると云ふことは體驗を固定して反省した時始めてみえるのである。

兎に角物の眞實を把握するには、身心を擧げて直接具體に働きかける外はなく、この體驗即ち行を通して始めてのものごとの正しい見方、考へ方、扱ひ方が身につくやうに修練せられ、ものごとの「すぢみち」が見出されこれに循ふ心が養はれるのである。

觀念的、抽象的物の見方では、一方的合理主義に墮して眞に具體的地盤に即した生々たる科學の生れる素地には培ひ得られないのである。

從來やゝもすれば眞理とは一般化され固定されたもののやうに考へられて來たのではなからうか。かゝる考へ方は全自己がその中に入つてゐない世界の知識を絶対のものとする所謂對象認識の學とも云はれる主知的立場の然らしめたものであらう。或はそれが科學と云はれるものであるかもしれない。然し何處迄も物の眞實に行くと云ふ事が徹底的に科學と云ふことであるならば、我々がそれに於てある世界即ち眞に具體的な歴史の實在の世界を把握するのになければならない。實際的なあまりにも

ちはあるまい。東洋の「無我」の立場である。無我の立場は體驗者を全然考へない。否考へもしない立場である。

自然科學は、或る立場から世界を觀るものであるが、その立場に立つ者をも世界の中に入れて、世界の中に自分を見るのが無我の境地である。これは自己をなくするのではない。自己をなくしようにもなくなりつことはないのである。この立場こそ「ありのまゝ」を見得る唯一の立場である。

一体自然と云へば吾々も其の中に含まれてゐるべきであるさうでなければ自然の意味が徹底しない。然し多くは觀るものとしての吾々を取除いたものを、自然と云つてゐるが、これは極めて主知的な立場であつて、眞の自然を觀てゐるとは云へない。吾々を包容する自然を觀るといふのは世界を觀るといふことである。この時始めて世界又は自然を觀るといふことが徹底的に云はれる。これはとりも直さず前に述べた、物になつて考へ物になつて行ふ自然没入の立場である。觀るものなくして觀るのである。

「あゝいゝなあ」と身心を擧げて月を見てゐる時は、あるのは月だけである。併し月が月であるのは、實は月だけで月であるのではなく、月でない他のあらゆる「ものごと」が月をして月たらしめてゐるのである。この月を月たらしめてゐる凡ての「ものごと」は、月の體驗の中に包含されてあらは

實證的なものでなければならぬ。

眞理は現實に對し現實的な働きを持つことに依つて眞理と云へるのである。即ち物を正しく扱へると云ふことも一般的に云へることではない。正しいといふことは一般的には存在しないのである。ものごと即ちものごととの本質と一体となつた時正しいと云ふことが云へるのである。従つて「ものごと」を正しく、くはしく、明らかに考察處理せんとする態度はあくまでも現實に即し自然に親しむ心自然と和する心を根本として培はるべきである。自然の「ありのまゝの姿」をつかみ自然の理法を見出し辨へこれに循ひ更に新なるものを創造せんとする科學する心は、何處迄も自己自身を否定して物となり、物となつて見、物となつて行ふ無心とか自然法爾とかいふ境地に於て培はれて行くのである。

科學する心は生きて働いてゐるものである。概念化され記載されたものではない。人と共に働き人と共に育つもの即ち「行」に於て現成するものである。具體的な「ものごと」に直接して觀ること（考察處理）の修練が行はれてゐる時共に科學する心も養はれて居り、科學する心が生々と働いてゐる時觀ることが最も正しく行はれて行くのである。

○観ると行

観るの本義がもの眞實に格らんとする「行」である
とすればこの行に徹すること以外に道に通達する方法は
ないであらう。行といへば直ちに面壁九年の坐禪の行や
流汗鍛錬の苦行のみを想起し易い。勿論それらは行とよ
ばるべきものには違ひないのであるが、行は必ずしもさ
うした特殊の機會と方法形式によつてのみ行はれるもの
ではない。従來行が吾々の生活と幾遠い離行道であるこ
とばかり強調されて、その易行道であることを云ふのは
一つの罪惡であるかのやうに考へられ過ぎたのではな
からうか。行の行たる所以は自己の全てを道の中に投じ我
を捨て、道と一体となることにあるのであるから「まこ
と」を求めて精進する生活の總てが行の連続であり道の
現成そのものである。一法に遇へば一法に通じ一行に遇
へば一行を修しつゝ、體驗を體驗として現成して行くので
ある。如何に詳細なこともそのことを決して疎かにせ
ず時々刻々に現れてくるものを間違ひなく把へ、なすべ
きことの一つ一つを丹念になして行く時それは直ちにも
のごとの眞實に通じ道の現前となる。自然の事物現象を
觀察する場合に於ても今觀てゐることに専念し身を以て
體驗する以外に其のありのままを把へる方法はない。行
から出て行に終るのである。行こそは目的であり方法で

ある。

排他的相互補足の關係に於て科學性を形造る實踐性と合理
性の兩契機の統一は行によつてのみ實現せられ、全体的直覺
的方法や分析的論理的方法もこの行に於てのみ眞に具体的眞
實を把握する道に參じ得るのである。つまり事々物々、一動
一行、隨時隨處に如實に自己の身心を舉して一如の活動を現
成することがものごとを眞に會得して行く道である。このこ
とを具体的に實踐的に納得することが觀ると行の一如の境地
を體驗することに外ならない。

更に深く考へると、時は永遠に刻々の今としてあらは
れるものであるから人はこの刻々の今に於て今の意義を
全からしめる爲に不斷の行を続けなければならぬ。こ
の不斷の行は足らざるを知る謙虚な態度で頭を下げて隨
順する境地であり、無邊際無窮に充足する心を起さずま
つしぐらに物のまことに到らんと發奮精進する境地であ
る。従つて自分の參學眼力が高まれば高まる程、自分の
參學眼力の限りしか見てゐないといふ氣持が生じて、限
りなき努力が続けられるのである。

「身心に法はまだ參照せざるには、法すでにたれりとおぼ
ゆ。法もし身心に充足すれば、ひとかたはたらすとおぼゆる
なり。……座中格外、おぼく様子を帶せりといへども、參
學眼力のおよぶばかりを見取會取するなり。……」(正法
眼藏)

かゝる謙虚な態度は道を究盡するものの總てが持つべ
き態度である。先覺者としての自覺に生き、國の子の鍊
成に無限の責任を感じる教師が常に自己の足らざるに鞭
打つて精進し、信頼し切つた師の下で己を虚にしてひた
すらに師の教に身をまかせてゐる兒童が教へるまゝを行
する時、眞理が期せずして自分の身体を通じて生きて働
き出し素直な究盡の態度が長養せられるのである。

中村清二博士はその著『生活科學教育』の中に『少年期の
私と理學の追憶』と題し博士が東京の一小學校に學んでゐた
頃、受持の小野先生につれられて愛宕山の石段の傾斜を實測
した當時の體驗を追憶して『……實に面白かつた嬉しかつた
……小學生の私等の小さい胸に或鼓動を覺えさせられた』と
眞理を把へ得た少年の感激を述べ更に『その頃の私が理學に
趣味を覺えるやうになつたのは確かに當時の先生の指導によ
るもので……小野先生の尊さを今更ながら感ぜずには居られ
ない』と亡き恩師に感謝を捧げてゐられる。

一一、「観る」と子供

観ることが即ち自然把握の道であり、生々不息なる科學す
る心を培ふ所以であるとすれば、國民學校低學年の子供にか
ゝる大きな望が持てるであらうかと一應反省せざるを得ない
であらう。然し初等科一年生と雖も一年生は一年生なりにそ
の特質に應じて自然を把握するものである。否寧ろ自然に親

しみ自然を愛好し自然に驚異の眼をみはる心はこの期の學習
を疎かにしては殆んど不可能であると言つてもよいのであ
る。

然らばこの期の子供は自然把握の働きに於て如何なる特質
傾向を持つものであらうか。

○自然の子

子供は土の子であり、風の子である。蟲や鳥はおろか
花に話しかけたり木に話しかけたり、一片の石にさへも
なんの不自然さもなく話しかけてゐるのである。さうし
て自然を友とし、自然と共に遊んでゐるのである。これ
が子供の本來の姿である。この自分と自分以外のものと
が未だはつきり分れない状態は國民學校低學年迄續いて
ゐる。

自然と一體となつて、自然の中で自然と共に遊び、自
然に驚きと興味を感じ、知らず知らず色々のことを體驗
してゐるのである。たとへ素朴的原始的な體驗であるとし
ても、その鋭い直觀的把握は生々不息の自然の本質に
直接觸れてゐるとも言へるであらう。知性の分離に禍ひ
されて、總てを概念化しなければ満足出来ない理窟つぽ
い人達よりも、より自然の本質に觸れてゐると斷言する
のは果して過言であらうか。

子供の自然をみる目は未だ汚されてゐないのである。

健眼である。否健かに育ち行くべき眼である。
勿論子供は科學的には幼稚であるに違ひなからう。然し科學的に幼稚であると言ふことは物の把握の仕方の方凡てが幼稚であると言ふことにはならない。又この直観によつてなされた把握は科學に反するなどと言ふことは言へないのである。否この知情意未分化の直観的把握こそ科學の母体をなすものであると言つてよいのである。
兎の子の死に涙を流して墓を作り、鉢植の花に水を飲ましてその成長を喜ぶ天人一体の姿、これこそ自然に對する子供の態度の特質と見てよいであらう。知的とか情的とか、意的とか言ふ區別のない接し方観方なのである。このことは又子供の自然への働き方が素朴的であると言はれる所以であらう。

○科學する芽生

自然の觀察の教師用書には第一期(初一・二年)の子供のはたらかかけの特徴を一言で言へば「素朴的」であるといふことに盡きると述べ第二期(初三年)は第一期と第三期(初四五六年)の橋渡しをする中間的のもので、いくらか理知が芽を出すときであるとしてある。
素朴といふことは非科學的といふことではない。科學する芽生があるといふことである。
椿の花を見て「赤いきれいな花だなあ」と感覺的な直

情は進んでそれらの間に存する「すぢみち」や「かゝり」を見出し、それ等を把握し得た喜びを感じる童心、眞理を愛する求知心となり、更に進んでそれらの「ことばり」を推究し新たなものを工夫創造せんとする研究心となつて行くのである。子供なりの観方を育てる自然の觀察の指導は理科指導の基礎的修練以前の指導ともいはるべきものであり、自然に對する眼を開かせる爲のものであるともいへるであらう。

三、観ることの指導

兎舎の設備を見ると、日光、乾濕、通風其の他の關係から選定された位置、或は屋根、壁、舎内のそなへ、上床に至る迄總てが兎をよく育てるといふ一途に歸せしめられてある。勿論觀察に便利である様にとの考慮も充分拂はれてあるけれども、第一の要件は兎をよく育てるといふことに外ならない。この兎がよく育たなければ、この設備は兎舎としての生命を持たないのである。このそなへが如何に兎の自然と一体たり得るかが根本であり、兎がよく育つて行くことそのことが、正しい自然把握の道そのものである。かく設備を實踐性に於てみると、物心一如の具体性が現前するのである。飼育のための飼育であり、設備せんが爲の設備に終つてはならぬ。

そなへは決して自然把握の手段ではない。往々にして、こ

観をなし鉢植の百合の生々した芽生を見ると「元氣な芽が出た」と全体的な把握をし、靜態よりも運動するもの變化するものに、ありふれたものよりも物珍らしいものに興味を持ち、然かもその興味の焦点は移動し易く、或は兎や鯉や鶏も自分達と同じやうに考へて、その生活を判斷するのが子供の物の観方接し方である。かく主体的であり主客未分化的であることが素朴的であるといはれる所以ではなからうか。この素朴的な働きかけが心身の發達と生活環境の展開に即應して漸次精緻となり、思考的となり、何事にも一應のすぢみちが通はなければ承知しなくなつてくるのである。此の事は第一期の終り頃より第二期にかけて漸次素朴的な働きかけの中に理知的な芽生が現れ次第に正しく、くはしく、明らかな働きに進むことによつてうなづかれる事である。即ち第一期に比べて觀察が分析的綜合的となり、物の働きを關聯的にとらへ思考も稍々論理的となり、相當長期にわたる變化をも見守つて行けるやうになる。

然して之等の事は素朴的な働きの中に理知的な働きの傾向が生じてくる事を示すものであつてどこまでも全体的観方を伴つた子供なりの観方である。
かくて自然の現象環境の事物に對して疑問を以て臨み驚異を以て見つめ、その美、その神秘を素直に感ずる純

れを方便視するのは、物の眞實に至らんとする科學の方法ではなく概念化の生んだ弊害である。アヒル小屋が水邊に建てられ、山羊小屋は乾燥した場所が選ばれ、鶏舎には砂が入れられてあるなど、夫々にふさはしい環境と設備が、日々の愛育の行と共に「あるがまゝの姿」を正しく把握する機縁となるのである。

更に観点をかへて考へてみると、眞に之等の設備環境を生かして観ることの徹底を期する爲には、指導の「機縁」「てだて」などのそなへが十分の企畫性を以て具体的に樹立されていなければならぬ。

そなへは心のそなへと物のそなへの一如の現成である。かくてこそ、そなへそのものが自然把握の機縁となり「そなへ即みちびき」の具体性をもち得るのである。
かくの如く設備、環境、指導の機構、手順等のそなへが一体となつてみちびきの場を構成し、自然把握の母体となるのであるが、論述の都合上やむなくこの分つべからざるものを「観ることのそなへ」と「観ることのみちびき」の二面に分けて考察し、観ることの指導のあるべき姿を究明したいと思ふ。

○そなへ

自然の觀察の「そなへ」として先づ取上げられることは、飼育栽培の施設及環境等のことであらう。

施設環境

初一年から初五年までは、通路は別にして草花を作る花壇が、四人組毎に〇、五、一、〇平方米位はなければならぬ。教師用書には、まとまつた一つの花壇の例が示してあるが必ずしも全体があつたやうにまとまつてゐなくとも差支へないであらう。中庭とは建物の傍、井戸端

池端、門脇、溝の縁、土手際等あけて、おいても餘り利用價值のない所が相當見つかるのである。日陰には日陰に育つ草を、湿地には湿地に好む草を栽培するやうにして寸尺の土地をも活かして使ひ、すべての子供が傍観者でなく、自らつくる立場に立てる様に工夫しなくてはならない。みんなが土にまみれて育て、行けば、花壇の中に入つて踏みじつたり、花を無意味にちぎつたりする様な不心得は出来なくなるのである。自然の観察を指導するやうになつてから、樹木を大切にすることをたか、花壇に入るものがなくなつたといふ聲を聞くのは、この事實を物語るものであつて誠にほゝえましいことである。

昌は一學級の受持つ場所を二つに分けて、その一つの方は學級全體協同で經營し、残りの方は四人組毎に受持つたせ、各組のものが仲よく助け合つてなるべく自分達で工夫して作ることにし、學級全體が充分に土に親しみ生命愛育の体験をなし得るやうにしてあるのである。これ

てみると、暫く飼つてゐる間に蛹となり、モンシロテフがでてくる。子供はさういふ變化に驚きと興味を感じ自然をみる眼が、だん／＼開かれて行くのである。

これらの施設環境が學年により、季節により、作物により、作業操作の別により、色々と計画的に運営されて眞に生きて働くとき自然把握の道が行ぜられる。

次にこれらの施設環境を眞の「そなへ」たらしめる「そなへ」について重点的に考察することとする。

てだてよく 如何に設備環境はよく出来てゐてもそれだけでは自然把握の道に參することは出来ない。これを生かすことが考へられねばならぬ。それは理科の指導其のものが科學性を持つことである。

即ち具体的なこの風土・子供・設備・教材等に應じててだて・方法が精密に企画せられ其のてだて・方法が日々の指導に於て指導の場を規制し且實證されつゝ物の生命にふれて行くのである。

物には観る時機がある。其の時機を失すると其の實相を把握するに容易でないばかりでなく時には不可能なところさへ生ずる。芽の伸びる様子を見せる時機、虫の出易い時機、灌水の時機、追肥・中打・土寄せ・棚作り・種とり等観察や手入に特に注意しなくてはならない期間を明瞭にして置いて總べて時機を失しない様にし教員一

は二年生より六年生まで持上ることになつてゐるから、相當廣い面積の土地が必要である。校地内に全部の昌を設けられる程ゆつたりのある學校は珍らしいと思はれるから、學校の實情に應じて工夫しなければならぬ。

飼育に關するものでは先づ兎がある。今迄の理科の行き方では剥製の標本をみせて終つたのであるが、それは生命愛育の念など起りようがない。四年生が飼育して下級生はこれに手傳ひし、時々餌など與へて可愛がつたり、世話したりしてゐる間に自然に兎の習性や形態の特徴にも氣づくやうになるのである。それから鶏の飼育でも、卵をかへして雛を育てるのである。其の外土地の事情、學校の情況に應じて出来るだけ色々のものを飼ふことがよいと思ふ。又學校の庭に池を設けて、鯉、鰻、めだか、金魚、かめ等を飼つておく、池は出来るだけ自然に近い様につくることが望ましい。何時とはなしに蛙や色々の虫などが生活する様になり、子供の眼に觸れるものが豊富になるわけである。

其の他校庭の樹木根や境堤の雜草等も、自然把握の道に參する尊い存在であることを忘れてはならない。

尚飼育箱、水槽等をそなへて置いて野原などでとつた虫を飼つて見たり、おたまじやくしを育てたりすること工夫させねばならぬ。畑の葉にゐた青虫を飼育しとなつてよく育つ様に努めねばならない。

殊に継続的な觀察を必要とするものは野生のまゝを觀る時も或は飼育栽培して觀る時でもあらかじめ十分の準備を整へ指導の機をあやまらぬ様にすべきである。理科の指導は其の日になつて用意したのでは間に合はない事が多い。種や苗などの準備は前年からして置かなければならないものさへもある。

昌には各學級いろ／＼の作物をつくることになつてゐるが次につくる作物まで考慮に入れて置かねば不都合なことが起る場合が多い。例へば三年の秋に昌全部に麥を蒔いて置くと四年の春じやがいもは植ゑられないし、普通の大根はじやがいものあとへは作れるがさつまいものあとへは作れないのである。

全校 次は全校一体となつてはたらいで行く様に仕向けることである。

一年に入ると間もなく記念の木を植ゑるのであるが一年生の記念の木であるから一年生だけで世話すればよいといふ氣持でなく全校教員一体となつてこの木を育て行く態度を作ることが肝要である。従つて一年生に鋏を使はせることは困難であるから上級生の手で準備してやり植付後の灌水その他の世話も相當手傳つてやるようにするのである。その他草花やヘチマやタウモロコシな

どを作るといふやうにいろ／＼仕事をさせるのであるが低學年には手に餘る仕事が多いから高學年が苗を仕立ててやつたり畠を打ち起してやつたりして世話をするのである。又或場合には低學年の子供が高學年の受持つてゐる畠の草や虫をとつてやつたり兎や鶏の餌をとつて來てやるやうなこともあるのである。

かく各の分を守つて縦横に協同し共同生活の体験を積み生物愛育の行にいそむ様に仕向けねばならぬ。

低學年に於ては文章による記録が困難であるから帖面のみの記録に捉はれず物による記録をさせるとか或は圖書工作等と連絡して具体的な記録を残す様に計畫し、絶へず其の記録を活かすことに努力しなければならぬ。特に継続的觀察を必要とするものは、その記録の方法を工夫することによつて觀察を深くし根氣よく世話する心を養ひ自然から直接學ぶ態度を培ひ得るのである。更に一年中の子供の遊び、郷土行事、家事等の内容の變遷に注意しこれを具体的に調査して子供の生活曆を作り子供の具体に即して指導が出来るやうに備へる事は極め必要であり且効果的である。

かきとめる

自然に依り自然に歸入せんとする自然の觀察指導の現實の場は『觀ること』を機縁とする教兒一体の体験の場である。こ

〇みちびき

子供はよく木の葉や草を集めてまゝごとをしてゐる。箸には松葉を皿には椎の葉を、お菓子には草花や木の實を使ふことに氣づき或は教へられて摘んだり採ったりしてゐる。お客の往來が始まると御馳走の不足感を覺えて、あれがよいこれがよいと考へ乍ら更に色々なものを集めて歩くものである。かうして遊んでゐる間にまゝごとに使つた草木の花や實の香りや色や形や手觸などがそれとなく印象づけられるのである。

子供の遊びの生活の中にも見ることが出来る。

かく興味に動かされ必要に迫られて色々はたらくことは誰でも経験するところであるが、子供に對して大人の感ずる様な必要をそのまま感じさせるといふのでなく、子供なりの遊びの中で興味を伴ひつゝ興る必要感を起させることが大切な指導の條件となるのである。

このやうに自然の中で遊ぶ子供の興味に出發して思ふまゝに遊ばせながらその遊びによつて受ける自然な感動を、極めて自然な方法で氣長に伸ばしてやるといふ所に自然の觀察の第一歩があるのではなからうか。

従つて大人の科學的知識の様に冷靜な理智的方面だけを問題にするのではなくて、知情意一体としての子供な

の全體的な場を反省回顧するとき幾つかの方法上の據点が同心的な波動を以て認められるのである。これを指導の面より方法的に考察すると何處迄も子供の特性に立脚して直接ものごとにあたらせ、興味と必要とを感じて進んではたらきかける様に仕向けることが第一であり、その爲には子供の遊びを重視して自然なとらはれない態度に還らせると共に『しつけ』を重んじ秩序正しく行動する様に訓練し、常に身心を舉げて工夫する様に導かねばならぬ。

いふまでもなく之等のことは何れも單獨に用ひられる方法態度ではなく皆關聯的に一体となつて働いて行つて始めて眞のみちびきの道となり得るのである。次に之等のみちびきの道がよく觀ることの具体的なはたらきに如何に參じてゐるかを端的に述べ今日の實踐に備へることにする。

興味と必要

喜んで學習するといふ自然への魅力は、子供自身が感ずる『必要』と『興味』から生れるのである。『必要』と『興味』によつて我を忘れて自然の境に入り自然の眞實に觸れ天地の化育創造に參する喜びも感ずるのである。この必要を感じさせ興味を起させるものは、おもしろい、めづらしい、おかしいと云ふやうな氣持がきつかけとなつて働くところの『ありのまま』をつきとめやうとする心』と『かはいさうだ』『立派に育て、やりたい、立派に仕上げたい』などと云ふ心があるとなつて働く『ものを育て作る心』とである。これは

りの働きを伸ばすのである。花壇を見に行つた子供は靜的な花よりもそこへ飛んで來てゐる蟲により多く面白味を覺え、花であつても特殊な色のものや形の特に大きいものか目立つて小さいものか氣を引かれ數少い方よりも數多い方に心を向けたがるのである。かく色や形の著しさに目を奪はれ動くものに氣を取られるといふ事は日常よく経験することであるが、このありふれた事實が子供の科學する心を育てる上には大切な原理となるのである。

この原理に立つて指導してこそ子供が自ら見考へ抜つて行かうといふ氣持を愈々強くし、且それを正しい方へ伸ばして行く事が出来るのである。然し乍ら『自然の子』の節で述べた様に子供の興味はその焦点が移動し易く同一事象に長く注意を留め得ないのである。例へば朝顔の花が咲き初めた頃の子供の喜びは全く表現のしようもない程であり、花の色や大きさに興味を惹かれて關心の中心となつてゐるのであるが花の色も出揃ひ大きさも略々見通しがつくと何時の間にか朝顔への興味はさめて朝顔を見る者はゐなくなるのである。

かかる場合更に色別の數しらべや明日又は明後日咲く花の數や色のあてつこや花の大きさの比較等を行うことに氣づかせて算數等へ發展し花のしぼんでゐるのを見せ

たり實の中に種子が並んでゐる様子をしらべさせたりすることによつて興味と必要を起させつゝ指導を深めることが大切である。

遊びに

自然を観るといふことの眞義は観るものなくして我を忘れて観るといふことにある。つまり自然と一体となり自然の中に於て自然を友とし自然と語ることである。子供に於てはこの姿は遊びとして現れる。

自然の觀察に於て草花を作ることも、魚や蟲を捕へることも、簡単なおもちゃを作ることも子供にとつては温い教師の手に導かれた何よりも楽しい遊びなのである。野原に連れて行かれた子供はきれいな花を見つけると花束にしたり首飾りを作つて首にかけたりして遊ぶ。又蝶を追ひ小鳥の聲に耳を傾け時を忘れて自然の中で遊ぶのである。晩秋の山に一日を遊び心ゆくまで秋の氣分を味ひながら好きな木の葉を集めて歸つた子供は押葉にしてあるその美しい紅葉黄葉を使つて模様作りをするのである。「とてもきれいな葉がたくさん揃ひましたね。さあこの葉をきれいな葉がたくさん揃ひましたね。さあか」といふ教師の注意深いみちびきの言葉や、教師の作つた美しい模様の数枚によつて興味を強く感じさせられ創作意慾に燃え立つた子供は必要な注意が終ると葉な

らべに一心になるのである。全く一心不乱である。一時は私語する者一人もゐない程の眞剣な没我の境が現前する。頭をかしげるもの、につこりほゝえむ者、膝を打つて喜ぶ者全く夢中である。此の時の子供にとつては自分もなく友人もなくあるものはたゞ葉並べだけである。最も楽しい時間なのである。興味にみだされた遊びである。「うーむ、これはきれいなのが出来るぞ」「この葉を此處に置くとつとよいなあ」等と子供と同じ楽しみで浸つてゐる教師の心からの喜びの聲は私の心の聲として響き一層の興味を感じ工夫心をかりたてずにはゐないのである。こんな時神經質になることは最もいまいむべきである。つまらない干渉は子供を生かす道ではない。しやぼん玉を作つて遊ぶ時には一生懸命しやぼん玉を作つて遊ばせればよいのである。然しこの一生懸命遊ばせるといふことはたゞ遊ばせるといふのではない。よく遊ばせるのであり、遊びの中に工夫考案の態度や物事をみきはめる科學的態度を培つて行くのである。

工夫してこしらへた風車『初三』をもつて運動場で遊ばせるでもいろ／＼暗示や手引を與へてその遊び方を指導しなければならぬ。風を正面から當てさせたり、裏面からあてさせたりして其の廻り具合の違ふこととはねの捻れ方との關係を見させたり風の向きに對して風車をいろ／＼の向きに置いて

みたり、ゆつくり歩いたり速く走つたり等して各々の場合の風車の廻る様子に注意させるやうにするのである。かうしてよく遊ぶことを指導することによつて子供は我を忘れて活動し自ら科學する心を体得して行くのである。

即ち遊びの間に興味と必要にかりたてられていろ／＼工夫したり見せ合つたりするそれがそのまま科學的な訓練なのである。

かやうに遊びの中に遊びを見出し子供の力を昂めて行くことは自然の觀察指導上まことに大切な要件であるから子供を自然の中に遊ばせる時には本當に遊ばせるがよい。この本當に遊ぶことが子供にとつては自然把握の行である。

自然な態度

自然の觀察に於ては既成の科學知識を授けて記憶力や模倣力を養ふといふ行き方でなく、子供の自然のままの働きを尊んで思ふ存分活動させその間に自らものを見考へ扱つて行かうといふ氣持を愈々強くし且これを正しい方向へ伸してやらうといふのがねらひであることは既に述べた通りである。

笹舟を作つて流したり落下傘を作つて飛ばせたり笛を作つて吹いたりしや色々と工夫を加へ方法を試みて次第に上手な仕方を体得して行くのである。この間に『ものごと』『すぢみち』を子供なりに把握出来眞實なものを追求する心や眞實なるものに隨順する心も養はれ創造の態度も培はれて次

のはたらしきを一層確かにして行くのである。

これは子供の場だけに限つたことでなく我々人類が今日の文化を築いて來た唯一の道であり人間の進歩し得る最も確かな方法である。失敗を繰返してゐる間に失敗の苦しい體驗を得再び同じ失敗を繰返すことを避ける爲に色々の方法を考へ出し之を實際に試してみるのである。かうした生き方は人間らしい精進の生活であるといへよう。

一体原理や法則は始めからあつたものではない、人間の精進の生活の結果得られたものである。この出來上つてゐる概念化された原理法則によつて子供の生活をしばるといふことは子供から人間らしい精進の生活を奪ふことである。

勿論子供に既成の學を眞向からふりかざして授けることが眞に子供を伸ばす所以でないといふことは學を輕視し學を否定する事では絕對にないのである。やがては子供も既に到達された學問を理解し更に一步を進めて行かなければならぬのであるがその素地を培ふ時期に於てはその時期の特性に立脚し眞に創造性に富んだ子供を養成する様に指導方針が樹立せられなければならない。こゝに『學』を授けるのでなく『學をする』事を授ける國民學校の根本的性格がある。

つまり原理法則に束縛されずに常にとらはれない心で常に精進を続けるといふ極めて自然な態度に還ることである。子供はその本性としてこの態度を持つてゐるから

それを損はないやうによく育てることが指導の要諦なのである。

一から十迄干渉して子供の自然な働きを抑へることは目の前の無駄を減らすことには役立つかも知れないが子供を伸ばす道とはならない。子供の働きの中に発展性のあるものを見出しその方向へ一層伸びる様に仕向けるといふ態度が子供を導く者にとつては極めて重要な關心事なのである。

低学年の子供は説明を聞いて理解したり自分のわかたことを言葉で発表したりすることには非常な困難を感じるのである。その子供に眞向から説明をおしつたり発表を強ひたりすることは子供の活動を鈍らすばかりでなく却つて學習を厭ふやうな結果をさへもひきおこすのである。どこ迄も自然の觀察は子供の自然の働きを重んじ行動を通じて理解させそれが行動に現れるやうな心身一体の修練たらしめねばならない。

けし

自然に還れといふことを極端に解釋すると、國民學校で最もやかましくいはれる「しつけ」といふことを全然無視して子供の思ふままにまかせるといふやうにも考へられるのである。然しそれは決して「しつけ」と矛盾するものではないのである。常にとらはれない心で常に精進して行く間に自然にしつけられるので

してこのしつけは體得せられ修練されて行くのである。

要するに國民學校理科の教育は子供の興味ばかりに媚びる野放しの自由教育でもなければ、どこまでも大人のしつけで抑へようとする型はまりの教育でもない。子供を伸び伸びとさせながら自然と共に遊ばせ、おもちやを作らせながら、ものごとの見方考へ方扱ひ方を導きその間にそれらの學習に必要な且國家目的になかつたしつけをつけて行くのである。

更に深く考へると、ものごとを見たり考へたり扱つたりする態度を養ふこと自體が廣い意味でのしつけをつけることになることから、理科の教育はしつけの教育であるとも云へるのである。

工夫

創造することに喜びを感じる心を養ふことは理科指導の積極的な最大の要諦である。しかもこのやうな心は小さな事柄であつても兒童が自ら見出すやうに導き、又工夫考案するやうに仕向けることによつて養はれるのである。發見創造はその場その場の思ひつきで出来るものではない。うますたゆまず努め失敗してはその經驗に省み新たな手順を計畫して工夫考案を重ね、その努力精進の結果生れるのである。草花の苗を移植するにしても、根ほりの使ひ方や、どの苗をどこに植ゑるか、木の工夫、木の葉のうし取りをするにしても木の葉のど

あり、しつけが徹底することによつて眞に自然の態度に還り生々とした知識や技術を體得し得るのである。

落着きがなく不注意な子供をそのままにして置いたり、蕪雜な方言を無關心で聞き流したり、學用品の整頓取扱ひを注意しない様な指導は國民學校の教育ではあり得ない。又たとへ子供の自然の性質とはいつても「やたらに食べたがる」とか「けんくわをしたがる」とか「何でも自分で獨占したがる」とかいふ場合に、凡て大人が遠慮して子供の自然の動きからばかり出直さなければならぬといふ必要は絶対にないのである。まして國民道徳に至つては至上命令であり絶対隨順である。

しつけはどこまでも「行動を通して行動にまで」を本體として行はれなければならない。自然の觀察に於て最も重視すべきしつけは「秩序正しい行動」をするやうに訓練することである。このしつけは國民學校教育で企圖されてゐる國民としての正しいしつけの一つであり、必ずしも理科のみでその成果を期せねばならないといふわけではないが、理科の特性からして特に理科教育に於ては必要不可欠のものである。ものごとを正しく見るとかものごとの原因をつきとめようとか或は機械を安全に動かさうとかいふやうな場合にもこの秩序正しく行動するしつけがなければ満足な結果は得られないのである。それと同時に立場を變へて考へるとかゝる理科の學習を通

ちらを上にしてうつすか、クレヨンはどう持つてどんなにぬるか等、一つ一つの仕事をよく考へて行はせ、子供自らが修練せられるのである。即ちよく見、よく考へ、よく扱ひつゝ一法に通じ一行を證して努力精進する時、分析的論理的考へ方と直覺的全體的考へ方が相互補足的に働いて工夫創造の態度を培つて行くのである。自然の觀察には工作的な教材も相當多く採擇されてゐるが、其の直接目標は物を作ることに喜びをもたせ一層うまく作るやう工夫させ併せて手先を器用にし、且次第に器具の使用に慣れさせるにあると示されてゐる。結果を急いでゆつくり考へる余裕を與へなかつたり、理科的な原理を正面に取り出して理解を強ひることは極力避けなければならぬ。

よく工夫させる指導に於てはものごと即した子供なりの疑問がよく生ずるものである。この疑問に對しては慎重に處理しなければならぬ。質問に對して現在の自然科學を根據として、「それはかう云ふわけだ」と安っぽく説明することは、兒童の研究心を枯らしてもふばかりでなく、時によると嘘を教へることになる場合さへある。子供の疑問は子供自身で解決する様に導くことを本體とするがよい。その爲に必要な暗示や手がかりを與

へて色々試みさせることが大切である。子供自らの努力の結果解決を得ることが出来たといふことになる。子供の研究心はいやが上にも旺盛となるのである。然し具体的なものごと直接して起る疑問は教師も即答されない場合が多いのである。これらの疑問については教員一緒になつて研究し解決に努めることが大切である。この眞摯な教師の研究態度に觸れて、子供は自ら學び自から考へるといふことの意味を直覺し体得して行くのである。

自然の觀察指導の方法

揖 宿 郡

目次

- 序
- 第一章 兒童性と自然の觀察
 - 一、第一期に就いて
 - 二、第二期に就いて
- 第二章 對象と施設環境
 - 一、對 象
 - 二、施設・環境
- 第三章 指導の方法
 - 一、直接させるとは
 - 二、直接させる方法
 - 三、處 理
 - 四、觀察指導例
- 結 語

序

へちまの實を大事さうに抱いて池の周りに集つた子供たちのにぎやかな聲に池の鯉や鮒が驚いて岩かげにかく

れ、めだかがばつと散つた。子供たちは今大小のへちまの實を思ひ／＼に池に投げ込んだり浮べたりして興じてゐる。

「やあ魚形水雷だ」「やあぶか／＼鯨だ」

「おい、それあこつちだ、僕たちの組のだ」

「それこつちからやるぞ。」

「うまい／＼當つたぞ、それどかあんだ」

「やあ親舟の後から子舟だ」

「あれ、親子つれだつて進んで行かあ」

となか／＼にぎやかだ。今にも池の中に飛び込みかねまい勢である。

これは今初等科二年の兒童たちが一學期の始めから育て、來たへちまの水とりを終へ、とり入れた實を水に浸して置くために、學校の池の周りに集つて遊んで居る一場面である。こゝに自然の觀察指導の素地が求め得らるゝものではないからうか。斯くて國家の要請に應じかゝる兒童の心身の展開に即して指導するには、先づ育てさせること（飼育・栽培）等に依り、自然に直接させること

した。
等言ふのがある。

主客未分化

→この子供たちの發表に依つて明らかに見得ることは第一期の兒童が心理的に見て主観と客観とが未分化の時代であると言ふことで即ち草木花鳥虫魚すべて自分と同じやうなものだと見、蟻やとんぼをほんとうに自分達と同じやうに「仲良く遊ぶ」とか「うれしそうに」とか「汗びしょになつて引いて行く」とか「おにごつこをしてゐる」とか等のやうに見る時期なのである。

智情意未分化

→更にこの期の兒童の特性として知情意未分化でしかも知よりも情意の働きの強いことも同時に察知されることである。例へば
「蟻が汗びしょになつて運んで行きます。私は感心と思ひます。」とか「とんぼがうれしそうに飛んで行く」とか等の如く知的よりも情意的に見ることが多いのである。

第一章 兒童性と自然の觀察

一、第一期に就て

私どもの研究「校庭の虫」(初二)學習中の子供達の發表の中に

- 蟻が仲良く遊んでゐました。
- とんぼが二人でうれしそうに飛んでゐました。
- 蟻がハンメ(食物)を力一ぱいに運んで行きます。蟻は汗びしょになつてゐました私は蟻は感心だと思ひました。
- 蟻が六びきで草の間にかくれたりしておにごつこをしてゐました。

自己中心性

しかもその生活中には自己中心的な行動が度々見られる。「めづらしい虫を見つけたら四人で一緒に語り合ひながら見なさい」と四人で協同して研究するやうに命じて我先に走り出して行き、一人でさがして一人で興じてゐる子供が多い。

斯様に共同性に乏しく自己中心的事であることもこの期兒童の特性である。

然してこれ等の特性は同時に一体として現はれることが普通であることも第一期兒童の特性と言へやう。かゝる特性を有する第一期兒童の自然の觀察の指導が如何にあるべきか、それが如何なる重要性を有するかについては教師用書自然科の体系の中に「兒童身邊の自然物自然現象及製作物に關する素朴な觀察操作をさせ簡単な工作を課し自然に對する眼を開かせると共に處理方法の初歩を指導する」とあるやうに實に此の第一期は理科指導の第一段階であり、自然に親しみ自然を愛好し自然に驚異の眼をみはる心を養ひ自然のありのままの姿を素直につかむと言ふやうな生活態度の修練は主客の未分化なこの時期知情意一体として對象に働きかける此の時期に於ける指導が極めて重要な意義をもつものである。

生命愛育の念と言ひ生活を秩序正しく科學的に處理する態といひ、理知の働きの未だ充分現はれない此の時期を逸してはほんとうに身につけることは容易ではない。更に兒童は、就學以前から自然に興味を有ち自然の中で自然と共に遊び自然に驚異を感じ自然から色々のことを學びながら経験を積み生命を發展させてゐる。これ等兒童の生活の指導を中斷することなき様こゝに自然の觀察の指導がなされねばならない。又機械器具の利用されてゐる現代に生活してゐる兒童はこれ等に接して経験を重ねね殊に舟や車や飛行機等に興味を有ち色々の玩具をもて遊び、これ等から色々なことも學び工夫する態度も養はれて來てゐるのである。この様な發達過程をその過程に順應して指導することはやはりかゝる兒童の自然物や製作物に對する興味と關心とを中斷することなく將來の發展を期する上に當然なされねばならぬことである。更に又所謂科學的精神修練の基礎とも言ふべき全体的直覺的把握の能力は、物の觀察に當つて感覺的直覺を根基とし全体的直覺的な把握をする所の此の第一期の兒童に於てその正しい萌芽を培つて置かねば理知が發達し物事を分析的部分的に觀察するやうになつてからでは到底身につけることは難かしいのである。

二、第二期に就いて

未分化から分化への過渡期にあるのがこの期の児童の特性であつて次第に物事を客観的に見るやうになり理知的なひらめきが現はれて来る。

帆かけ舟の學習中出来上つた舟を池に浮べて走らせてゐる時である。「かちを廻して走らせてごらん」と言ふと無難作にかちを廻して單に舟が廻るのを面白がつてゐる中に、或組では「右に行かせるのだからかう廻せば良い」と相談してかちを廻して浮かべてゐる。そこにはすでに關聯的に考察するしかたの萌芽が見られる。又いくらか理に依つて納得するやうになる。昌へ連れて行つて他の學級の昌を荒した時である。「ふみにじられて可愛想に花が泣いてゐるよ」と言つたのはもう納得してくれない子供を幾人か見かける。自分達の昌をふみ荒されたら君たちはどう思ふか。そして今みんなから荒された二年生はどう思ふだらうと言ふと「ほんた」とうなづいてくれる。即ちいくらか理に依つて納得するやうになる。

かゝる特性を有つこの第二期の指導は次第に組織的な學習に向かはせなくてはならないことは教師用書にも述べられてある通り

觀察は繼續觀察、比較觀察へと指導し、考察も聯關的な考察のしかたをするやうに仕向け、

飼育の如きも組織的本格的になつて來なければならぬ。初三「學校園の出」の學習中、

子供たちは今昌の手入れをしながら虫をさがしてゐる。いもの葉にきれいな「しやくとり虫」を見つけて、見「先生又いつかのやうに飼つて置ませう。又てふが出るかも知れませんか、何に入れたら良いでせうか。」師「どうして飼つたら良いか周りを良く調べなさい。食べ物はどうしたら良いかも考へて。」と言ふと、芋の葉が食べ物だから芋の葉が枯れぬ様水にさすこと、それをそのまゝ飼育箱に入れて置くことと言ふことに落ちつく。斯やうに住む場所、食べ物等を研究しつゝ飼育すると言ふやうになつて行かねばならないし、其の研究も自分で問題を作つて調べて行くといふやうな學習に向かはせるやうにすべきで、即ち此の第二期は「理科指導の第二段階」であつて、組織的な指導を行ふべき第三期へ移る過渡期として第一期の分化發展をはかるのを其の特殊性とする。

第二章 對象と施設環境

さて斯く第二期に於ける児童性を見、この児童性の上立つて指導さるべき自然の觀察が何をその考察處理の對象に選ぶべきが、それが如何に施設さるべきかにつ

月	四			五			上
	上	中	下	上	中	下	
初	庭の動物 春の野 庭の花 記念の木 学校の庭	庭の動物 春の野 庭の花 記念の木	庭の動物 春の野 庭の花 記念の木	草花植え 麥と虫とり 草花とり 春の種子まき	草花植え 麥と虫とり 草花とり 春の種子まき	草花植え 麥と虫とり 草花とり 春の種子まき	木の葉遊び
飼育栽培	→ 記念の木	→ 記念の木	→ 記念の木	→ あさがほ → 虫のせわ	→ あさがほ → 虫のせわ	→ あさがほ → 虫のせわ	→ ホーキ草 → 百日花
初	季節だより 春の種子まき	春の野	春の野	むし齒 五月の昌	むし齒 五月の昌	むし齒 五月の昌	私たちの研究
飼育栽培	→ へちまとうもろこし	→ へちまとうもろこし	→ へちまとうもろこし	→ 水仙 → 球根上げ → 水花さふらん	→ 水仙 → 球根上げ → 水花さふらん	→ 水仙 → 球根上げ → 水花さふらん	→ 日草金 → れんげ
初	春の種子まき めだかすくひ	植付け(1) めだかすくひ	植付け(1) めだかすくひ	水栽培 さし木(2)	水栽培 さし木(2)	水栽培 さし木(2)	梅と桃
飼育栽培	→ かぼちや → めだか → おたね	→ かぼちや → めだか → おたね	→ かぼちや → めだか → おたね	→ きく → えぞ菊つくば → さといも	→ きく → えぞ菊つくば → さといも	→ きく → えぞ菊つくば → さといも	→ 柳 → 其の
苗床	初一 (ホーキ草、ホーセン花、百日草) 初二 (千日草、金レン花、松葉ボタン) 初三 (ネギ、エゾギク、ツクパネ朝顔、金魚草、美女櫻)	初一 (ホーキ草、ホーセン花、百日草) 初二 (千日草、金レン花、松葉ボタン) 初三 (ネギ、エゾギク、ツクパネ朝顔、金魚草、美女櫻)	初一 (ホーキ草、ホーセン花、百日草) 初二 (千日草、金レン花、松葉ボタン) 初三 (ネギ、エゾギク、ツクパネ朝顔、金魚草、美女櫻)	初一 (ホーキ草、ホーセン花、百日草) 初二 (千日草、金レン花、松葉ボタン) 初三 (ネギ、エゾギク、ツクパネ朝顔、金魚草、美女櫻)	初一 (ホーキ草、ホーセン花、百日草) 初二 (千日草、金レン花、松葉ボタン) 初三 (ネギ、エゾギク、ツクパネ朝顔、金魚草、美女櫻)	初一 (ホーキ草、ホーセン花、百日草) 初二 (千日草、金レン花、松葉ボタン) 初三 (ネギ、エゾギク、ツクパネ朝顔、金魚草、美女櫻)	初一 (ホーキ草、ホーセン花、百日草) 初二 (千日草、金レン花、松葉ボタン) 初三 (ネギ、エゾギク、ツクパネ朝顔、金魚草、美女櫻)

自然の觀察指導細目(附、飼育栽培層)(表I)

自然の観察指導細目(附、飼育栽培暦)(表I)

月	四			五			六			七	八	九			一〇			一一			一二			一			二			三						
	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上中下	上中下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下				
初	庭の動物	庭の野	庭の宿	庭の動物	庭の野	庭の宿	庭の動物	庭の野	庭の宿	庭の動物	庭の野	庭の宿	庭の動物	庭の野	庭の宿	庭の動物	庭の野	庭の宿	庭の動物	庭の野	庭の宿	庭の動物	庭の野	庭の宿	庭の動物	庭の野	庭の宿	庭の動物	庭の野	庭の宿	庭の動物	庭の野	庭の宿			
初	学校の庭	記念の木	学校の庭	学校の庭	記念の木	学校の庭	学校の庭	記念の木	学校の庭	学校の庭	記念の木	学校の庭	学校の庭	記念の木	学校の庭	学校の庭	記念の木	学校の庭	学校の庭	記念の木	学校の庭	学校の庭	記念の木	学校の庭	学校の庭	記念の木	学校の庭	学校の庭	記念の木	学校の庭	学校の庭	記念の木	学校の庭			
一	飼育栽培	飼育栽培	飼育栽培	飼育栽培	飼育栽培	飼育栽培	飼育栽培	飼育栽培	飼育栽培	飼育栽培	飼育栽培	飼育栽培	飼育栽培	飼育栽培	飼育栽培	飼育栽培	飼育栽培	飼育栽培	飼育栽培	飼育栽培	飼育栽培	飼育栽培	飼育栽培	飼育栽培	飼育栽培	飼育栽培	飼育栽培	飼育栽培	飼育栽培	飼育栽培	飼育栽培	飼育栽培	飼育栽培			
二	飼育栽培	飼育栽培	飼育栽培	飼育栽培	飼育栽培	飼育栽培	飼育栽培	飼育栽培	飼育栽培	飼育栽培	飼育栽培	飼育栽培	飼育栽培	飼育栽培	飼育栽培	飼育栽培	飼育栽培	飼育栽培	飼育栽培	飼育栽培	飼育栽培	飼育栽培	飼育栽培	飼育栽培	飼育栽培	飼育栽培	飼育栽培	飼育栽培	飼育栽培	飼育栽培	飼育栽培	飼育栽培	飼育栽培			
三	飼育栽培	飼育栽培	飼育栽培	飼育栽培	飼育栽培	飼育栽培	飼育栽培	飼育栽培	飼育栽培	飼育栽培	飼育栽培	飼育栽培	飼育栽培	飼育栽培	飼育栽培	飼育栽培	飼育栽培	飼育栽培	飼育栽培	飼育栽培	飼育栽培	飼育栽培	飼育栽培	飼育栽培	飼育栽培	飼育栽培	飼育栽培	飼育栽培	飼育栽培	飼育栽培	飼育栽培	飼育栽培	飼育栽培			
苗床	初一(ホーキ草、ホーセン花、百日草) 初二(千日草、金レン花、松葉ホクタン) 初三(ネギ、エゾギク、ツクバネ朝顔、金魚草、美女櫻)												初二(ヒナギク、金セン花、三色スミレ)												(さつまいも)											

に述べることにする。

一、對 象

第一期に於ける兒童の考察處理の對象としては「自然界の事物現象並びに製作物」となつてゐるのであるが、この期の兒童の環境は極めて狭く兒童の身邊の外にはあまり出でず兒童の身邊にあるものでも、此の頃の兒童の生活の中心が遊びの世界にあることを思ふと、

第一それが子供の興味を引くものであるか。

第二にそれが彼等の遊びにとつて必要を感じるものであるか。

若しくはそれが是非兒童に考察させて置く必要があるものであるかが選ばれなくてはならぬ、但し第一期から第二期に移るに従つて兒童の生活環境の擴大、心意の發達等に應じて對象選擇の範圍も擴げられなくてはなるまい。教師用書に「自然の觀察は特に實地についての指導を本体としなくてはならないが自然の状態は土地に依つて著しく異なる故教材を一定することは非常に困難である、そこで本書では東京近郊を基準として教材を選定しその指導の要領を記載することとした故に地方に依つて教材を適當に取捨し補充し或は順序を更へて一層兒童に適切ならしめるやうに力めなくてはならない。尙指導例は要領の趣旨を具体化する指導の要領を例示したもの

である。従つて指導例をそのまま適用する必要はなくその中の一部分を省略するとか、順序を變へるとか他の物で置換へるとかしても何等差支くない云々」と示されてある通り、實際には要領の趣旨に基づき指導例を參考にして各學校に於いて指導の細目を作り指導の細案を立てなくてはならない。次に指導の細目（飼育栽培曆を含む）を例示（表1）するが左の細目を作るに當り特に考慮せる点を述べて置くことにする。

一、時期を本郡の季節に合わせて變更したこと

例（1）初等科一年「麥蟲と虫とり」

これは六月中旬教材として示されてあるが本縣では五月中旬から麥は收穫期に這入るので本細目では五月中旬の教材とした。

例（2）初等科二年「春の種子蒔き」

これは四月下旬教材として提示されてあるが本郡に於ける「へちま」「とうもろこし」の播種時は三月末から四月初であるので本細目では四月の一番初めの教材とした。

例（3）初等科三年「春の種子蒔き」

かぼちやの種子蒔きは四月下旬では本郡としてはおそ過ぎるので、これも同じく四月上旬の教材とした。

例（4）「芋植ゑ」これは初等科四年の四月教材である

が、「じゃがいも」の植付けは二月下旬から三月中旬が、「さつまいもの苗床」は三月中旬から下旬が本縣に於ける最適期であるので初等科三年の終りにもつて来た等々

二、教材の單元を季節に応じて分割したこと

例(1)初等科二年「秋の種子まき」中十月中旬教材を(1)えんどう(2)そらまめ、の種子まきは十月上旬に(3)草花の苗植をは十一月初旬にと二つに分割した。

(2)初等科三年「秋の種子蒔き」十一月教材は二つに分割して、(1)草花の播種は十月上旬に、(2)麦蒔きは十一月にした等々

三、土地の状況に依り教材を變更したこと

例 初等科三年「水栽培」やつがしら、くわむ等の水栽培をさせ根や芽の伸びて行く様子を目のあたり見せるのであるが、本郡には「くわむ」も「やつがしら」も殆んど見當らないので、これを子供に最も親しみのある「さつまいも」「里芋」に變へた。等々

であるが、尙この細目はこれで完成したものでは勿論なく、毎年々々その實施した結果については記録して置いて次の年の細目を考慮して行くやうにする。

二、施設環境

第一項に於いては考察處理の對象として指導細目を中心に論述したのであるが、次にそれが如何なる施設環境の下に指導されるべきかについて述べたいと思ふ。先づ「自然に親しみ自然より直接に學ぶ態度を養ふ」に必要な施設としての現況とそれが活用の實際を例示する。

一、學級施設

1、水生動物飼育栽培用水槽
硝子製角形を理想とするも經濟上大部分は圓形(直徑一尺一八寸)及代用として生花用水盤を利用せる學級もあり。

2、昆虫飼育箱「教師製作」

3、溫度計(アルコール着色)

氣溫表、天氣調等繼續觀測記錄するやう施設

4、根掘り(兒童一個宛)

竹製、高學年の工作で作製せるもの、

5、花鉢(各組毎に一箇)

二、動物飼育施設

施設	管理	内容	活用
池	初三	金魚、鯉、鮒、メダカ、石ガメ、アメンボウ等	當番制に依り給餌及掃除

兎小舎	初四	子から育てたもイ、ロ、ハ各二箱宛親及雄兎計六匹	當番制に依り給餌及掃除飼育日誌
小鳥舎	初五	十姉妹	當番制により給餌及給水飼育日誌
鶏舎	高一	親八羽	全前
豚舎	高二	子から育てた親豚一頭	全前(部業農)

(場所を考慮して一三三年兒童の觀察に便なるやう)

三、花壇

講堂の周りを共同花壇として一學級約十平方米、初一、二は高二と、初三は高一と、共同、初四、五、六は各學年單獨に。

學年	教材	時期	栽培植物内容
初一(高二)	秋の種子蒔	九月下	はなびし草、はなさふらん、水仙等の直蒔
初二	春の草花植	五月下	千日草、金蓮花、松葉ぼたん等の移植
初二(高二)	秋の種子蒔	十一月	色すみれ、ひな菊、三色花等の移植

初三	春の種子蒔	五月中	えぞ菊、つくばね朝顔
(高一)	秋の草花植	十月上	金魚草、美女櫻

(初四、五、六畧す)

初一、「教室の窓の前、約十平方米」

初二「初六」「一學級、〇、五アール」

六年を卒るまで繼續担当の計畫

學年	教材	時期	栽培内容
初一(高二)	春の種子蒔	五月上	「朝顔」を教室側に
初二	春の草花植	五月下	ホーキ草、ホーセンク
初二	秋の草花植	十月上	ワ、百日草の苗植
初三	春の種子蒔	四月上	來年四月末までに終る草花を高二兒童に
初三	秋の種子蒔	十月上	へちま、とうもろこしの播種
初四、五、六(畧す)	春の種子蒔	四月上	えんどう、そらまめの種子蒔き
初四、五、六(畧す)	春の種子蒔	四月上	かぼちやの種子蒔
初四、五、六(畧す)	春の種子蒔	四月上	ねぎの植付
初四、五、六(畧す)	春の種子蒔	四月上	麦蒔き
初四、五、六(畧す)	春の種子蒔	四月上	じゃがいもの植付
初四、五、六(畧す)	春の種子蒔	四月上	さつまいもの苗床

五、藥草園(約〇、五アール)
サフラン、ゲンノシヨウコ、ケシ、ヘニバナ、除虫
菊、リンダウ、カラスウリ

六、校外環境調査

次に校外環境の調査活用について述べて見よう。教師用書に「本書では學校附近に田畠森林野原山川等があり動物も普通のもので一通りはあることを想定してゐる。地方に依つてはかやいな事情に相當な特徴があるから實狀に應じて指導する外はない。その場合には學校附近についてその景觀動植物の分布狀況等をよく調査して置いて實地指導に當らなくてはならない。さうして自然を愛する氣持で指導し自然を荒さないやう注意を要する云々」とこの趣旨をより良く生かして指導を進めて行くためにはどうしても「郷土の自然の觀察地圖」といふやうなものを用意して計畫的系統的な校外指導が出来るやうにせねばならない。次の地圖はその一例を示したものであるが防諜の關係等で充分表はし得なかつたことを遺憾とするものである。これも細目と同じく年々改められ更新されて行くべきであらう。(表一)

第三章 指導の方法

第一章に於て第一二期の兒童性について論じ第二章に

させること以外にはなく、かの兒童用書の必要を認めないとする自然の觀察教師用書の趣旨もこゝに存するものと思ふ。

『自然の觀察に於ては子供に自然を觀察させるのが目的である。それには自然に親しみ自然より直接に學ぶことが最も大切なことであつて、我々を取巻く自然界が立派な教科書であるとも考へられる。本を通して自然の色々な事を覺えさせる單なる物議りを作つても生き／＼と働く科學的な知識技能を持つた國民を作ることには出来ない。先づ自然の物にぶつかつてその物を正しく見たり正しく考へたり或は適當に扱つて行く能力が出来なければならぬのである。その間に工夫し創造する態度を養つて行かなければ諸外國に劣らぬ日本の科學は生れて來ないのである。云々』(教科書編纂趣旨、岡現次郎先生述)

とあるのも亦同じく自然の觀察指導の方法原理として「自然に直接させる」と言ふことを説明して居られるものと信ずる。

斯く自然に直接させることに依り低學年指導の方法原理たる「興味を起させる」ことゝもなるであらう。斯くして知識も技能も眞に身についたものとなり、従來の理科教育に於てなされた如き教科書の上で文章や繪に依つて詰め込まれた所謂死物の知識技能を興へるとか得させるのではなく、どこまでも自然物自然現象に直接させ

於て對象について考察して來たのであるがこの第三章ではかゝる兒童性を有つ兒童をしてかゝる對象に對して如何なる「はたらきかけ」をなさしむべきか。「これが指導の方法のあるべき姿について考察して見たいと思ふ。先づ指導の方法を表示して見る。

對象たる直接させる。〔自然の中に遊ばせる〕處理
自然に直接させる。〔動植物の飼育栽培〕
簡易なる物の製作〕る

一、直接させるとは

自然の觀察指導の方法原理であり學習の第一段階とも言ふべきは、對象たる自然に直接させることである。即ち自然に對する体當りである。理科が自然のありのままの姿をつかみ、理法を追求し新なるものゝ創造をなすことの修練である以上、それには何としても先づ直接自然の中に遊ぶことに依つて、自然に親しみ、自然を愛好し、自然と和する心が養はれなければならない。然して自然に接して直接自然から學ぶことが積み重ねられることに依り自然界に於ける事物現象の全体的關聯の理會ともなり、更に自然の妙趣も恩恵も感得し得るのである。又自ら植物の栽培に當り、自ら動物の飼育をなし即ち動植物と言ふ自然に對する体當りに依り、生物愛育の念が培はれねばならない。

斯く自然の觀察指導の方法原理は對象たる自然に直接

れを正しくくわしく明らかに見、考へ扱ふことの修練即ち「對象に對するはたらきかけの修練」の過程に於ておのづから獲得され練磨させる程度の知識であり技能でなければならぬのである。

二、直接させる方法

さて然らば直接させる方法は

第一、自然に親しませ自然の中で遊ばせる。

自然に親しませるとは好んで接しさせることで自然の中に生きてゐる喜びを味はせ自然を愛好するに至らせることである。そのためには兒童の本性に従つて自然の中で「自然物を友として遊ばせることである。斯くする中に「自然の中の美しさ面白さ偉大な偽りのないまこと、すぢみち」を見出し無限の妙趣と眞實とに觸れようとする氣持ち態度の萌芽が養はれ即ち「自然に對する眼が開かれる」のである。更に考察の仕方が指導され考察能力の訓練がなされることに依つて考察の初歩が奠けられるのである。

第二、動物の飼育植物の栽培。

對象に對して直接させる第二の方法として、動物を飼育し、植物を栽培することである。自然に親しみ自然より直接に學ぶためには何と言つても先づ自ら動物を飼育して見、植物を栽培して見るのである。自分で飼育し

て見、植物を栽培して見ればその動物にその植物に自然と愛着を感じその形態生態にもおのづから注意をしながらはならない様になり手入れなど進んでやるやうになる。朝顔の種子を蒔く、芽が出る——つるが伸びる——花が咲く——再び種子が出来る。こゝに喜びを感じ、かうして土に對する親しみ、生物愛育の樂しみを感ぜさせると共に繼續觀察の出発点ともする。畠の菜の葉に居た青虫が暫く飼つてゐる間に蛹になりやがてもんしろてふが出て来る。子供はさういふ變化に驚いたり興味を有つたりする。そこに子供ながら考へる力が出来て来よう。さうして自然を見る眼がだん／＼開かれて行くのである。又上級生が飼育してゐる兎に一年生が手傳つて時々餌をやつたり可愛がつたりするやうに仕向ける。さうして學校全体のものが生物愛育の心を持つやうにもなり、かうして世話をしてゐる間に自然にその習性や形態の特徴にも氣付くやうになるのである。

第三、簡易な物の製作をさせる。

直接させる第三の方法として簡單なる玩具の製作をさせるのであるが、主として自然物を材料として最初は簡易に手先で作れるものを課する、而して指導の直接目標は「物を作ることに喜びを持たせ一層うまく作れるやうに工夫させ併せて手先を器用にし、次第に器具の使用に

慣れさせる」のであつて、その物に含まれてゐる理科的な原理を正面に取出してこれが理解を強ひるのではない。唯それが取扱ひを経験させ後日の學習に資するのである。落下傘を作つて投げ上げてはうまく擴がるやう、急に落ちないやうに工夫させ、はねやたこを作つて飛ばせて見れば、うまく廻るやうに工夫し、たこの糸の具合を工夫させる。その間にはねの廻るわけやたこの上るわけに疑問を起すことは望ましいところであつて、それを理解でなしに經驗を通して考へるやうに導いて行き子供が工夫して作ることを奨励するやうにする。斯くすることによって工夫考案の態度が養はれ技能の修練も出来るのである。

三、處理

さて最後にかゝる方法に依つて直接した後の處理の方法について考察して見たい。

- 1、それを飼育栽培すること。
 - 2、それを材料にして簡易なもの、製作をする。
- 結局第二、第三の方法にまで學習は進められなくてはならないことになると思ふ。
- 第二の方法に依る學習後の處理としては、それが生育の様子や手入したこと等をノートや日記に記

録することであるが、初等科一年ではこれは無理でもあらし教師用書にも要求されてゐない。唯その變化の様子を見守る程度で良いのである。そこで初等科二年及三年の實例について述べることにする。

初二

1、栽培の記録を季節だよりに書きとめさせる。

きせつだより 二年1組(八)			
月	日	曜	天気
4	11	土	はれ
4	17	金	はれ
4	20	月	雨
4	23	木	はれ
4	24	金	はれ
6	8	月	はれ

2、生育の様子を繪に表はせる。
 畠のそらまめの芽生えを寫生させる。
 その後も一週間毎に寫生させる。
 暖くなつて元氣よく伸び始めたら高さを知る。
 寫生や記録は季節だよりの資料に保存して置く。

初三

1、オタマジャクシの飼育

「めだかすくひ」に行つて採つて来たおたまじやくしを水鉢に飼つて當番を決め交替で世話をする水草を入れる。糸ミ、ズ其の他の餌を時々やる。世話したことを飼育日誌に書く。
 當番でない者もいつも氣をつけてゐて何か變つたことが起つたらノートに書いたり寫生したりして置く本學年よりノート指導をなす。

五月九日 土曜日 晴天	
午前	午後
世話(世話) どの所に糸ミ、ズをとりに行つた。 話し(話) たくさんとつて来て食べさせた。 食(食) よく食べる。	けさとつて来たのこりを又たべさせてかへつた。
氣(氣) きふよりずるぶん大きくなつてゐる。 太(太) ころや 大(大) たい 小(小) しょう	糸(糸) 糸み、ずを良く食べるのでうれしかつた。 感(感) (感想)
當番	三之組
検査	検査

(表III)

方法原理	方法	教材	處理
(1) 自然の中に遊ばせる	●季節のだより ●春の野 ●五月の畠 ●田植 ●私たちの研究園	野 畠 植 究 園	↓一週間に一度づゝ整理させる ↓國語(綴方)及圖畫へ ↓藝能科習字へ

次に以上論述せる指導の方法原理と方法と處理との關係を初二の教材につき表示することにする。

月日	變化
六月九日	竹を立て、やつた。二葉の外に大きい葉が四枚、小さい葉が一枚
六月十九日(雨)	つるが出て来た。
六月廿三日	もうつるが竹にまきついてゐた。
七月六日	つぼみがついてゐる。

斯く記述することにより観察はいよゝ深められて行くのである。

月日	變化
七月十二日	花が咲いた。
七月十五日	花の下に小さな實がなつてゐる。
七月廿一日	たなをつけてやつた。

(以下畧)

第三の方法に依る學習後の處理として再び第一の方法へ歸りその作つたものを持つて自然の中で遊ばせる。斯くすることに依り更に深く考へさせ工夫させることゝなるのである。

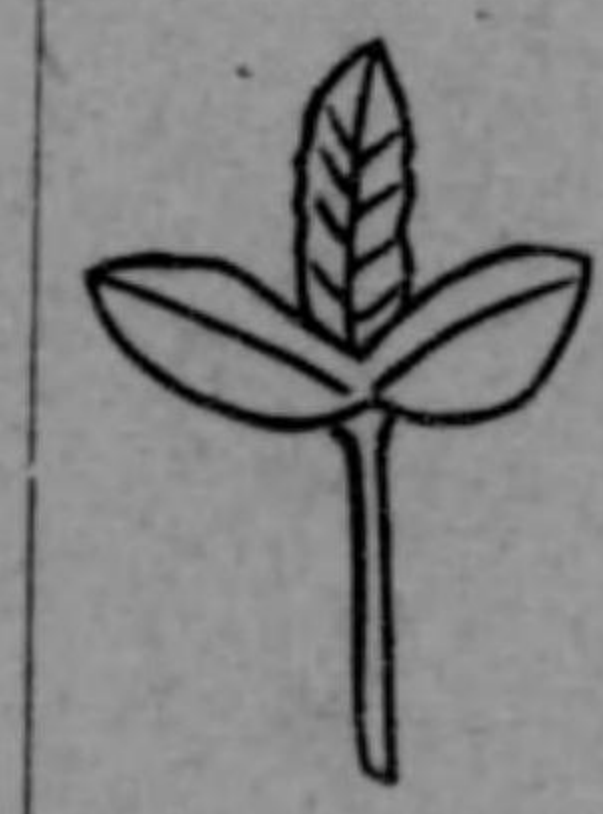
例入記ト一ノ

月日	變化
五月六日(水)	學校の田からオタマシヤクシを取つて来て水鉢に入れた。 長さ一センチ五ミリ位(圖畧)
五月九日(土)	少し細長くなつて魚のやうにおよぐ。糸みゝずをよく食へる。
五月十三日(水)	大へん大きくなつた。 長さ三センチ位
五月十八日(月)	えらがなくなつて後足が見えて来た。(圖畧)
五月十九日(火)	後足が大分大きくなつた。(圖畧)
五月二十五日(月)	前足も見えて来た。(圖畧)

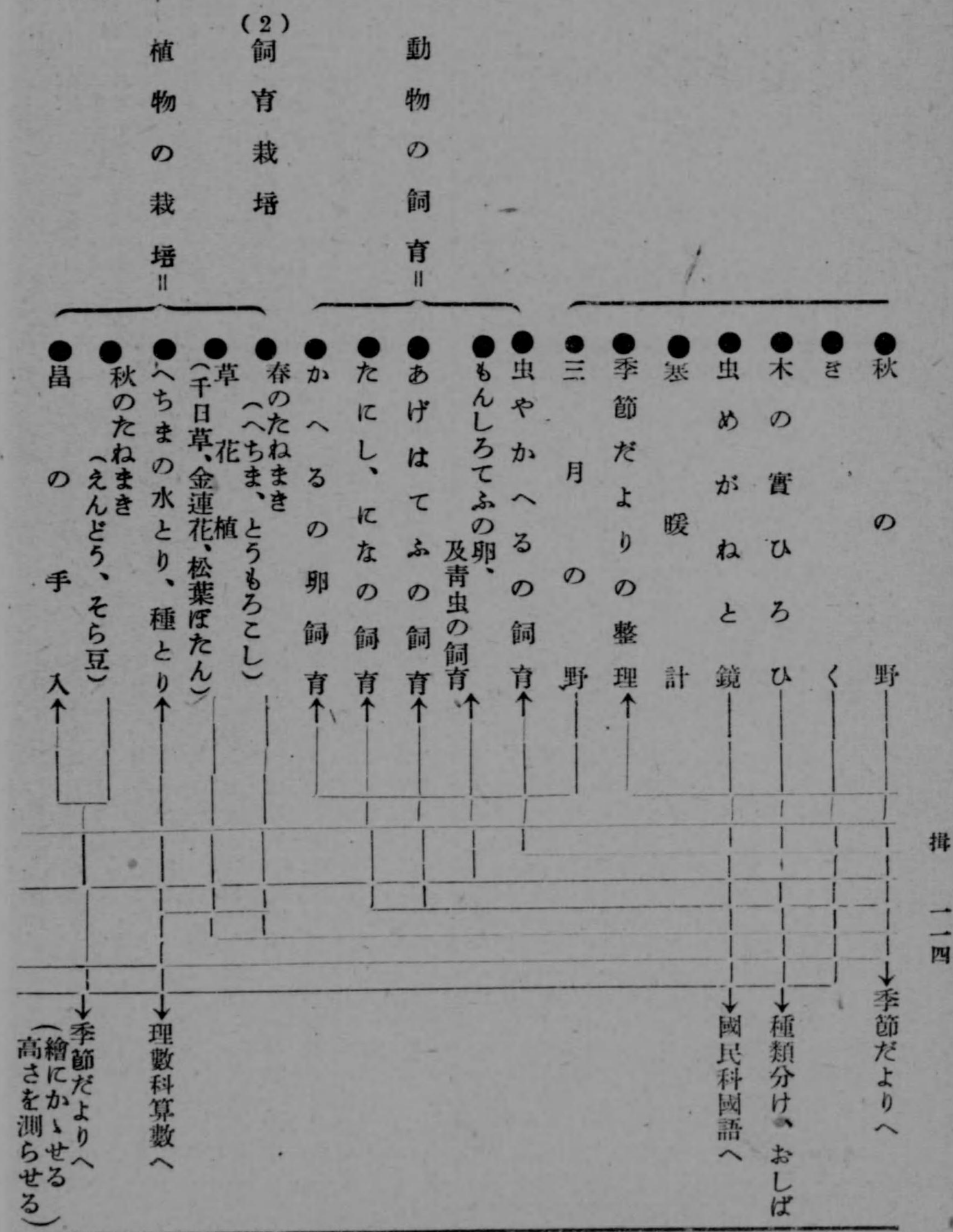
2、「カボチャ」の栽培
種を蒔いてから終るまでかぼちやの一生を繪や簡単な文で記録せる。(例、大岩本)

(大岩本)とこたべらしていつにヤチボカ

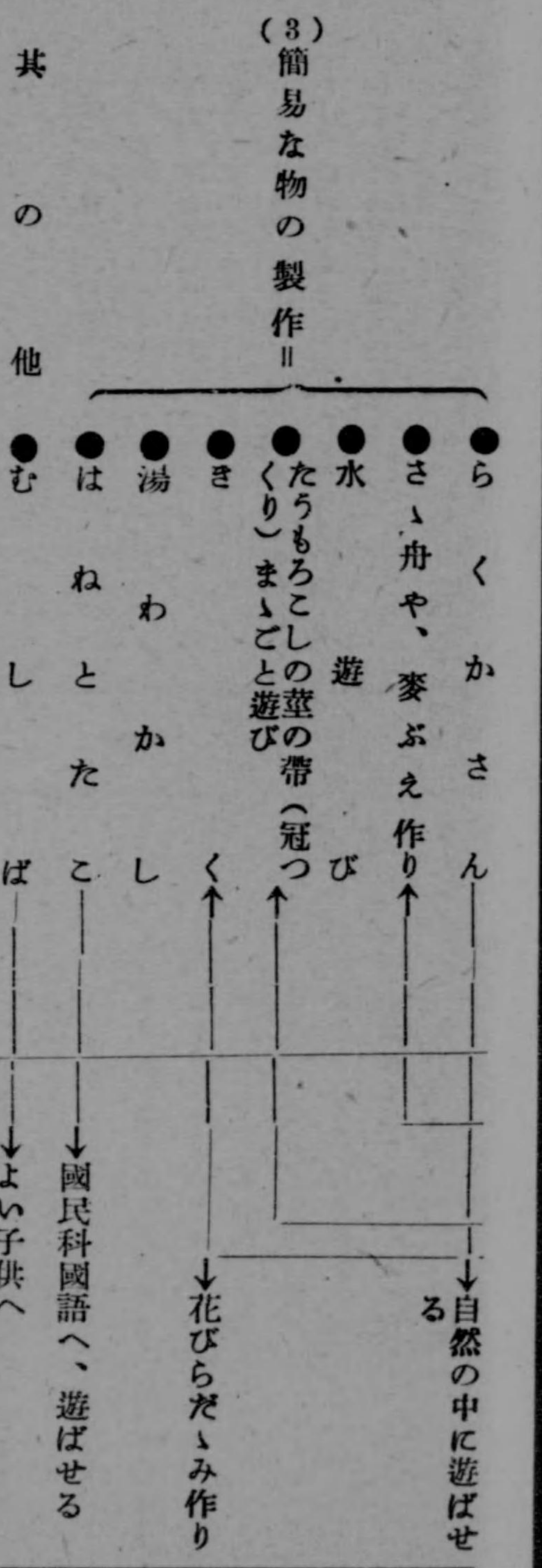
月日	變化
五月十二日(雨)	先生と一しよにはたけにかぼちやのたねをまいた。
五月十五日	毎日水をやる。 だん／＼土がかたくなつた。 まだめは出ない。
五月二十日	めが出た。 ふたばにたねのかはがついてゐる。
五月二十五日	はの長さ三センチ七ミリ
五月二十六日	あたらしいはが一枚出て来た。
五月二十七日	一センチ五ミリ



(る せ さ 接 直 に 然 自)



掛 一一四



用具

- ① 根掘各児童に一個づつ (一三頁参照)
- ② 作業用ざる、四人組毎に一つづつ
- ③ 竹及藁
- ④ 種子を入れる袋 (古状袋) 四人組毎に二枚づつ

實際

場所時間	指導の具体相	指導の態度
教室 5分	今から花壇や畠に行くことをつ げ、道具を用意させ、一組から 順によく並んで先づ花壇へ	○はまりのよい服装

掛 一一五

四、観察指導例

教材 學校園 (初二、九月)
 目的 九月初めの學校園につきその變化の有様を見させたり、手入れを行はせたり、種子を採らせたりして季節の移り變りを印象づけると共に生産愛育の念に培ふ。

準備

- ① 前日學校園を見廻り指導要項を決めて置く。
- ② 千日草、ホウセンタワの種子とり。
- ③ スベリヒユ、チカラシバ等の除草
- ④ ヘチマのつる上げ、トウモロコシの起し方。

(で 島)	
略す	〇後始末をよくする
すつかり整理し終つたら水タン	よい子供。
クの所へつれて行き、	〇仕事をしたら後で
根掘りを洗はせる。	は必ず手足を洗ふ
手足を洗はせる。	ことを忘れぬ子供
整理して授業を終る。	(衛生訓練)

結 語

——自然の観察を子供と共に自ら行する教師——
以上自然の観察指導の方法につき「自然の観察教師用
書の精神に基づき、力めて具体的に立脚し、実践の跡に照

して論述せんと試みたが今こゝにその後を省みて、筆者
の力の遠く及ばざりしことを深く恥づる次第である。
今や日本科学教育振興の聲高く、国防科学に生産科学
に更に南方科学にとその前途いよ／＼多事なる秋に當り
吾等教育者今こそ乾坤一擲皇國の道に殉ずる氣魄もて科
學を子供と共に自ら行する教師でありたいと念願するも
のである。児童と共に自然の中に自然を友として遊び得
る教師、然して子供と共に土にまみれ、或は兎小舎の掃
除をする教師、斯くして自然から直接に學ぶ所の謙讓な
研究的態度、かゝる精神態度こそ實に自然の観察指導の
根底をなすものであり、大東亞建設戰完遂の大業を翼賛
し奉る臣民の道であると信する者である。

自然の観察の指導の方法

出 水 郡

目 次

- 一、精 神
- 二、基 據
- 三、方 法
- 四、施 設

序

「大日本者神國也」とは、我が祖先以来の誇である。
然るに明治初年以來歐米の物質文明に眩惑せられ、動と
もすれば日本の眞の姿を見失ひ世界の一等國に列すると
いふ事を無上の光榮とするが如き人もないでもなかつた
然し「萬邦をして各其の處を得しめる」とは、開闢以來
の大理想であり、建國當時の大精神である。我が國史は
此の大理想實現の歴史であり、歩みである。特に今次の
對米英戰は、其の最も具体的なる顯現に外ならぬ。最早
や今日に於ては歐米追隨は斷じて許されぬ。眞に自己の

力を信じ自己の力を發揮する秋なのだ。即ち大東亞共榮
圈を確立し皇國日本の文化をして世界に光被せしめ、以
て世界新秩序建設に貢献せねばならぬ。換言すれば日本
といふ具体的地盤に即して生成發展する國民文化建設即
高度國防國家建設によつて、八紘爲宇の大理想實現に邁
進せねばならぬのである。茲に學校教育の科學性強化を
徹底せしめねばならぬ所以が存する。
此の秋、自然の観察指導の方法を論ずるに當つて、先
づ從來の科學教育を反省しつゝ、國民學校理科の使命、
及び自然の觀察の意義を考察し、而して第一期第二期の
兒童心身發達段階に於て、理數科理科としての使命を行
じつゝ、皇國民を鍊成せんとする吾人の歩みを述べる事
にする。

一、精 神

1、理數科教育

もと／＼科學といふものは、吾々の日常生活に於て五
官を通じて映する具体的事物現象を、直接の對象とし、

の自覚がなければならぬ。

茲に於て、科學教育は既成科學を知らせる事ではなく、日本人としての働きを鍊成して本當の知慧——科學する人——を養ふのでなければならぬ。世に科學的生活態度とか科學的態度といつてゐるのは「科學する人」の生活態度の事であつて、現實にぶつかつて得られた經驗をもとにして、次には前の失敗を避け、よりよい結果が得られるやうにと考へて實行する事、自己の現實を盲目的でなくよく判斷して力強く切り捌いて行くことである。かゝる日本人を合理創造の精神を有してゐる人——腕の人——といふのであつて、腕の日本人養成こそ新しい科學教育の狙である。腕の日本人・合理創造の精神を有してゐる人、これこそ高度國防國家を建設し、八紘爲宇の大理想實現に最たるのである。

理數科は此の精神を鍊成する爲に組織立てられたものであるが、其の要旨に

「理數科ハ通常ノ事物現象ヲ正確ニ考察シ處理スルノ能ヲ得シメ之ヲ生活上ノ實踐ニ導キ合理創造ノ精神ヲ涵養シ國運ノ發展ニ貢獻スルノ素地ニ培フヲ以テ要旨トス」

とある。之を解明すれば素直な心・まことの心を以て、正しく・くわしく・明らかに、見たり・考へたり・扱つ

原始的恐怖の念が奇異の感となり更に此の感が「何が故に」といふ理知的活動の結果誕生したものである。故に科學は一見複雑に見える現象の中に存する理を發見し、之の理に循つて纏められた知識が結果として得られる事になるのであるが、從來の科學教育に於ては、西洋に成長した此の知識の理解が何よりの目的であつた爲に注入主義・記憶主義の弊に陥つたのである。其の結果「振子の等時性」とか「電氣とは何ぞや」といふ原理・法則・定義等は説明し得ても、自己の健康増進とか「ラヂオ・時計等の修理」といふ具體的生活現象に直面しては、何の能力も無いといふ珍現象を呈するに至つたのである。つまり、從來の教育に於ては、科學者が科學したものを概念とし、抽象知として取入れてゐたに過ぎないものであつた。かゝる抽象知は人生にはさほど必要のないものである。本當に必要なものは、人生活動の中に織り込まれた生きて働く知識・精神・技術と一体化された知識、換言すれば本當の知慧である。此の知慧は科學する事、即ち自然の中に没入し、見るものと見られるものと一体となり眞に科學を行する事によつて把握創造されるものである。

「科學する」とは人の働きであり、しかも日本人の働きである。隨つて其の働きの根底には日本人としての眞たりする事を鍊成するのである。これが鍊成され身につくと當然ものごとの「すぢみち」「ことはり」を見出し之を辨へ之に循ふ心が養はれ、更に新なるものを創造せんとする所謂合理創造の精神が養はれる。即ち腕の人が出来るといふのである。隨つて理數科教育は自然界の事物現象を正確に考察處理する能を身につかせる様に鍊成する事であつて、かくすれば合理創造の精神が養はれ、結局は國運の發展の實をあげることが出来るといふのである。

2、自然の觀察

此の「身につく教育」を最も有効適切ならしめる爲に低學年理科として自然の觀察が新しく生れた事を吾々は充分に理解せねばならぬ。

即ち理科指導を通じて涵養される精神は、合理創造の精神の一つの相たる私學的精神であるが、これが爲には自然のありのままの姿を素直につかむ態度が養はれなくてはならない。又此の精神の根本には自然に親しむ心・自然と和する心がなくてはならない。かゝるものの修鍊は、主客未分化の時期・知情一体として對象に働きかけるこの期を最適とするのである。尙又生物愛育の念も、動植物に對して觀察を進んで行ふやうにならしめる事も主客が未分化で理知の發達が著しくない此の期に其の基

礎が養はれて居なければならぬのである。

國民學校の教育、特に理數科教育に於ては、生活を「秩序正しくし科學的に處理するやうに訓練する」といふ事が大切であつて、此は理科の一つの目的でもあり、尙理科の他の目的を達成する爲にも其の基礎となるものである。しかもかやうな訓練は國民學校で企圖する國民としての正しい躰をつけることの一つであるから、兒童が必要や興味を感じまいとに係らず皇國民の一資質として躰づけねばならぬ。即ち習慣化せしめねばならないのである。習慣は自覺や論理を伴はないものである。隨つて其の形式は生活々動の始めて現はれる時期に容易であることは心理的自然である。初一二年は、學校生活の始められる時期であるから、此の期を逸しては、生活を正しくし、科學的に處理する躰も身につけることは容易でないのである。

兒童は又就學以前から、自然の中に於て自然と共に遊び、自然に驚異を感じ、自然から色々の事を學びつゝ經驗を積み、生命を發展させてゐる。又機械・器具の利用されてゐる現在に生活してゐる兒童は、これ等に接し經驗を重ねこれ等から色々な事を學び又工夫する態度も自ら養はれてゐるのであるが、これに對して何等の考慮を拂はぬ時は、兒童の自然物に對する興味と關心とを判斷

することに成り、將來の發展の支障となるのである。其れ故低學年よりかかる指導をなさねば、到底理科教育の目的は達せられないのである。

一、基 據

理科教育は、理論的働きを鍊成して其の身につけねばならぬのであるが、身につくとは休得することである。休得せしめるには、生活の具体的事實に即して處理し、實踐せしめることに徹せしめねばならぬ。即ち從來の如く原理とか法則を理解せしめる爲に生活的事實を方便するといふのでなく、兒童生活其のものを鍊成して其の生活の中に自然の理を見出すやうにすることになければならぬ。しかも此の鍊成は兒童にとつて具体的でなければならぬのである。といふのは、兒童の對象への働きかけ、必要と興味の感じ方、科學的處理力等は、兒童の心身發達段階によつて異なるものである。随つてかゝる心身發達段階に即しての鍊成でなければ眞に兒童にとつて具体的でないのであるから、身につけ得ないのである。そこで自然の觀察指導に當つては、眞に一期二期の兒童を知らねばならぬ。次に兒童の心性を考察して見る。

1、兒童の生活

で、刺戟的性質が大きいとか強い運動するとか珍しいといふが如きによつて左右されるものである。随つて對象と自分を對立させて自ら意識して注意するといふ性質がない。今まで大事にしてゐた事を次の瞬間捨て、省ないといふやうに兒童に、變移性が強いと言はれるのもかゝる特性より生れる必然的現れである。

兒童の思考生活に於ても、自己中心の傾向を示す。即ち自己の主觀的存在だけあつて、自己以外のものは、それと融合してゐて自己と對立してゐない。對立と自分を同じやうに感じ、同じやうに思ふのである。つまりそこにある現實を漠然とさうだと思つてゐるのである。随つて其の内容を分節して其の一部と他とを對立させて關係を考へるといふやうな關係判斷は成立しない。此の關係判斷の缺如といふことが混同・並置・矛盾の無視、證

(イ) 對象 此の期の兒童の行動は、知的發達が十分でないで、思考に訴へ判斷によつて環境に應ずるといふ成人に見るやうな論理的推理、即ち「かくすべし」といふが如き判斷によつて起るものでなく、興味により情緒の働きによつて規定されるものである。つまり兒童生活の場に於て、外界の刺戟と兒童内部の欠乏状態とが聯關すると、欠乏状態を満さうとする努力が必然的に起る。例へば麥笛を鳴してゐる人な眼前にすれば「自分も作りたい鳴したい」といふ内部的欲求が生じ、そうしないでは居られないといふ衝動的な活動として現はれるのである。随つて兒童の内部的欲求を暖るもの、換言すれば興味を引くものか必要を感じる物でなければ兒童の働きかけの對象とはなり得ないのである。

(ロ) 働きかけ かゝる對象への働きかけは未分化であり、素朴的である。即ち知覺の如きも感情・意志の活動と融合してゐて未だ分化してゐない状態にある。一本の棒が馬とされたり、兒童に花の色を聞くと「美しい色です」とか「よい色です」と答へるのも、かゝる兒童の特性によるものである。

尙注意の如きも、成人に見るやうな客觀に對して注意するといふ客觀と主觀の對立の状態に生れるのでなく、客觀に引き入れられるといふべき性質を持つてゐるもの

明不要といふ兒童特有の思考形態として現れて來ることになるのである。兒童は又總べてのものに生命を認めようとする汎心論的傾向を見せたり、太陽は人が作つたものといふやうに外物を見て人間が作つたものとする人工論的傾向を見せるのであるが、かゝる傾向は、皆自己中心の思考を中核として現れる兒童特有の世界觀である。

然し第二期に入ると、學校生活にも馴れ身体も成長し精神も旺盛な發達をなすので、自己中心の傾向も漸く脱し、そこに論理的なものも芽生え、推理も稍可能となり記憶も發達し、遊戯のやうなものも知的なものを含むやうになる。そこで第一期に於ては素朴的な考察處理をさせる程度であるが、第二期に於ては次第に組織的な學習に向はせねばならぬ。

2、自然の觀察指導の心構

働 き	期	期	期
一、對象	兒童身邊の自然界の事物現象 製作物	兒童の興味を感じるもの 必要を感じるもの 今後の指導上大切なもの	選擇範圍を擴げる。
二、觀察	1、感覺的直觀を根基とする。 2、全体的直覺的な把握をする。 3、動態の觀察	1、全上 2、全上 3、動態の觀察	

<p>○短時間に於ける全体的な観察をする。 例、虫・鳥・魚・獸等の動く有様 舟・車・飛行機等の動く有様 數・形・大きさの變る有様(算數)</p> <p>4、靜態の觀察 ○感覺的直觀と全体的直覺的な觀察を主とする ×分析的・部分的觀察はなるべく避ける。 數・形・大きさ(算數へ分離)</p> <p>5、比較觀察 ○等しい点、違つてゐる点を大きつばに重点的に觀察する。 ○數・形・大きさの比較(算數への分離)</p> <p>6、繼續觀察 ○動植物の飼育栽培に關してはこれを見守る程度とする。</p>	<p>○關聯的に觀察なす。 例、虫・魚などの動作と其の形とを關係的に見る。</p> <p>4、靜態の觀察 ○次第に分析的部分的な觀察に進む。 例、花・果實の内部の構造に注意を向ける。</p> <p>5、比較觀察 ○異中に同を見出し、同中に異を見出すやうな觀に進む。 ○多少分析的部分的となる。 6、繼續觀察 ○變化の様子を興味と關心とを以て相當長期に亘つて觀察する。</p>
<p>三、思考</p> <p>1、直觀的に判斷する。 ×論理的に思考を進める事を強要しない。 ×分析して綜合判斷をする時期でない。 ×類推したり一般化することを急がない。 2、對象を自分達と同様に考へて判斷することを許す。</p>	<p>1、直觀的に判斷する。 2、幾らか分析して綜合判斷をなし論理的に推理する方向に向はしめる。 3、自己を主体として、客觀的に考察する方向に向はしめる。</p>

<p>四、處理</p> <p>※素朴的操作・初步的指導。</p> <p>1、整理整頓(算數と共通) 2、飼育栽培 ○上級生の手傳ひの程度、又は教師の眞似をする程度。 3、蒐集・採集・分類の初歩 ○兒童の直觀に基づき情意の要求に従つて分類させる。 4、簡単な工作(算數と共通)。 5、測定・記録の初歩(算數と共通)。</p>	<p>※次第に程度を進める。</p> <p>1、全上 2、飼育栽培 ○兒童の活動の範圍を擴げ、工夫考察をも促す 3、蒐集・採集・分類の初歩 ○稍系統的な分類までならしめる。 4、全上 5、全上</p>
<p>五、知識</p> <p>一期二期を通じて、兒童が其の全身を働かせ、自然に直接ぶつかつて行く間に自ら得られる程度で満足する。 ○物の名稱は普通見馴れたものに限る。 ○名稱は記憶させる必要はないが、教師が度々君を呼んで兒童に聞かせる程度でよい。 ○術語は堅苦しいものは避け、通俗的な親しみ易いものを用ひる。</p>	<p>体的に考察してみる事にする。 ※前日</p>

三、方法

以上一期二期の理科の指導に當つての態度を明らかにし、而して此の方面で養ふべき能力を重点的に概観してみたのであるが、今シャボン玉遊びによつて、かゝる能力が伸び行く相を展開して、自然の觀察指導の方法を具

幸にして資生堂の洗濯石鹼を入手出来た。カンナで薄ぐ剃いで水に溶して見た。四五分も掻きまぜてみると大體溶けたので吹いて見ると大きな玉が出来た。なか／＼興味深いものがある。子供になつて一心に吹いた。色々

工夫もした。これなら子供も興味を持つこと疑ない。明日の授業も先づ成功だと自信もつき、石鹼も十分削ぎ、麥わらも四五十本、茶碗を十個ぐらい用意して歸途についた。

自然の観察はあくまで遊び其の物であつて、自然の中に解放する事であるが、單なる野放であつてはならぬ。自然を友とし、自然と遊ぶ中になるべく能率よく理知的能力を伸ばし休得せしめて行かねばならぬのである。これが爲には、十全の準備と豫定案を持つことである。シャボン玉遊びをさせるならば教師が先づ作つて見る。そこに製作上の困難なる点がわかり、水と石鹼との量的關係吹き方・飛ばせ方の要領が自ら休得せられ、教師の休得は兒童の休得となり、ここに教育はなり立つのである。教材によつては野外につれ出すものもあるが、かかる教材に於ては、兒童を引率しようとする實地現場の下檢分が是非必要である。即ち引率の途中や目的地の危険物・危険な個所の調査は勿論のこと、毒虫や毒草についても一通りの心得を持ち、尙途中や目的地で兒童が興味や關心を持ちさうなもの、持たせねばならぬもの等、豫め觀察して置かねばならぬ。こうした前日までの準備があつてこそ明日の指導が有意義に終るのである。

※水曜日の三時限目

都合よく風もなかつた。豫告されてゐた兒童は、麥わらと茶碗を机上に出して、教師の來るのを今か／＼と待ちわびてゐた様子、教室に行くと手を拍つて喜ぶ兒童もゐる。

即ち前日に麥わらと箸（竹の棒）及び廢品の茶碗或は竹筒を持參する様に兒童に豫告して置くのである。かくすれば自ら手頃の麥わらを作り、或は廢品の茶碗を探したり、竹筒を用意するであらう。かやうに自ら用意する中に種々の能力が練磨されて行くのである。然し此の期の兒童の處理力は、未だ幼稚なものであるから困難なる点は教師が補けねばならぬ。徒らに處理力の鍊成といふ事で、無理を強ひて理科嫌ひにならしめるやうな事があつてはならぬ。尚かゝることで動ともすれば、家庭に負擔をかける様な事になり勝ちであるが、教師は十分家庭の事情に理解を持ち、例へば麥わらのない家庭の兒童には教師が準備してやる旨を納得せしめてやつて、家庭に迷惑をかけぬやうに努めねばならぬ。

「皆さん今日はシャボン玉遊びをするのでしたね、先生が作つて來ましたから吹いて見ますよ」

と、いつて徐に吹いて見せる。

「先生私は作つた事があるよ」。

経験者も五六名はゐるらしい。

「あゝきれいなね」。

「あら／＼飛んだ」一時に歡聲が上つた。

「先生私に吹かしてよ」。

「私にも／＼」。

押へ切れぬ製作欲がつき上げて來たらしい。こうして先づ兒童の興味と必要感とを唆つてやるのである。

「では皆さんと一緒に作りませうね」。

「うれしい、うれしい」

「どうして作りますか」といつて経験者の記憶を呼び起してやる。

「石鹼に水をかけます」。

「さうですね」と言ひながら、大体の作り方を説明してやり、

「さあ組長に石鹼をあげますから四人で仲よく分けなはしよ」といつて一組分づゝ分け與へる。

此の兒童たちには等分に分け方がなか／＼困難らしい。机間巡視しながら指導する。

「先生水を入れてよしの」。

「はい、どれくらい入れたらよいか考へて入れなさいね」と注意を促す。

兒童は水を汲むにも、木の葉等を取るにも無方針にやり勝ちである。然し何事も仕事するには計畫的にするや

うに饒けることが必要であつて、これが爲には「これくらいの水でよいだらう」と考へながら、水を入れるやうに仕向けねばならぬ。或はソラマメを植ゑる時等、土を掘返したり、石ころや棒切れを拾ひ出したりすることがあるが、こんな場合等も、無意識にやるのでなく「棒切れや石ころがあると豆が根を伸しにくいだらう」とか、「土を深く掘らないと根を十分張れないだらう」と考へながら仕事をやるやうに仕向ける事が大切であつて、かゝることが絶へず訓練されて行くと、將來何事も計畫的にするやうになるのである。

「先生、見て下さい／＼」。

思ひがけない大きな玉の出來たのに驚いてゐる。

「あら／＼飛んだ。森山さんのは飛びましたよ」

三四分も経たぬ中に、あちこちにシャボン玉が飛んでゐる。

中には丹念に水を掻きまぜてゐる兒童もゐる。或は二回も三回も水入れに行つたり、「石鹼が足りません」と訴へる兒童もゐる。然し六七分も経つと大部分の兒童が成功した。不成功の者三名、此の兒童はとかく幼稚で自力で仕事が出来ないのである。かゝる兒童には、學習が出来るところまで教師が手傳つてやらねばならぬ。兒童の一人が

の方法や程度によつては、児童の活動性を萎縮せしめる憂もないでもないから、一應黙として與へて置いて、次第に其の意味効果を悟らせるやうに仕向けることが大切である。

「先生公園に行つてもよいの」。

「はいよいですよ」。

あそこへ一歩、そこに一群思ひ／＼の場所で活動的な此の児童達は、一心に遊んでゐる。

「見てごらん、きれいな」。

「私のは大きいのが出来るよ」。

「私のもよ」。

向ふには落ちて来るシャボン玉を、再び吹き上げやうと焦つてゐる児童もあり、茶碗の中で龜の甲のやうなものを作つたり、吹き消したりしてゐる児童もある。中には「先生見てみてね、私のはぐる／＼廻るのよ」と、さも不思議さうに訴へる児童もゐた。こうして知情意未分化の此の児童達は心身一体としての活動を遺憾なく發揮してゐる。

「あら／＼飛んだ、あーれせんだんの木に」。

「永山さんのはよく飛ぶのね、私のはちよつと飛ばないよ、水を入れて来るから」と言つて、水道の方を走つて行く児童がある。「水を入れては駄目」と、思はず

「先生庭に出ませう」。

「あゝさうです、皆庭で遊びませう。人を押さぬ様に順々に出なさいよ」。

といつて、庭につれ出す。自然の観察は自然から直接學ばせるのであるから、室外學習が本体となるのであるが室外に於てはとかく教室學習に比して、児童の注意が落ちつかず、散漫になり、管理が困難であるといふ嫌ひもあるのであるから、理科の目的を達成する爲には、教室學習の長所を取入れる事が、より効果的な場合があることを忘れてはならない。石鹼水製作を教室でなしたのはかゝる意味が存するのである。

「人を押さぬやうに順々に出る」といふ事は、訓練であり、躰である。児童の興味と關心とを基礎にして指導することは、自然の観察指導上最も重要なことであるが「人を押さぬやうに順々に出る」とか「後始末をよくする」といふやうに、「秩序正しい行動をする」といふ事は、理科の一つの目的でもあり、又理科の他の目的を達する爲にも其の基礎となるものであるから、児童が興味や關心を持たなくとも、ともかく實行せしめねばならぬ事柄である。躰として與へねばならぬ。かゝる躰は低學年から心掛け、しかも反復練習しなければ身につかぬものであるから絶へず注意して指導せねばならぬ。然し其

止めやうとしたが、こゝだと氣付いて児童のする儘に任せて置いた。

「先生一つも出来なくなつちやつたよ、水が多過ぎたのね」。

「さうです、あなたが水を澤山入れるからよ、然しよゝ事に氣付きました褒美に先生のを上げませう」といつて、教師のを分けて與へる。

従來の教育では、ともすれば「水が多いと駄目だ」と知識として傳授してゐたのである。此の知識が所謂抽象知であつて、觀念的である。即ち石鹼と水との量的加減は体得されてゐないのである。始からこゝうした知識として授けることを止めて、水が少いと判断がついたら水を注がせる。其が却つて失敗に終る。今度は先の失敗を繰返さぬやうにと考へて實行する。かくて水と石鹼との量的關係は自ら体得せられ「水が多いとシャボン玉は出来な」といふことも、自ら悟るのである。かゝる指導が、眞の理科指導であり、かくして得た知識が眞の知識であり、生活に生きて働く如きとなるのである。かやうに色々と経験を積せる間に事象を貫く理法を、児童自ら見出すやうに仕向けることが大切であつて、かくすれば生活上の必要な知識技能も自ら体得せられると共に、眞實なるものを追求する心が盛となり、眞實なるものに隨順す

る心が養はれ、創造の態度も養はれるのである。築山の方に行つて見る。

「先生提灯が出来ましたよ、こゝれ」。

「ほう提灯ですか面白いね、其二つ作れますか」

「先生二つ出来たよ」。

「先生三つ、これ／＼」。

このやうに教師の一寸した暗示により、児童の工夫は益々發展して行くものであり、而して新しきものの發見創造となるのである。故に教師は適當な暗示を與へ児童の工夫を進めて行くやうに努めねばならぬ。「三つ作り得たこと」は些細な事ではあるが児童にとつては新しきものの創造であつて、此に無上の喜びを感じるのである。かやうに創造する事に喜びを感じる心を養ふことは、理科指導最大の要諦である。

こうして皆が存分に遊んだ頃を見はからつて、

「さあ、皆先生の廻りに集りなさい。今から誰のが一番大きいのが出来るか競争をさせよう」

と、誘ひかける。

自然の観察指導に於ては、児童自ら進んで對象に働きかけるやうに仕向けながら能力を伸してやることが大切であるが、最初から一所に集めて教師の豫定した仕事に引き入れやうとしてはならない。

先づ自由に遊ぶ一時を児童に與へるのである。野山に引率して行つたら先づ存分に花を摘ませ、蛙を追はせ、十分満足と與へてから一同を集めて、花みこしを作りませうと誘ひかけるのである。シャボン玉遊びに於ても、自分で石鹼水を作つたら、心ゆくまで吹かしてみなければならぬ。

「ふくらんだ〜」。
「ぐる〜廻るよ」。

こうして存分に遊んだ児童は始めて落付きを見せ、各自大きな玉を作らうと努力するのである。其の間に校舎が玉にうつる。色が變る。ぐる〜廻り乍ら膨らんで行く事等にも氣付き、何邊か吹き破つてゐる中に「此以上吹いたら破れるぞ」といふ加減も体得して行くのである。

二三名上手な児童に吹かして賞揚してやり、次に、「今度は大きなシャボン玉を天まで上げませう」といつて、飛ばせ方の工夫をせしめる。なか〜うまくゆかぬらしい。中には程よく膨らんだ頃手をすつと引いて上手に飛ばせてゐる児童もあるが、大部分は偶然管から離れて飛んで行くのを喜ぶ児童である。全然出来ない者もある。

「先生どうすれば上るの、私のは飛ばないよ」
「さあどうしますかね、上手な人を見て居つて見ま

鹼水はどうしますか、捨てるのは惜しいね。」

「先生洗濯に使つたらいいよ」。
「さうさう。高等科の姉さん達に上げませうね。皆此のバケツに入れなさい。」といつて少しの物でも無駄にしてはならないといふことを駈けるのである。かゝる指導によつてすべての物を生かさうとする心が養はれて行くのである。

「姉さん達が喜ぶでせうね。さあそれでは、水道に茶碗洗ひに行きませう」といつて、水道に導く。「こうして洗ひなさい」と模範を示して洗はしめ、「手も綺麗に洗ひませう。口もよく嗽ぎませう」と言つて、教師自らやつて見せる。皆終へた頃、教室に導き、

「茶碗は机の中に入れなさい。麥わらは家に持つて歸へつてもよいですが、いらぬ人は此の塵箱に入れなさい。」といつて教室や庭等に散らさぬやうに躡ける。こうした事を例外なく指導する事によつて、後始末をよくすることが習慣せられ、身につき、其の効果が家庭にまで及ぶやうになるのである。

「家で作つてもよいですがお母さんの許を得て作りなさいよ、石鹼は何で削りますか」。

「小刀で」。
「そう、庖丁等で削つてはいけませんよ」と注意して

せう」と言つて、疑問をすぐ解決してやるのでなく、教師と共に工夫して行く態度に出るのである。此の種の疑問は何か眞實なものがありさうだ「眞實なものを求めよう」とする心の萌芽であつて、適當に指導することが大切である。此を教師が簡單に片づけてしまふことは、研究心を盛にする所以でないのである。

「先生こんなにします」と手眞似で發表した児童がゐた。此の児童は、遊びの中に自ら自然のすぢみちを辨へたものであり、しかも之に循つてゐる児童であるが、發表能力が幼稚な爲に手眞似で發表したのである。かやうに一期の児童の發表能力は未だ十分發達してゐないのであるから、手眞似・足眞似・身振りで發表する事も許し最初から纏つた言語・文章を要求してはならぬ。學年が進むに従つて本質知發表に進展して行くやうに仕向けるのである。

「あゝさうですか」といつて教師が實證して見せる。實證によつて、其の眞相が愈明らかになり、他の児童も「なる程さうだ」自分もやつて見ようとなり、幾度かやつてゐる中に技能が練られ、要領が身について来る。こうした絶驗が、他日「慣性の理」の學習に大なる力となるのである。

「今日は大變面白かつたね、もう止めませう。此の石

學習を終る。

四、施設

一、教材

自然の觀察は、あくまで實地についての指導であるから、其の地方其の児童に適する如く教材を選定し、配列しなければならぬ。教師用書にも、地方の情況に應じて教材を取捨し、補充し、或は順序を變更して、一層児童に適切ならしめるやうに注意してある。隨つて各學校に於ては、郷土の實情をよく調査し、季節を考へて教材配當案を作製し、尙花壇・畑の栽培植物の選定、及び栽培曆の製作により其の指導の時期を逸しないやうに努めねばならぬ。(具体例畧す)

一、用具

往々にして用具の不足を來たし易いのであるが、用具其の物の使用に慣れしめる事も、理科指導の一つの目的であつて、用具の不足は、かゝる修練が出来ないばかりでなく、他の目的を達成する爲にも其の支障となるのであるから、是非其の整備をなさねばならぬ。本校としては次の如くなしてゐる。

- 鋏 ○ 小刀 ○ 物指、算數、工作と關聯があるので入

學當初購入せしめる。

ロ、學級備品として備へる

○根掘り（在籍數） 高二年生に、三學期新入生の爲に製作せしめて置く。

○植木鉢 各學級十五個を標準としてゐるが、不足の分は竹筒で代用してゐる。

○水鉢 家庭で使用する大型のガラス壺で代用する。

○昆虫飼育箱 學級一個づつ配當してゐる。

ハ、學年備品として備へる。

○廣口壺 マヨネーズ・福神漬の空壺等、廣口壺に代用されるものを全校児童より蒐集して各學年五十個づつ配當してゐる。

○竹筒丁（一學年のみ） 六年生に製作せしめたが使用毎に刃が潰れるので修理の必要がある。

○竹筒（一學年のみ） 高一年生に製作せしめた。

ニ、學校備品一切を活用する。

その他種々の用具が必要であるが、理科備品・工作備品・農業科備品・家事備品・体操備品等一切を擧げて活用する事にする。

3、飼育栽培地

國民學校に於ては、兒童に植物の栽培・動物の飼育をせしめて、自然より直接學び、科學的考察處理の能を修

一		二					三																								
2	草花とり	16	石ひろひ	15	めだかすくひ	14	三月の野	13	木の實ひろひ	12	秋の野	11	田植	10	五月の畑	9	春の野	8	草つみ	7	もみぢ	6	とり入れ	5	ばつたとり	4	麥畑と虫とり	3	池や小川の動物	2	草花とり
	一日上山崎	一日	淨圓寺川原	一日	松原橋附近	一日	小原台地	一日	太田	一日	熊野神社	一日	熊野神社	一日	君名川	一日	平野原	一日	城山	一日	松尾	一日	城山通り	一日	平野原	一日	淨圓寺川原	一日	淨圓寺川原	一日	淨圓寺川原
	○・八籽	○・八籽	○・八籽	一籽	一籽	二籽	二籽	一・五籽	二籽	○・六籽	二籽	二籽	二籽	二籽	二籽	一籽	○・五籽	一籽	○・五籽	一籽	一籽	○・六籽	一籽	一籽	一籽	○・七籽	○・七籽	○・八籽	○・八籽	○・八籽	

練せしめねばならぬのであるから、教師用書三十七頁に示してある施設は最小限度として是非必要である。本校としても保護者會の補助を得て其の趣旨に添べく努めたのである。

4、學習目的地

教科書に、目的地選擇基準として一年に於ては

(イ) 兒童が餘り疲れないやうに、なるべく學校に近い場所。

(ロ) 各自、自由に觀察し、採集をさせる場合危くない場所。

(ハ) 自由に取れる材料の多い場所。

二年に於ては、一年の時より少しは遠くへ行つても無理でないところが、實際問題となれば、土地の事情に明るくない場合もあつて、其の選擇に困難を感じる事もあるので、自然の觀察地圖を製作し、其の目的地を大體指示して置くのである。然し其の場所に固定する意味でなく、其の地圖を活用する様に努める。次に其の具体物を示せば

野外に於ける自然の觀察の學習目的地

學年番號	教 材	時間	場 所	學校より距離
1	春の野	一日	龍光寺の庭 (五万石溝土手)	○・六籽

結

以上、私は此の論述に於て、理數科教育は既成科學を教へる事ではない、理的働きを鍊成して身につかせることである。これには、兒童の心身の展開に即して生活其のものを鍊成しなければ、到底それが身につか得ない事を強調し、そして初一女に於ける此の働きが、教兒一体として俱學俱進の場に於て伸び行く相を展開したのであつた。

茲に論を終へて窃に回顧する時、まことに力の足らざるを痛切に感ずる。然し、今私の腦裡を強く往來するものは「此の精神を教師が身につけることだ、そして此の環境・此の施設の下に生ずる事である」と。生かすとは、こつ／＼と協見をせずにはやることがである。文部省圖書監修官蒲生英男先生は言はれる「この頃は特に早く世の中が移り變り複雑になるから、注ぎ込まねばならぬ知識も多からう。然しそれは高學年でやればよい事で、一二年の問題ではない。低學年ではこつ／＼と茶を作つてそれを食ふつもりで居ればよい。他人が持つて来てくれる罐詰なんかいよ／＼間に合はなくなつた時の事である」と。とにかく吾々は汗を流し手に豆をつくりつゝ畠を耕す事だ。そしたら花壇の花は來年の春になると今を盛りと咲き亂れるであらう。子供の眼も又伸びるであらう。

初等理科教育の方法

川内 一三四

川内 市

目次

- 一、述べる態度
- 二、國家が要求する指導精神の體得
 - 一、先づ教師用書に求む
- 一、實踐躬行
- 二、協同
- 三、創造
- 四、鍊成
- 三、具體の創造
 - 一、更に旺盛なる實踐力を具體の修練に求む
 - 一、郷中の篤農家、篤技家に求めて理心技一體の修練をなす
 - 二、仕事計畫表を整備す
 - 三、少年團作業基礎訓練に求む
 - 四、必要なる施設を完備す
- 四、理科教育推進員
 - 一、最後に學校經營の組織機構の中に求む

一、述べる態度

「初等理科一」を手にして僅か數ヶ月ではあるが此の間私共が理科教育の具體的方法を創造せんとして實踐し努力せる經過に基づき、反省を加へ將來に資せんとし、その一端を述べよう。

第一、指導精神の體得を教師用書に求めた。

こゝで述べることは極めて平凡な且つ分り切つたことであり教師用書以外何等出でゐない。何となれば理科教育の方法は全學年に亘り、その目的・指導の精神、各教材の取扱ひの要領並びに取扱ひ上の注意に至るまで教師用書には最も懇切丁寧に述べられてゐるので私共は教師用書以外何物にも據る必要がない。又據る可き性質のものでないと思ふからである。従つて私共は教師用書を繰り返し、熟讀玩味して眞に自分のものとして活かし、然るに教師用書により體得せる指導精神の徹底を期するためには如何にして具體に下りるか、即ち具體に於け

る私共の創造的な着眼と研究的勞作とに俟たねばならぬこの點第二に述べて旺盛なる實踐力の内容を更に教師自ら修練せんことを企圖した。

斯くて特に初四の理科教育はその實踐の具體性から、これを學校經營の組織機構の中に於いて考察することが妥當であるとの結論を得、それには理科教育推進員に大いに期待せねばならぬことを述べて此の稿を結ぶこととする。

※ ※

二、國家が要求する指導精神

の體得

—先づ教師用書に求む—

一、實踐躬行

文部省圖書監修官岡現次郎氏は「三四年理科の編纂趣旨の中に

—これまで使つてゐた「小學理科書」に較べてみると非常な違ひである。「小學理科書」を開いて見ると巻頭第一行に「さくらは大きい木になる」と書いてある。新しい教科書では第一課は「イモノ植エツケ」で「昌ニジャガイモヲツクリマセウ」と書いてある。新

舊教科書の巻頭の最初の一行を較べて見ると大變に面白い。偶然か或は必然か、これ等の一行にそれぞれの教科書の運命が宿つてゐるやうな氣がするのである。舊い教科書のはサクラの形や構造を記したものであつてこれを覚えさせる。知識を興へるといふことになり新しい教科書では「昌ニイモヲ作りマセウ」といつて兒童に仕事をやるやうに呼びかけて働き方を示してゐる。その體験を通して知識を得させて行くことを考へてゐるのである。——云々

と述べて居られるが監修官だけに慥かに穿つた論である。從來の理科教育が理科の頭を作る——即ち觀念の教育に終つた弊に鑑み國民學校理科の最も正しき道特に實踐を主とすべきことを教へられたものといへよう。初四に於いては一層この態度に徹せねばならぬ。例へば、

「兎ノセウ」といふ教材があるがこゝでは兎を飼ふといふことが主體となり、目的となつてゐる。従つてよく食はせねばならぬし、飼料も選擇せねばならぬ。又犬や猫など妨がねばならぬ。腹を悪くしたら治療して可愛がつて育てねばならぬ。折角學校に飼つてある兎が瘠せて見るに忍びぬ状態にあり或はよく死んでしまつて兎のお墓が賑ふ様ではこれまで述べ來たつた理科の實踐躬行の

行き方ではない。それには第三者の立場から兎を観察するといつた一般の態度から動物園の園丁にまでの世話に變らねばならぬ。又「コンロと湯ワカシ」といふ教材があるがコンロで火を起して湯を沸かすこと自體が目的であつて、從來の如くロソクの火を眺めてロソクといふ題のもとに火の定義、種類、成立する要件等を究明するのではない。よりよく火を起すことの出来る日本人、消すことの出来る子供を、修練することを目的としてゐる。

本學年の教材をその流れから見ると、イモを作つてデンプンをとるまでの一聯の仕事と稲を作つてとり入れまで一聯の仕事のこの二つの大きな仕事の間にあつて兎の世話や虫を飼つてその移り行きを見ることや、おもちゃを作ることなどがはいつて大體の骨組を作つてゐる。従つてこれまでの「自然の觀察」に於いて取扱つたものを高い程度に於いて——子供自身の實踐を通して總なめにやらせようと意圖してゐる。

稱を作つてとり入れるといふ仕事はこの學年の兒童にはなか／＼無理な仕事である。從來は觀察を主體として五年に採用されて來たのである。それだけにこの教材を本學年に採用するに當つては當局でも相當な問題となつたらしい。然るに教師用書に述べられた如く「稲は神代

見廻りに行つてゐることがわかつた。作物は目を離すことが出来ぬ。目を離せば虫にやられ、雑草にやられることを二宮翁もしきりと教へてゐる。本學年の如く長期間に亘つて飼育栽培を實踐せしめんとするに當つてはコソツと道に殉ずるの清人の態度の如き極めて大切なを訓へられたものである。

二、協同

本學年の教材がイモとイネとの二つの大きな仕事の間にあつてこれ等に關聯をもちながら飼育栽培並びに製作等の勞作そのもの、實踐それ自體を主體とする教材によつて組み立てられてゐることは前にも述べた。而してこれ等の仕事を教師用書の精神に則つて高度に實踐するためには、先生の手を離れて子供の當番制により世話が中絶しない様に而も仕事がおろそかにならぬ様、豫め教師の綿密な計畫が必要であると共に從來の個人主體の學習に立脚せる一齊からお互ひに力を合せ工夫しながら仕事を進めて行くと言ふ即ち協同勵勵の組織機構の上に立つて絶えず修練が積まれねばならぬ。協同で仕事をするといふことは單に本學年に限つた問題ではない。特に全學年を通じ何れの教科書にも勝つて濃厚に特色づけられて理科指導の實踐形態の中心機構をなしてゐる。なほ生活の面を見るにこれは科學的技能を生かして行く上に直接

の昔から我が國に栽培され今日まで最も大切な食物として我が國民の生命を養つて來た。これに對して正しい理解をもつことはこれを生産する者だけでなく國民一般にとつても極めて必要なことである。一度でも稲を育てた體驗をもつことは國民としてむしろ當然のこと、云はなくてはならない……として此の困難な仕事を無理だと言ふことを認めつゝ行はしめてゐるのである。而もこの間に於ける繼續的觀察も從來の如く稲の本體を解らせると言ふことを目的とするのでなく、實地に稲を修練し稲を實踐躬行せしめて日本人としての修練をなすと言ふ——こんな大きな考へが背景となつてゐることを掴まねばならぬ。そして始めて指導精神の體得に深さが生じ實踐力が強められると思ふ。

實踐躬行は道に殉ずると言ふ精神をその根本の態度とする。一兒童福山清人が「サツマイモノ植エツケ」が終つて後のことである。他の兒童は疲れたらしく畝の周りに腰を下して休んでゐる。畝は學校から七八十米も上つた高臺で三十數分もかゝる。肥料や道具を擔いでこゝまで上りつめ休む暇もなく畝を耕し、苗植ゑをしたのだからこの學年の子供として疲れるのも當然である。然るに清人だけがたつた一人畝をもつてコソツと畝の周圍を整理してゐる。その後も學校が引けてから時々自分で

必要なる基本的なものであつて、科學教育を論じ實踐するに當つてどうしても閑却し得ない問題と思ふので更に附加してみたい。

從來我が國では技能が非常に重要視され技術者であるとか科學者であるとか言つたものは人格が多少どうあつても技能さへ優れてゐれば立派な技術者として認められた感がないでもない。然るに科學的な仕事をするといふ場合を考へて見る時一人で出來るといふことは非常に少ない。殊に最近の進歩した工學・科學の方面に於いては協同で仕事をしなくてはならぬといふことが益々不可缺の事柄として強調されて來た。そして支那事變—大東亞戰爭を契機とする國內體制の變革により更に拍車をかけられつゝあるに鑑みても協同して仕事をするといふことが科學精神の涵養に當つて如何に基本的にして重要な役割を占めるか、伺はれる。この観点に立つて特に指導の心構を新にし本學年の理科教育を實踐せねばならぬ。今試みに「自然の觀察」教師用書の中に特に揚げられた「協同で仕事をなす場合」の一部を拾つて見よう。

- 1、學校の花壇（自然の觀察教師用書（二）二頁—三頁）……この花壇全體が調和のとれた美しいものになればしらすしらすの中に協力の喜びや貴さがよく感じられ協同の精神が養はれる……略……花壇の計畫は

學校全體として考へ兒童の能力に應じて仕事を受持たせなければならぬ。花壇全體の計畫と經營には六年生が當ることとし五年以下のものにはそれぞれ花壇の一部を受持つて花を作らせる……以下省略

2、學校の畠（自然の觀察教師用書（三）二〇頁）……（省略）

斯くの如く學校の花壇、畠の經營並に各教材の實踐等あらゆる場合にのぞみ或は縦の或は横の協同組織の上に立つべきことを示してあるが、素直に私共が教師用書の精神に則つて實踐せんとすれば、これまでの理數科理科の經營から一步を進めてもつと新たな構想に基づく學校經營の組織機構といつた立場からの教科經營を計畫し實踐を企圖せねばならぬ。

三、創造

本學年の兒童は第一期や第二期の兒童に比べて非常に理智が進んで来る。したがつてこれまでの自然の觀察時代に於ける素朴なものから、漸次合理的立場に立つて考察し處理を進め更に新なるものを創造せんとする態度に導いて行くことが必要である。今その指導過程を教師用書の段階に求めるならば、初二の自然の觀察時代は先生にならつて或は上級生の手傳ひをしながら仕事をしつてゐる間に自然にわかつて行く。即ち素朴な考察處理

を通して氣づかせる教育による理科的躰の段階であり初三は同じく自然の觀察ではあるが過渡期に即して漸く理智的な眼を啓きそのものと周囲との關係を一体裡に認める様指導を行ふ。本學年からいよいよ見透しを以て生活を進める一方現状維持に満足せず常に改良進歩せんとする態度を心掛けて鍊らねばならぬ。そこで畠を耕して種を蒔いて置けばよいといふのでなく、成長した後のことを豫想しての耕し方であり仕事でなければならぬ。例へば大根の根は地中深く伸びるものであるから特に深く耕さねばならぬこと、土くれ、石、木ぎれなどがあるとなつた大根の出来ることなどを思ひ起してこれ等を取除かねばならぬことを豫め考へて耕す態度を修鍊せしめ、又土をこまかく耕して水が下から上つてくることによつて土に濕り氣をもたせる方法も指導する。紙玉鐵砲の製作に於いても「棒ノ長サハドレグラキガヨイデセウ。長スギルトドウデスカ、短カスギルトドウデスカ」と示唆を與へて考察せしめる。勿論最初ははつきりわからない。然し棒が筒と柄とを合はせた長さよりも長くなくてよいことを圖によつて認めさせ大體の見當で棒を切つてはめさせ出来た後でこの間について考へさせるといつた風に、始からはつきり分らないことでもかうして大體の見當を以つて仕事を進める様指導に留意し、兒童を

能力とに富んだ皇國民の鍊成こそ亦國民學校の使命であらう。

四、鍊成

鍊成は國民學校の全面に亘る教育の方法である。理數科理科に於いては平たくこれを「どこでも何時でも而も間違ひなく實踐出来る」と解することが出来よう。例へばマツチを何度も磨つて漸くつけれられるのでなく一邊で而も何時でもつけれられる。「ネチをしめよ」と命ぜられて左だつたか、右だつたか、その都度考へ或は試みてやり直しながらしめられるのでなく命ぜられると直ちにしめられるといふ域にまで修鍊されることである。教師用書の總説二十二頁には、

機械器具の取扱に關する技能は觀察、實驗その他の作業に必要なものであるが國民文化の進むにつれて國民生活の實際に極めて重要なものとなつて來た。殊に國防上からいつて國民のこの技能を修鍊して置くことは一刻もゆるがせに出来ないところである。随つて機械器具についてのその構造機能について理解を與へるだけではなくこれに慣れ親しませその取扱を身につけさせ尙進んで改良の工夫まで行はせるやうに指導しなくてはならない。

と述べて國防上極めて必要なを力説し又身につけるま

して漸次見透しを以つて仕事する様修鍊することが本學年に於ける合理的立場の第一歩である。そしてこの兒童自らが見出さんとする合理的考察處理は同時に新たな生活の創造となり、兒童自ら現狀に満足せずして工夫考案せんとする態度となる。そこで私共はつねに此の學年に於ては創造的な頭を鍊るといふことに指導の心構をもたねばならぬ。一つの事實事象に對してあり得べき處理考察は幾通りかある場合がある。従つていろいろな立場から考察し得る頭を鍊るといふことが本學年からの指導の中心眼目の一つとなつてくるが、此の場合工夫のさせ方にもいろいろな方法があるので私共はこの教材、この場合にはどの立場で合理的態度を鍊成して行くかを豫め決めてかゝらねばならぬ。それにしても教師の頭の程度、技能の範圍で教へ込まうとする態度はどこまでも避け兒童自ら工夫し考察して解決し創造する態度を鍊成することが肝要である。

大東亞戦争が戦ひつゝ建設して行くといふ從來に例を見ぬ性格を辿つて進められつゝある秋、思想、學術、教育等に於ける植民地的性格を打破し自主的な立場に立つて日本人本來のものを感じ方、考へ方を發揮せしめることは私共の大切な心掛けの一つであると思ふ。大東亞共同確立、新文化創造の大使命を果すに足る創造的意慾と

での修練を強調されてゐるが、これは單に技能の面ばかりでなく理科教育の内容全般に亘つて極めて大切なことは説明を要するまでもない。然らば如何にして錬成して行くか。これについてはその内容、方法等、具體的解説が教師用書の全面に亘つて懇切に而も十分に述べられ、又本稿の全面を通じて至るところに觸れてゐるつもりなので特にとり立てゝ述べる必要を感じない。たゞ此處で一言力説したいのは、本學年の理科教育が特に繼續的仕事の實踐に根ざし一教材が長期間に亘つて行はれるので從來一般に取扱はれた授業の如くその時間限りといつた指導では到底徹底しないといふことである。授業と一聯の仕事との關係を重点の連鎖と見る時、特に授業面に表はれる重点、節々の錬成と共に授業と授業との期間に於ける連鎖の面に重要な錬成價值のあることを反省させられたものである。私共は今後大いにこの面に努力を拂はねばならぬ。

三、具體の創造

一 更に旺盛なる實踐力を具體の修練に求む

のであるが、梅雨期になると或は死なし或は不健康の状態に至らしめ折角の自然の觀察も不自然の觀察となり、生物愛育の情を求めて憐愍の情となり、實際に兎の飼へる人物を養成せんとして果されぬ状態を繰り返して来た。ところが市内隈之城町の井上さんが多年兎を飼つて成功せることを聞き本年初、來校を請ひ實地に即して研究會を開催した。先づ學校内を巡視して飼育所としての適切な地を選び十幾年の歳月と何千頭の飼育による反省に立つての指導を受けつ、校長以下職員協同して現在の飼育所を設計、數日を要してこれを作り上げると共にその飼ひ方の技術までも共に研究し合ひ爾後四年生が當番制を以つて飼育をつゞけることとなつた。以來未だ一頭をも殺すことなく丸々と肥つた元氣に充ちた兎が漸次増えつゝあるに鑑みてもお互に唯抽象的な講義や讀書による觀念的知識から實踐性をもつ理心技一體の眞行の修練をなすことの貴さを訓へられたものである。

また我が川内市に鎮まります新田神社では毎年入梅の日に御田植祭が取り行はせられる。そしてこの御田植祭に必ず缺ぐことの出来ぬ奉納踊として隣町樋脇の倉野部落のヤッコ踊といふのがある。ヤッコ踊とはトツグワ(トキハス、キ)のヤッコフリと謂つてトキハス、キが長い穂を出して初夏の軟風に大揺れに揺れる様になつた時

一、郷中の篤農家、篤技家に求め理心技一體の修練をなす

教師用書により指導精神を體得しても直ちに具體的實踐に下りることは困難なことである。それは實踐の地盤としての郷土の自然の在り方に即するための研究的勞作を必要とするからである。實にイネとイモを中心とする理科實踐の上に組立てられた本學年の理科教育は特に郷土の自然現象に即應し隨順するの態度に徹しなければ全然指導が出来ない。然るに郷土の自然に即應して豊富な實踐力を體得するには、

1. 教兒一體となつて郷土の山野を跋渉し生き物と環境とを一體の中に學修すると共に、
2. 多年眞剣な生活體驗を積める篤農家、篤技家に求めて最もその郷土に即した具體的方法と技術とを修練すると共にその態度を學ぶことが肝要である。

そこで私共は教師用書を手にするや繰り返し繰り返し熟讀の上、これが指導精神の把握に努め夏季鍛鍊期間を利用して夫れ々の篤農家、篤技家を訪ねて教を請ひ次に掲げる如き我が川内市に最も即した仕事計畫表を作り上げこれに従つて本學年の理科實踐を進めて来たのである。今反省の二三を述べて大方の参考に資したい。私共は兎其の他を飼育して理科實踐を修練し來たつた

期が田植に最も良い時期であるといふ古因に由るものだからであつて、このヤッコ踊の奉納が終らぬうちは決して御田植をはじめない慣習となつてゐるのも面白い。教師用書一〇二頁、一〇七頁には夫れ夫れ「作物の栽培は自然に従つて行ふべきこと」「自然現象に順應した栽培を行ふことの大切なことを重ねて教へてあるが、郷中の篤農家がよくこの精神を體得實踐してゐる。なほ「大豆の種マキは柿の双葉に豆三粒を包む程度に伸びた時期、粟の種マキは金柑の三番花が時期と申して所謂機械的な曆によらず作物と同じ環境にある生物の移り變り、而も年々による氣象の變化に最も即應する具體的な郷土の自然の在り方に素直に順應しつゝ實踐すべき貴い教訓を受けた。私共はこの郷中の篤農家の態度を學ぶと共にこの學ぶこと夫れ自體に私共の最も具體的な創造への實踐を見出さねばならぬ。

二、仕事計畫表を整備す

長期間に亘る一聯の仕事に繼續的に實踐せんとする本學年の理科教育に當つては一教材、一仕事を取り出しての教材研究の下に來週取扱ふ程度の準備を計畫位では教師用書が要求する季節による適宜な取扱ひ、教科目相互の聯關による理數科一體の精神を十全に活かすことが出来ない。一年を通じての全體の計畫に於ける一教材、

更に今日の仕事―明日の仕事にかゝらねばならぬ。この點に鑑み私共は先づ教師用書により指導精神の體得に努め、一方郷中の篤農家、篤技家に求めて郷土の自然に即した具體的實踐内容を學ぶと共に夫々學校生活機構に應じて仕事計畫表を作製しこれに従つて實踐を試みてゐる。何れの學校でも此の實踐指針の効果を大いに認め感謝されてゐる。今後毎年の反省により修正を加へ、つねに可動性をもつ進歩的なものに仕上げて行くつもりである。

三、少年團作業基礎訓練に求む

少年團作業基礎訓練の一部を「大根ノ種マキ」に活用して大いにその効果を認められたのでこゝにその概畧を述べることとする。

川内市では大部分が商業地帯であつて十分なる栽培園を求めることが出来ない。従つて僅かの栽培園を設けたの狭い土地に多数の子供が同時に作業せねばならぬ状態にある。先づ狭い栽培園の中に四人組の畠が作られる。通路も最低限といふより無理に詰められる。お互が思ひ思ひに仕事の都合々々で鋤を振り上げると隣の組と突き合ふ。そこで一々教師の命に従つて仕事が順序よく而も整然と進行する。「各組は自分達の畠を前にして北面、縦に一列」「番號」「一、二、三、四」「一番鋤、二番三番肥料桶、四番柄杓、位置につけ」で夫れ々々の分担

四、理數科教育推進員

―最後に學校經營の

組織機構の中に求む―

以上述べた事柄のすべてを全職員にのぞむことが出来るか否かを反省したい。國民學校誕生以來益々教員の質向上と研究とを要望せらるゝの切なるに反し最近の實状はあまりも皮肉である。教員の移動多く、ために一方では缺員を生じ他方質は低下し、それにも増して對外的な事柄にいよゝ煩瑣を加へその結果は教師用書さへろくに讀まれてゐない傾向がある。斯くの如き事情に鑑み吾々は一つの學校、或は一地方に於いて「よし理科のことは引き受けた」と一般教科目の一通りの研究の上に更に理科實踐の具體面に創造して立つ訓導たる使命を自ら任じて立つと共に、現下國民學校經營がかゝる推進員に俟つもの多きを自覺せねばならぬ。然してこの推進員のもつ性格も亦國民學校の組織機構に即應すべきは當然である。即ち理數農工家事體鍊等一體の統點に立つ鍊成機構を樹立し、この組織の中に全職員、全兒童を置くと同時に、自らその陣頭に立つて先導する底の計畫性と實踐意慾との旺盛なる性格をもつ推進員こそ私共が大いに希む

川内 一四二

と位置に着く。「鋤の者北面して右手前」「或は東面して左手前」等縦横に耕やさせる。この間に肥料桶のものは肥料桶に示された通りのしも肥を用意して擔いで来る。かうしてどんな狭い處でもお互に突き合ふことなく又極めて時間を經濟的に仕事を能率的に進めることが出来る。技術面に於ける修練が國防上極めて大切なるは前に詳しく述べた。特に四年生の理科が余程工夫し計畫を綿密にすると共に、子供の作業を能率高く饒けられておなければ時間の不足を生じ到底各教材を終へることの出来ないといふことは理科一に對する全國共通の憫のようにも察せられる。然るに私共はかうした最も手近なそして足下に横たはる具體の創造に着眼して教師自ら創造し實踐すべき幾多の問題があることにお互ひ氣附かぬのではなからうか。

四、必要なる施設を完備す

最低限の施設が必要なるはあまりも分りきつた事である。殊に觀念の理科教育から實踐の理科教育へ大轉換をした國民學校理數科、理科就中初四の理科教育に於いては言ふまでもない。然るに本縣教育界ではこの施設が極めて貧弱である。私共は必要なる施設は教師の勞作に訴へても、とにかく何としてもこれが完備に今一層の奮起とかうした機運とが必要である。次に私共の年次的施設計畫の實際を圖示しよう。

ところのものである。そしてこの訓導の仕事を中心にして、はじめて學年、學校經營に於ける教科經營の生々たる姿を發揮し得よう。

教科經營の研究が從來兎角その教科の理論的抽象的研究に終始して旺盛なる實踐力に培はれ得なかつた點を私共は大いに反省してこの稿を結び度いと思ふ。

川内 一四三

初等科理科教育の方法

肝 屬 郡

肝 一四四

目次

はしがき	×
第一章 理科教育のねらひ	
第一節 理數科は	
第二節 理科は	
第二章 現状の反省	
第三章 五・六學年理科指導の方法	
第一節 基調	
第二節 實際	
むすび	

はしがき

今や皇國民の總力は、大東亞戰爭完遂に結集されてゐる。大東亞戰の完遂に科學日本の建設、科學教育の振興は特に現下の國の要請である。此の中に在りて皇國民鍊成の基礎を建設せんとする國民學校教育に於ては、理科

教育が之に參する眞摯なる實踐道場である。理科教育の本道を経に行せんとする吾人は自己を虚にし教育報國の誠を致し皇民鍊成に邁進せねばならぬ。
こゝに五・六學年理科教育の方法を述べるに當り、國民學校精神の具体化を目標とし、先づ理科教育をねらひを定め、現状を反省し五六年の特性をみ之を土台として指導の姿が如何にあるべきかを述べよう。

第一章 理科教育のねらひ

第一節 理數科は

國民生活の理知的分野を中心として國民の理知的活動を盛んにすることを任務としてゐる、而して數理的なものを中心とする部面が算數で、科學的なものを中心とする部面が理科である。然も兩者は相依り相扶けながら各分野の特徵を發揮することに依つて理數科の目的を達成し皇國民の基礎的鍊成をなすのである。

第二節 理科は

要旨 理數科理科ハ自然界ノ事物現象及自然ノ理法ト其ノ應

用ニ關シ國民生活ニ須要ナル普通ノ知識技能ヲ得シメ科學的處理ノ方法ヲ會得セシメ科學的精神ヲ涵養スルモノトス。とある。

即ち理科は國民の隨ふべき道の理知的方面の修練として特に物象のありのままの姿を素直に捉へ、すぢみちを辨へ、これに適つた行動をなし、更に之を發展させ新なるものを創造することの修練をなすものである。

従つて對象に對する「はたらきかけ」は實際の物象に直接して特質を知り關係を掴む「見方」、實際に即して確める「考へ方」、物の性質理法に順應し様とする「扱ひ方」で、之が理科に於ける「はたらきかけ」の特徴である。この過程に於て知識が獲得せられ、技能の練磨がなされるのであるが、其の知識技能は自然界の事物現象及自然の理法と其の應用に關し國民生活に須要なる普通の知識技能及び科學的處理と限定されてゐる。

而して理科指導を通じて涵養せられる精神は科學的精神である。此は自然のありのままの姿を掴み自然の理法をみいだし辨へ、之に循ひ更に新なるものを創造せんとする精神であり、その根底には自然に親しむ心、自然と和する心がなくてはならぬ。同時にあくまでも現實に即して正しく、くわしく、明らかに物事を考察處理する精神態度であり、又常に工夫を巡らし物事のはたらきをよ

くしよりよきものを生み出さうとする精神的態度である。この精神態度は考察處理により養はれ、又考察處理はして注意事項として、

- イ、自然に親しみ自然より直接に學ぶ態度を養ふに努めること。
 - ロ、自然界に於ける事物現象の全体的關係の理會に努め進んで自然の妙趣と恩恵とを感得させること。
 - ハ、植物の栽培動物の飼育をなさしめ生物愛育の念に培ふこと。
 - ニ、科學的技術の修練に努め日常生活に實踐せるやうに指導すること。
 - ホ、發見創造の喜びを感じさせ發見し創造する態度を養ふに努めること。とある。
- 以上を狙ひとして現状を聊か反省したい。

第二章 現状の反省

國民學校の理科は自らの力に依り法則原理を發見し、之を應用實踐し、更に進んで新しきものを創造せんとする皇民の基礎鍊成をするのである。然るに未だ小學校時代の概念的注入的教育が幾分残つてゐる様に思はれ、又國民學校の精神が十分に理解されてゐないきらひがないでもない。

○教師 何と云つても理科教育を眞の委たらしむる根本は教師にある。學校の全教師に理科教育の根本態度が十分に出來てゐるか、反省すべきである。不知不識の間に教科書の事項を知識として授け實驗觀察、飼育栽培等は知識の方便とし、記憶を強ひ兒童の心理に悖り、生活と離れ自發心や創造心を伸すことを忘れるが如き事が無いとは云へない。

我々の目指すところは記憶では無い眞の科學的力である。故に教師は指導の体系を確執し、具休案を持ち急がずあせらず、科學心の向上に勉めねばならぬ。然るに教師自身の生活は眞に科學的で合理化されてゐるか、又如何程兒童の友達であるか、それが兒童に如何程の感化を與へつゝあるかを思ふ時、小學校教育その儘の惰性的教育が現在心の何處かに残つてゐる様な感がある。

直接させることに重きをおくと上滑りした學習となり、又論理的の研究のみを重んじては理窟詰めの學習となるが如き、捉はれた學習もないではない。

今こそ眞に理科教育革新の急を痛感する我が國の現状である。大東亞の民族を率ひて立たねばならぬ日本人は國內に於て世界に冠たる科學を建設せねばならぬ時に立到つた。此の秋に當り最も大切な小國民の科學教育の大部分を掌る理科教育者として、眞に徹底せる理科教育

栽培飼育其他種々の施設がなされるが其の管理が高學年でなされ學習の時のみ低學年が世話するのは理科の精神に適つたやり方ではない。設備の優秀は肝要であるが、何と云つても之を使ふ者が本當に理的に地についた使ひ方をなし、何物かを兒童に植付けねばやまぬ設置でなければならぬ。又藝能科工作等と關聯し、教兒一体となり器具機械を製作修理し或は蒐集整理し、誰にでも使へる生きた設備でなければならぬ。更に學習の場を學校に限定することなく自轉車屋に或は公園へと廣げねばならぬ。

只二三の例に就いて述べたに過ぎないが施設經營は科學的雰囲気を作る事であり、之に依る不知不識の科學心發達と意識的な科學心向上の目的に合致せるものでなければならぬ。要するに國民學校の精神が十分に理解されず未だに小學校時代の概念的注入的教育が幾分残つてゐる様に思はれる。

第三章 五、六學年理科指導の方法

第一節 基調

一、學年的指導の体系

体系のない指導は時間と努力の浪費となる最も經濟的

の信念を打樹てねばならぬ。

○兒童 科學振興の聲と共に日一日と兒童の科學心が伸びつゝある。然しながら他から命せられなくとも自發的に研究すると云ふ域にまではまだ達してゐない。例へば、

日曜日の子供の自發的な遊びを見る時朝からトンゴを追ひ出してゐる。勿論理的に見るのであるが、稍々もすると只澤山捕へて投げ散してしまふ様な事になりがちである。幼虫は、卵は、等考へ之を飼育研究するが如き積極的態度が薄

い。

我々は常に兒童を無意識的生活から意識的生活へ然も持久的數量的生活へと向はせ、眞に科學的に考へ行ふ力のある兒童の養成に邁進すべきである。

○設營 從來は設備が全教師に理解されず理科室は活用されず、只主任や部員の理科の如き感があつた。かゝる經營から學校全体の理科へと其の根本が變るべきであり、教師の總てが理科主任であると云ふ精神と責任を持つ様にならねばならぬ。

器具機械等は殆ど店に依存し、兒童の實生活とかけ離れたものが多かつた。時局より考へる時、用具に捉はれる事無く生活中の物を活用し實驗に親しませることが肝要である。

に教育効果をあげるには學年的な体系を教師がしつかり握つてゐねばならぬ。次に學年的体系を教師用書に求むれば、

○第一期—一、二年—初步的段階

對象は常に兒童の身邊にあるものを取り、考察處理は素朴的で、自然の中に面白く遊ばせる間に科學的な芽を伸す、即ち知的技術的よりも趣味關心に重きを置き、色々なものあらゆる角度から豊富に觸れさせ、神秘的事實をみさせて神秘を感じしめる時代である。

○第二期—三年—過渡的段階

生活させることに依り次第に組織的な學習へ向はせる。而して對象は身邊のもの、考察處理は素朴的な中に次第に組織的へと導くのであるが、決して急いではいならない。即ち本期は第一期初二の延長であり、然も次の初四の基礎として、取扱ひがなされねばならぬ。

○第三期—四五六年—

理科の獨自性發揮の段階

教材の排列を整備し、科學的に考察處理することの基礎的修練をなし、基礎的知識技能を体得させる。即ち第一期以來培つて來た考察處理を次第に科學的本道へと導くのであり、科學的態度の基礎的鍊成をなす時期である。

○第四期—高等科

國民文化及び國民の實生活に於ける科學的方面の考察に重

点を置き、且つ國民としての科學的技術の修練を重視する。以上四期に分つて略述したが、勿論之は劃然とした區別ではない。要は合理創造の精神養成といふ目標に向つて自分の兒童の程度と郷土とを考慮し、一步一步と學年が進むに従つて程度を高めて行くべきである。

二、特性——第三期……(一・二・四期は省略)

1、對象

兒童の環境の擴大に應じて對象の範圍も廣くなり、知識の進むに伴つて新しいものも採上げるが常に兒童生活に近いもの興味を引き必要を感じるものを選ぶべきであり、又基礎的能力修練に必要なものは對象とすべきである。初四以下の對象よりみて、体位向上及物象製作に關する對象が多くなるのではないかと思ふ。

2、考察處理

「觀察」、は直觀的なみ方と共に次第に分析的部分的觀察へ、更に綜合的全體的な觀察と相俟つて理論的直觀の能力を養ひ、ものごとの眞實の姿を把握する様に導き又長期の繼續觀察・精細な比較觀察數量的なみ方へと仕向ける。

「思考」本期は兒童の理知も相當に發達し、論理的に納得出來ねば承認しない態度を生じ、空想と現實がはつきり分け、現實に立脚した明確な判斷を要求する時期で

ある。今までの初歩的訓練を基として論理的な思考へと進め、分析して綜合判斷する方向へと向はせねばならぬが、兒童の程度に應ずることを忘れてはならぬと共に僅かな經驗より簡單に結論を導き一般化することをさげ、結論は現實にあてはめて實證せねばならぬ。即ち分析抽と實證とが相伴ふ様にせねばならぬ。其の態度としては主客一如の姿を失つてはならないが、主客の分化に伴ひ客觀的に物を見る態度を養ふべきである。

「處理」、前期の程度を高め特に蒐集採集は目的をはずきり限定し範圍を擴大して行はせる。分類も既成の分類法の注入でなく、目的により都合よい分類の仕方を指導する。測定・記録も製作も程度を高め、尙實驗方法の指導も必要である。

「知識」、考察處理の過程に於て知識を得しめるのであるが、かくして体得せる知識を整理し、知識が生きて働く様にすることが大切である。即ち事實に即して最も重要な点はどこかを見定め、それが頭にしつかり入り、既得の知識の中にとけ込んで更に考察處理を進めて行く基礎となる知識でなければならぬ。

以上一般的な特性であるが之のみにては眞の方法は打樹てられない、自校の兒童が如何にあるかの科學的調査に立つ方法でなければならぬ。

第二節 實 際

一、教材の指導力点

教材を判然と區別することは困難であり又分つべきではないが、説明の便宜上左の四つに分つて指導の力点を述べることとする。

1、生物教材

要旨 觀察栽培飼育ニヨリテ生物愛育ノ念ヲ養ヒナガラ、生物ヲ正確ニ考察處理スル態度ヲ養ヒ、生命アル物ノ眞實ノ姿ヲツキトメサセル。とある。

生命ある自然物の研究であり、生活の姿生命のあり方をつきとめるのであるから、生態中心の研究でなければならぬ。それが爲には生物を環境と關聯のもとに於て、分析的部分的に研究せしめると共に全體的綜合的に研究せしめねばならず、飼育栽培繼續研究が重要とならねばならぬ。例を「種子の發芽にとる。」

教材の關聯より發芽の條件が主となるべきであるが、従來の如く教室實驗のみに依る繼續研究ではない。實地に播種せる研究と比較し、然も一生を一聯のものとしてみることにより、覆土灌水種子の變化・太陽との關係が明瞭となり、發芽の眞の姿は理會される。更に間引・追肥・除草等により根毛・向日性・向地性等の發見となり、如何に環境と關聯を持つかもわかり、生物の生きる姿も掴み、生命の在り方もわかる。又學年的關聯を考慮し、初四以下に於てなされた個々の

研究を一步進めて、分析的論理的研究へと進め、然も全體的な關聯に於て高次の理會へと導かねばならぬ。

2、体位向上教材

要旨 人体ノ構造機能ヲ明ラカニサセ保健衛生ノ實踐ヲ指導シ、國民体位ノ向上ヲハカル。とある。

對象は高尚なる精神生活をなす自己自身であるが、研究は多くは間接的で直接的な把握が困難である。指導は標本・模型・掛圖等を利用することが多いが、常に自己身体の理解に意を用ひ、身体の健全なる發育に對する理解を得させ体位向上の観点から正しき生き方を自覺させ之を實踐せしめる様にせねばならぬ。

消化に例をとる。教材「食物」の營養的研究に續いて本教材を考察し更に次の血液循環へと關聯をもつことを考へると本教材取扱の根本態度は明らかになる。消化器の構造の研究よりも機能の研究を主とすべきである。而して消化器の各部はすべてが關係を持ち、又他の器管及び精神作用とも關聯をもつ、故に全体より部分へ、再び全体へ然も部分的研究の際も全体を常に忘れず。又自己の消化器の理解が目的であるが、故に過去の消化器病の經歴を話させ、其の原因を考察させ、或は身体検査の結果を利用し、消化器衛生の重要性を感じしめ作用へと進む様にする。構造に就ては自身の物を見ること困難であるが故に方便物を活用せねばならぬが、常に自己身体と對照させ其の位置大きさ等をさぐらせ、自己より直觀

方便物へ再び口已に歸る研究でありたい。尙消化の作用は物理的化學的に精神作用の關係大なるに依り、愉快に食べる事が必要である。又衛生に出發し生理解剖に進み、更に衛生に歸る研究でなければならぬが、衛生としては、よく嘔むこと齒磨、合嗽、過食せぬことは特に注意せねばならぬ。かくして生活實踐へ導き、生活を合理化し、國家の要求に添ふべく努めることが肝要である。

3、物象教材

要旨 自然界ノ物象現象ヲ正確ニ處理スル能ヲ養ヒ、物象現象ヲ貫ク理法ヲ極メサセ、ソノ眞實ノ姿ヲツキトメサセル。とある。

對象は衣食住等の日常生活に關係深き物の中基礎的事項を選び、理法の發見、理法と應用の統一、或は性質と用途の關係を求めらるるのであるが、勿論既成の知識の注入でなく、考察處理の態度能力を養ふのである。その過程に於て最も基礎的なる知識を得させ、物象現象の本質に觸れさせねばならぬ。酸を例とす。

食膳にのぼる酢、密柑酢、腹が痛い時に飲む梅酢等が兒童生活中の具体の酸である。たまにはプリキ屋で鹽酸に接した者もある。硫酸の如きは殆知らないが、家で硫酸を用ふるので無縁の如き硫酸もこゝに連りをもつ、かゝる酸に就いて研究するのであるから、具体の酸、酢より出發し生活經驗と疑問を基として酸の性質に對する實驗が生れねばならぬ。即ち

何故梅干を入れると辨當箱に孔があくかの疑問の解決として金屬に對する反應が考へられ、實驗方法の工夫が生じ、眞に自發的な考察となり、ひいては動植物に對する作用の發見となる。更に性質作用を事實に就て證する態度となり、如何に利用されるかも理解し、合理的な生活へと進むのである。更に秋分について述べると、教材が天文教材だけに三球儀や掛圖のみに依る研究で終りがちであるが、理科の本質に即した研究をなさせるには、先づ教材の要素的な生活經驗をさせることから始め、太陽の出入の場所、時刻、南中の高さ、影の長さ及び晝夜の長さ、氣候、更に動植物の變化等を繼續的に觀測、記録し、之を基として模型掛圖を活用し、あくまでも事實に導いて歸納し、更に多方面に經驗させることにより反省を加へ確たる法則を捉へる様に導かねばならぬ。かくして始めて秋分の眞の理解はなされ、自然に對する驚は敬虔の念(神秘感)へと發展するのである。

4、製作教材

要旨 自然ニ人工ヲ加ヘタ物ヲ考察サセ、ソノ構造機能ヲ明ラカニサセルト共ニ、ソノ活用ニ慣レサセ、尙コレヲ通ジテ理法ヲキハメサセルト共ニ新ナルモノヲ工夫創造スル態度ヲ養フ。とある。

主として科學技術活用部面に就いての指導である。五・六年では日常生活に使用されてゐるもの、其他人工を加へた物を對象とし、製作すること使用することにより

創造の精神も涵養され、製作意慾も生するのである。

次に教則に關聯して指導の過程を述べることにする。

1、直接せる科學的生活

教則 ●自然ニ親シミ自然ヨリ直接ニ學ブ態度ヲ養フニ努メル

コト

- 必要ト興味トヲ感セシメ、自發的活動ヲ促スコト
- 兒童生活ニ即應シ兒童心身ノ發達ニ伴ヒ個性ニ適應シタ指導ヲスルコト
- イ、共同學習前に於ける話合

○家のポンプを使用しながら工夫して調べること

○どうして水が上がるか、水が出ない時の故障は?

○近所の異つたポンプも調べる。こと等に就て、

ロ、具体に即する科學的生活をさせる。

○構造に就いては畧々理解し各部の名稱を尋ねる

○辨を發見して喜び其の開く方向を發見する。

○水を入れれば水があがらないと訴へる。

科學的生活は種々の疑問を生ずる、教師は適當に暗示を與へて生活させる。生活中の疑問の主なるものは、水の上る理由、消火ポンプの水の勢よく飛ぶ理由、活塞に皮のある理由等である。

かくして無意識的な兒童の生活は意識的科學的へと變り、興味と疑問を生み、眞の自發的學習となり、常に現實に忠實なる態度となるのである。

り理法を發見し、其の理法を應用することにより立派な製作たらしめ、よりよき使用たらしめ、理法と應用の統一、性質と用途の關係を掴ませ、其の間に科學的技術を會得せしめ、工夫創造の精神態度を養はんとするものである。又自然物に人工を加へると云ふことは物と人の「はたらき」が一体となつたものが創り出されることであり、その物と使ふ人の「はたらき」が一体となつた時に物の「はたらき」は十分現れる事を心得て指導すべきである。

製作教材に於ては常に諸用具の取扱ひ方及び整理整頓に留意し、更に材料の經濟的使用の訓練にも十分注意せねばならぬ。

本教材は創造力の養成、生活の科學化、國防上極めて重要な教材である。

二、指導の具体——初五、ポンプ

具体のポンプは家庭用の吸上ポンプや消火用ポンプ等である。其の原理は水鐵砲として兒童の生活中に生きてゐる。そこから指導の手掛りは得らるべきである。從來の如く實驗器具のみによる原理の教授で無く、具体のポンプの使用分解、組立をなすことにより、其の構造機能は關聯的に理解され、理法も發見し、取扱ひにもなれ始めてポンプの活用も出来るのである。其の間に於て工夫

2、具体の経験發表

△活塞の辨に就て

手を圓筒に入れ軽く辨に觸れて活塞を動かすと、活塞が下へ行く時は辨が上に開き水が上つて来る。活塞が上へ行く時は辨が閉ち活塞の上の水が持ち上げられて出口から出る。圓筒の辨に就て

活塞を抜いて手を入れると圓筒の下の方に辨があり、閉ちてゐる。辨を開け様としても開けられない、それは上の方の水が活塞を壓してゐるからだと思ふ。

△辨の動き方に就て

本當のポンプは外から内部が見えないので、ガラス製の實驗用ポンプで研究した。活塞が上へ動く時は下の辨が上に開き水が上り、活塞が下へ動く時は圓筒の辨が閉ちて、水は活塞の辨をおし開いて上にあがる。

△活塞の皮に就て

家のポンプが水が出なくなつた時、活塞と圓筒の間から空氣が入るので、父と二人で皮を變へると、隙がなくなり大變きつくなつて水がよく出る様になつた。それで活塞についてゐる皮は隙間を無くする爲めだと思つた。

△其他種々なる發表をなす

從來の如く教室のみによる學習ではいけない。學習の場は廣い、家庭に、工場に、學校に、野外に、之等を自由に使ひこなさねばならぬ。本教材は家庭と學校が其

△活塞の構造、辨の開き方構造を明確に見せる。

○今一度各部分が如何に組立てられてゐたか、それがどんなに動くかを部分品をみながら考へさせる。

○圖を書きながら實際のポンプと比較しつゝ、實驗考察させる。特にどこに注意して研究すべきを念を押す。

ク、論理的的研究による確認

○兒童各自實驗器具を準備し、圖解、考察し、次の如く構造機態を明確につかむ。

活塞を下へ動かすと
下の辨が閉ち、

上の辨が開き……圓筒内の水が辨の上に出る。

活塞を上へ動かすと
上の辨は閉ち……活塞の上の水は流れ出る。

下の辨は開き……下方の水が圓筒内に入る。

ハ、組立及び檢證

の主なる場である。而して直接させ、實踐させ、兒童の具体的直覺的な把握を重んじ、之を基として論理的研究へと進めねばならぬ。かくする事により兒童は自然の物象に就て直接に學ぶ喜びを感じ、興味を持ち積極的な態度となるのである。

3、構造機能の体得(○教師△兒童)

教則 ●モノゴトヲ分析的論理的ニ推究スル態度ヲ養フコトヲ重シズルト共ニ、全体的直學的ナ把握ノ仕方ヲ重視スルコト

●自然界ノ事物現象ノ全体的關聯的ノ理會ニ努メ進ムニ

自然ノ妙趣ト恩恵トヲ感得サセルコト

●科學的技術ノ修練ニ努メ日常生活ニ實踐サセルヤウニ指導スルコト

イ、分解——具体即構造機能の理解

ポンプ全体を念頭において、兒童と話し合ひながら分解させる。

○何處からはづすか？

△活塞を取りはづす、

○活塞をはづすには？

△ナットを緩める。

○道具は？

△スナバ、

用具の取扱、ナットの廻し方の指導をする。

活塞を抜がせ、圓筒と密着せることを確める。

○構造と今の實驗とを比較しながら、全体としてのポンプを考へて組立てさせるのであるが、常に部分品は順に、然も應を拂つて丁寧に取扱ふこと、ナットは緩める時の反對で右廻りにしつかり締めることに注意させる。尙すべて機械器具は生命あるものとして取扱ふ態度でありたい。

△自らの手により組立てる。

喜びが生れる。

○組立が終つたら、正しく組立てられたか必ず檢證させる。

かくして構造機能は明瞭につかみ得るのであるが、水の押上げられる原理は依然として不明である。こゝまで研究を進めた兒童は必ず其の原理の解決へと進むであらう。

取扱は全体的より部分的分析的へと進み、再び全体に歸り、あくまで事實に忠實ならしめ、観ては考へ、考へては觀る態度で進ませる。其の間に自力解決の信念を持たせる様に努めると共に、實驗は常に具体のポンプの理解の爲に行はせること忘れてはならぬ。從來の學習の如く、模型ポンプの研究のみで終るべきでは無く、又模型ポンプの發展として具体のポンプを研究すべきでもなし。

兒童が具体に直接し、實踐して學び得たことには實に尊いものがある。時には大人以上の鋭い觀察考察をすることもある。然し余程理知的になつたとは云へ、まだ主

観的獨斷的な部分があり、時には感情に動かされ、或は論理性に欠け、又中途で行惱む様な事もある。本教材に於てもポンプの構造機能はよく研究してゐるが、大氣の壓力に依り水が押し上げられると云ふ所迄突き進んで考へず、只活塞に依りて吸ひ上げられる如く早合点してゐる。兒童が多い。そこに兒童の特質が窺はれる自分の兒童の特質を科學的に研究し、日々の兒童の生活を見極め、之を土台として次第に分析的論理的研究へ、關聯的綜合的研究へと向はせなければならぬ。而して直接させることに提はれては微温的な上滑りした研究となり、分析的論理的研究に提はれては、興味をそぎ自發心を押へることになる。

要は提はれることなく急がずあせらず、科學心の伸展に努むべきである。

4、原理の發見

教則●既成ノ學問ヲ前提トシタ知識ヲ教ヘ込マウトスル態度ヲ避ケ、モノゴトヲ正確ニ考察處理サセ、眞實ノ姿ヲツカマウトスル精神ヲ涵養スルニ努メ觀念的知識技能ハソノ過程ニ於テ自ラ獲得セラレル様ニ心掛ケルコト

●自然界ニ於ケル事物現象ノ全体的關聯ノ理會ニ努メ進ムテ自然ノ妙趣ト恩恵トヲ感得サセルコト。

○今一度ポンプの水の上る理由を考へて行はせる。
△空氣が入らねば水は上りません。空氣が押し上げられるのです。ポンプも空氣が水を押し上げるのです。水鐵砲もです。スポイドもです竹筒で水が吸ひ上げられるものでもです等。
○大發見ですと褒め、其他の實例を考へさせ、兒童の胸は原理發見の喜びに躍る。

ニ、實證—原理の確認

模型のポンプや具体のポンプで原理をたしかめ、兒童は自らの力により次の如き眞の理解を得る。

活塞を上へ動かすと……活塞の辨が閉ぢ

圓筒内の空氣が薄くなる(活塞、圓筒密着の理)

井戸の面を壓す空氣の力が押し上げられ下の辨を押し開いて水は圓筒内へ、

活塞を下へ動かすと、

活塞で水が壓されて圓筒の辨は閉ぢる。

水は活塞の辨を押し開いて上に出る。

結局空氣の壓力に依ることを確認する。

兒童は消火ポンプの研究を要求するであらうが之は省略する兒童が研究し發表した理法は、一應是を肯定して認めたり、教師の適當な暗示と指導により、兒童の力に依つて其の誤を發見せしめる。而して兒童は自ら發見した原理が獨斷的主觀的なりし事に氣づき、どうにかして理法を發見しようとする。教師は機を逸せず次の實驗考察

●發見創造ノ喜びヲ感ジサセ、發見創造スル態度ヲ養フニ努メルコト。

イ、兒童の假設

△竹筒で水を吸ふことから……吸ひ上げるのだ、スポイドのことから……吸ひ上げるのだ。
水鐵砲の實驗から……ポンプは水を活塞で引き上げるのだと思ふ等種々である。

○よくポンプのことを考へながら験せしめる。

△硝子管、スポイド、水鐵砲等で今一度ためす。吸ひ上げる、活塞で引き上げる、區々である。

ロ、假設の否定

○完腸器に水を半ば入れ下をつめ活塞を引かせる。
△始めて活塞で引き上げられないことに氣づく。

○ゴム栓に硝子管を通し瓶に水を一杯入れて、栓をきつくして水を吸ひ上げさせる。

△吸ひ上げることま引き上げること出来ず、今迄獨斷的に考へてゐたことの誤りに氣づき、兒童の假設は破れ更に原理發見の意慾に燃える。

ハ、原理の發見

○ゴム栓を少し緩めて吸はせる。
△意氣込んで實驗をはじめめる。そして栓が瓶の口にきつちり詰ること。空氣が隙間から入ること。水が吸ひ上げられることに氣づく。

へと進ましめ、正しき理法を發見させるのであるが尙之にとどまることなく、更に事實に照して實證させ、確實に理會させねばならぬ。かくして發見の喜びを味ひ、自然の妙趣恩恵を感得し、敬虔の念も抱くことになるのである。

5、實踐及發展

具体のポンプの眞の理解は使用上の注意の發見となり無理の無い使用へと導き、更に故障の修理、水鐵砲の改良、簡単なポンプの創作へと發展し、生活は合理化されるのであるが、其の後の研究は理科會等に於て發表させる様にする。

むすび

狭い經驗を基として、國民學校精神の具体化に勉め、初等科五・六學年理科教育の方法として述べた。然しながら教科書は從來のものであり、教材も不明で具体的にと思ひつゝも意の如くならざる点が多々あつた。何と云つても指導法を支配するものは「方法の体系を持つこと、兒童の心理作用をよく考慮すること」にある如何に教師が教材に明るくとも、如何に熱心でも、それのみではいけない、教師は常に兒童と共に研究し、人格的感化の強い者でなければならぬ。

理科教育は教師と兒童の科學的精神の交流に依つてなされるものである。

國民學校の理科はむつかしい、出来ないと悲觀する必要はない、兒童と共に具体に即して研究するのが理科である。理科程やりやすいものはないのである。我々は何の不安もいらない。教師用書の精神をよく理解し、郷土と兒童を考へ、六年八年の体系を立て、急がずあせらず大きな氣持で、地についた指導をなし、良き日本の子供の養成に努めねばならぬ。

國民學校に於ける 理數科理科教育の方法

(但し高等科理科經營案)

大 島 郡

目 次

- 序
- 第一章 理科教育の使命
- 第二章 高等科理科の性格
- 第三章 指導の實踐形態
 - 第一節 教材に對する態度
 - 第二節 教材配當案
 - 第三節 教授案例
 - 第四節 生活指導の實際
 - 一、環境の生活化
 - 二、年中行事の科學性強化
 - 第五節 本郡生物の一考察
- 結 語

序

大東亞戰爭勃發以來宣戰の大詔に勇躍した皇軍の赫々

たる戦果は世界史上未だ曾て其の類を見ざるものがある。これ素より御稜威の然らしむる所で眞珠灣頭に於ける特別攻撃隊の活躍不沈艦を誇りしプリンス、オプウェルス號の悲壯なる最期の斷末魔の蔭には日本独自の科學精神が潜んで居ることは見逃せない事實で如何なる難局に再會しても冷靜正確に科學的準備を盡して皇國の爲に一路邁進する皇民の傳統的日本精神の現はれである。億兆一心國民の其のあらゆる階級を通じ職域に於て科學的な躰と技術的な教養を備へねばならぬ秋が到來したのである。皇國へ奉仕するといふ實蹟を擧げるには、どうしても現實の力としての科學と技術とを再考し科學に依り技術に依つて偉力を發揮した産業であり軍事にして始めて眞正に高度國防國家を建設する國家活動となり得る。如上の觀點から皇民の科學心の養成は勿論教育の初期より十分留意せられなければならぬが高等科は初等教育の完成期に當り其の大多數の者は直ちに明日の實社會に於

て産業國防の第一線に立つべき使命を有する兒童なるが故に如何なる科學的素養を体得せしむべきかは國家的見地よりするも其の意義の重且つ大なるは多言を要せぬ所である。従つて高等科理科に於ては現代社會に於ける國民文化實生活に於ける事象を科學的に考察處理し得る能が修練体得されなければならぬ。それが爲には實生活を力強く具體的に指導する事である。右の論點を基底に於て郷土學校兒童の特殊性と即し實踐しつゝある實際案を平明に記述してみたい。

第一章 理科教育の使命

明治以來西洋の文明を取り入れた結果我れ我れの文化は急速に進歩したのであるが餘りに科學的眞理の魅力に幻惑して抽象的學問体系に食傷せざるを得なかつた。この知識は勿論決して無益ではない。廣く世界から其の生命の中に榮養を攝取同化しつゝ生成發展を遂げて來た。今日の理質文明の多くは西洋からの輸入物であるがこれ又立派に日本精神に取り入れられて融合調和されて來た事は大東亞戰爭に依つて事實的に立證されて居る。西洋流の單なる功利主義的のみ科學を見る事は大に排斥しなければならぬ。物心一如の一元的なものが日本精神である。従來の教育は動もすれば分離的に其の内容方法を

考へられたが國民學校の教育に於ては心身一体知行一如の教育が高調され一切が皇國の道の修練に統合せしめられよつて以て皇國民鍊成としての大眼目に歸せしめんとして居る。即ち感性の教育も知性の教育も皆皇國民を鍊成するのが根本的目的であつて國体に對する深き固き信念を有し國民意識が昂揚されて初めて眞の知識技能を体得せしむる事が出来るのである。斯くして國家産業の發展國防の充實の根氣を培養せらるるもの之に依りて初めて内に國力を充實し外に八紘一宇の肇國精神を顯現すべき次代の大國民を育成する事が出来るのである。理數科授業の方針の第一に「我が國に於ける科學の進歩が國家の興隆に貢献する所以を理解せしむると共に皇國の使命に鑑み文化創造の任務を自覺せしむること」を挙げ又第二に「數理及自然の理法を推究する態度を養ふこと」を述べ第三に「分析的論理的に考察する力を養ふと共に全体的直覺的に把握する態度を重んずる事」を述べ飽く迄推究し發明發見にまで至る精神の涵養が重要であつてそれには直觀力が其の源泉となると述べて居る。又第四に「觀察實驗を重んじ實測調査作圖工作等の作業に依りて理會を確實ならしめ發見工夫の態度を養ふに力むること」を擧げて居る。又從來國防と云へば軍人の仕事とのみ考へられ一般國民は關與せざる態度であつた。今日の

如き國家總力戰に於ては國民全部が一体となつて國防に當らなければならぬ。國民學校の内容に於ては各教科を通じて國防に關する科學教育が重視せられ第五に「國防に關する常識を養ふこと」が掲げられて居る。斯くの如く理數科を通じて皇國民のなすべき自分の教養を基礎づけ國運の發展に資せしめんとするのであつて科學教育は即ち皇國民鍊成の一翼となり青少年をして天業翼贊の大任を果さしめんとするのである。科學といへば物質利用の爲の學問とのみ解しおまけに時には科學を重んずることは即ち唯物主義であるかの如く考へたり理科の學問は特定人の珍品とされて其等の探究は専門家に委ねば宜いと言ふ考へは舊体制の考へである。生活の科學化とは物象實驗の様な手間取るものではない。問題は常に脚下に展がる吾が校では掃除後の汚水、塵の捨て方に於て「こうする事は科學的でせうか」と聞く。この生活の中には物に對する報徳の精神も自ら見出される。科學的生活とは決して無情冷酷な生活ではなく高雅な宗教的、藝術的、行的生活であり而かも能率的な明朗活潑な生活である。立身出世主義の歐米流の利己主義ではない。皇國に於ては一舉一動君國の福祉を考へての科學精神である。國民學校に於ける科學性強化は其の場限りのものでなく兒童には第二の性格となり一生涯的のものである。日本科

學が跛行的な歩みを續けて來た理由の一つとして支那流の迷信に依存することが多かつた。九星運命判斷、種蒔姓名判斷、旅行等、人間の生活に迷信の附随しないものはない位である。

然し國体に關する肇國の神話宗教信仰とは其處に日本人として強國なる區別と置かなければならない。神話は神話として日本人の絶對的な信仰にしてこの信仰に依り健全なる独自の日本科學精神も生れ出て來る。無知蒙昧時代からの種々雑多な迷信も良き科學研究の對象として研究のメスを揮ひ一應はこれと科學的に吟味し科學的に系統立られて來たのである。教師先づ地方の迷信を打破し大國民的生活をなす事に依り社會の科學的教養も高められる事と思ふ。斯くて學校教育の科學性強化を圖らんとするならば教育當事者がお互に科學修練の行者となり萬事を科學修練の態度で行はねばならぬ。お互ひが科學修練の行者たる時學校教育は自ら科學性を現はして來り其の強化は當然の結果を生む。科學的な素地を大海の様に廣く技術的なレベルを高原の様に高く建設するといふ事こそ我が國民學校理數科理科に尙せられたる科學動員に外ならないのである。

第二章 高等科理科の性格

高等科は兒童期と青年期との過渡の時期即ち青年前期であり身体の成長も旺盛で分活力握力が迅速に増加する。この時期の一般的特性として各兒童の個性が顯著となり反省的批判的となり自主的自律的活動の面が多く社會事象に對し興味を有すると共に社會的協同的活動に對する理解の度が高まつて来る。高等科の兒童は其の心理的特徴に於ても一言にしてこれを表せば「性格なき性格」に立到れる時期であつて其の身体的特質と相俟つて恰も一路邁進しつゝある列車の如く一步を誤らばとるかへしのつかない結果を招來する極めて危険なる時期である故にこの期は我が國力の消長に最も影響の甚大なる一般大衆の性格形成の第一關門に當つて居る極めて重大なる時期なのである。謂はば高等科の教育經營の如何は今後の大東亞建設の如何を物語るものである。吾が校區域民は各町村からの混合世帯を職業機業である高等科修了生中男子は阪神方面よりも滿支の軍需工業へ進出する者が多く女子は町の機業に従事する者が大多数である。初等科在學中は無二の親友なりし友も中學女學に入ると自然交際も疎んじ動もすると自己を卑下する傾向がある。學校出必ずしも出征しない事は町在住の商人を生きた手本として勵まし同じ高嶺に上る道はいくらもある事を肝に銘じさせて居る。今迄理科嫌ひな兒童も模型飛行

機の製作に興味を感じグライダーといふ一事物に依つて理科を觀る眼が出来理科愛好の精神が濃厚になつた事は喜ぶべき現象である。高等科理科に分解組立を重点に於いたのは此の期の兒童心理に合致してゐるものとみへる。これを國家的見地より見るに從來の初等科修業生の約七割は高等科に於て教育せられその大部分が直ちに各種産業部面の發展開發の樞幹をなす國民とする又國家の公民となり國防の第一線に従事するものも大部分は高等科兒童中より出でる現狀で其の教育の充實は重大なる地位を持つものである。故に第三期迄の基礎陶冶の上に國民生活に於ける事象を全体的に考察處理する能力の修練に重きを置かなくてはならない。國民文化及び國民の實際生活に於ける科學的方面の考察に重点を置き且つ國民としての科學的技能的修練を重視する。即ち高等科に於ては其の使命に鑑み國家全体國民生活一般を見渡して教材を選択して指導するのである。自然と國民生活との關係例へば産業國防災害防止家事等に關する事項が重點となるのである。社會の實務に就けば専門的な形式で學んで行くのである。在學中は國家として或る程度の潔りをつけておく必要はあると思ふ。そして低度乍らも一貫した理法を授け社會に出る基礎を鍊成する事になる。又時局柄國防上の教材に大いに力を注がれた所が見られる。

高等科の理科の精神も初等科と根本的に異なる事はないけれども理數科の目的より見て特に應用方面を實習的に課する事に一般の工夫を要する。理數科理科は理智的な國民生活の分野を担当して皇國民を鍊成するといふのが眼目であるから隨つて兒童の環境での具體的分野の縮圖となり。又兒童の生活に現はれる事物現象はそれ故大規模な國家的な實質的鍊成部面の投影になるわけである。「兒童から」とか「兒童の環境に於ける自然から」といふ事は右の様な大規模な國家的規格に漸次高めつつ鍊成して行く具體的な姿と考へねばならないのである。單なる兒童の興味に認めるのではない。又一面的な子供の好むがままに放任するのではない。右の様に歴史的國家觀に立つた兒童觀に依り其の理智的分野の鍊成に萬全を期せねばならないのである。

第三章 指導の實踐形態

第一節 教材に對する態度

從來教材が動もすると學問的体系に捉はれたり生活的でなく興味的でないもの多分に盛られて居た事は前述の通りであるが是等の教材を出來得る限り兒童の生活を見極め精査し其の中から具體的な綜合的な而も兒童の生活に關係深いものとして提供しなければならぬ。従つ

て郷土的であり其の兒童の程度地方の實情に應じて加除選擇されなければならぬ。然して之を行ふに際して二つの態度が考へられる。即ち一は現行理科書を文部省の經過規程を参照し最大限の活用をなすものと、一は國民學校の精神を検討し現行理科書を根底とするが比較的之に拘泥する事なく教師の取捨選擇をして立案實施するものである。當校に於ては全般的水準を高め實踐性のあるものを望む上から見て前者の態度を以て進み別載實施案例の如きものを考へてゐる。實業科藝能科體鍊科と重視してゐる部面は之が一体的取扱ひに依つて時間的には大きな節約となすと共に初期の目的を達する所以になる。又生理衛生教材に於ては其の實踐部面を體鍊科衛生部と結んで行ふ。本郡の特有動植物に就いては國家の資源上から地域的科學的に考察させる。即ち自然物と人工を加へた物を考察させ其の構造機能を明らかにさせると共に其の活用に慣れさせ尙これを通じて理法を究めさせると共に新たなものを工夫創造する態度を日常卑近の郷土物産に依り養ふことである。知識体系の樹立を目指す意味から子供の科學少年航空兵少年少女俱樂部其の他文部省推薦圖書を購入し科學的雰圍氣に浸らせる。殊に交通不便な文化機關に接觸する機會を得ない本郡兒童には讀書に依り幾分でも科學性の萌芽を啓培しようと努力して居

るのである。理科の學習は限られた時間ばかりではない。兒童の生活を背景にとりふりも二十四時間の生活其の物の中に學習を進め生活そのものの中に解明して行く態度でありたい。行住坐臥是學習でなくてはならない。教師も掛圖と臭い標本で抽象的な知識の傳受で終始しないで子弟同行實物觀察を主とする立前をとるべきである。室外の作業が従來の如く單に理科的知識を体得させる方便としての勞作でなく知識や技術も其の過程に於て必然的に取扱はれ解明して行く線の太い授業が望ましいのである。理科は平易だ面白いといふ第一印象を持たせるべきである。低學年に於ては観せる處理する力を重視し高等科に進むに連れて自然に解るといふ漫々のな行き方でありたい。四十分の授業に於ては片輪授業でもよ

い。簡単な目標に向かつて重点主義で進まなければ豫定の進行は無つヶ敷しいのである。戦時下資材の觀點より藥品機械の入手難は當然の事で機械がなければ出来ぬといふ自由な態度を改めて勇敢に現情を現にあるものをもつて解決し教兒共に工夫創造して行く事こそ現今の理科教育の目的に則るものである。而して新教科書が發行される迄は文部省の國民學校教則案説明要領及解説、初四理科教師用書を無二の教育方法の原理としてこれに基いて實踐して行くより他に道はない。現在の日本は汗牛充棟も蓄ならざる主義主張に左顧右盼朝令暮改漂々として操守する所がない有様では全我傾倒の修練の姿といふ事は出来ない。

第二節 教材配當案

月	四	月	五
三、校内の植物觀察	一、哺乳類 二、鳥類	書行理科 教材料	四、魚類と水産 五、大鳥の蛇類と兩棲類
二	三	時數	三、魚類 四、爬虫類と兩棲類
特有植物・藥草・毒草の觀察	郷土の牛馬・山羊・豚から研究を進め飼育法・増殖法をはかる 郷土の鳥類・渡り鳥を研究対象にし鶏の科學的飼養法	指導	三、一 三
植物愛護の念	鶏の飼育法	精神	食膳に上る魚から出發し本部の水産業の概略 毒蛇と人生、生態學的研究 咬傷の應急處置 如の耕し方用具の後始末 自然界の相互的關係 昆蟲標本に依り益虫害虫を分類する
	高女鳥當番決定	生活實踐	新鮮な魚の鑑別法 魚市場研究 ハブは神にあらず ハブ屋見學 農業 標本製作
		備考	

月	九	月	七	月	六	月	五
十五、硫酸銅と明礬 一四、マグネシウム カルシウム	一三、食鹽 一四、マグネシウム カルシウム	一、宿題處理	一〇、晒粉、ヨード チンキ、毒瓦	八、種蒔針植	六、七、昆蟲類	六、教材圖の入手	四、魚類と水産 五、大鳥の蛇類と兩棲類
二	二	一	三	五	三	一	三
電池、銅液、顔料の原料 人生との關係を考察せしむ	二品の性質を比較、性質用途 性質相互的に取扱ふ	學級研究發表 展覽會 既知未知、具体抽象 理科の平俗化	模型ヒコキ、其の他工夫考案に依る製作 動物標本	種蒔移植の事實から原理原則を把握するや 工夫する	昆蟲標本に依り益虫害虫を分類する	如の耕し方用具の後始末 自然界の相互的關係	食膳に上る魚から出發し本部の水産業の概略 毒蛇と人生、生態學的研究 咬傷の應急處置 如の耕し方用具の後始末 自然界の相互的關係 昆蟲標本に依り益虫害虫を分類する
		藥用	科學的生活	針植の常識	益虫の識別		新鮮な魚の鑑別法 魚市場研究 ハブは神にあらず ハブ屋見學 農業 標本製作
		食鹽と 曹達工業	藥能科	線の太い學習	班別指導繼續觀察		

展 開	考 察	應 用	心 構
<p>目的指示 本棚が倒れないやうに工夫されてゐる點はどこか 下が重くて倒れにくくなつてゐる實例 發動船共榮丸について 玩具の船で實驗する この鉛筆はどうです 他に例はないか 學校の二階、本廊の家屋の構造 再び本棚にかへり綜合する</p>	<p>物の倒れないやうに出来てゐることをしらべる ●どうすればもつと倒れない様になるか 下が重い 一番下の段には大きな本が入つてゐる 起上り小法師、コップ、花瓶 荷物を積んだ時と積まない時といづれが客を多くのせると思ふか 積まない時？ 荷物を積んだ時？</p>	<p>物の倒れないやうに出来てゐることをしらべる ●どうすればもつと倒れない様になるか 下が重い 一番下の段には大きな本が入つてゐる 起上り小法師、コップ、花瓶 荷物を積んだ時と積まない時といづれが客を多くのせると思ふか 積まない時？ 荷物を積んだ時？</p>	<p>原理原則から出發しない 生活接觸に依つて科學心を觸發する 事物を事物から直接に學ぶ 共榮丸の構造は上部が高い 下が重ければ倒れない實例 事實問題に關心を持たせる 暴風雨と關聯 ノート整理 板書事項を書寫するばかりでなく氣づいた事を書かせる</p>

水の入つた重いバケツを兒童に持たせる
用具の後始末

上体は左に傾く
次時の研究問題にする
破損しないやう
叮嚀に

原理原則發見への誘導
響のある學習
この過程の中に知識も技術も体得させる

第四節 生活指導の實際

一、環境の生活化

リ、理科室の能動的經營
理科室を開放し用具の後始末は兒童に負擔させるの過程の中に知識も技術を体得させ物資入手困難の當今に於ては試験管一本でも破損せしめず物心一如の精神を養ひ理科室を自然界生活界の縮圖たらしめる。

2、本校に於ける栽培飼育の狀況

教師は兒童と共に驚き共に疑問を解決する。自然のままの飼育、堅忍持久の態度を養ふ。

○動物飼育

山羊二頭、家鴨四羽、鶏五羽、水魚類、駝等
大きい子供には世話をさせ小さい子供には其の思恵を受けて觀察させる立前をとる。飽くまで研究的に飼育し測定統計等を日誌に記入させる。

○植物栽培の實際（高等科）

イ、學校園農園の經營

教科書と關聯しつつ従来の園藝栽培を改め食糧増産に加擔する意味から季節的な野菜を栽培し販賣し収益の喜びを味はせ國家焦眉の食糧生産の協力に依つて直接奉公翼賛の實踐に挺身する。

ロ、教材園

管理は高等科生、校外に出ですとも教材園を活用し時間の節約にもなる。

3、觀察臺

動植物は名前を記憶させるのが目的でなく生活狀態人生との關係を究明する其の他標本教授參考資料は理室に死藏せしめず絶へず陳列し教材との聯關をはかる。

4、時局揭示板

時局部は時局に關する行事設備一切を管掌する。我が國の科學の進歩が國家に貢獻する現状を知らしめる。

- 5、映畫の利用
料金は五錢である。映畫館と聯絡をとり教育映畫を觀覽させる。
- 6、兒童圖書館
費用は後援會費から支出する。係りは高等科女兒であり知識体系の樹立を目指す。
- 7、其の他の設備
ラヂオ装置、看護室、供養塚、神俣田、ブラスバンドがある。
- 8、教師の部
生成發展する者のみが教壇に立ち得るの信念に依り目進の科學に對する一通りの認識を有し自らが其の生活を科學化することに同心戮力其の修養につとむ。
- イ、研究發表會
ラヂオの一般常識、本郡生物の特異性國民學校の模型飛行機製作について發表會があつた。

二、年中行事の科學性強化實踐案(高二)

月	行事	目	標	聯	關
---	----	---	---	---	---

- 9、各教室の科學的設備
花鉢二個、水槽を備へ教材に適する草花を栽培し生命力旺盛なる生物を自然の状態に飼育し事物に依り物を學ぶ態度を養ひ教室の背面も時局的に獨自の構想の下に設營する廊下には寒暖計を備へ日々氣温を測定する。
- 10、展覽會
父兄の集會を利用し春の野草藥草毒草兒童製作品を展覽し科學性強化を社會にまで普及する。

月	九	八	七	六	五	四
○飛行大會	○宿題處理	職業指導 ○送信蒐集	水練大會 ○採集一時研究	○ムシ商賣防日 ○時の記念日	○春の遠足 ○海軍記念日	○身体検査 ○校具修繕
九月二十日、全校機型飛行大會舉行 空への憧れを持たせる	工場での体験發表 學校展覽會	高二男は今年町の蘇鐵製粉工場其の他の工場へ送り機械の一通りの扱ひ方を修練させ郷土資源愛護、自給自足の念を体認させた、女兒は大島紬工場へ送った。	昆蟲、貝類、植物採集、集めるだけでなく分類、生態方面、農産資源、軍需、醫學資源、から一葉の植物にも人生との關係を記入させる 郷土の迷信と生活との關係	齒科醫の口腔衛生講話、ハミガキ訓練 吐瀉訓練、衛生週間 時間觀念の薄いは本部の短所である。午前七時始業、午後は家庭での食糧増産に参加せしむ。正確さは社會生活の信の發現であり科學精神の發展にも大に役立つ。 海と船に親しませる、海水と人体との衛生部面	從來の花見的遠足に終らしめず室内で知識として習得した事を實物に觸れしめ觀察眼を養ふ。 海軍兵器、寫眞展覽會、時局講演 相模大會 海洋少年團を組織する計畫	各自、身体の長所、短所を自覺せしめ知行兩面より止揚された眞正の生活態度としての体位向上を計る。科學的理解のない實踐は危險である。 行じさせる理科であり資源愛護の理科の意味から理科と工作、一体の立場で机、腰掛の修繕をさせ科學技術の實踐の場となし物心一如の精神を養ふ。
一四、浮力の原理 一六、天、科學兵器	宿題處理	五、澱粉糖類 一九、石油發動機	一三、液体の壓力 一四、浮力の原理 一五、郷土の有用植物	能率的生活へ	距離の實測、時間の測定、 國土愛護 一五、郷土の有用生物	一〇、傳染病 一八、家庭衛生

